井尻Ｂ遺跡 12

市道御供所井尻線建設に伴う発掘調査報告書Ⅱ

－ 井尻Ｂ遺跡第17次調査（Ａ・Ｅ・Ｆ区）の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第787集

調査番号　００２７
遺跡略号　ＩＧＢ－１７

２００４
福岡市教育委員会

A区全景（南東から）

A区出土文字瓦

序

玄界灘を挟んで朝鮮半島と向き合う福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきました。そのため市内には数多くの歴史的遺産が残されていますが、それらを保護し子孫に伝えていくことは私達の義務であります。しかし近年の都市開発によってそれらの多くが失われているのが現状です。

福岡市教育委員会は、このように開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財に関して事前の発掘調査を行い、できる限りの記録の保全と調査結果の公開に努めています。

本書は市道御供所井尻線建設に伴う南区井尻Ｂ遺跡の発掘調査について報告するものです。本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。最後に発掘と調査から報告書の刊行に至るまで多くの方々の御理解と御協力を賜りましたことに関しまして心から謝意を表する次第でございます。

平成16年３月31日
福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

１．本書は平成12年度から平成15年度にわたって発掘調査を行った井尻Ｂ遺跡第17次調査のうち、平成12年度に調査を行ったＡ区・Ｆ区と平成13年度に発掘調査を行ったＥ区の調査報告書である。
２．本書で使用した遺構実測図の作成は横山邦継・屋山洋・阿部泰之・名取さつき・藤祥子が、遺物実測図の作成は長家伸・大塚紀宜・水崎るり・横山・屋山・阿部が行った。
３．本書に使用したトレース図は調査員のほか、安野良・副田則子によった。
４．本書で使用した遺構・遺物の写真撮影は横山・屋山・阿部が行った。
５．本書で使用した方位は磁北である。
６．挿図中の遺物番号と図版中の遺物番号は一致する。
７．本書の作成はＡ区を屋山、Ｅ区を横山、Ｆ区を阿部が担当した。
８．本書に関わる図面、写真、遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管される予定である。

調査番号　０００２７			遺跡略号　ＩＧＢ－１７
調査地地番　福岡市南区井尻１丁目地内			分布地図番号　ＮＯ２４　板付
事前審査番号　１１－１－１			
	開発面積	調査面積	調査期間
Ａ区	1427㎡	1367㎡	2000.6.7～2001.3.31
Ｅ区	1122㎡	883㎡	2001.4.1～2001.8.31
Ｆ区	709.5㎡	473.8㎡	2001.1.5～2001.3.2，2001.8.20～2001.8.28

本文目次

第Ⅰ章　調査の記録 …… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の組織 …… 1
　3．立地と環境 …… 2
第Ⅱ章　A区の調査 …… 4
　1．調査区の立地と環境 …… 4
　2．弥生時代から古墳時代前期の調査 …… 4
　　1）竪穴式住居 …… 4
　　2）貯蔵穴
　　3）土坑
　　4）井戸
　　5）周溝状遺構 ……57
　3．古代の調査 ……58
　　1）掘立柱建物 ……58
　　2）溝
　　3）土坑
　4．小結
第Ⅲ章　E区調査の記録 ……87
　1．調査概要 ……87
　2．竪穴住居群の調査 ……88
　3．建物群の調査 ……113
　4．土壙群の調査 ……137
　5．井戸跡の調査 ……151
　6．甕棺墓の調査 ……157
　7．小結 ……163
第Ⅳ章　F区の調査 ……169
　1．調査概要 ……169
　2．掘立柱建物（SB）……169
　3．溝（SD）……169
　4．土壙（SK）……179
　5．その他の遺物 ……180
　6．小結……180

挿図目次

Fig.1　井尻B遺跡群の位置 …… 3
Fig.2　井尻B遺跡群北側発掘調査地点位置図…… 4
Fig.3　A区周辺図 …… 5
Fig.4　A区全体図 ……折り込み
Fig.5　SC1166.1210.1980.1981遺構実測図 …… 7
Fig.6　SC1210出土遺物 …… 8
Fig.7　SC1002遺構実測図 …… 9
Fig.8　SC1003遺構実測図 ……10
Fig.9　SC1003出土遺物 ……11
Fig.10　SC1003出土鉄鎌実測図 ……12
Fig.11　SC1004遺構・遺物実測図 ……13
Fig.12　SC1005遺構・遺物実測図 ……14
Fig.13　SC1006遺構実測図 ……15
Fig.14　SC1030遺構実測図 ……16
Fig.15　SC1030遺構・遺物実測図 ……17
Fig.16　SC1031遺構・遺物実測図 ……18
Fig.17　SC1031・SC1073遺構実測図……19
Fig.18　SC1119・1142遺構実測図 ……20
Fig.19　SC1172遺構実測図 ……21
Fig.20　SC1175遺構・遺物実測図 ……22
Fig.21　SC1184遺構実測図 ……23
Fig.22　SC1209遺構・遺物実測図 ……24
Fig.23　SC1237・SC1240遺構実測図……25
Fig.24　SC1277遺構実測図1 ……26
Fig.25　SC1277遺構実測図2 ……27
Fig.26　SC1277遺物実測図 ……28
Fig.27　SC1277柱穴出土遺物 ……29
Fig.28　SC1360遺構実測図 ……30
Fig.29　SC1360遺構・遺物実測図 ……31
Fig.30　SC1361遺構・遺物実測図 ……32
Fig.31　SC1362遺構実測図 ……33
Fig.32　SC1395・SC1410遺構実測図……34
Fig.33　SC1430遺構・遺物実測図 ……35
Fig.34　SC1431遺構・遺物実測図 ……36
Fig.35　SC1432遺構実測図1 ……37
Fig.36　SC1432遺構実測図2・出土遺物1 ……38
Fig.37　SC1432出土遺物2 ……39
Fig.38　SC1432出土遺物3 ……40
Fig.39　SC1432出土遺物4 ……41
Fig.40　SC1433遺構・遺物実測図 ……42
Fig.41　SC1433遺構実測図2 ……43
Fig.42　SC1434遺構実測図 ……44
Fig.43　SC1434遺構・遺物実測図 ……45
Fig.44　SC1739・SC1893遺構実測図……46
Fig.45　SC1852遺構実測図 ……47
Fig.46　SC1734・SC1955遺構実測図……48
Fig.47　SC1955出土遺物 ……49
Fig.48　貯蔵穴遺構実測図 ……50
Fig.49　貯蔵穴出土遺物 ……51
Fig.50　土坑実測図1 ……52
Fig.51　土坑出土遺物 ……53
Fig.52　土坑実測図2 ……55
Fig.53　井戸遺構実測図 ……56
Fig.54　周溝状遺構（SD1467）実測図 ……57
Fig.55　溝と掘立柱建物位置図 ……58
Fig.56　SB01遺構実測図 ……59

Fig.57 SB02遺構実測図 ……60
Fig.58 SB03遺構実測図 ……61
Fig.59 SB04遺構実測図 ……62
Fig.60 SB05遺構実測図 ……63
Fig.61 SB06遺構実測図 ……64
Fig.62 SB07遺構実測図 ……65
Fig.63 SB08遺構実測図 ……66
Fig.64 SB09遺構実測図 ……67
Fig.65 掘立柱建物出土遺物 ……68
Fig.66 溝土層図 ……70
Fig.67 溝中央部瓦出土状況図・遺構図 ……71
Fig.68 SD1247・1248出土遺物 ……72
Fig.69 SD1249出土遺物 ……73
Fig.70 SD1692出土遺物 ……74
Fig.71 十字溝出土瓦実測図１ ……75
Fig.72 十字溝出土瓦実測図２ ……76
Fig.73 十字溝出土瓦実測図３ ……77
Fig.74 十字溝出土瓦実測図４ ……78
Fig.75 十字溝出土瓦実測図５ ……79
Fig.76 十字溝出土瓦実測図６ ……80
Fig.77 SD1439出土遺物 ……81
Fig.78 SK1016遺構・遺物実測図 ……82
Fig.79 その他の出土遺物 ……84
Fig.80 第11次調査出土刻書土器 ……85
Fig.81 SD1247出土文字瓦文字実測図 ……86
Fig.82 御供所井尻線調査Ｅ区遺構出土状況全体図…折り込み
Fig.83 竪穴住居跡出土状況全体図 ……89
Fig.84 SC01住居跡出土状況実測図 ……90
Fig.85 SC01住居跡土層断面実測図 ……90
Fig.86 SC01住居跡掘方出土状況実測図 ……91
Fig.87 SC01住居跡炉跡出土状況実測図 ……91
Fig.88 SC01住居跡出土遺物実測図 ……92
Fig.89 SC02住居跡出土状況実測図 ……93
Fig.90 SC02住居跡土層断面実測図 ……93
Fig.91 SC02住居跡堀方出土状況実測図 ……94
Fig.92 SC02住居跡出土遺物実測図 ……94
Fig.93 SC03住居跡出土状況実測図 ……95
Fig.94 SC03住居跡出土遺物実測図 ……96
Fig.95 SC04住居跡出土状況実測図 ……96
Fig.96 SC04住居跡出土遺物実測図 ……96
Fig.97 SC05住居跡出土状況実測図 ……97
Fig.98 SC05住居跡土層断面実測図 ……98
Fig.99 SC05住居跡掘方出土状況実測図 ……98
Fig.100 SC05住居跡炉跡出土状況実測図 ……99
Fig.101 SC05住居跡出土遺物実測図 ……99
Fig.102 SC06住居跡出土状況実測図 ……100
Fig.103 SC06住居跡出土遺物実測図 ……101
Fig.104 SC07住居跡出土状況実測図 ……102
Fig.105 SC07住居跡出土遺物実測図 ……102
Fig.106 SC08住居跡出土状況実測図 ……103
Fig.107 SC08住居跡土層断面実測図 ……104
Fig.108 SC08住居跡掘方出土状況実測図 ……104
Fig.109 SC08住居跡炉跡出土状況実測図 ……105
Fig.110 SC08住居跡出土遺物実測図 ……105
Fig.111 SC09住居跡出土状況実測図 ……107
Fig.112 SC09住居跡掘方出土状況実測図 ……108
Fig.113 SC09住居跡炉跡出土状況実測図 ……109
Fig.114 SC09住居跡出土遺物実測図（1）……110
Fig.115 SC09住居跡出土遺物実測図（2）……111
Fig.116 SC10住居跡出土状況実測図 ……112
Fig.117 SC10住居跡土層断面実測図 ……112
Fig.118 SC10住居跡出土遺物実測図 ……113
Fig.119 建物群出土状況全体図……113
Fig.120 SB01建物出土状況実測図 ……115
Fig.121 SB01建物柱穴掘方土層断面実測図 ……116
Fig.122 SB01建物柱穴出土遺物実測図 ……116
Fig.123 SB02建物出土状況実測図 ……117
Fig.124 SB02建物柱穴掘方土層断面実測図 ……118
Fig.125 SB02建物柱穴出土遺物実測図 ……118
Fig.126 SB03建物出土状況実測図 ……119
Fig.127 SB03建物柱穴掘方土層断面実測図 ……120
Fig.128 SB03建物柱穴出土遺物実測図 ……120
Fig.129 SB04建物出土状況実測図 ……122
Fig.130 SB04建物柱穴掘方土層断面実測図 ……122
Fig.131 SB04建物柱穴出土遺物実測図 ……122
Fig.132 SB05建物出土状況実測図 ……123
Fig.133 SB05建物柱穴掘方土層断面実測図 ……123
Fig.134 SB05建物柱穴出土遺物実測図 ……124
Fig.135 SB06建物出土状況実測図 ……125
Fig.136 SB06建物柱穴掘方土層断面実測図 ……125
Fig.137 SB07建物出土状況実測図 ……126
Fig.138 SB07建物柱穴掘方土層断面実測図 ……127
Fig.139 SB07建物柱穴出土遺物測図 ……127
Fig.140 SB08建物出土状況実測図 ……128
Fig.141 SB08建物柱穴掘方土層断面実測図 ……129
Fig.142 SB08建物柱穴出土遺物実測図 ……129
Fig.143 SB09建物出土状況実測図 ……130
Fig.144 SB09建物柱穴掘方土層断面実測図 ……130
Fig.145 SB10建物出土状況実測図 ……131
Fig.146 SB10建物柱穴掘方土層断面実測図 ……131
Fig.147 SB11建物出土状況実測図 ……132
Fig.148 SB11建物柱穴掘方土層断面実測図 ……133

Fig.149 SB11建物柱穴出土遺物実測図 ……133
Fig.150 SB12建物出土状況実測図 ……134
Fig.151 SB12建物柱穴掘方土層断面実測図 ……134
Fig.152 SB13建物出土状況実測図 ……135
Fig.153 SB13建物柱穴掘方土層断面実測図 ……136
Fig.154 SB13建物柱穴出土遺物実測図 ……136
Fig.155 土壙群出土状況全体図……137
Fig.156 SK01土壙出土状況実測図 ……138
Fig.157 SK01土壙出土遺物実測図 ……139
Fig.158 SK02土壙出土状況実測図 ……140
Fig.159 SK02土壙出土遺物実測図 ……140
Fig.160 SK03土壙出土状況実測図 ……141
Fig.161 SK03土壙出土遺物実測図 ……142
Fig.162 SK04土壙出土状況実測図 ……143
Fig.163 SK04土壙出土遺物実測図 ……143
Fig.164 SK05土壙出土状況実測図 ……144
Fig.165 SK05土壙土層断面実測図 ……144
Fig.166 SK06土壙出土状況実測図 ……145
Fig.167 SK07土壙出土状況実測図 ……145
Fig.168 SK07土壙土層断面実測図 ……145
Fig.169 SK07土壙出土遺物実測図 ……146
Fig.170 SK08土壙出土状況実測図 ……147
Fig.171 SK09土壙出土状況実測図 ……148
Fig.172 SK09土壙出土遺物実測図 ……148
Fig.173 SK10土壙出土状況実測図 ……149
Fig.174 SK11土壙出土状況実測図 ……149
Fig.175 SK12土壙出土状況実測図 ……150
Fig.176 SK12土壙出土遺物実測図 ……150
Fig.177 SK13土壙出土状況実測図 ……151
Fig.178 SE01井戸跡出土状況実測図 ……151
Fig.179 SE01井戸跡出土遺物実測図 ……152
Fig.180 SE02井戸跡出土状況実測図 ……153
Fig.181 SE02井戸跡出土遺物実測図 ……153
Fig.182 SE03井戸跡出土状況実測図 ……154
Fig.183 SE03井戸跡出土遺物実測図 ……154
Fig.184 弥生時代墓地出土状況全体図 ……157
Fig.185 K01～05甕棺墓出土状況実測図 ……158
Fig.186 K01・02・03・04・05甕棺実測図 ……160
Fig.187 K06甕棺墓出土状況実測図 ……161
Fig.188 K06甕棺実測図 ……162
Fig.189 弥生時代中期のE区図（第Ⅰ期）……163
Fig.190 弥生時代後期のE区図（第Ⅱ期）……164
Fig.191 弥生時代後期のE区図（第Ⅲ期）……156
Fig.192 弥生時代後期のE区図（第Ⅳ期）……166
Fig.193 SB2017実測図 ……169
Fig.194 SD2001・2002土層断面実測図 ……170
Fig.195 SD2001・2002出土土器実測図 ……170
Fig.196 SD2001・2002出土石器実測図 ……170
Fig.197 F区全体図 ……171
Fig.198 SD2003土層断面実測図 ……172
Fig.199 SD2004土層断面実測図 ……172
Fig.200 SD2005・2018土層断面実測図 ……173
Fig.201 SD2005上層出土弥生土器実測図 ……174
Fig.202 SD2005上層出土土師器・陶質土器実測図…175
Fig.203 SD2005下層出土弥生土器実測図 ……176
Fig.204 SD2005下層出土土師器実測図 ……177
Fig.205 SD2005下層出土石器・調整剥片実測図 …177
Fig.206 SD2006土層断面実測図 ……177
Fig.207 SD2006出土石器実測図 ……177
Fig.208 SD2006出土須恵器実測図 ……178
Fig.209 SD2018出土弥生土器実測図 ……178
Fig.210 SD2018出土土師器実測図 ……179
Fig.211 SD2018出土石器実測図 ……179
Fig.212 SK2011実測図 ……180
Fig.213 SK2011出土須恵器実測図 ……180
Fig.214 遺構検出面出土遺物実測図……180

図版目次

Pl. 1 ①調査区南東部②調査区中央部
Pl. 2 ①A区調査区全景②SC1002堀方
③SC1003遺物出土状況④SC1003床面
⑤SC1003遺物出土状況⑥SC1004床面
⑦SC1005床面⑧SC1030・1031床面
Pl. 3 ①SC1030炉完掘②SC1073完掘状況
③SC1172、SC1184④SK1166,SC1172、SC1184
⑤sc1209⑥SC1210
⑦SC1210屋内貯蔵穴⑧SC1210遺物出土状況
Pl. 4 ①SC1277遺物出土状況②SC1277炉
③SC1277内カマド？
④SC1277柱穴内土器出土状況
⑤SC1277完掘状況⑥SC1237
⑦SD1359⑧SC1360床面
Pl. 5 ①SC1361②SC1362③SC1362炉
④SC1410⑤SC1430⑥SC1432床面
⑦・⑧SC1432遺物出土状況
Pl. 6 ①Sc1432主柱穴②SC1432完掘状況
③SC1432東側ベット下堀方
④西側ベット下堀方
⑤SC1432炉下溝土層⑥SC1433床面
⑦SC1433堀方⑧SC1434床面
Pl. 7 ①SC1434遺物出土状況②SC1434完掘状況

③SC1434床面下溝完掘④SC1852
⑤SC1852⑥SC1893
⑦SC1955⑧SC1955完掘状況
Pl. 8　①SK1078②SK1481③SK1066④SK1067
⑤SK1097⑥SK1212⑦SK1213⑧調査区北西部
Pl. 9　①SE1181,1916、1915②SE1917
③SE1215④SE1215土層⑤SB01⑥SB02
⑦SB05⑧SB06
Pl.10　①SD1249遺物出土状況
②SD1247軒丸瓦出土状況
③SD1692瓦出土状況④SD1247土層A
⑤SD1248土層C⑥SD1247完掘状況
⑦SD1692完掘状況⑧SD1439土層
Pl.11　①文字瓦凹面②「山部評」③「豊評」
Pl.12　A区出土遺物
Pl.13　E区調査区全景（北西から）
Pl.14　①SC01住居跡出土状況（東から）
②SC02住居跡出土状況（南西から）
Pl.15　①SC03住居跡出土状況（北から）
②SC04住居跡出土状況（北から）
Pl.16　①SC05住居跡出土状況（西から）
②SC06住居跡及びSK02土壙出土状況（南西から）
Pl.17　①SC07住居跡出土状況（北から）
②SC08住居跡出土状況（南西から）
Pl.18　①SC09住居跡出土状況（北西から）
②SC09住居跡（床面）出土状況（北西から）
Pl.19　①SC09住居跡床面遺物出土状況（北東から）
②SC09住居跡完掘状況（北西から）
Pl.20　①SK02土壙調査状況（南から）
②SK02土壙完掘状況（南から）
③SK03土壙調査状況(北から）
④SK03土壙完掘状況（北から）
Pl.21　①SK04土壙調査状況（西から）
②SK05土壙完掘状況（北から）
③SK07土壙調査状況（北から）
Pl.22　①SK07土壙内遺物出土状況（南から）
②SK07土壙完掘状況（西から）
③SK09土壙調査状況（東から）
Pl.23　①SC08住居跡主柱穴（3132）調査状況（東から）
②SC08住居跡主柱抜き跡投入土器出土状況（西から）
③SC08住居跡主柱穴（3134）調査状況（東から）
④SC08住居跡炉跡調査状況（東から）
⑤SE02井戸跡出土状況（南から）
⑥SE03井戸跡出土状況（東から）
Pl.24　①甕棺墓出土状況全景（南西から）
②小児甕棺墓出土状況全景（南東から）
Pl.25　①K01甕棺墓出土状況（西から）
②K02甕棺墓出土状況（北東から）
③K03甕棺墓出土状況（北東から）
④K04甕棺墓出土状況（西から）
⑤K05甕棺墓出土状況（南から）
⑥K06甕棺墓出土状況（南西から）
Pl.26　住居跡出土遺物類
Pl.27　住居跡出土遺物類
Pl.28　住居跡・土壙出土遺物類
Pl.29　井戸跡出土遺物類
Pl.30　出土甕棺類
Pl.31　①Ｆ区全景（西より）
②Ｆ区拡張区全景（北より）
Pl.32　①SD2001・2002溝土層断面（北より）
②SD2005・2018溝土層断面（北より）
③SD2006溝土層断面（北より）

表目次

A区
Tab. 1　SB01建物跡計測表……59
Tab. 2　SB02建物跡計測表……61
Tab. 3　SB03建物跡計測表……61
Tab. 4　SB04建物跡計測表……63
Tab. 5　SB05建物跡計測表……63
Tab. 6　SB06建物跡計測表……64
Tab. 7　SB07建物跡計測表……65
Tab. 8　SB08建物跡計測表……66
Tab. 9　SB09建物跡計測表……67
Tab.10　瓦出土一覧表 ……82
E区
Tab.11　SB01建物跡計測表 ……114
Tab.12　SB02建物跡計測表 ……116
Tab.13　SB03建物跡計測表 ……118
Tab.14　SB04建物跡計測表 ……121
Tab.15　SB05建物跡計測表 ……122
Tab.16　SB06建物跡計測表 ……124
Tab.17　SB07建物跡計測表 ……126
Tab.18　SB08建物跡計測表 ……127
Tab.19　SB09建物跡計測表 ……129
Tab.20　SB10建物跡計測表 ……131
Tab.21　SB11建物跡計測表 ……132
Tab.22　SB12建物跡計測表 ……133
Tab.23　SB13建物跡計測表 ……134

第Ⅰ章　はじめに

１．調査に至る経過

平成11年３月31日に土木局建設部南部建設課より福岡市教育委員会埋蔵文化財課長宛に南区井尻１・２丁目地内に新設する市道御供所井尻線建設に関する埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号11－１－１）。申請地のうち井尻１丁目地内は周知の埋蔵文化財包蔵地である井尻Ｂ遺跡内に位置していることから、埋蔵文化財課では埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査が必要であると判断した。当地区は古い住宅地で道が狭く大型工事車両の通行が困難であった。ただ以前行われた周辺の調査および、道路の土地買収進展に伴う家屋建て替え時の試掘・発掘調査の事例から遺跡が存在することは確実であるため、平成11年10月から平成12年３月まで発掘調査を行った。（第14次調査）。今回の第17次調査は平成12年６月から14次調査の北側隣接地から発掘調査を開始した。前述したとおり調査地に面した道は狭く工事車両が進入できないため、発掘調査に使用する重機などの機械類は調査終了後埋め戻していた14次調査区から進入し、また調査に伴う廃土の置き場としても14次調査区を利用することとして、その後の調査も調査終了区を進入路および廃土置き場として利用しながら遺跡の南から順に調査を行うこととした。その後担当職員が増えて台地の南北両端から調査を進めることとなり、調査次数が混乱するおそれがでてきたため台地上の調査全体を17次調査とし、それを現生活道路で区切られたブロックを一単位として南端のA区から北端のＦ区までを設定した。調査の工程は平成12年度にＡ・Ｆ区、13年度にＢ・Ｄ・Ｅ区とＣ区北半部、14年度にＣ区南半部の調査を行った。井尻遺跡北台地上の初めての大規模な調査であり、台地の南東から北西に台地を横断した調査であるため台地上の遺跡分布の予想がある程度可能になり、大きな成果を上げることができた。その成果を元に平成14年７月13日には出土遺物に関する新聞発表を行い、また2003年文化庁主催の速報展にはこの17次調査で出土した遺物の中で特に重要な８点を出展した。平成14年夏以降井尻Ｂ遺跡の発掘調査は終了して井尻Ｂ遺跡の北側に位置する五十川遺跡群へと移行したが、井尻遺跡第17次調査で出土した遺物は大量であり、また貴重な遺物が多いためそれらの整理報告は2005年度までかかる予定である。

２．調査の組織

調査委託　　土木局建設部南部建設課
調査主体　　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課
調査総括　　埋蔵文化財課　課長　　山崎純男
　　調査第２係長　　（前）山口譲治　（現）田中壽夫
調査庶務　　文化財整備課　　（前）宮川英彦　（現）御手洗清
調査担当　　埋蔵文化財課　事前審査　　（前）中村啓太郎（現）田上勇一郎
　　調査第１係　　横山邦継　屋山洋　阿部泰之
調査作業員　一ノ瀬フミヨ　上野龍夫　浦伸英　江嶋光子　大塩皓　加藤常信　香田信子
坂下達男　大長正弘　橘良平　橘智子　高野瑛子　谷英二　谷正則　遠山勲　徳永静雄　中村尚美
布江孝子　税所篤英　廣田安平　前山政義　三浦力　宮川ヤエ子　大和育絵　山下智子　吉住政光
其田昌祥　大和武史　森本良樹　伊藤美伸　藤原直子　林厚子　乾俊夫　伊藤ミドリ　一宮義幸
牛尾与志助　海津宏子　川岡涼子　倉光政彦　高橋茂子　中園登美子　土生ヨシ子　満田雅子
三好道子　山田ヤス子

３．立地と環境

井尻Ｂ遺跡群は福岡平野中央部を博多湾に向かって流れる那珂川の右岸に沿って細長く延びる台地上に位置する。この台地上には数多くの遺跡が分布しているが、南側には春日市の須玖永田遺跡や須玖坂本遺跡等の青銅器製造関連の遺構・遺物の他にガラス製品の鋳型など複数の工房が存在していたことが判明している。ここ井尻周辺においても江戸時代から青銅器の鋳型が出土することが知られており、奴国の青銅器生産を支える工房の一つとして注目されてきた。福岡市教育委員会の発掘調査でも鋳型に使用された石英長石斑岩の破片が多く出土するため、弥生時代後期には井尻Ｂ遺跡で多くの青銅器が生産されていた可能性が高いと考えられてきた。また、井尻遺跡の北側の台地上には比恵・那珂遺跡という弥生時代から古代にかけての大規模な遺跡が存在しているが、これらの遺跡は弥生時代においても遺構の多さや大型掘立柱建物等の存在から拠点的集落であると考えられており、古代においても那津官家や那珂郡衙の可能性がある掘立柱建物群や瓦片が出土するなど、拠点的集落としての役割を果たしていたものと思われる。本遺跡はこのように南北を弥生時代から古代までの大規模な遺跡に囲まれており、これまでも重要な遺構が存在する可能性が言われてきた。しかし大正13年に九州鉄道（当時）に福岡～二日市間の電車が開通し井尻駅ができると、周囲の開発が進んで昭和20年代からは人口が急激に増加しはじめた。そのため駅周辺は住宅地として小規模な開発が進んだため、台地上には古くからの細い道が残されてしまい、車での進入が困難であったため、これまでは大規模な開発が行われず調査も周辺での小規模なものにとどまり遺跡の全体像はつかみにくい状態であった。

本遺跡のこれまでの発掘調査の成果により、旧石器から古代の遺構が確認されている。旧石器は主に台地の南端部（西鉄大牟田線より南側）で確認されている。台地北側では後世の遺構から石器が出土するものの原位置を留めるものはなく遺物も少ない。その後縄文時代には少量の石鏃が出土するのみで遺構や土器は確認されておらず、ヒトが定住した痕跡は確認できない。弥生時代では台地の北西端部で夜臼式土器や板付Ⅱ式土器の小破片が攪乱から出土している（17次Ｅ区）が、現在確実な遺構としては中期前葉の城ノ越式の貯蔵穴が最も古い遺構である。その後、後期前半までの検出遺構は少ない。しかし中期の土器片は弥生後期や古代遺構から多く出土する事から多数の遺構が存在したもののその多くが削平により消滅したものと考えられる。中期後半から後期前半においても中期中頃ほどではないものの遺物は多く出土しており、遺構も竪穴式住居が数件確認されている。弥生時代後期後半になると台地全体に集落が形成されはじめ、古墳時代前期までの間に多数の竪穴式住居や掘立柱建物が建てられるようになる。この時期は大規模な集落が形成されるだけではなく、弥生時代末には青銅器生産関連遺物やガラス勾玉鋳型が出土するなど生産関連の遺物が出土するようになる。その後古墳時代中期になると竪穴式住居などの生活遺構はほとんど見られなくなる。これは遺跡の南端部で井尻Ｂ１号墳など５世紀後半の古墳が存在するため遺跡全域が墓域となったと考えられている。しかし、現在までで古墳の周溝等の遺構が確認された区域は限られている。６世紀代には少量であるが須恵器も出土するようになる（11次・17次Ａ区調査）。現在遺構は確認されてないものの７世紀の掘立柱建物群に先行して、集落などが形成され始めたものと思われる。７世紀末から８世紀初頭になると台地中央部で寺院・官衙遺構が出現し、遺物が多く確認できるようになる。この時期の遺構は台地北端の22次調査や南端に近い６次調査などでも確認されており遺構の分布する範囲は南北約650m、東西250mと広域に渡ることが判明した。この時期の瓦が出土する遺跡は周辺で那珂川の対岸に位置する三宅廃寺、同じ右岸では那珂遺跡、高畑遺跡など密集している。これらの遺跡群で高畑遺跡は太宰府から北に伸びる官道のうち東側道路に隣接しており、三宅廃寺や井尻Ｂ遺跡は西側官道に近いところに位置している。

1　井尻Ｂ遺跡
2　雀居遺跡
3　東那珂遺跡
4　比恵遺跡
5　那珂遺跡
6　五十川遺跡
7　那珂君休遺跡
8　板付遺跡
9　高畑遺跡
10　諸岡Ａ遺跡
11　諸岡Ｂ遺跡
12　笹原遺跡
13　三筑遺跡
14　南八幡遺跡
15　井尻Ａ遺跡
16　寺島遺跡
17　横手遺跡
18　大橋Ｅ遺跡
19　三宅Ｃ遺跡
20　三宅Ｂ遺跡
21　野多目Ｃ遺跡
22　曰佐遺跡
23　弥永原遺跡
24　曰佐原遺跡
25　須玖遺跡群
26　岡本遺跡群

Fig. 1　井尻Ｂ遺跡群の位置（1/25,000）

第Ⅱ章　A区の調査

１．調査区の立地

井尻Ｂ遺跡は南北方向に長い台地上に位置し、現在は西鉄大牟田線の線路によって南北に分断されている。第17次調査は市道御供所井尻線新設に伴う発掘調査のうち台地上の発掘調査で台地東側の低地部分が第14次調査である。台地東側低地の調査としてはこれまでに第８次、第11次調査が行われており、約150m離れた第11次調査では弥生時代の井戸などと共に弥生後期と古代を中心とする包含層が確認されており、銅鏃や中細型銅矛の鋳型などが出土している。台地東側の低地は諸岡遺跡が位置する台地との間の幅が約400m程の低地であるが春日、井尻、五十川の台地が那珂川からの堤防となり、また諸岡の丘陵が御笠川からの堤防としてまとまった水量を得ることが難しかったと思われる。そのため東側低地はその上流に多くの貯水池が分布し、現在においても低地に面した台地裾には大小さまざまな溜池が点在する。この低地に水を引き水田を拓く努力は古くから行われたと考えられ、それを目的とした水路が南区笠抜遺跡や今回報告する17次Ｆ区で確認された溝であると思われる。それに対し台地北側の低地部分は近隣の試掘調査によると台地が急激に落ちており約３ｍ下までは河川氾濫によると思われる粗砂層で遺構・遺物とも確認できていない。井尻遺跡が位置する台地のすぐ西側には那珂川の旧河川が流れていた時期もあり、現在井尻台地西端を流れる五十川川はその名残である。流れが西側に移ってからも那珂川が氾濫したときには井尻と五十川の台地端まで流れに洗われていたと思われ、この氾濫により前述した水路が埋没し、流れに遺構が削られた可能性が考えられる。

新設される道路は北側台地を北西方向から南東に横断しており、台地上の長さ750mを測るが、Ａ区はその台地の東端に位置し、第14次調査区に隣接する。第14次調査区は東側に解析する谷の中に位置し、台地上との標高差は1.5mを測る。台地際に八女粘土と思われる白色粘質土を盤とする幅15mの平坦面があり、そこで弥生時代と思われる掘立柱建物や古墳時代前期に属する井戸を検出した。白

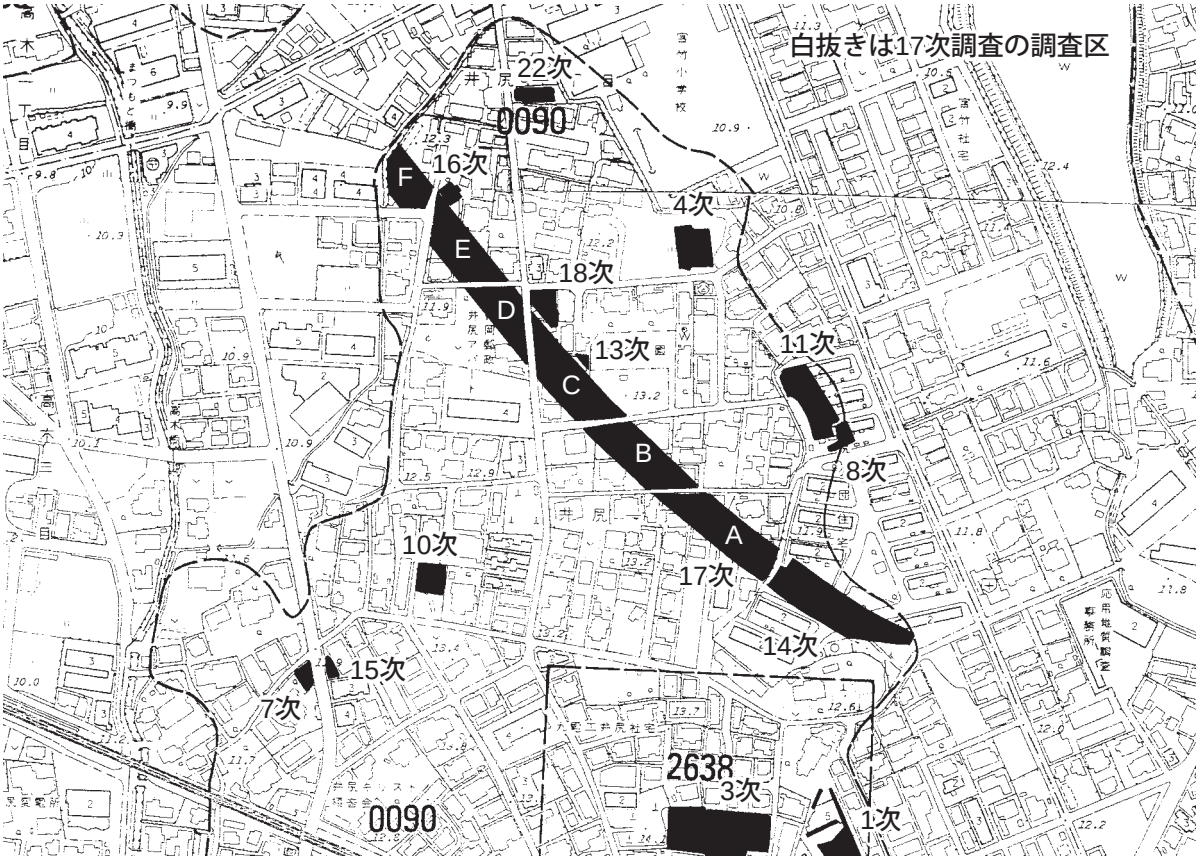


Fig. 2　井尻遺跡群北側発掘調査地点位置図（1/10,000）

色粘質土の上に堆積した黒褐色土は弥生時代から古代の遺物を多く含んでおり、弥生土器は後期後半から古墳時代初頭の時期の土器片が多量に出土した。後期後半の甕・壺が多く出土するほか甕棺の破片も多く含まれ、中期中頃の甕棺を主としながらも中期後半から後期の甕棺片も多く見られる。特殊な遺物としては銅鏃鋳型が１点出土したほか、鋳型に使われていたと思われる石英長石斑岩の破片が数点出土している。銅鏃鋳型はもともと別の銅製品の鋳型として使用されており、側面に半円形の鋳型面が残る。最初の鋳型を割り、その割面を平らにして鏃の鋳型を掘り込む。鏃は連鋳式であると考えられる。古代の遺物は瓦を中心をして須恵器坏や土師器甑等が出土している。瓦は第３次調査や17次Ａ区溝出土瓦と同タイプで丸瓦凸面がナデ、凹面に布目圧痕が見られる。平瓦は凹面に布目圧痕かもしくは強いナデ、凸面は格子のタタキを施す。

今回の17次Ａ区調査地点は調査前は宅地、一部畑である。宅地は畑の耕作土上に盛り土しており調査時の遺構面までの深さは30～60㎝を測る。調査では全面表土剥ぎを行い、廃土は第14次調査区に仮置きした。標高は調査区の西端が最も高く12.6mを測り、東側に向かって緩やかに傾斜する。Ｅ区から西側は緩やかに西へ傾斜しており、台地の最も高い稜線はＡ区の西側のSC1073付近であるがその分削平も激しくＡ区西側は遺構の遺存状態が悪い。Ａ区では主な遺構として弥生時代の貯蔵穴３基と土坑、弥生時代から古墳時代の竪穴式住居37軒、７世紀末から８世紀の掘立柱建物９棟と溝を確認した。最も古い遺構は貯蔵穴で弥生時代中期中頃である。Ｅ区ではこれよりもう少し古い城ノ越期の貯蔵穴が数基検出されており同じ台地でも西側の那珂川に面した方が若干古くなる傾向がみられた。弥生時代後期後半の遺構は台地全体に広がるが古代の掘立柱建物であるSB09の柱穴列が谷側に延びているため当時に比べ台地端部が削られていると考えられる。しかし今の台地落ち際から７ｍの地点に前述した古墳時代の井戸があることから、台地端部が削られていたとしても規模は小さくてせいぜい数m程である。また、台地端に盛り土をして建物のを立てた可能性もあるが現時点ではそのような痕跡はみられない。

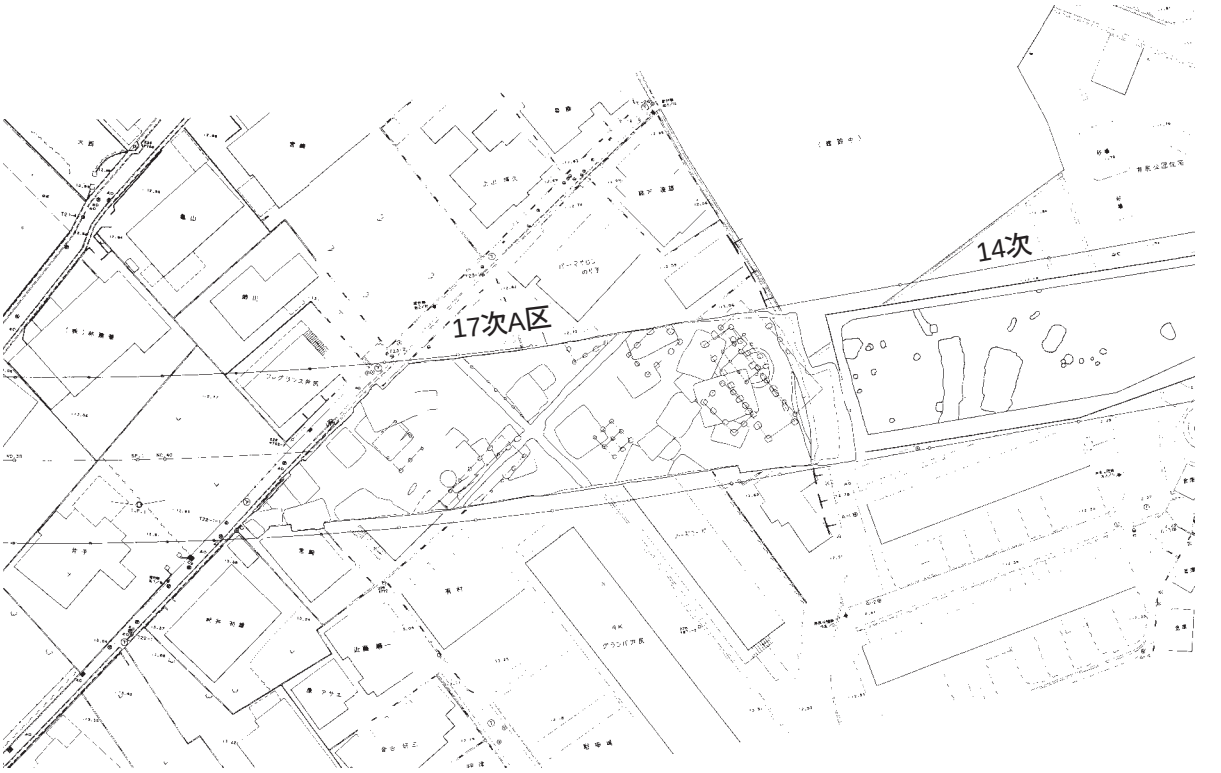


Fig. 3　Ａ区周辺図（1/1,000）

Fig. 4　A区全体図（1/200）

２．弥生時代から古墳時代の遺構と遺物

１）竪穴式住居の調査　中期中頃から後期前葉の竪穴式住居４棟と後期中葉から古墳時代初頭の竪穴式住居37軒を検出した。遺存状態が悪く床面が残っていない住居や貼床の痕跡のみが残存している住居が多く、中には遺構検出時の清掃で消滅した住居もある。

SC1166（Fig.５）調査区北西側で検出した。東辺を攪乱に切られ全形は不明であるが、南側の角が丸みを帯びているのに対し、北西角は直角と不規則であるがだいたい小判型を呈すると思われる。床面は検出面からの深さが５㎝と浅いが全体が平らであり、住居の切り合いがある可能性は低い。北西の角から南に幅13㎝、深さ５㎝の壁溝が巡る。遺物は床面から少し浮いた状態で甕・器台・高坏等の破片がまとまって出土した。出土時には各個体とも形をなしていたが器壁が薄く、焼成も弱かったため取り上げ時に細片化し、復元ができなかった。

SC1210（Fig.５）調査区中央北寄りで検出した。SC1209に切られる。平面は東西に長い隅丸長方形で主軸をＮ－80°－Ｗにとる。東西3.8ｍ、南北3.15ｍ、床面までの深さ８㎝を測る。柱は２本柱で柱間は1.7ｍを測る。南壁際中央に位置する長径83ｍ、短径80㎝の屋内土坑から完形の甕が、また住居床面からは石包丁などが出土している。床面下に貼床などは確認できなかった。北壁に沿って長さ246㎝、幅71～54㎝、深さ7～13㎝の溝状の掘方を検出した。弥生時代中期中頃の土器片が多く出土すると共に汲田・須玖期の甕棺片が出土している。出土遺物（Fig.6　001～005）。001は甕である。完形で口径14.9㎝、器高14.8㎝を測る。褐色を呈し、胴部にかろうじてハケ目が見られるが全体的に摩滅が著しい。胴部に黒班あり。002は甕である。復元口径14.5㎝、器高14.1㎝を測る。淡橙～黄褐色を呈し口縁に黒班がみられる。胎土に３㎜以下の砂粒を多量に含む。003は甕である。復元口径18.5㎝を測る。橙白色を呈し胎土に白色砂を多量に含む。004は甕である。復元口径22.5㎝を測る。005は石包丁である。完形で長さ13.4㎝、高さ4.5㎝、厚さ９㎜を測る。

SC1980（Fig.５）調査区南東側で検出した。削平が著しく堀方痕跡のみを確認した。SC1360と1362に切られる。平面は円形もしくは小判型を呈すと思われる。推定径2.5ｍ前後。出土遺物なし。

SC1981（Fig.５）調査区中央南東寄りに位置する。SC1277に切られる。平面は円形もしくは楕円形を呈す。床面は削平されており掘方の深さ４㎝を測る。遺物は出土していない。

SC1002（Fig.７）調査区北西端で検出した。平面は長方形もしくは方形である。攪乱により床面は長さ1.6ｍ、幅40㎝しか残っていない。床面までの深さは９㎝を測る。柱穴は不明で北壁の一部に沿って幅13㎝、深さ５㎝の壁溝を確認した。掘方は床面から10㎝下で全面に細かな凹凸がみられるのは掘り下げ時の鍬先痕跡と思われるがその中で遺存のよい痕跡は幅約15㎝を測る。

SC1003（Fig.８）調査区北西端側で検出した。平面は現状で東西に長い長方形を呈し、主軸をN－57°－Wにとる。東西両短辺に幅110～115㎝のベット状遺構がつく。ベット状遺構の床面は削平により遺存していない。東側ベット状遺構は壁から35㎝のところに見られる小溝までは削出しであるが、それから低床部との間の幅70㎝は地山ロームの暗赤褐色粘質土の盛土である。このとき低床部の掘方底面と同じ高さまで下げず、低床部底面から14㎝の段を残して、その上に盛土をしている。西側ベットも同様にほぼ全体を低床部掘方底面から３㎝上まで掘り下げてから盛土を行っている。柱は２本柱で柱間は2.7ｍ、柱穴堀方は西側で径53㎝、深さ50㎝、東側では径62㎝、深さ83㎝を測る。床面から10㎝程浮いた状態で多量の遺物が出土した。また床面直上で多量の炭化物を確認した。炭化物はスサ状の植物質を主とし、丸太などの木材が見られないことから、焼失家屋ではなく住居解体後に柱材などは再利用するために持ち去り、屋根に葺いた植物質などのうち再利用できないものを燃やした可能性が考えられる。また、住居埋没途中の土層に２基の炉がみられる。他の住居があるのかまたは窪み

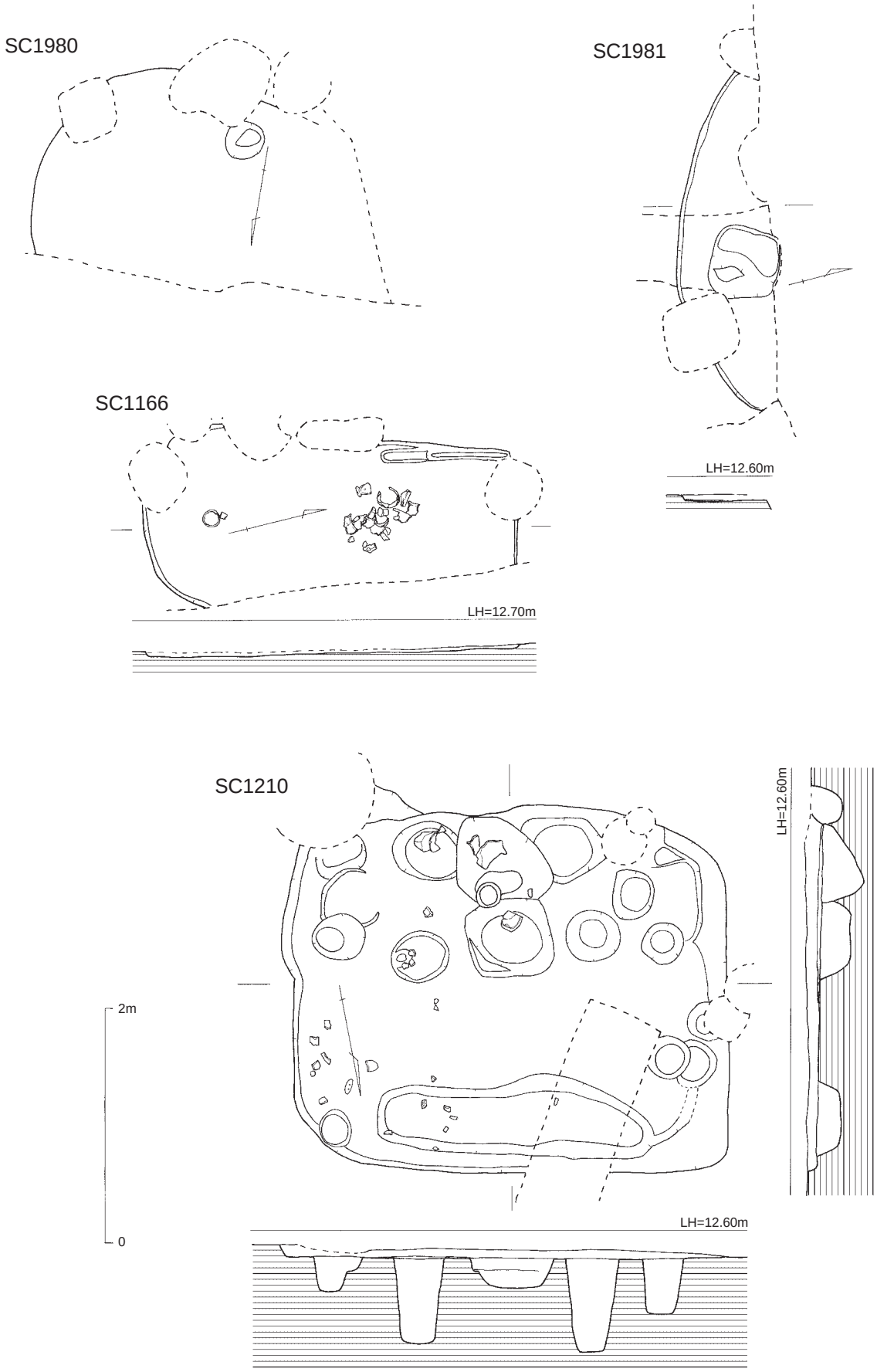


Fig. **5**　SC1166.1210.1980.1981遺構実測図（1/50）

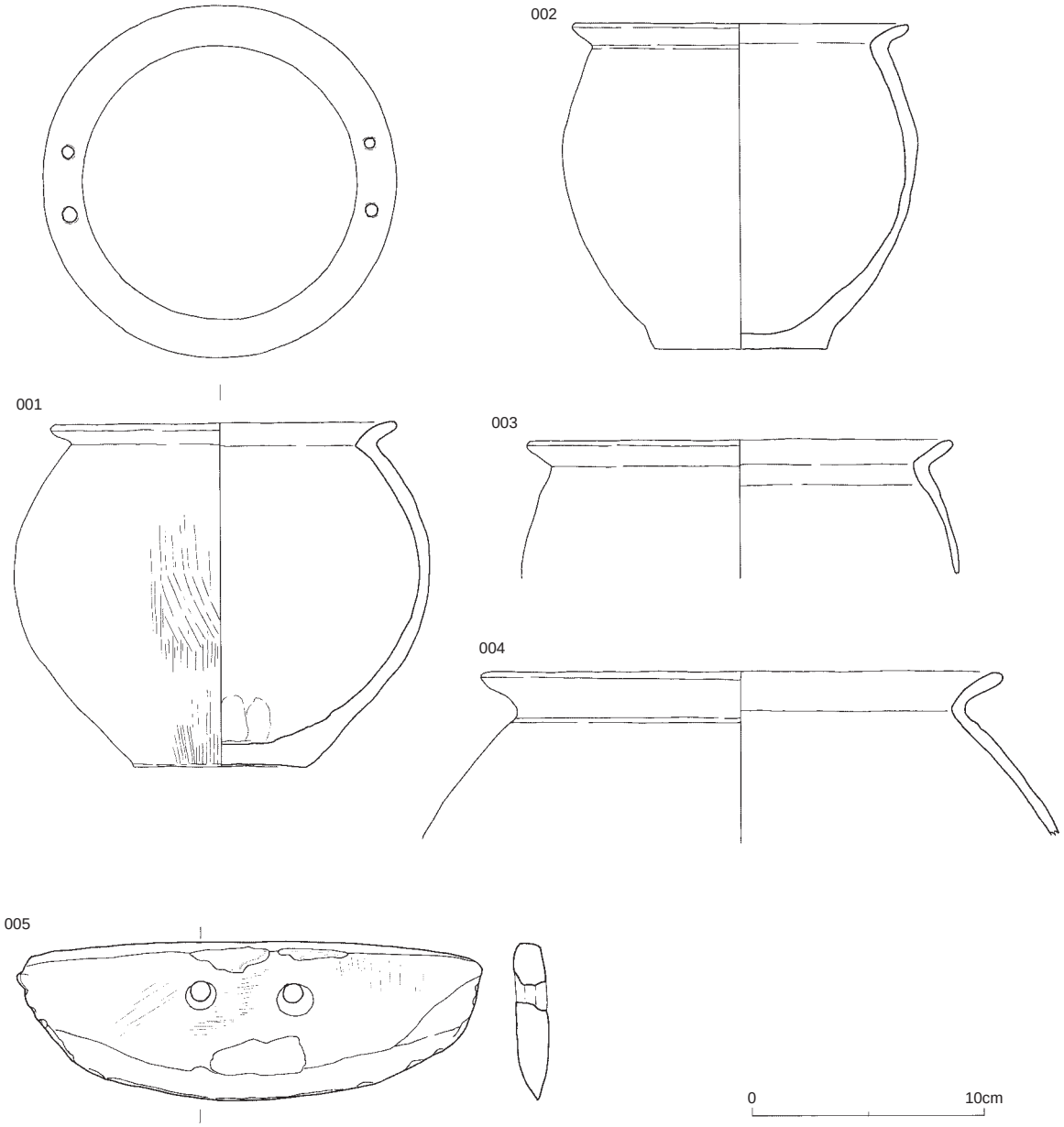


Fig. 6　SC1210出土遺物（1/3・005は1/2）

を炉として利用したものと思われる。出土遺物（Fig. 9～10図006～016）。006は鉢である。復元口径29.9㎝を測る。橙黄色を呈し胴部に黒班がみられる。胎土は精良で細かな白色砂を含むが、内面側に多く表面側には少ない。外面の調整は縦ハケと思われるが摩滅のため不明瞭である。007～010は甕である。007は復元口径27.6㎝を測る。淡黄白色を呈し胎土は粗く１～4㎜の砂を多く含む。008は復元口径10.4㎝を測る。橙白色を呈し胎土は細かく２㎜程の砂を多く含む。調整は不明。009は復元口径12.2㎝を測る。淡橙白色を呈し肩部に黒班がある。胴部はやや潰れた球形を呈し、口縁は短く「く」の字型に立ち上がる。010は胴部下半である。黄白色を呈し底部から胴部過半に黒班あり。底部は径3.9㎝を測り底面がレンズ状に膨らむ。011・012は壺である。011は二重口縁で口縁端を欠く。赤橙色を呈し胎土は精良である。頸部外面に縦ハケ、内面に横ハケを施す。012は淡橙色を呈し胴部に黒班がみられる。胎土は粗く１㎜程の砂を多量に含む。外面は頸部に縦ハケ、胴部上半に横ハケ、胴部下半に縦ハケを施し、内面には全体に横ハケを施す。焼成は表面は堅く締まっているが器壁厚の2/3は帯状に黒色を呈す。013・014はは器台である。013は器高15.2㎝、底径14.2㎝を測る。外面黄白色を呈

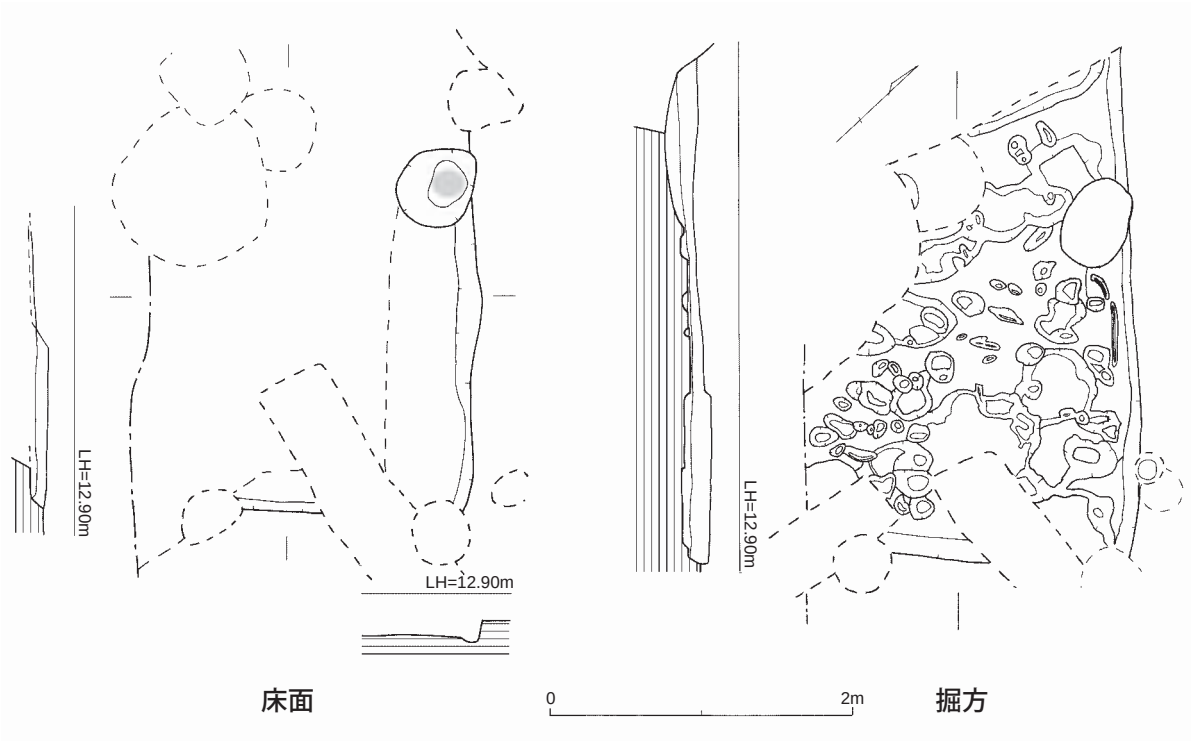


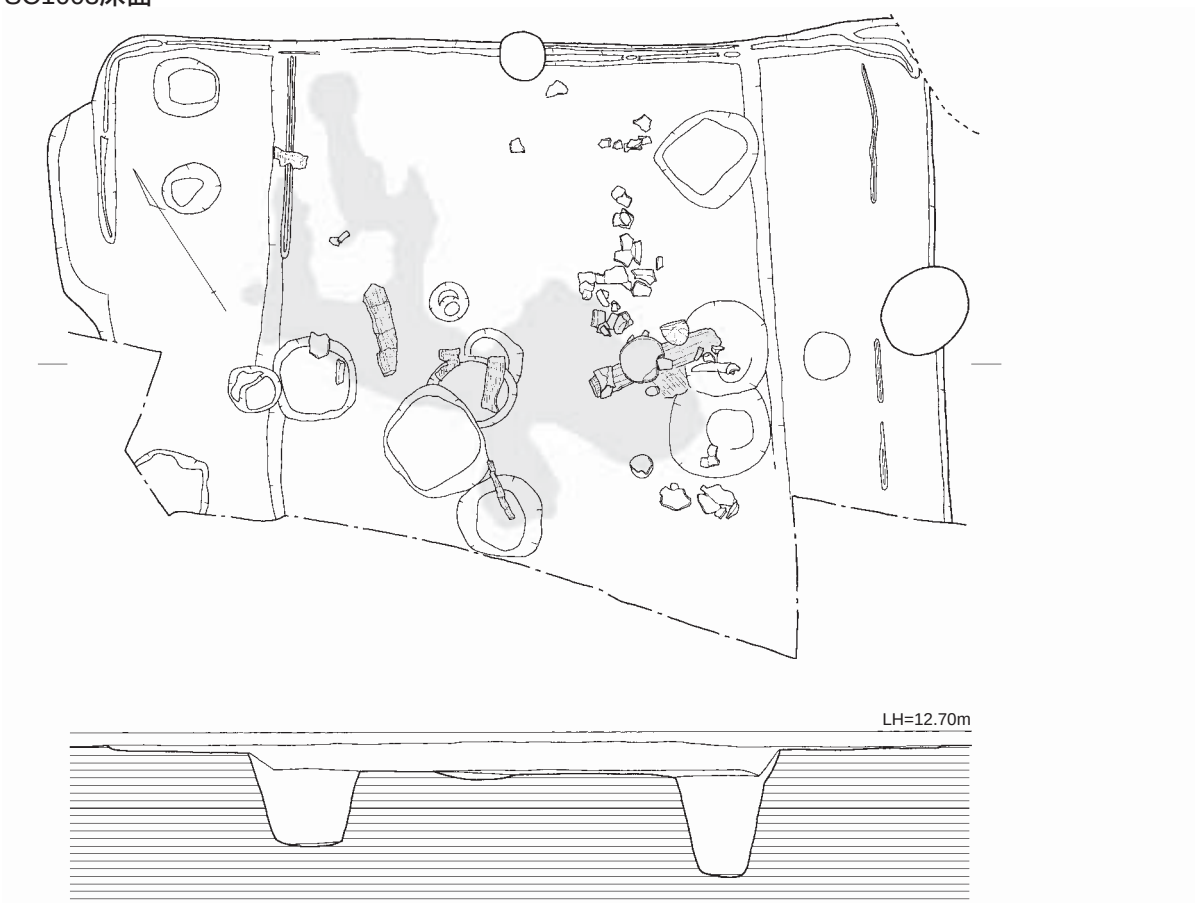
Fig. 7　SC1002遺構実測図（1/50）

す。外面は摩滅著しいがタタキ痕跡が残る。内面は横ハケ。015は小椀である。口径6.8㎝、器高3.9㎝を測る。橙色を呈し胎土精良で砂は含まない。調整は不明瞭であるが内面上半は横ナデ、下半はナデ、外面は底部は未調整、上部には斜めのタタキを施す。016は鉄製の鎌である。長さ31㎝、根本幅6.3㎝、先端幅2.7㎝、厚さ0.6㎝を測る。基部から10.1㎝のところに段があり、それから先端が刃部であると思われる。基部は上側を1.1㎝幅で折り返えす。保存処理後は長さは変わらないものの幅がやや狭くなり、基部の段が消滅した。（PL12.016）基部の膨らみが錆であった可能性があるが取り上げ時の観察ではしっかりしていたと思われるので、実測図は処理前、写真は処理後のものを記載した。

SC1004（Fig.11）調査区の北西端で検出した。南北に長い長方形を呈し、主軸をN－６°－Eにとる。南西端をSC1003に切られる。遺構の北側が調査区外に延びており、現状で南北4.54m、東西3.4mを測る。床面までの深さは12㎝を測る。壁際に幅8～28㎝、深さ7～13㎝の壁溝が巡る。約1/2前後を攪乱で削平されており、柱穴や炉は不明である。覆土中から甕の口縁や底部など細かな土器片が多く出土したがほとんど図化できなかった。出土遺物のほとんどが中期中葉から中期末までの土器片である。出土遺物（Fig.11　017～019）いずれも甕口縁である。017は復元口径29.2㎝を測る。外面は橙色～暗橙色を呈し胎土は粗い。018は復元口径29.8㎝を測る。外面は淡橙色～橙色である。019は橙色を呈す。胴部上端は垂直に立ち上がり口縁直下でやや肉厚になり直交する口縁がつく。

SC1005（Fig.12）調査区の北西側で検出した。中央部を古代の土坑SK1016に切られる。平面は南北に長い長方形を呈し主軸をN－8°－Eにとる。現状で南側短辺と西側長辺の中央部までにL字型のベット状遺構がつく。西壁ベット状遺構の北側は削平されたものと思われる。ベットの床面は削平され堀方のみ遺存している。西側ベット状遺構中央で径70㎝の円形土坑を検出した。この土坑は内面がかなり焼けて赤変しており、炉か竈として使用されたものと思われるが住居しに伴う遺構であるかどうか確定できなかった。土層に焼土の上に白色砂混じりの粘土層がみられるが、これは竈の構築材であった可能性がある。焼土は低床面の西壁際でも検出された。径30㎝の円形に床面が赤変している。ベ

SC1003床面



SC1003掘方

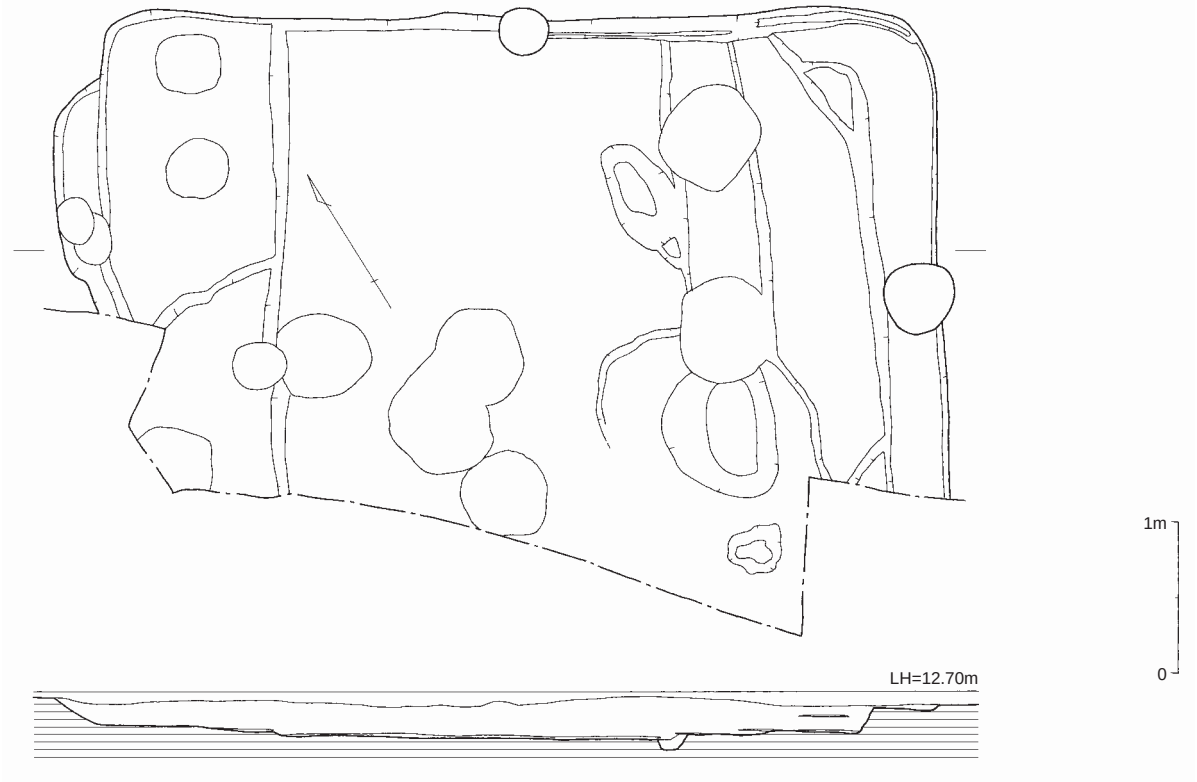


Fig. 8　SC1003遺構実測図（1/50）

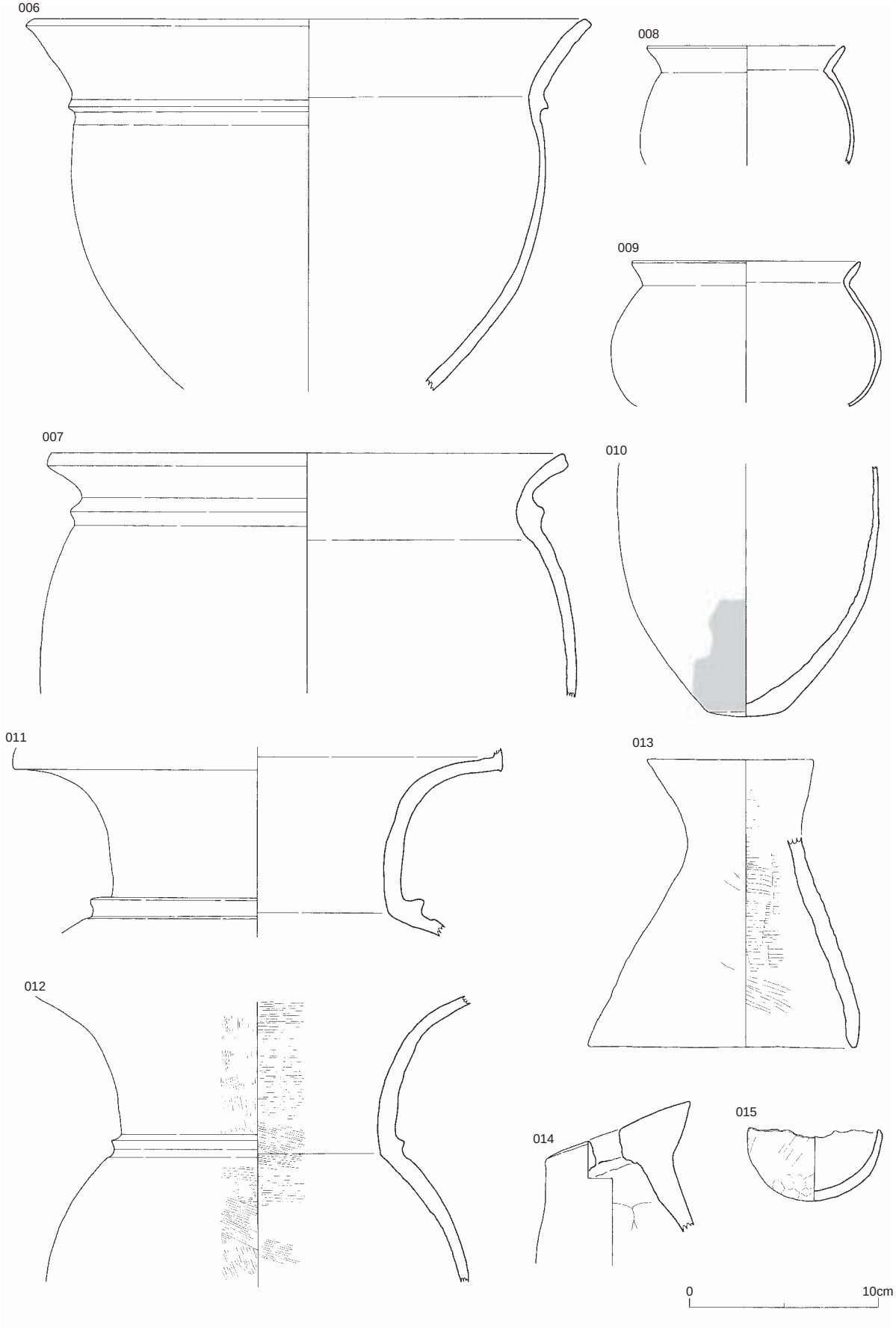


Fig. 9　SC1003出土遺物（1/3）

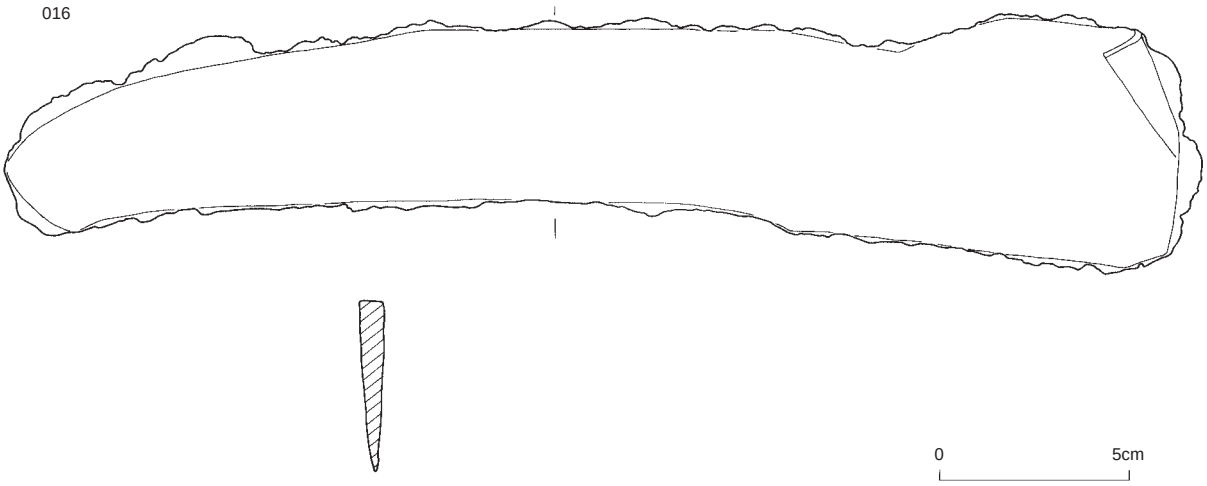


Fig.10　SC1003出土鉄鎌実測図（1/2）

ット状遺構は掘方底面から５㎝ほど高く削り出して、その上に地山ロームの赤褐色粘質土で盛土している。低床部は南北3.5ｍ、東西3.02ｍで検出面からの深さは15㎝を測る。低床部南側に断続的に幅5～9㎝、深さ３～８㎝の壁溝が巡る。柱は２本柱で柱間は2.5ｍを測る。柱穴掘方は径34～39㎝、柱痕跡は南側柱穴で径13㎝を測る。掘方は低床部の西側半分を15㎝程掘り下げている。壁溝を検出した部分は堀方で盛土された部分である。掘方北端では掘下げ時についた幅15㎝近い鍬の刃先らしい痕跡を確認した。覆土中から土器小片が多く出土したがその多くは中期中葉から中期後半の甕片で少量後期中葉から古墳時代前期の遺物も含む。出土遺物（Fig.12　020・021）020は袋状口縁の口縁端部である。赤茶褐色を呈し細砂を少量含む。焼成は良好で調整は不明瞭であるが外面は横方向のミガキと思われる。

021は小型甕口縁である。赤橙褐色を呈し胎土は細かく砂などはほとんど含まない。

SC1006（Fig.13）　調査区北西側で検出した。３～４軒の竪穴式住居の切り合いと思われる。いずれも残りが悪く床面は残っておらず、壁溝とわずかな掘方のみの遺存で切り合いは不明である。覆土中から弥生中期中葉から中期後半の甕片とともに中期中葉の甕棺片・焼土塊などが出土している。

SC1030（Fig.14・15）調査区の北端で検出した。SC1031を切る。主軸をN－68°－Wにとる。住居の東側半分は攪乱等で破壊され、北半分は調査区外に延びる。炉の中心から西壁まで3.9ｍ、南壁まで3.5ｍで東西にやや長い住居である。覆土はロームブロックを多く含む暗茶褐色土で低床部床面から８㎝上に炭化物層を確認した。床面の一部に細かなロームブロックを多く含む暗茶褐色土の薄い層が見られるのは貼り床か。西側に幅約２ｍ、南側には0.2ｍの細いベット状遺構がつく。西側ベット際には壁から10㎝離れたところに壁に沿った小杭の痕跡を確認した。間隔は10～18㎝である。小杭を確認した部分のベットは北側に比べやや狭くなっていることから削りすぎた部分に盛土で作り足し、崩壊防止用の板壁を押さえた杭と考えられる。低床部はベットから10㎝低い。ベットから50㎝離れて溝が巡る。柱は２本柱で東西方向に並ぶ。東西両柱穴とも切り合いがありどれが対応するかを確定するのは難しいが西側は主柱穴間溝がつくことからSP1954、東側は炉の距離からSP1098である可能性が高く、柱間は2.72ｍを測る。西側柱穴は平面隅丸方形を呈し、径約60㎝を測る。炉は円形で径72㎝、床面からの掘込みは61㎝を測る。炉の周囲には１辺90㎝ほどの溝が巡る。溝は幅が５㎝前後で東側で途切れる。周囲に板を巡らす為の溝か。西側主柱穴と炉の間には溝が掘られており、溝の底面は炉から柱穴側に傾斜する。溝を埋めてから炉を掘り込む。低床部の周溝は主柱穴の外側に接しているが、

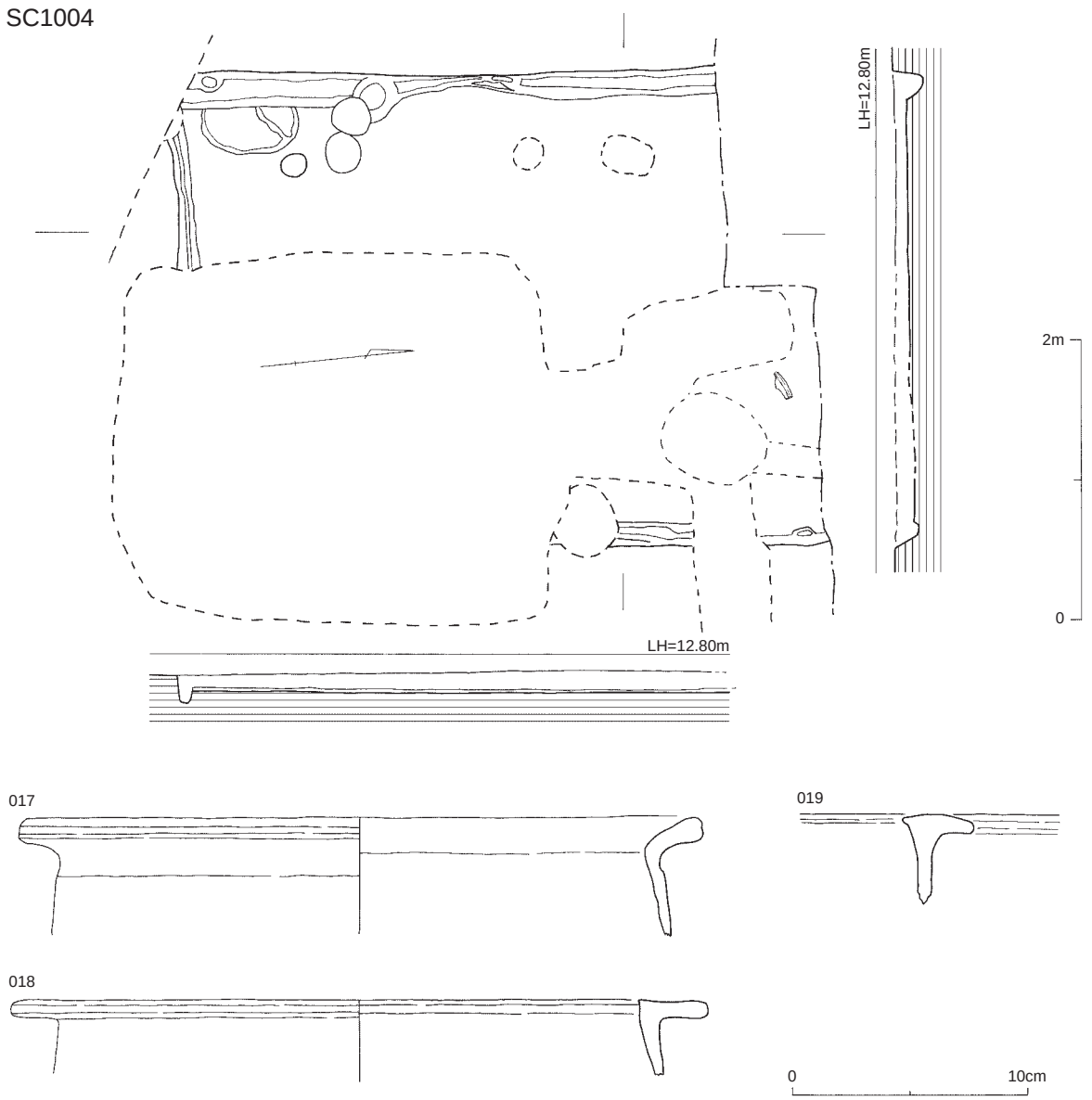
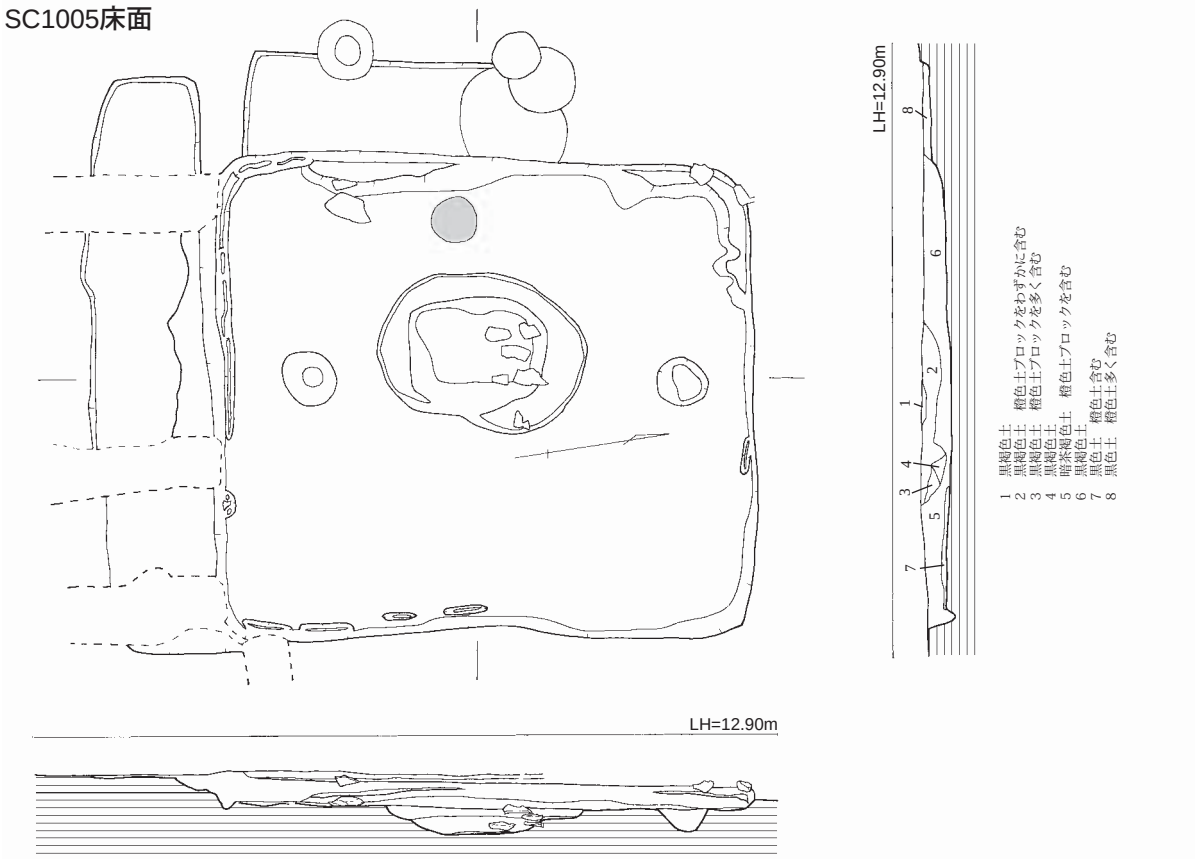


Fig.11　SC1004遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

他の住居でベット状遺構を主柱穴が切ることからベット状遺構の板壁を差し込む溝の可能性があり、この場合ベット幅は南壁側で51㎝、西壁側で159㎝とかなり広い。また、西側ベット上にある溝が低床部の東西方向の溝と対応することから別の機能を持つ可能性もある。覆土中から土器小片が多く出土した。その多くは弥生時代中期の甕片であるが、やや古い城ノ越期の甕片も出土している。また、床面直上から後期前半の甕棺片が纏まって出土した他に022～024（Fig.15）が出土した。

SC1031（Fig.16・17）調査区北西側で検出した。SC1030に切られる。南北に長い長方形を呈し主軸をN－3°－Eにとる。南北両短辺に幅１ｍ前後のベット状遺構を持つ。北側のベットは西側短辺に出っ張りを持つL字型を呈し、幅はL字の付け根部分で94㎝、SC1030との境部分で117㎝を測る。削平されベット床面は残っていない。南側ベット状遺構はL字状に幅18㎝、深さ５㎝程の壁溝が、北側ベット状遺構には幅4～11㎝、深さ2～4㎝の壁溝が断続的に巡る。北側のベット状遺構は完全な盛土であるが南側ベット状遺構は掘方底面から３㎝高く削り残し、その上に盛土している。掘方底面は検出面からの深さ８㎝を測る。柱は２本柱で南側柱穴は掘方径86㎝の楕円形を呈し、深さ71㎝を測る。北側

SC1005床面



SC1005掘方

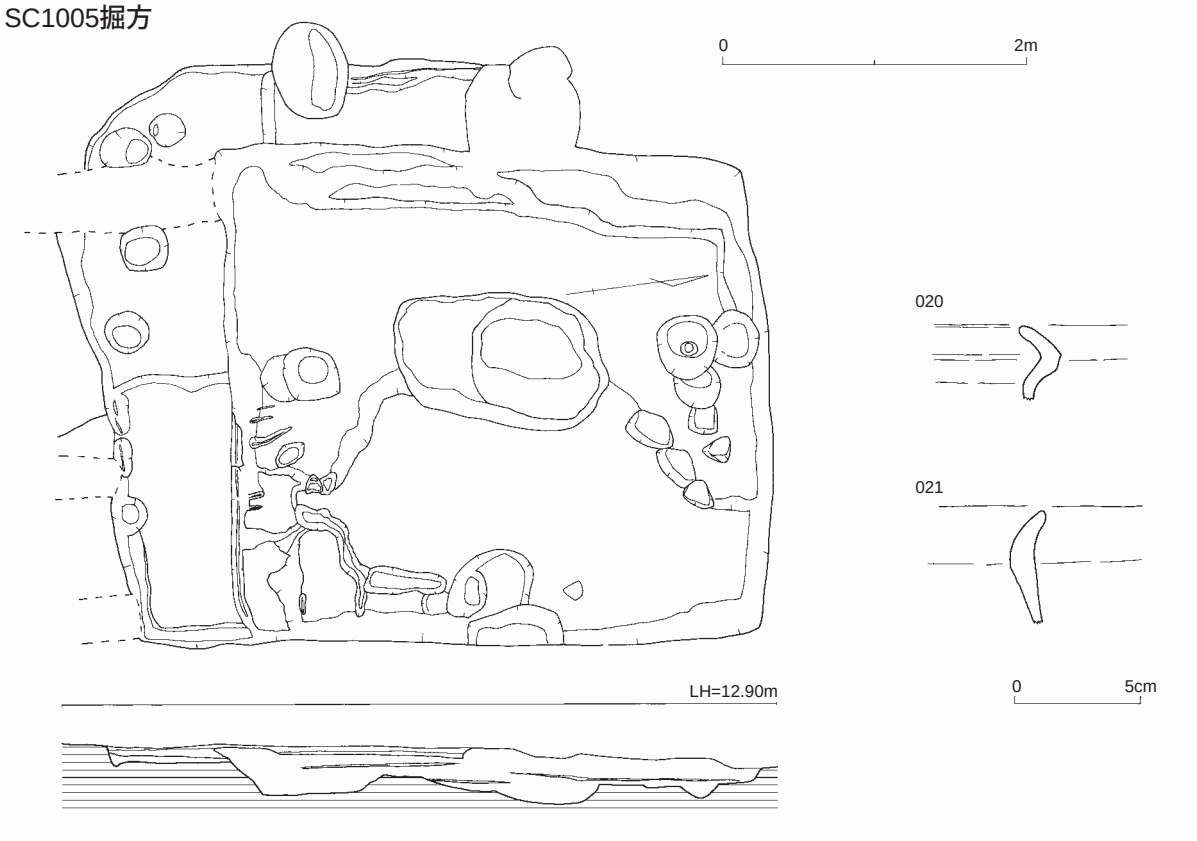


Fig.12　SC1005遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

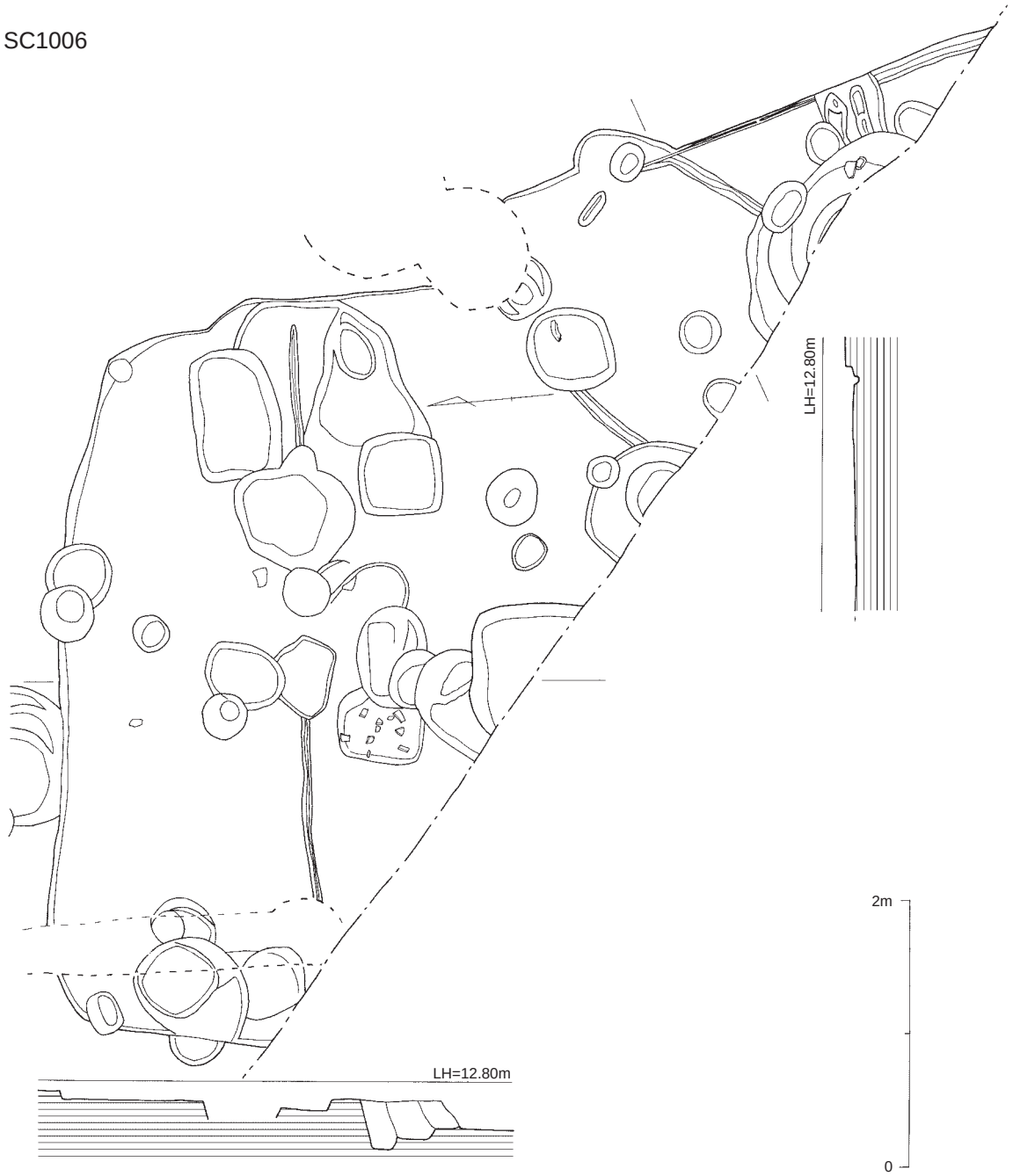
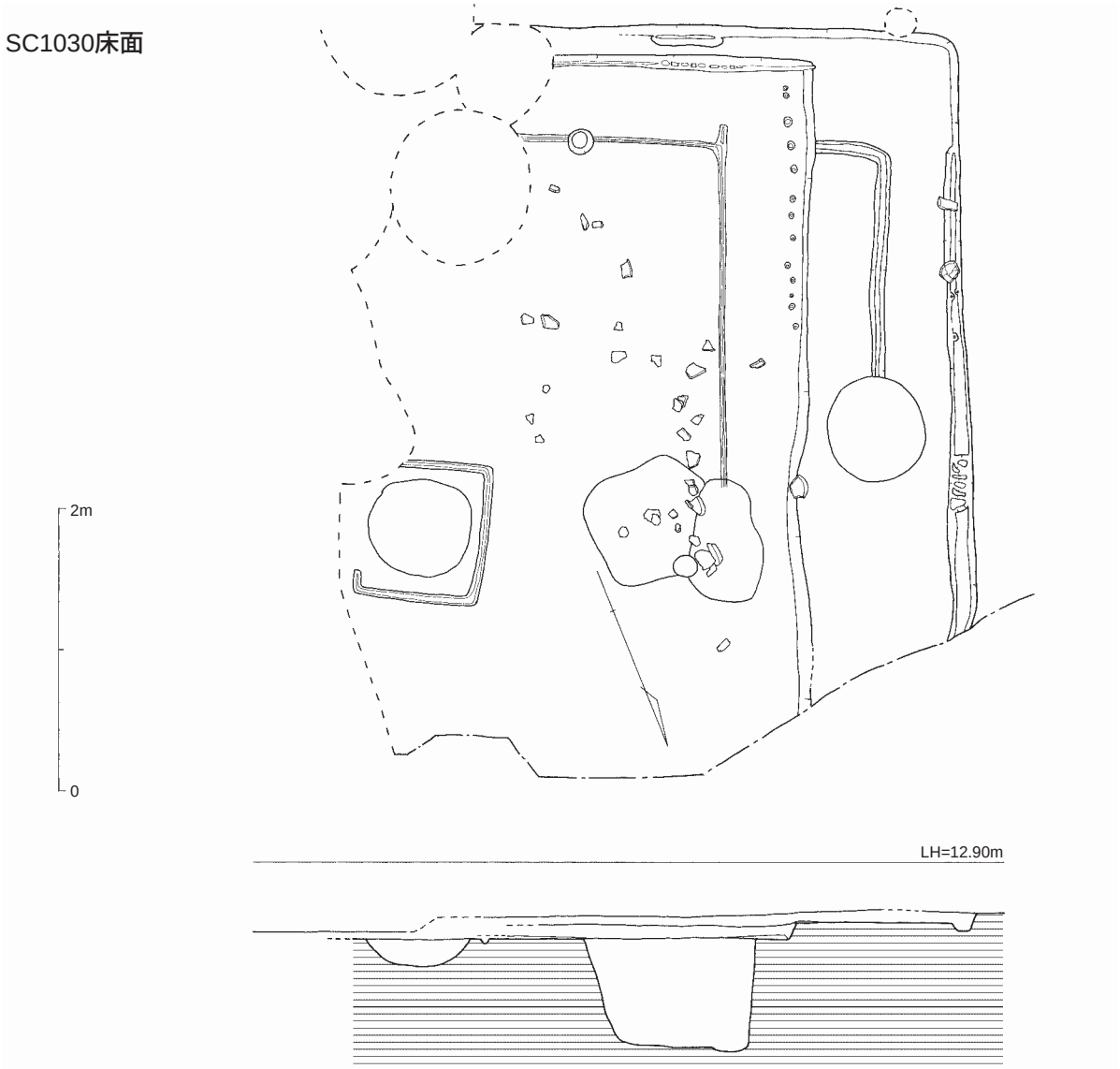


Fig.13　SC1006遺構実測図（1/50）

柱穴は長径97㎝、幅81㎝の不整楕円形を呈し、深さ57㎝を測る。床面直上から高坏片などの遺物が出土した。出土遺物（Fig.16　025～027）。025は小型鉢である。復元口径12.6㎝を測る。026は器台である。復元口径8.3㎝、器高6.9㎝を測る。027は高坏の脚部である。復元底径17.4㎝を測る。

SC1073（Fig.17）調査区南西側で検出した。ほとんどは調査区南側に延びる。床面は深さ43㎝を測る。北側で幅３㎝の断続的な溝を確認した。壁溝と思われるが、掘方壁に平行せず住居に伴わない可能性がある。溝との間をベット状遺構とすると幅103～136㎝を測る。低床部は埋まる途中で一度掘り下げられている。埋没途中に２面の焼土面があり、埋没中の窪みを炉として利用している。

SC1119（Fig.18）調査区中央から北西寄りで検出した。SC1172に切られる。平面形は東西に長い長



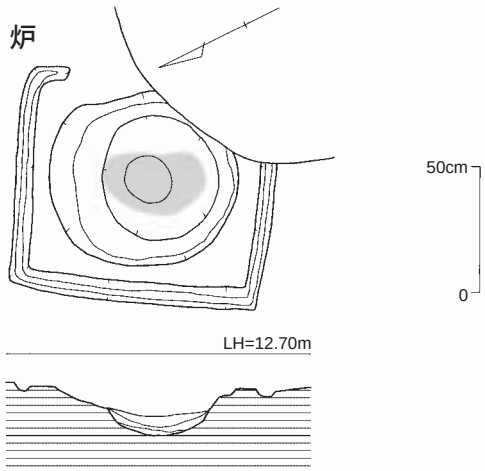


Fig.14　SC1030遺構実測図（1/50・1/30）

方形と思われ、短径は約５ｍを測る。床面は削平されており、掘方底面までの深さ７㎝を測る。東壁に沿って幅４～９㎝の溝を確認した。壁際に位置する1189は主柱間溝の残りと思われる。柱穴は長径77㎝、短径65㎝、深さ42㎝、溝は長さ36㎝を測る。堀方からは弥生時代中期の甕小片が出土した。

SC1142（Fig.18）調査区北西側で検出した。東西方向に長い長方形で主軸をN－53°－Wにとる。床面は削平され、住居の約1/2の範囲で掘方痕跡のみ確認した。現状で長径2.9㎝、短径2.6ｍ、遺構検出面からの深さ４㎝を測る。東壁際の一部に幅６㎝の壁溝を確認した。柱穴、炉は不明である。

SC1172（Fig.19）調査区中央西寄りで検出した。削平され床面は遺存しておらず掘方と屋内土坑のみの調

SC1030掘方

Fig.15　SC1030遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

SC1031床面

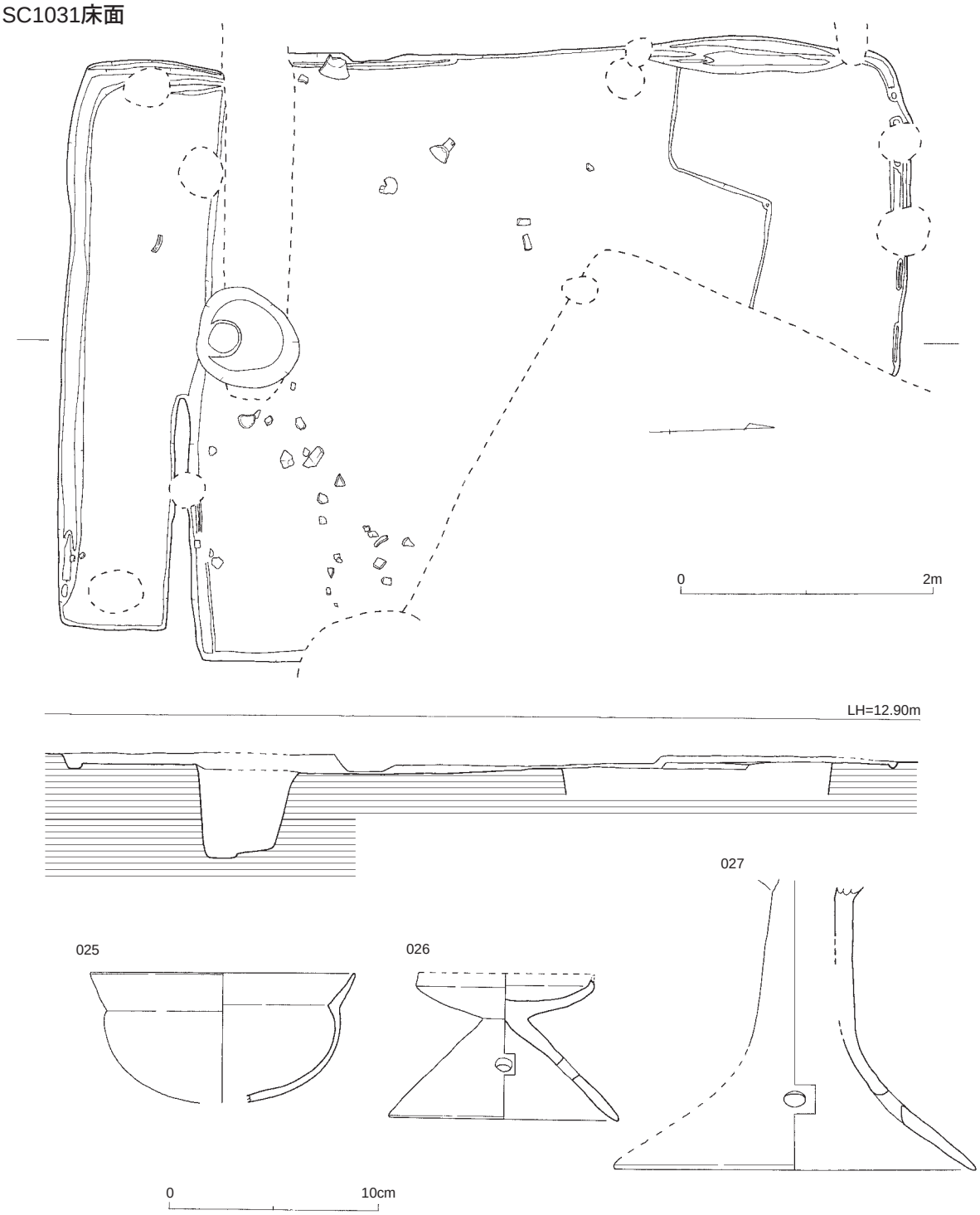
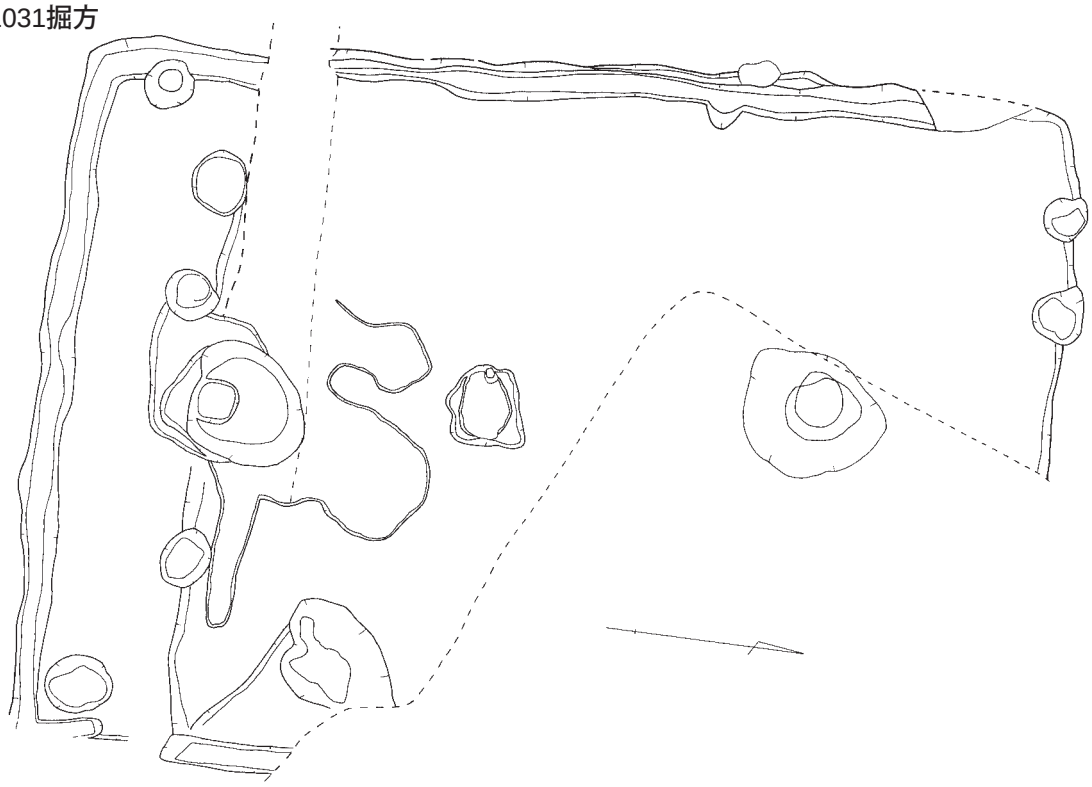
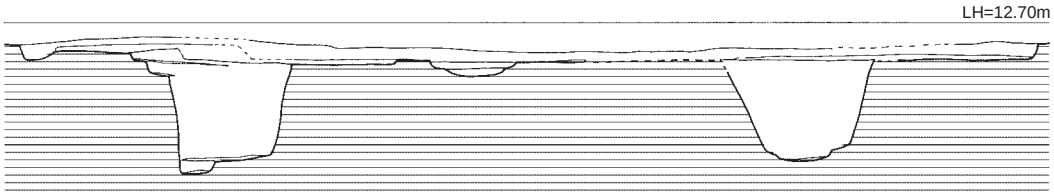


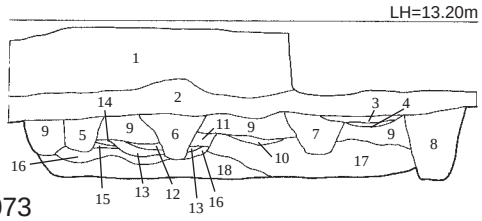
Fig.16　SC1031遺構遺物実測図（1/50・1/3）

査である。西側が削平されているため現状で南北に長い長方形を呈し南北297㎝、東西203㎝を測る。南側に位置するSK1171も軸が同じであり、同じ住居に伴う可能性がある。北壁に沿って東西方向の掘方があり幅67㎝、深さ14㎝を測る。主柱穴は不明である。炉はSK1171の掘り込み内部が熱で赤変しており炉と思われる。掘方埋土中から土器小片が多量に出土した。ほとんどは細片で時期不明であるが、時期の判るものには鋤先口縁の破片、小型器台片、「く」の字型口縁破片、弥生後期後葉の甕底部などのほかに山陰系器台の小片などがある。

SC1031掘方







1 新しい盛り土
2 灰色土　耕作土
3 黒褐色土　焼土ブロック含む
4 焼土　炉
5 黒褐色土　柱穴掘方
6 黒褐色土　柱穴掘方
7 黒褐色土　柱穴掘方
8 黒褐色土　柱穴掘方
9 黒褐色土　ロームブロックを含む
10 焼土　炉
11 暗橙色土
12 橙色土
13 黒色土
14 橙色土
15 黒色土
16 橙色土　黒色土をわずかに含む
17 暗橙色土
多量のロームブロックの透き間に黒色土を含む
18 橙色土

SC1073

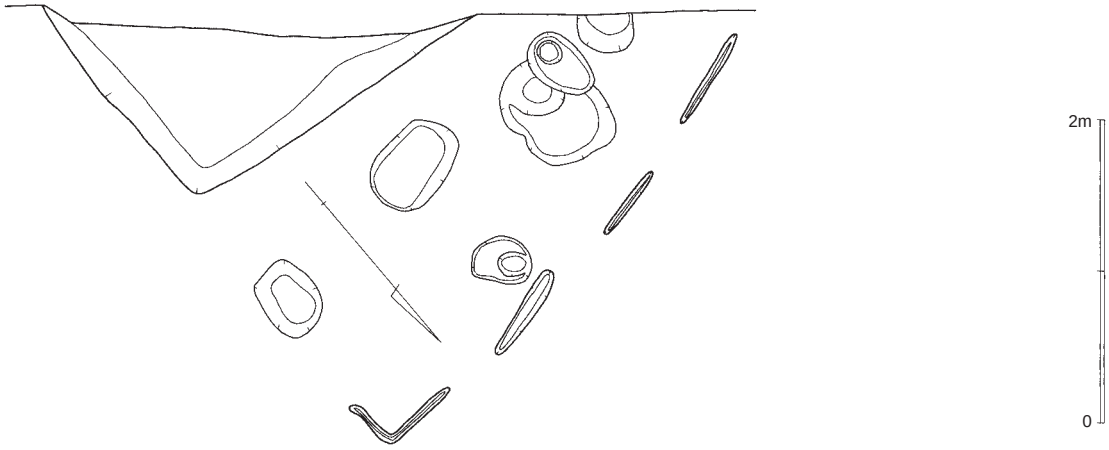


Fig.17　SC1031・SC1073遺構実測図（1/50）

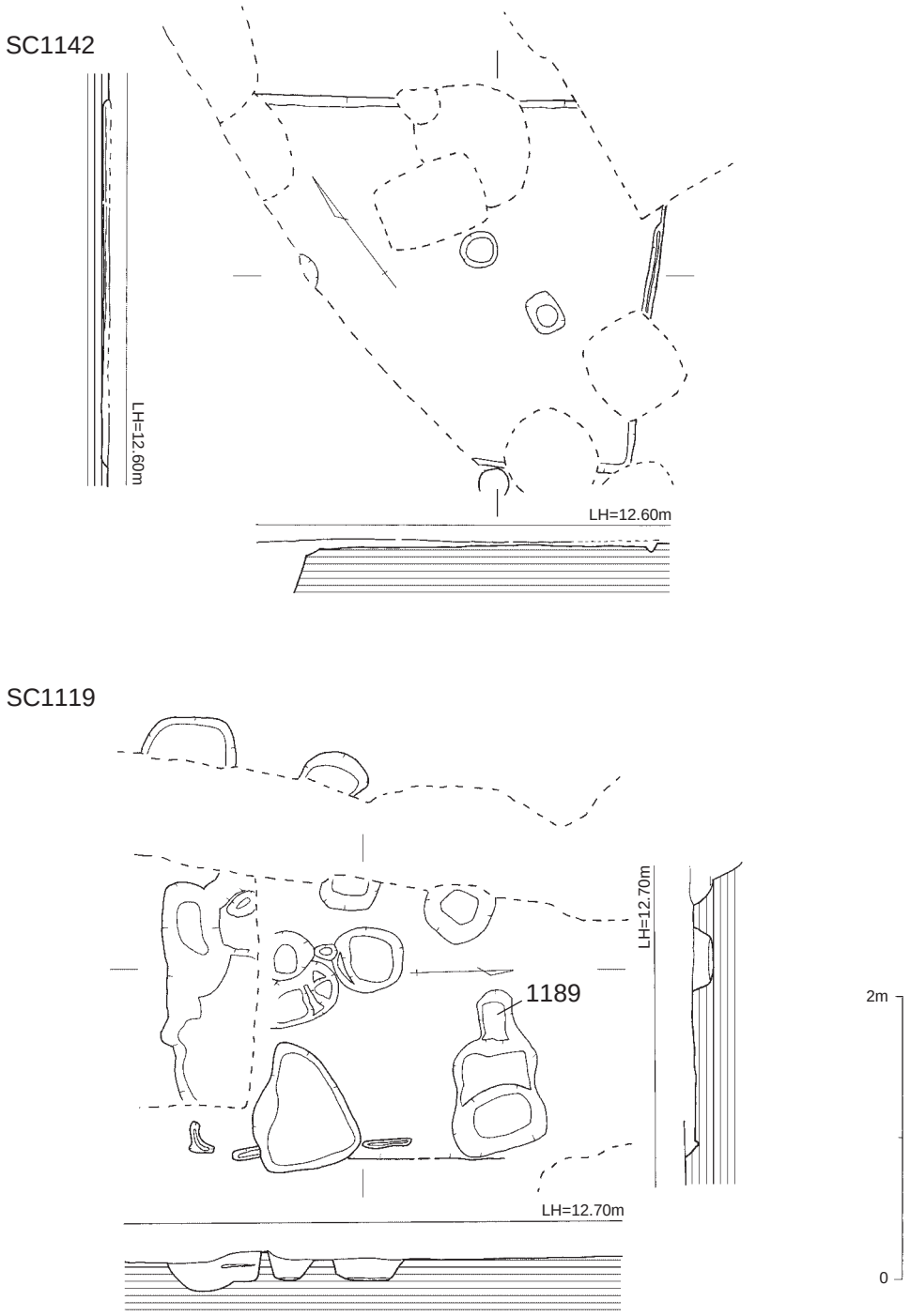


Fig.18　SC1119・1142遺構実測図（1/50）

SC1175（Fig.20）調査区中央西寄りで検出した。削平され遺存悪い。平面は方形もしくは長方形で現状で東西3.1m、南北1.0m、床面からの高さ７㎝を測る。北側にベット状遺構の下部構造と思われる掘り込みがあり、現状で幅75㎝、長さ3.03m、深さ７㎝を測る。柱は２本柱で、柱間は2.3mを測る。柱穴堀方は径39～48㎝、深さ7～28㎝を測る。掘方埋土中から土器細片が多く出土したがその多くはL型口縁片や丹塗り土器片などの弥生時代中期に属するものが多い。出土遺物（Fig.20　028）。028は高坏坏部である。復元口径23.6㎝を測る。外面は赤褐色と黄褐色の斑を呈す。

SC1184（Fig.21）調査区中央西寄りで検出した。SC1172に切られる。平面は方形もしくは長方形で主軸をN－17°－Eにとる。床面は削平され、掘方の一部のみの遺存である。現状で南北４m、東西

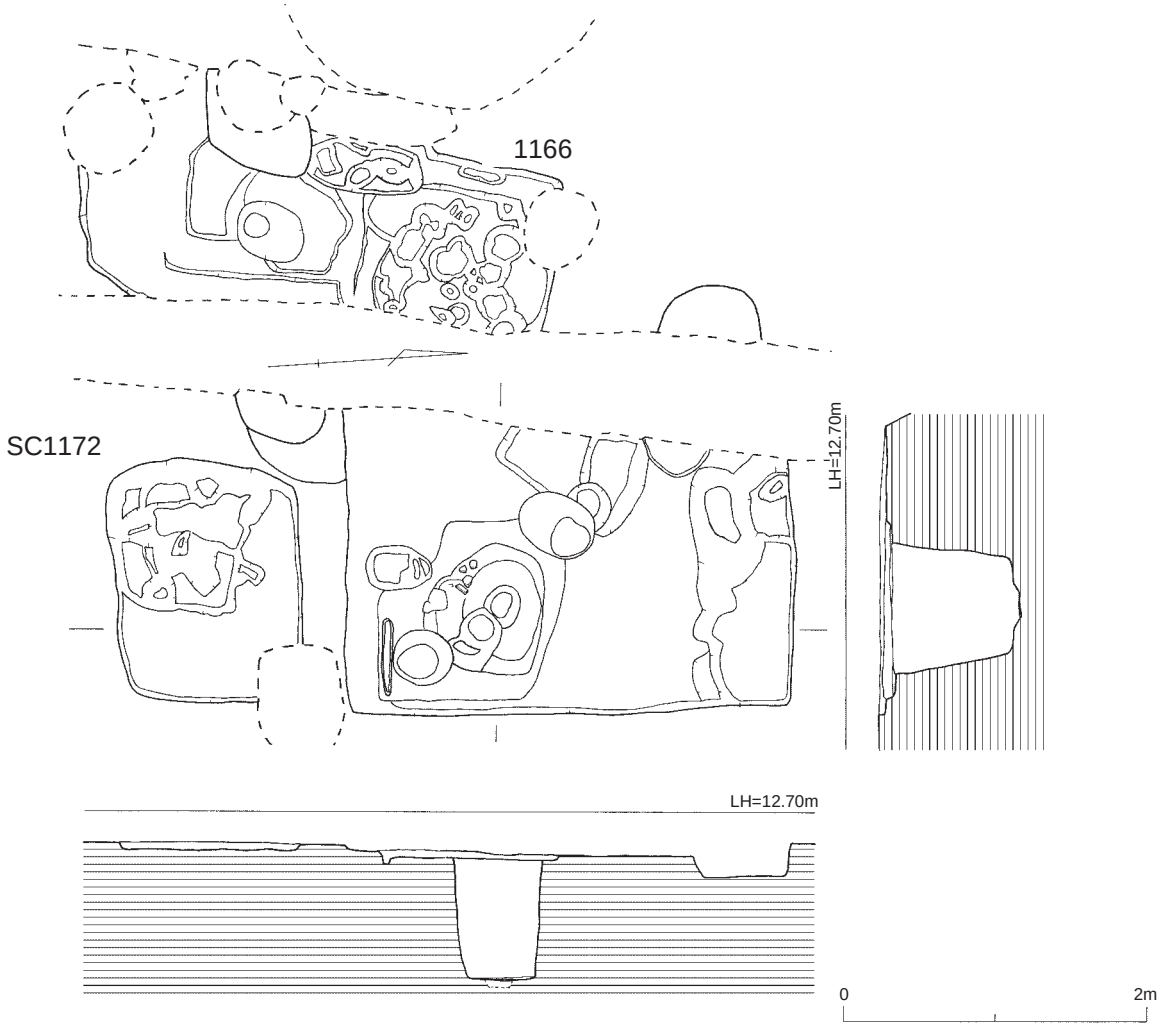


Fig.19　SC1172遺構実測図（1/50）

2.4mを測る。北壁沿いに幅22～28㎝のベット状高まりとその落ち際に沿って70㎝～100㎝間隔で並ぶ柱穴状遺構がみられる。柱穴は楕円形で長径25㎝、深さ6～8㎝を測る。南東隅に不整方形の屋内土坑がつく。東西幅92㎝、105㎝を測る。埋土中から弥生中期の土器細片が出土した。

SC1209（Fig.21）調査区中央北寄りで検出した。古代の溝SD1248に切られ、SC1210を切る。平面形はやや南北に長い長方形で主軸をN－8°－Eにとる。南北4.84m、東西4.05mを測る。床面は削平されて残っていない。掘方底面は北から南へ緩やかに傾斜する。柱は４本柱で柱間は2.3mの方形である。東壁中央は外側に張り出すが壁から26㎝離れて長径96㎝、短径59㎝の長方形を呈す屋内土坑があり、その周辺から小型丸底壺や長頸壺、甕棺片などの遺物がまとまって出土している。出土遺物（Fig.22 029）。029は小型鉢である。復元口径は11.6cmを測る。

SC1237（Fig.23）調査区中央西寄りで検出した。SD1115とSC1184に切られる。床面は削平されて掘方のみの調査である。平面はやや平行四辺形を呈し、現状で東西5.07m、南北4.86m、掘方底面までの深さは５㎝を測る。南西隅に西壁から約50㎝離れて長さ52㎝、幅８㎝の壁溝状溝を確認した。

SC1240（Fig.23）調査区南側で検出した。遺存状態不良である。SC1236と攪乱に壊され平面形が不明で、また削平が著しく掘方もほとんど残っておらずわずかな痕跡のみである。地山の橙褐色粘質土が薄く汚れた状態で痕跡のみの確認である。遺物は出土していない。

SC1277（Fig.24・25）調査区中央で検出した。主軸をN－82°－Wにとり平面はほぼ方形で東西5.6m、

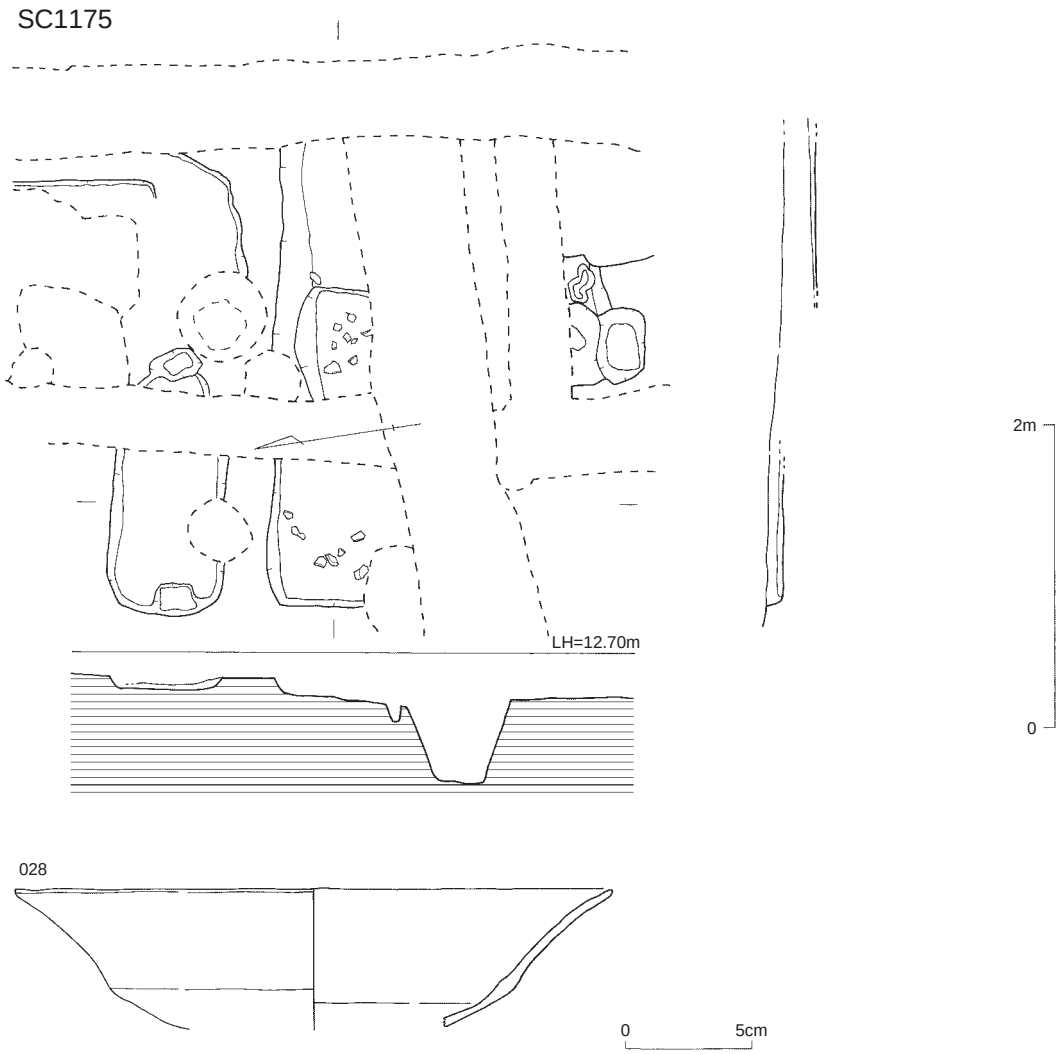


Fig.20　SC1175遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

南北5.62ｍを測る。東西両端にベット状遺構がつき、幅は東側が110～120㎝を測る。西は攪乱によりベット端部が破壊されており明確な幅は不明であるが最大80㎝程度である。東側のベット状遺構は中央部が途切れており、156×120㎝の窪みができているが、窪みを囲うように東・北側には壁溝があり、その囲いの中を133×69㎝の小判型に一段下げた後、中心に径50㎝、深さ36㎝の柱穴状土坑を掘り込んでいる。小判型掘り込みの西側周辺には焼土ブロックと黄褐色粘土ブロックが散乱しており、柱穴状土坑の埋土も焼土ブロックを多く含む。竈かなにかの構築材であろうか。柱穴状土坑の埋土は上層が周辺の覆土とは異なる暗褐色粘質土で下層は締まりのない黒褐色粘質土である。暗褐色粘質土は竈構築材の可能性がある黄褐色粘土ブロックを含む黄褐色ローム混黒色土を切っている様にもみえ、住居に伴わない可能性も考えられる。住居の周囲には途切れながらも壁溝が巡るが、西側ベット部分では壁溝が二重に巡る。西壁はやや外側に膨らむが、内側の壁溝は直線を呈し、外側の壁溝は壁に沿って外側に膨らんでいる。炉は低床部中央に位置し、３基の楕円形掘り込みがあり、大きなものから径83㎝、47㎝、36㎝、深さは同順で14㎝、32㎝、13㎝を測る。３基の掘り込み周辺には赤橙色粘土や暗茶褐色粘質土、炭化物などが分布する。主柱穴は４本で柱間は南北で2.8ｍ、東西で2.8ｍを測る。南西側の主柱穴からは二重口縁壺が伏せた状態で出土し、柱抜き取りに伴う祭祀と思われる。遺物は住居床面から浮いた状態で高坏・甕等の破片が多く出土している。これらは主柱穴の上にも分布してお

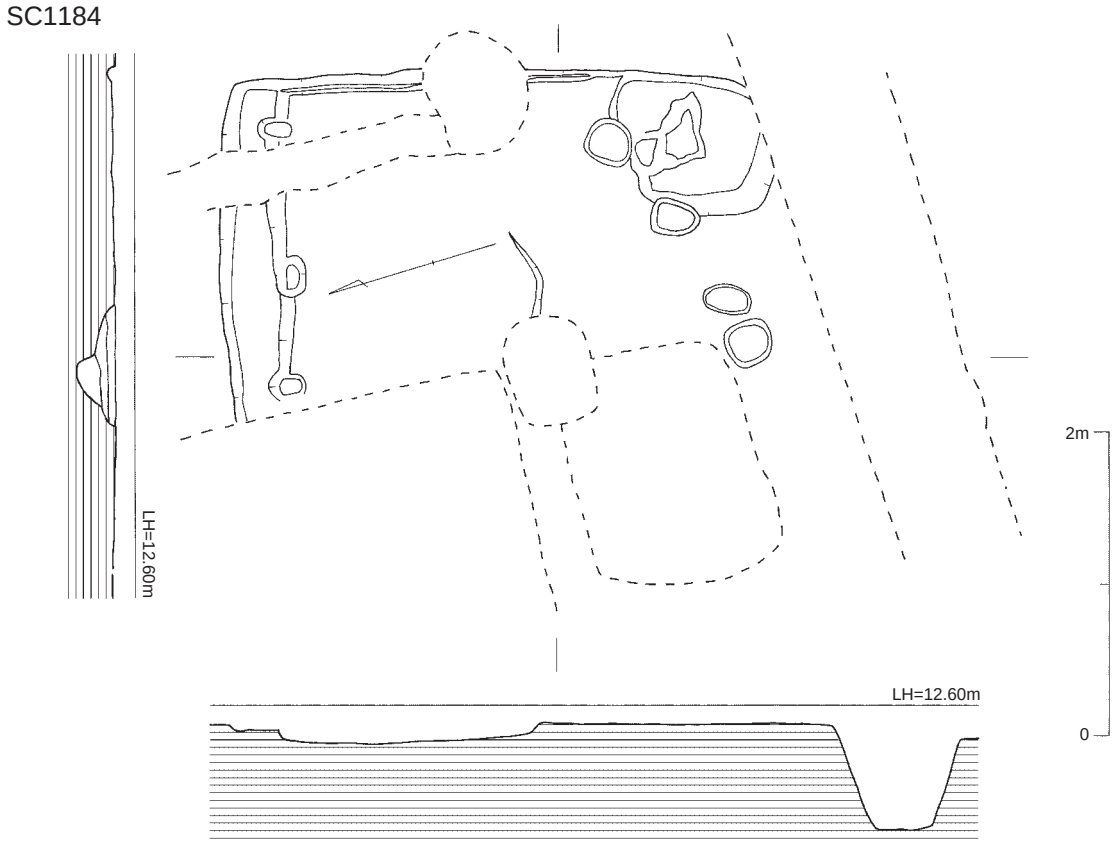


Fig.21　SC1184遺構実測図（1/50）

り、住居が廃棄され柱穴が埋まった後に捨てられている。出土遺物（Fig.26・27　030～040）030は壺である。外面は赤褐色で胴部に黒班がある胎土は細かく砂をほとんど含まない。031は土師器鉢である。復元口径13.8㎝、器高5.6㎝を測る。032～034は土師器甕である。032は復元口径12.8㎝を測る。033は復元口径13.2㎝を測る。外面黄褐色を呈し胎土は１㎜程の白色砂を多量に含む。034は復元口径15.1㎝を測る。外面黄白色、内面黒褐色を呈す。035・036は高坏である。035は復元口径20.8㎝、器高13.9㎝を測る。外面淡橙色を呈し口縁端と脚部端にわずかに黒班がみられる。脚部には三方に円形の透かしが見られる。036は底径10.9㎝を測る。外面は橙色と暗黄色の斑で胎土は細かい。三方に円形の透かしを持つ。037・038は器台である。037は復元口径9.0㎝、器高7.6㎝、底径10.2㎝を測る。外面は淡橙白色で脚に四方透かしがはいる。038は復元口径9.8㎝、器高7.9㎝を測る。外面は橙褐色を呈し胎土は細かい。039は砥石である。長さ11.6㎝、幅2.5㎝を測り、断面は三角形に近い。長軸に沿った研磨痕がみられ全面を砥石として使用している。040は二重口縁壺である。主柱穴から伏せた状態で出土した。外面は赤橙褐色を呈す。底部わずかに尖る。胴部上半に黒班あり。

SC1360（Fig.28・29）調査区の南東側に位置し主軸をN－67°－Eにとる。SC1362に切られ、また南西側約1/2は調査区外に延びる。東西に長い長方形を呈すると思われるが、現状で短辺６ｍを測る大型竪穴式住居である。東壁に幅85～110㎝のベット状遺構がつき北壁に沿ってL字状に曲がる。ベット状遺構は削平され床面は残っていない。東壁ベット状遺構は床面から３㎝の高さまで一度削ってから地山ロームの明赤褐色粘質土で盛土しており、北壁ベットは削り出しのない完全な盛土である。柱穴は東西に長く長径127㎝、幅83㎝、床面からの深さ91㎝を測る。炉側に階段状の段が２段つくのは柱を柱穴に入れるときのスロープとするためと思われる。柱痕跡径24㎝を測る。主柱穴から西側の炉に溝を掘る。用途は炉の排水用の溝と思われる。住居内で焼土面が２カ所確認されたが、いずれも床

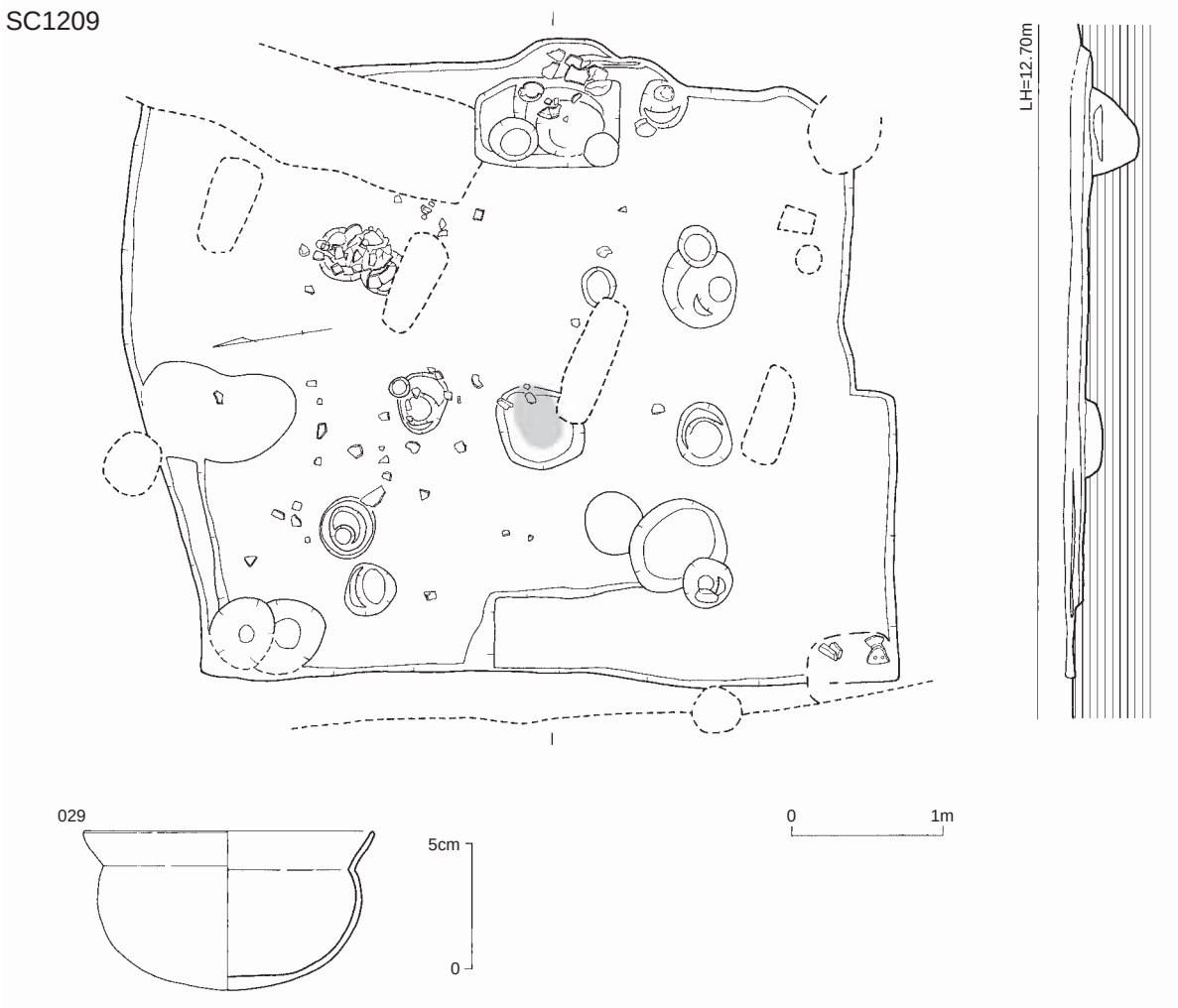


Fig.22　SC1209遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

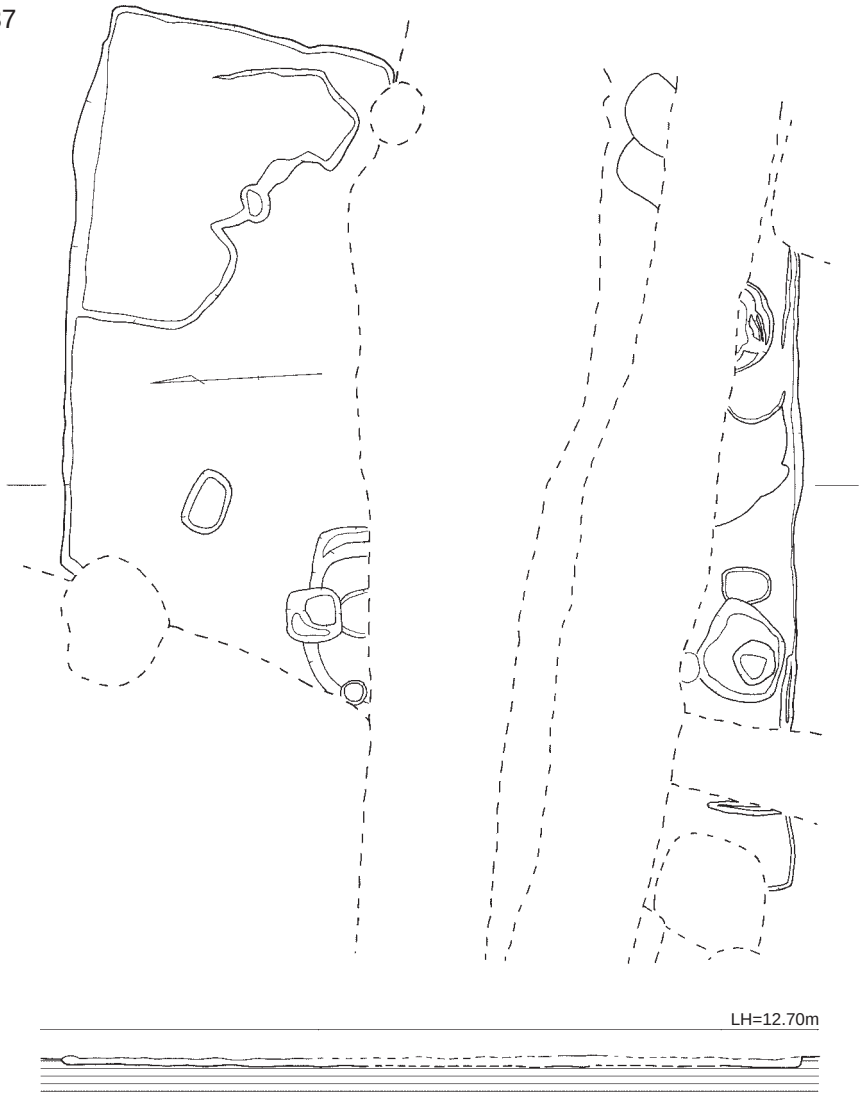
面より高いため住居に伴う炉ではなく、住居が埋没途中の窪みを炉として利用したものである。掘方は幅20～30㎝の壁溝を巡らす。この溝はベットと貼り床の盛土で埋められている。壁溝や低床部掘方、ベット下掘方も壁に沿っており、他の住居の掘方より整然とした印象を受ける。出土遺物（Fig.29 041～044）041・042は土師器椀である。041は復元口径16.2㎝、器高7.2㎝を測る。外面暗茶褐色、底部は黒色を呈す。042は口径10.4㎝、器高4.8㎝を測る。外面橙色を呈す。043は甕で復元口径7.7㎝を測る。外面黒色を呈す。044は二重口縁壺の口縁である。暗赤褐色を呈し外面口縁端に波状文を施す。

SC1361（Fig.30）調査区南東側で検出し主軸をN－85°－Eにとる。SC1893に切られ、SC1362を切る。平面形はやや隅丸の長方形を呈し長径5.38m、短径4.26mを測る。床面は削平され残っていない。炉は中央部に位置しており、平面は南北に長い楕円形で長径67㎝を測る。柱は長軸に平行する２本柱で柱穴は長径96～103㎝、柱穴間は3.7mを測る。掘方は東西壁沿いを不整形に10～20㎝掘り下げる。

出土遺物（Fig.30　045・046）。045は甕底部で復元底径3.7㎝を測る。橙色を呈しす。調整は不明。内面はナデか。046は器台底部で復元底径10.2㎝を測る。外面黄橙色を呈し胎土粗い。

SC1362（Fig.31）調査区南東側で検出した。SC1361に切られ、SC1360に切られる。平面は東西に長い歪な長方形を呈し、現状で東西4.06m、南北3.4mを測る。床面は削平されて残っておらず掘方のみの調査である。南壁に沿って幅40～75㎝、深さ15㎝前後の溝を掘り、黄白色粘質土で一度埋めてから南壁中央付近に長径70㎝、深さ２㎝の浅皿状の穴を掘下げている。この穴はわずかに壁がわずかに焼

SC1237



SC1240

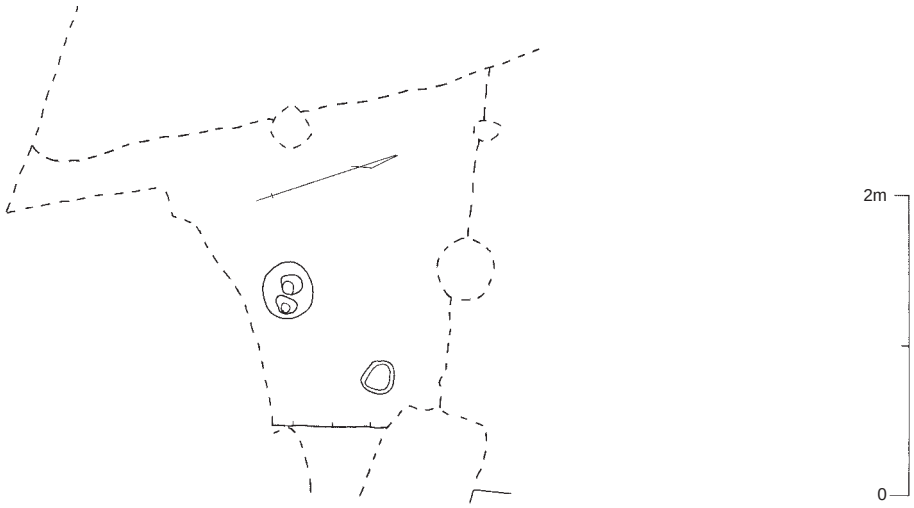


Fig.23　SC1237・SC1240遺構実測図（1/50）

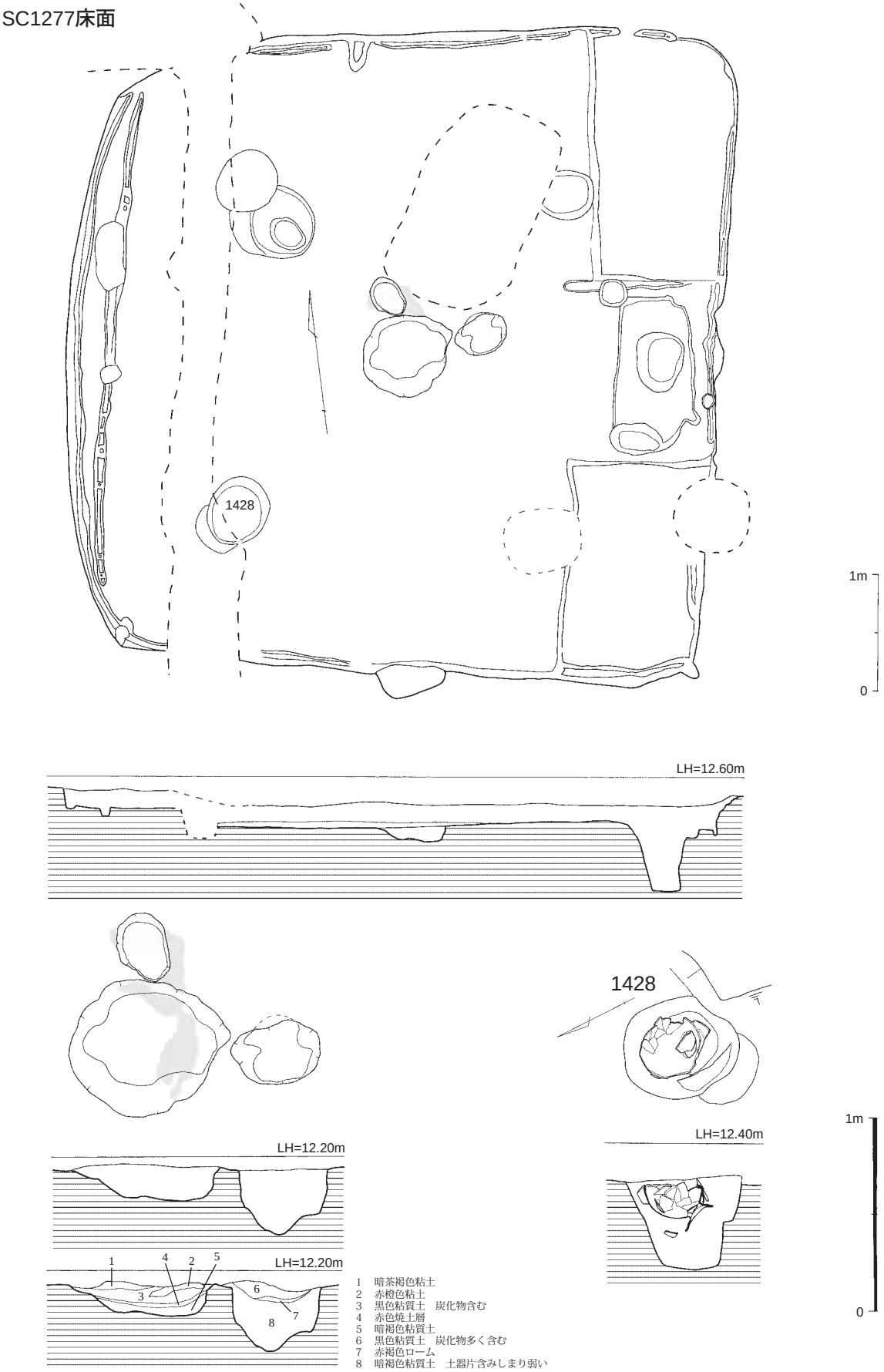


Fig.24　SC1277遺構実測図1（1/50・1/30）

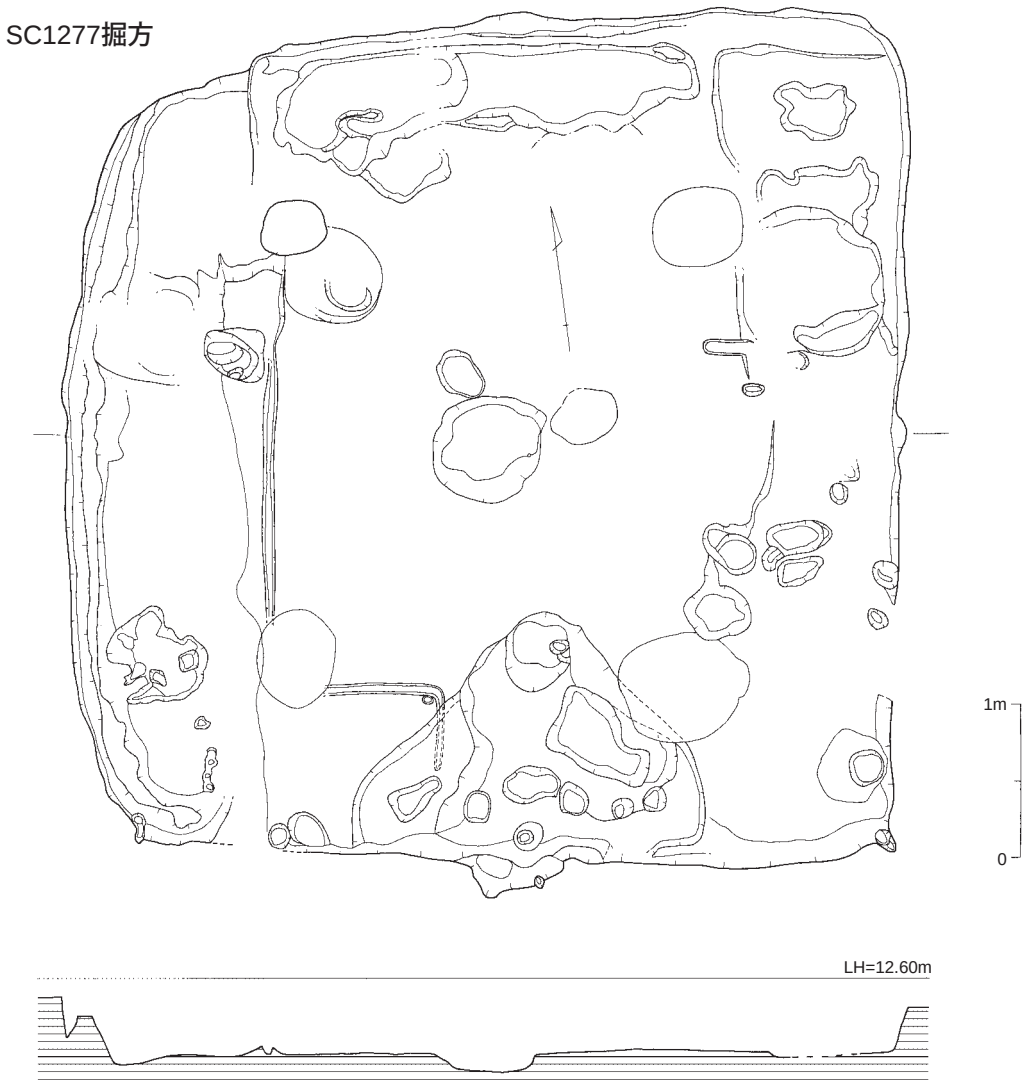


Fig.25　SC1277遺構実測図2（1/50）

けていることから炉として利用された可能性がある。

SC1395（Fig.32）調査区南東寄りで検出した。SC1360に切られる。遺構の南西部分は調査区外に延びる。床面は削平されて残っていない。南側は床面までの高さ６㎝を測るが北側は痕跡のみ確認した。これらは同じ住居でなく切合の可能性も考えられる。遺物は弥生中期の甕の小片が出土した。

SC1410（Fig.32）調査区東側で検出した。SC1430に切られ主軸をN－13°－Eにとる。平面は南北にやや長い長方形で長径5.06m、短径4.76mを測る。床面は削平のため遺存しておらず、壁溝のみ検出した。炉は中央よりやや北寄りに位置する。柱は４本柱で径35～42㎝、深さ58～63㎝を測る。柱間は東西2.5m、南北2.8mを測る。出土遺物なし。

SC1430（Fig.33）調査区東側で検出した。SC1410を切る。床面は削平され残っておらず、幅８～23㎝、深さ５～16㎝の壁溝と床面の汚れのみ確認した。平面形は方形もしくは長方形で主軸をN－69°－Wにとる。遺構の北半分は調査区外に延び、現状で東西6.53m、南北3.65mを測る。南東隅の角は南側がわずかに南側に膨らむ。主柱穴は不明である。壁溝からレンズ状をなす甕底部や焼けた粘土塊が出土した。出土遺物（Fig.33　047・048）047は壺底部である。048は表面が熱のため赤変している。胎土は粘土が非常に緻密である。断面薄い黄白色を呈す。図の上側は断面尖り気味であるが急激

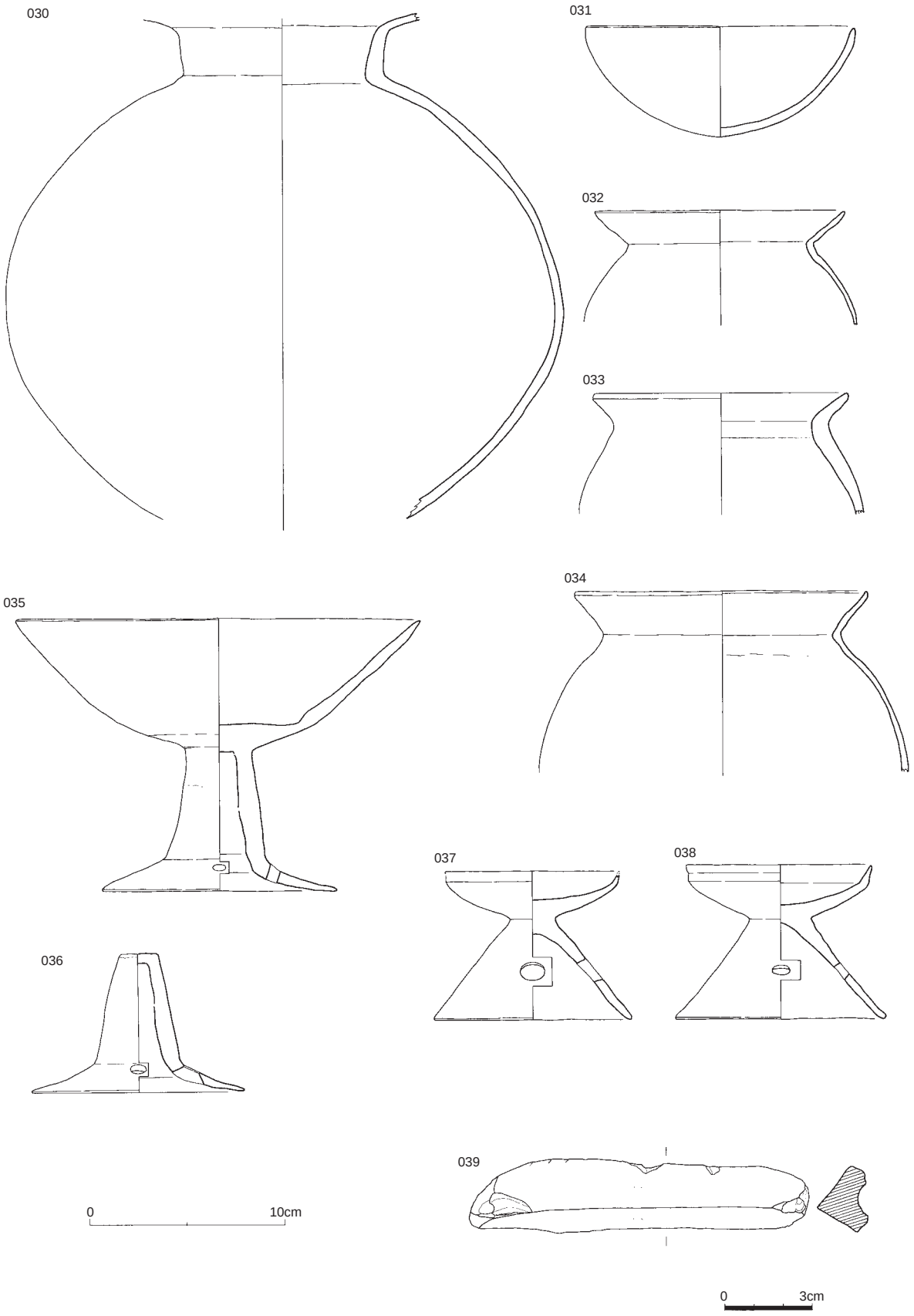


Fig.26　SC1277遺物実測図（1/3・039は1/2）

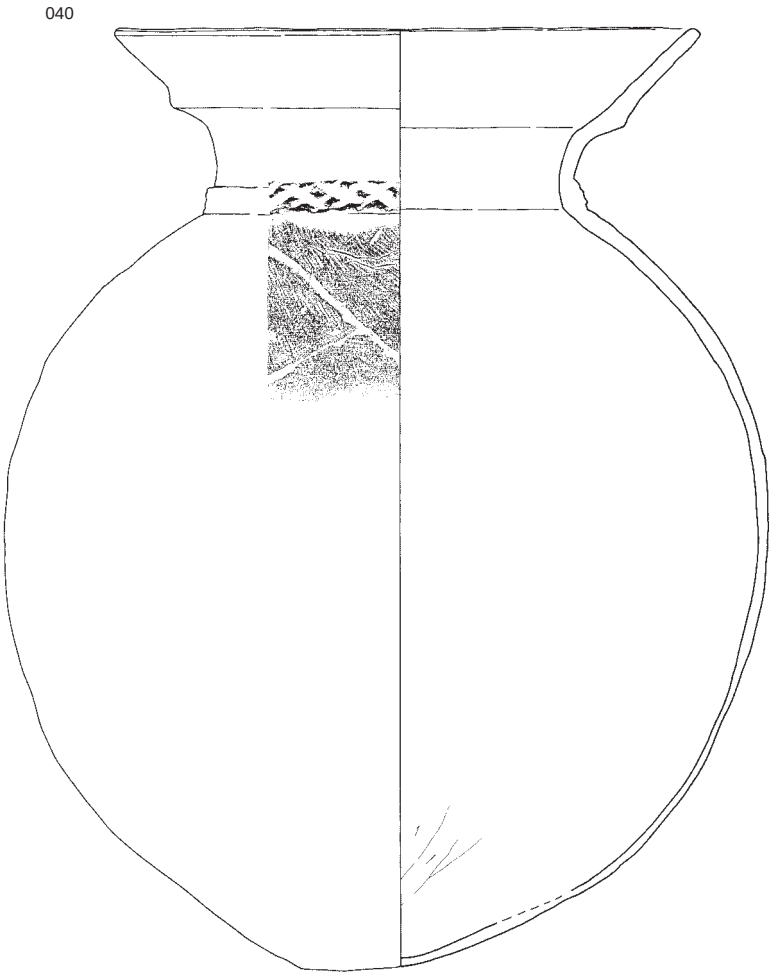


Fig.27　SC1277柱穴出土遺物（1/3）

に膨らみ最大厚1.9㎝を測る。右上角は緩いカーブを描く。青銅器鋳型の中子である可能性がある。

SC1431（Fig.34）調査区の東南側で検出した住居で主軸をN－30°－Eにとる。SC1432に切られる。平面は長方形で長径4.43m、短径3.2m、床面までの深さ15㎝を測る。覆土は暗茶褐色土で土器片を多く含む。床面中央からやや南側の床面直上で明確な掘込みを持たない焼土面を検出した。床面は両短辺をベット状に残して６㎝ほど掘り下げており、掘方底面全体に炭化物を敷き詰めた後、黄白色粘質土で両側ベット部分と同じ高さまで埋めている。掘方底面の中央部分はわずかに窪んでいる。中央の堀方底面は他の住居と比較すると生活面であると考えられるが、全面に炭化物を敷き黄白色粘質土で丁寧に埋めていることなどは他の住居と異なる。SC1362で炉下の溝を埋め戻すのに同じ黄白色粘質土を使用していることなどから考えると生活面は焼土面で掘方は床面の地下構造である可能性が高い。出土遺物（Fig.34　049～055）049は台付甕である。復元口径14.7㎝、器高17.1㎝を測る。外面黄褐色を呈し口縁から胴部下半までの黒班あり。内底部に赤色顔料がみられる。050～052は甕である。050は復元口径14.9㎝を測る。外面は橙色と胴部下半は黒褐色を呈す。内面は全体に丁寧なナデを施す。051は復元口径12.4㎝を測る。調整は外胴部と内面口縁がハケ目、内胴部はナデを施す。052は外面淡橙色を呈し胎土は細かく砂をほとんど含まない。053は甕底部である。底部径3.7㎝を測り、外面黄褐色を呈す。054・055は台である。054は底径14.7㎝を測る。外面橙色を呈す。055は底径15.6㎝を測る。外面淡橙色を呈し胎土は細かく白色砂をわずかに含む。調整は不明である。

SC1432（Fig.35）調査区の東端で検出した大型の竪穴式住居である。平面は東西に長い長方形で主軸をN－57°－Wにとり、長径7.68m、短辺6.21m、床面までの深さ49㎝を測る。両短辺と北側壁沿いにコの字型のベット状遺構がつき、幅78～97㎝を測る。ベット部床面は削平され一部分以外残っていない。東側壁際と北側壁際には断続的な壁溝がみられ幅７～13㎝、深さ２～５㎝を測る。長辺ベットの真中に幅86㎝、深さ４～６㎝の凹部があり、その壁際には壁溝がつく。低床部中央部やや北東寄りで炉を検出した。炉は隅丸長方形を呈し長径78㎝、短径66㎝、深さ14㎝を測る。掘り込みの北側に片寄って焼土面を確認した。柱は２本柱で柱間は4.7mを測る。柱穴掘方は不整形を呈し径78～92㎝、深さ53～55㎝を測る。掘方端がベット状遺構を切る。炉と西側柱穴の間には溝が掘られており、溝の

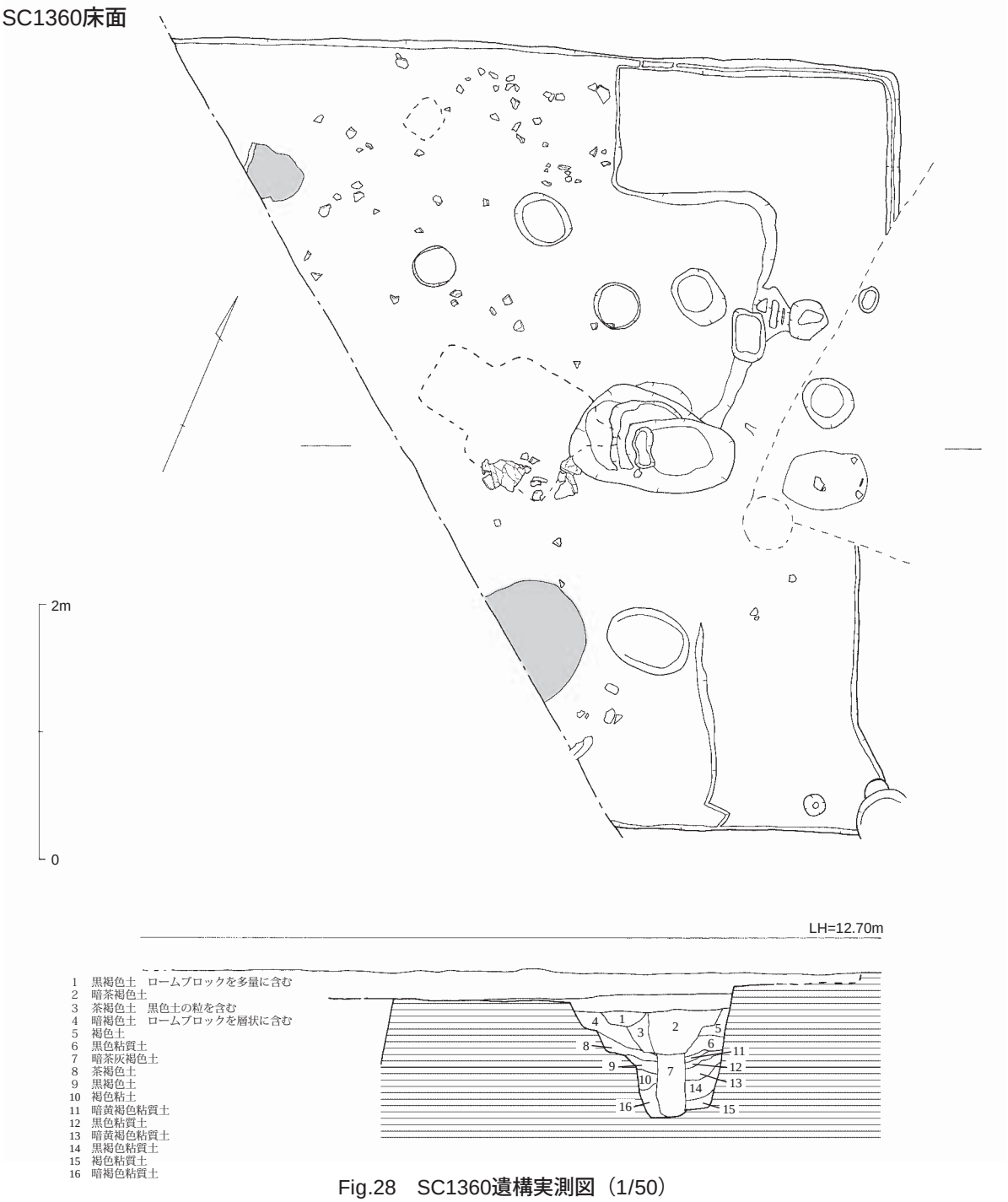


Fig.28　SC1360遺構実測図（1/50）

底面は柱穴側に傾斜する。炉は溝を埋めてから掘られており、溝は排水などの機能を持つと考えられる。東側柱穴では柱の抜き穴を土層で確認できた。柱穴掘方の両端に版築状土層があり、中央に柱を抜いた掘り込みがみられる。抜き穴から長頸壺の頸部を打ち欠いた胴部のみが出土した。柱を抜く際の祭祀と思われる。ベット状遺構は地山の暗橙色粘質土を盛土しており、掘方底面は低床部掘方底面よりも深く溝状に掘り下げている。短辺のベット状遺構では低床部との境に幅15～25で地山を壁状に削り残し、その後掘り下げた部分を地山ロームである暗橙色粘質土で埋め戻している。低床部は長辺5.38m、短辺5.1mのほぼ方形を呈す。ベットからの深さは15～25㎝を測る。西側短辺を除く３方に断続的に壁溝を巡らす。低床部掘方は中央部はほとんど下がらないが周辺はかなり掘り下げられており、

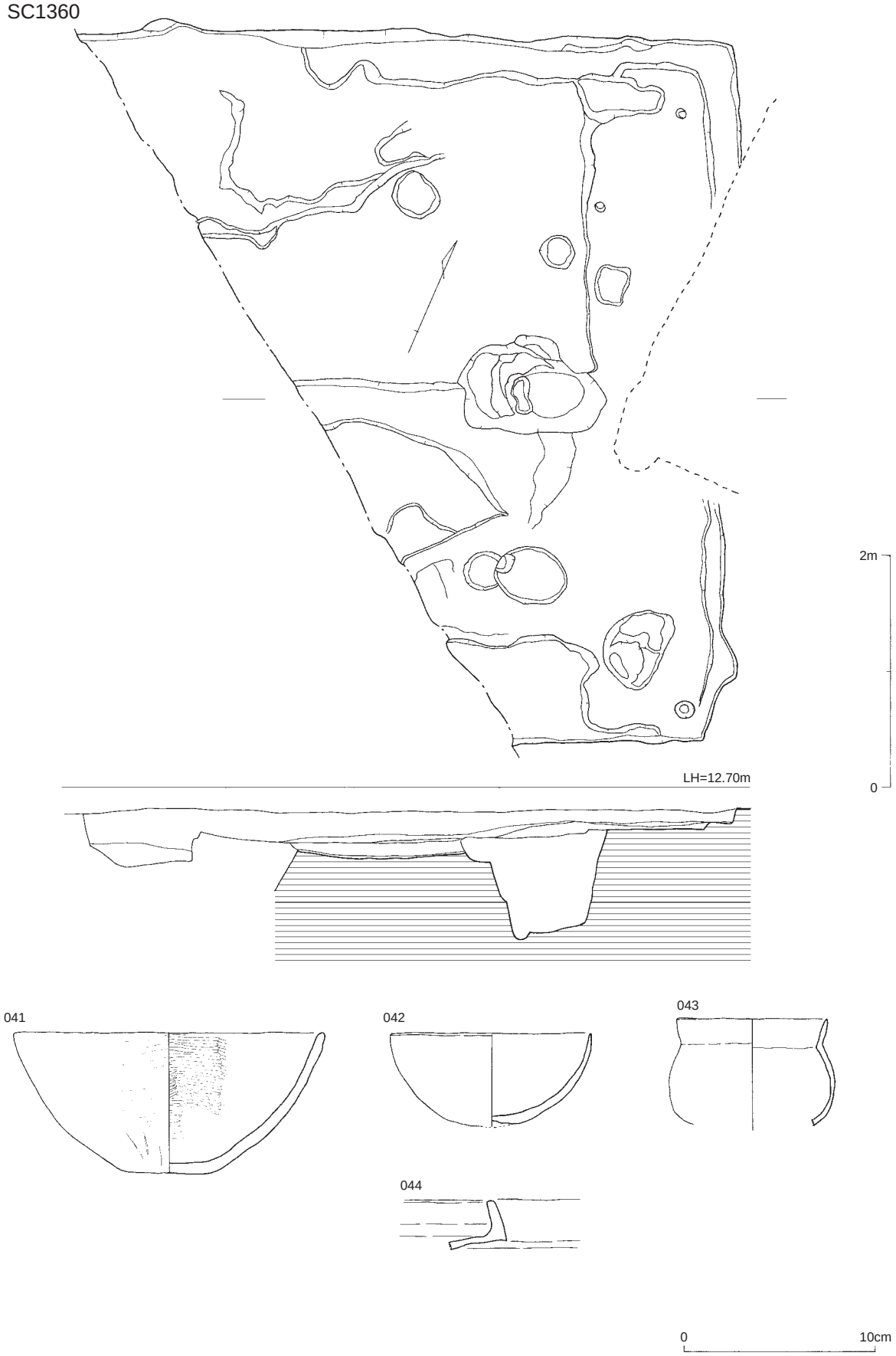


Fig.29　SC1360遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

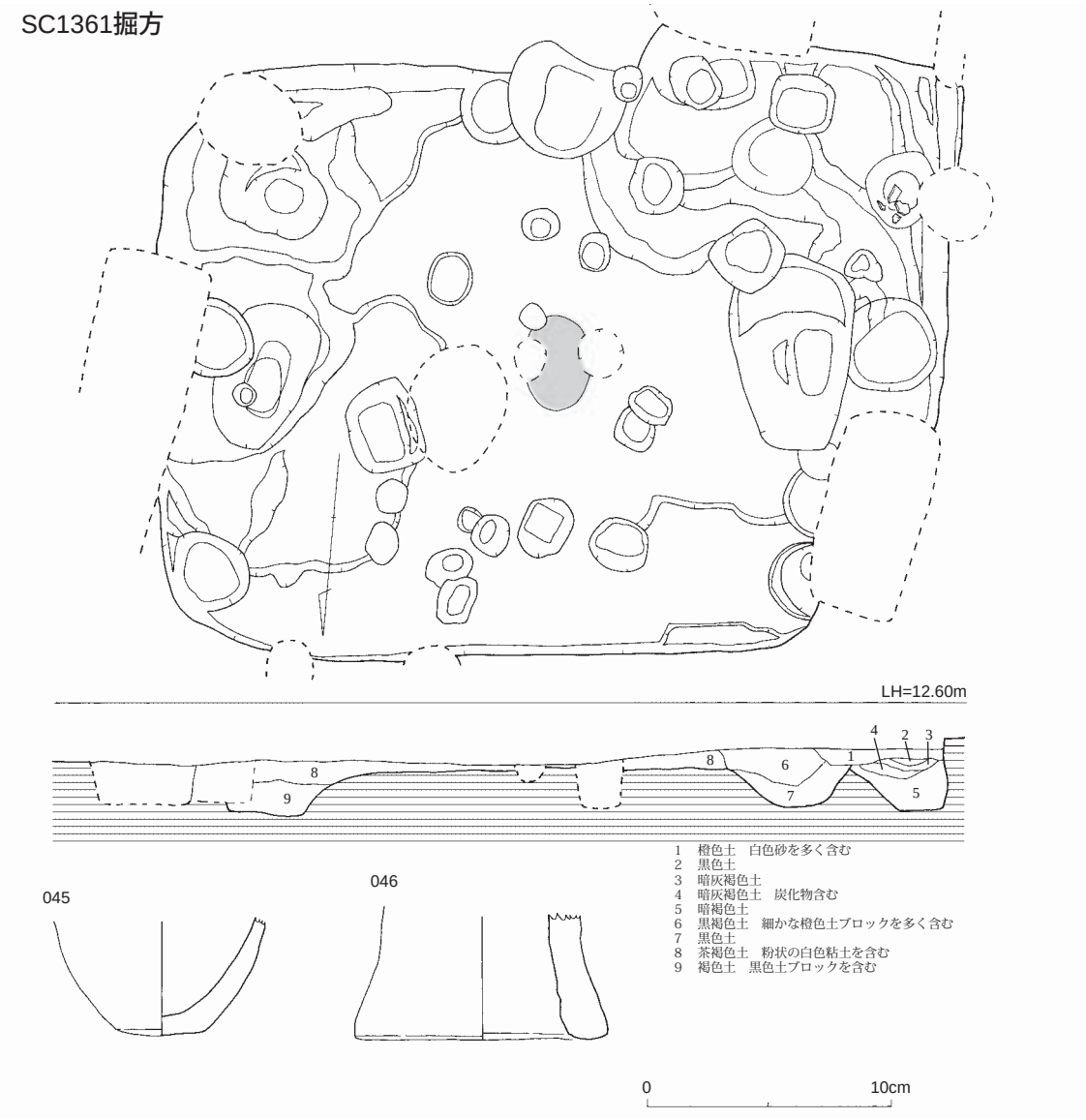


Fig.30　SC1361遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

深さ30㎝近く掘り下げた部分もある。掘方床面は南側長辺と短辺ベット下が深くなっており、住居内に流れ込んだ水を南壁際を通してベット下に流す工夫と考えられる。生活面床面から多量の遺物が出土した（PL5　7・8）。出土遺物（Fig.36～39　056～079）。056は長頸壺の胴部である。胴径18.7㎝を測る。東側主柱穴の柱抜き後から出土した。057は壺口縁である。復元口径15.3㎝を測る。外面褐色を呈し口縁部に黒班がみられる。058・059は甕棺である。058は復元口径41.2㎝を測る。外面橙褐色～暗茶褐色を呈し胎土は粘土粒粗く焼成は良好である。胴部下半に断面台形の突帯がつく。059は外面橙褐色、内面橙白色を呈す。胎土は粘土粒がやや粗めで砂粒を多く含む。頸部くびれ部分に断面台形の突帯がつく。060は椀である。復元口径10.3㎝、器高4.7㎝を測る。外面茶褐色を呈し胎土は精良で表面に雲母片を含む。薄い粘土層が何層かあり、薄く粘土を貼り付けながら器壁厚の調整をしている。焼成は良好である。061は小型の甕である。復元口径7.9㎝、器高8.9㎝を測る。外面は上半が暗茶褐色で下半が橙色を呈す。062・063は高坏である。062は口径25.3㎝、器高16.7㎝を測る。外面淡橙色を呈し口縁端に黒班がある。脚部には円形透かしを穿つ。063は脚部である。底径15.3㎝を測る。坏内淡橙色、脚外面黒褐色を呈す。胎土は極めて粗い。調整は全体にハケ目。064は鉄製の鋤先である。

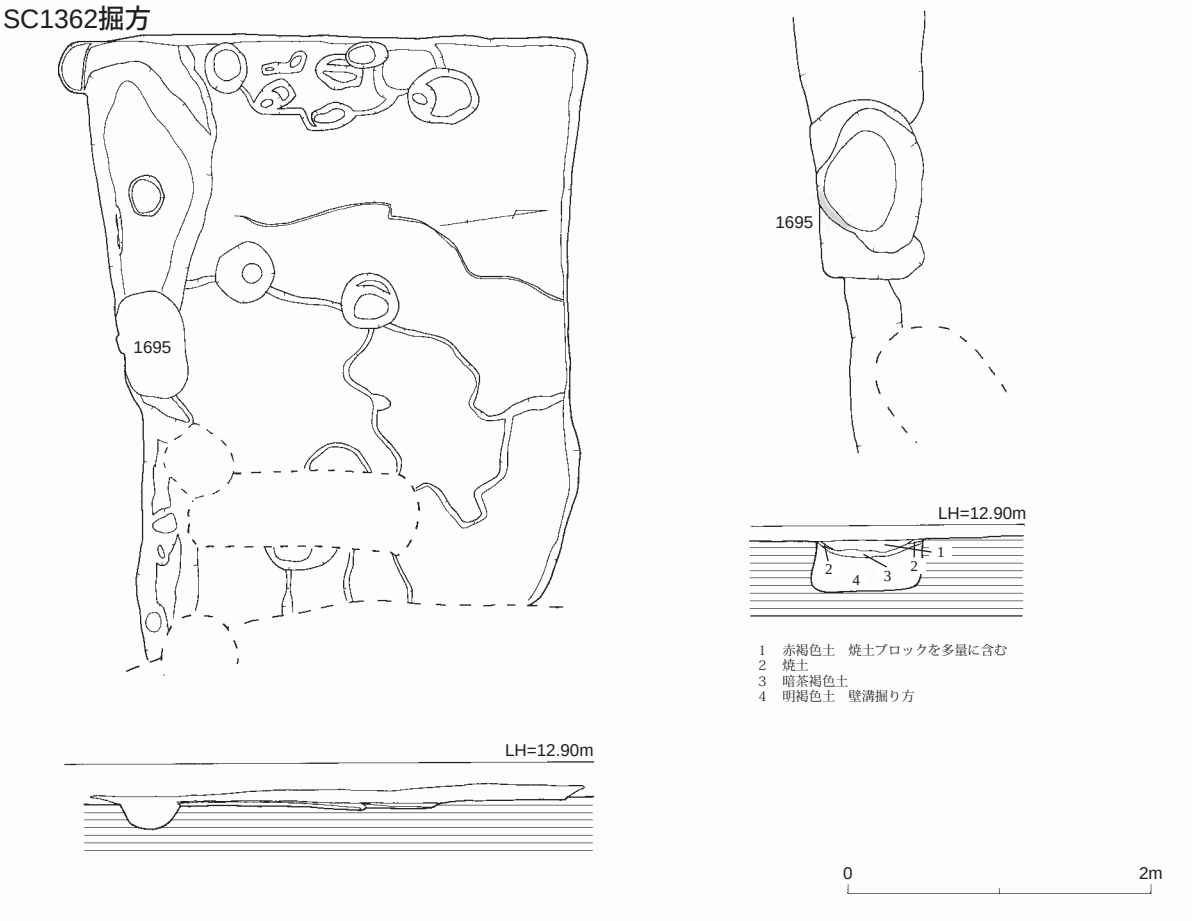
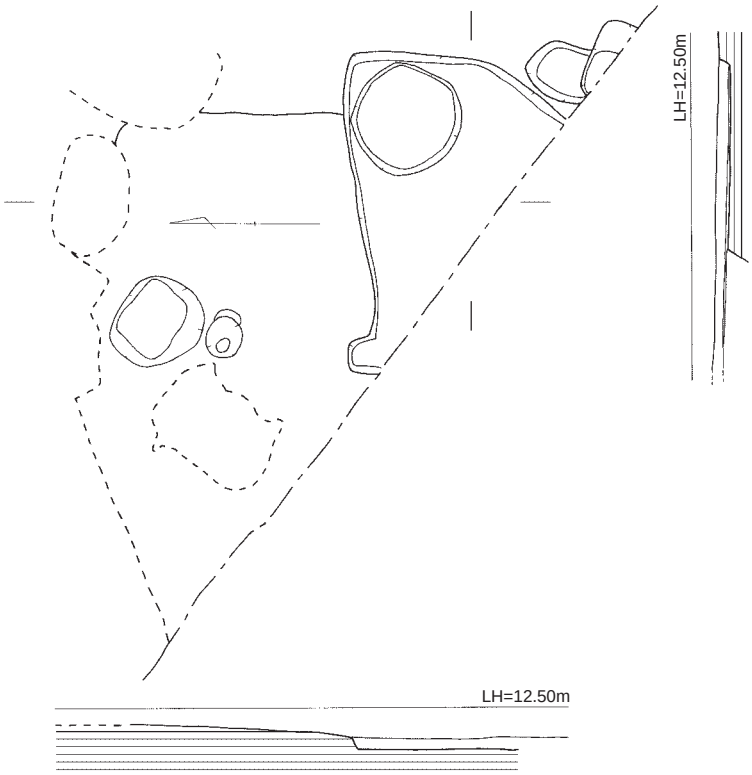


Fig.31　SC1362遺構実測図（1/50・1/30）

現状で基部幅11.8㎝、先端幅9.2㎝、長さ6.9㎝、鉄板の厚さは1.5～2.5㎜を測る。厚さは中央が厚く、両端は薄い。折り返しは図右側はＵ字型に曲げられているが、左側は完全には曲げられていない。刃部に大きな錆の固まりがみられる。065～068は壺である。067は直口壺で口径12.2㎝を測る。外面橙黄色を呈し胴部に大きな黒班がある。068は復元口径13.2㎝を測る。外面は橙色を呈す。口縁から底部の全体の1/2に達する黒班がみられる。069は鉢である。復元口径25.3㎝を測る。外面は黒色を呈す。胎土は細かく砂粒を多量に含む。070～073は甕である。070は復元口径19.3㎝を測る。外面茶褐色を呈す。胎土細かく１～２㎜の砂粒を多く含む。071は復元口径17.8㎝を測る。外面淡橙褐色を呈し、口縁に黒班がみられる。胎土細かく３～５㎜の砂粒を多量に含む。白色砂は器壁内面に多く外面には少ない。072は復元口径20.7㎝を測る。外面黒色を呈す。調整は外面は細かいハケ、内面は粗いハケを施す。073は復元口径15.7㎝を測る。外面は淡橙白色を呈し胴部に黒班あり。074は小型器台である。底径11.4㎝、器高8.4㎝を測る。外面橙褐色を呈す。075～077は器台である。075は口径16.1㎝、器高21.7㎝を測る。外面は淡褐色を呈し胴部中央に黒班がみられる。076は口縁が袋状をなす。復元口径12.6㎝、器高の推定は21㎝前後を測る。胎土は粗く２㎜前後の砂粒を多量に含む。077の底面は楕円形を呈し長径14.7㎝、短径13.9㎝を測る。外面黒褐色を呈す。078は鉢である。胎土粗く２㎜以下の細砂を多量に含む。079は台である。底径17.4㎝を測る。外面淡橙白色を呈す。

SC1433（Fig.40）調査区南東側で検出した。SC1432に切られ、SC1434を切る。平面は東西に長い長方形で主軸をN－66°－Eにとる。両短辺に幅86～118㎝のベット状遺構が付く。ベット状遺構の床面は削平されて残っていない。柱は２本柱で東側主柱穴は古代大型掘立柱建物の柱穴に切られているが、

SC1395



SC1410

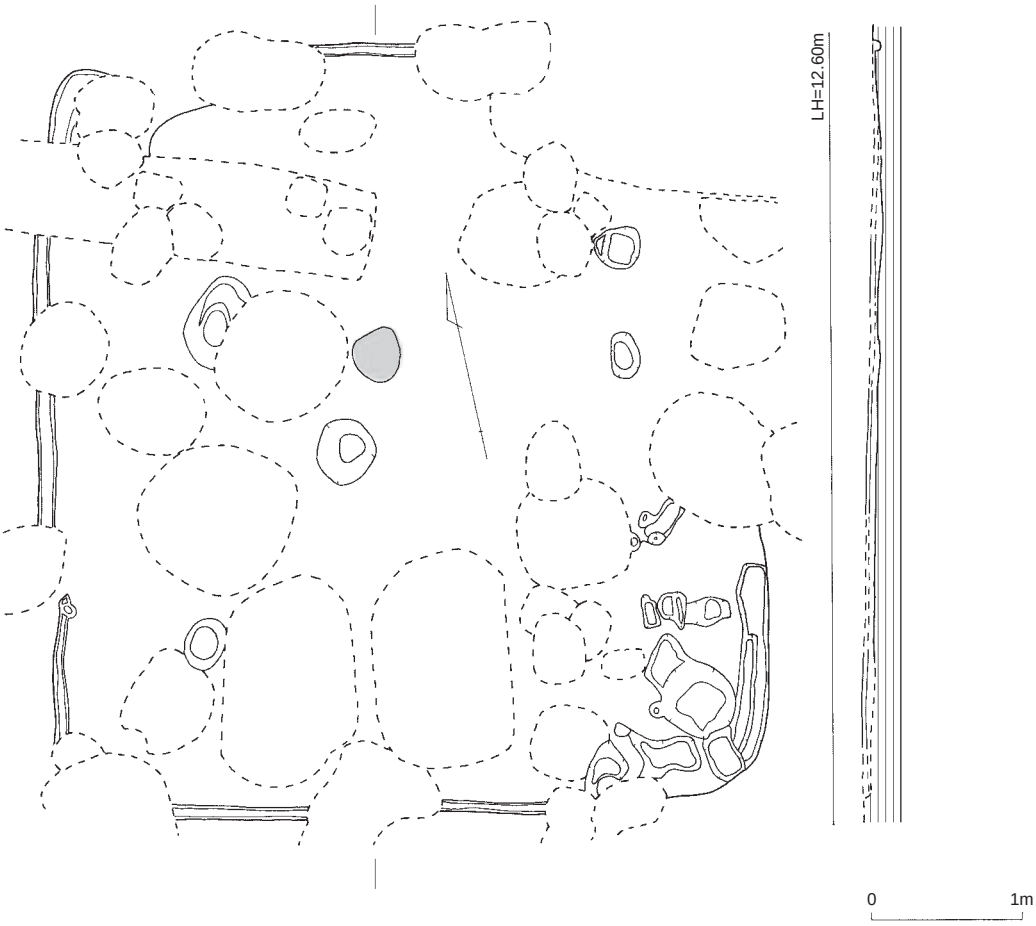


Fig.32　SC1395・SC1410遺構実測図（1/50）

SC1430

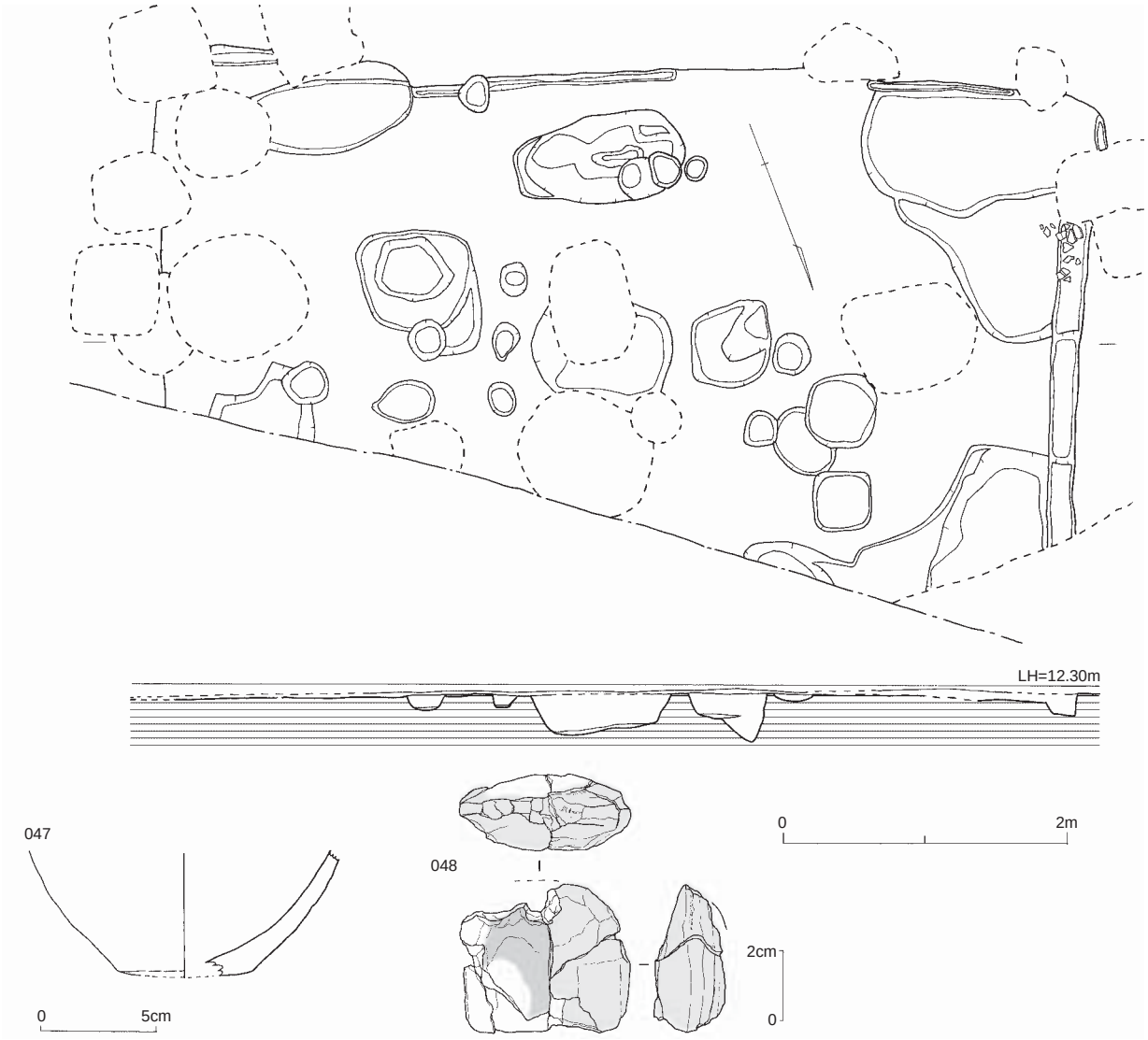


Fig.33　SC1430遺構・遺物実測図（1/50・1/3・1/2）

柱間はおおよそで3.9ｍである。柱穴平面は楕円形を呈し径73㎝、深さ65㎝を測る。柱痕跡は南側の柱穴で確認できたものは径23㎝を測る。柱穴間に幅35～50㎝、深さ約20㎝の溝を掘った後に黄褐色粘質土と黒褐色粘質土をブロック状に混ぜて埋め戻し、その上に炉を築いている。炉は平面楕円形を呈し径64㎝、深さ22㎝を測る。底面に黄褐色ロームに炭化物を混ぜた土を貼っており、その上で焼土面を確認した。溝底面は炉の下が最も高く、両柱穴にむけて下がる。柱穴はベット状遺構をきる。低床部とベット状遺構の境に断続的な壁溝がみられる。ベット状遺構は低床部掘方底面から3～12㎝程高く段を残して掘り下げた後に地山の橙色粘質土で盛土している。盛土は北側ベット部で高さ20㎝ほど、南側ベットでは10～13㎝を測る。低床部も２～16㎝掘り下げ橙色粘質土を貼る。床面から浮いた状態で土器が多く出土したが、図化したものの他には弥生後期後半の甕棺片がある。最も多く出土したのは弥生時代中期中頃から後半の土器片である。出土遺物（Fig.40　080）。080は甕である。東側主柱穴から出土した。口径11.8㎝を測る。外面橙色を呈し胴部下半に黒班あり。胎土精良。

SC1434（Fig.42・43）　調査区東端で検出した。SC1433に切られる。平面形は東西に長い長方形を呈し主軸をN－77°－Wにとる。両短辺に幅92～101㎝のベット状遺構が付く。ベット状遺構の床面は削平されている。ベット状遺構の掘方は低床部との境に15～30㎝幅の壁を削り残して低床部掘方より

SC1431

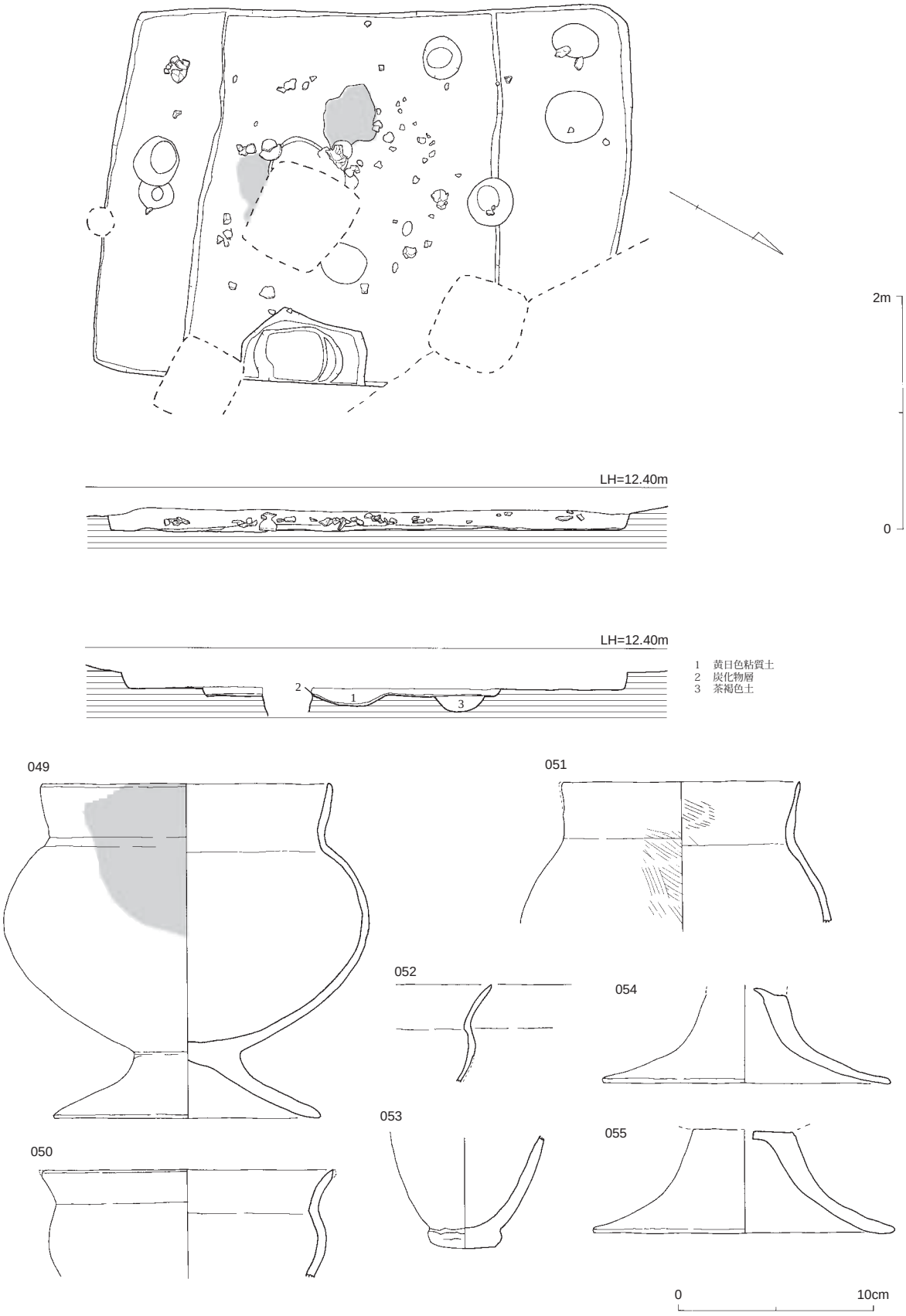


Fig.34　SC1431遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

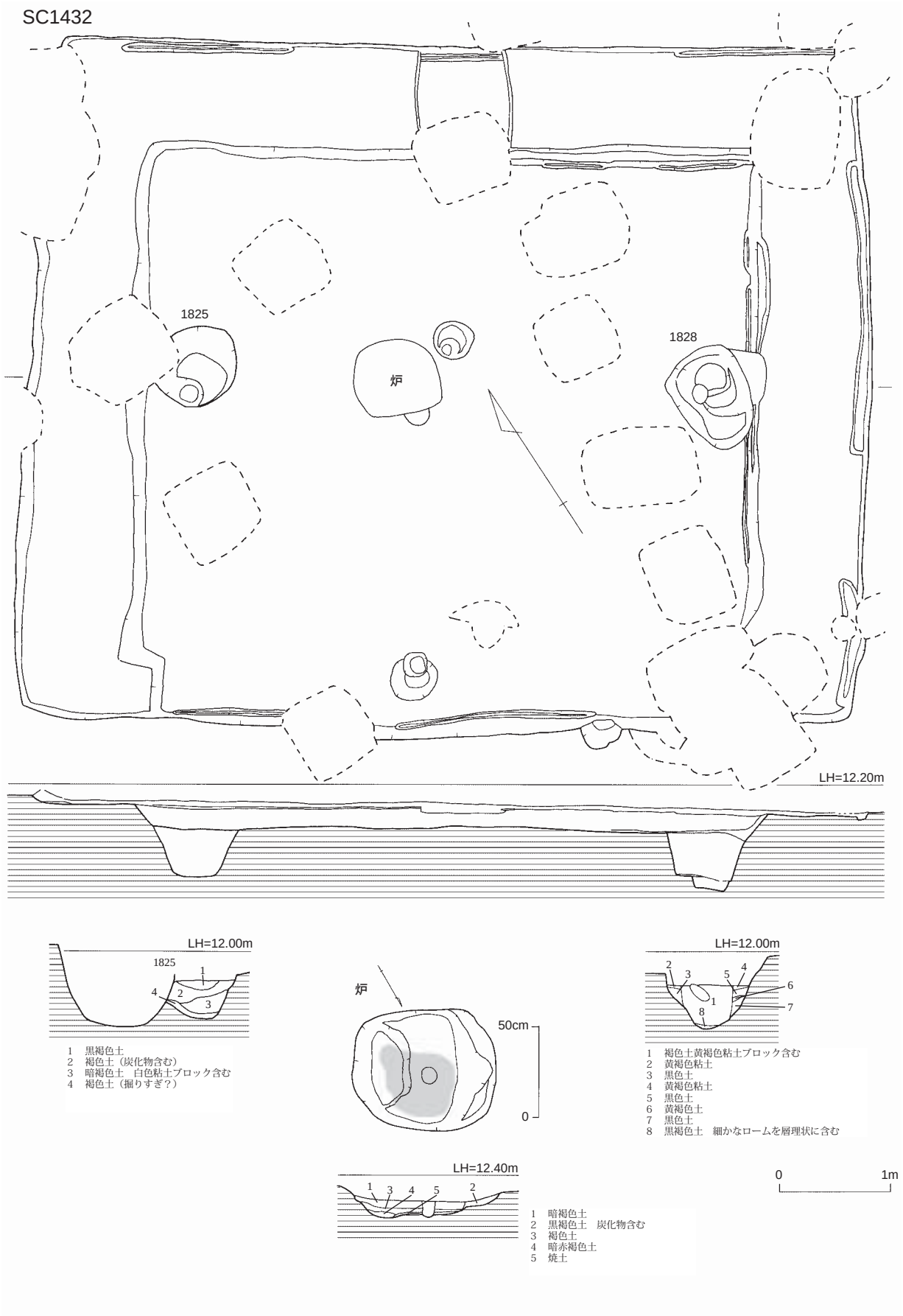
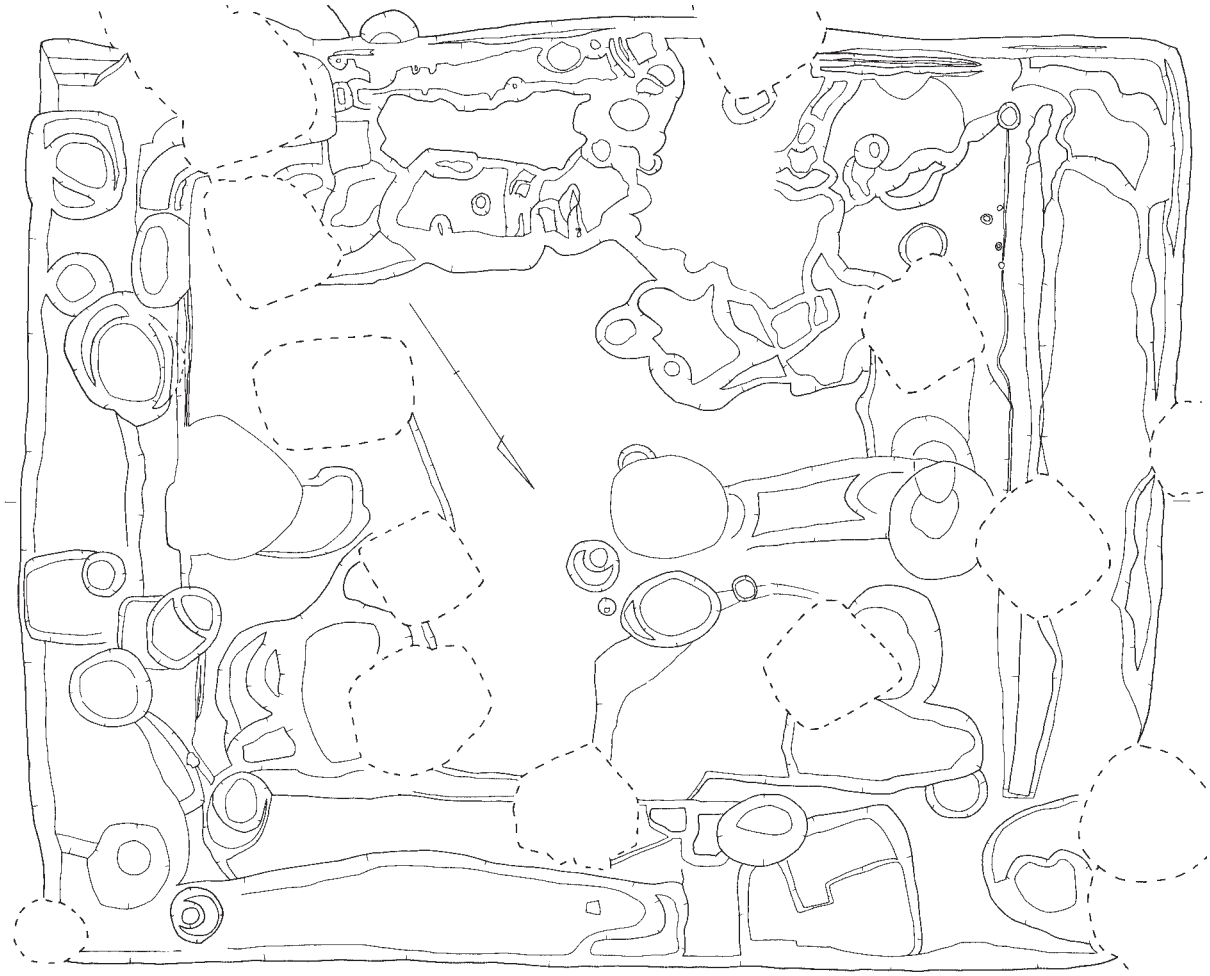
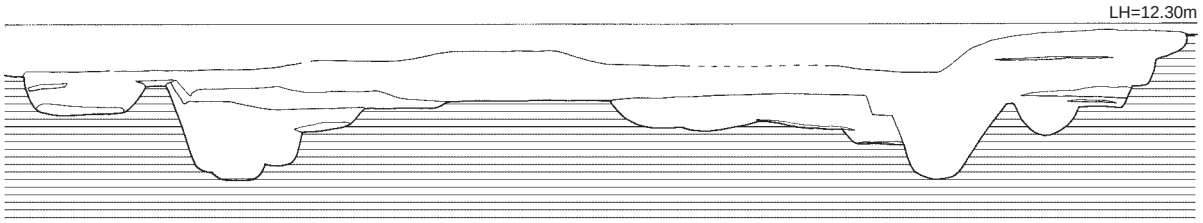


Fig.35　SC1432遺構実測図1（1/50・1/30）

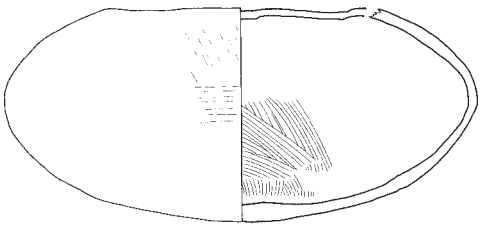
SC1432掘方



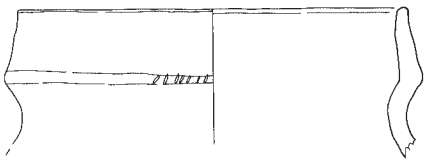


0　2cm

056



057



0　10cm

Fig.36　SC1432遺構実測図2・出土遺物1（1/50・1/3）

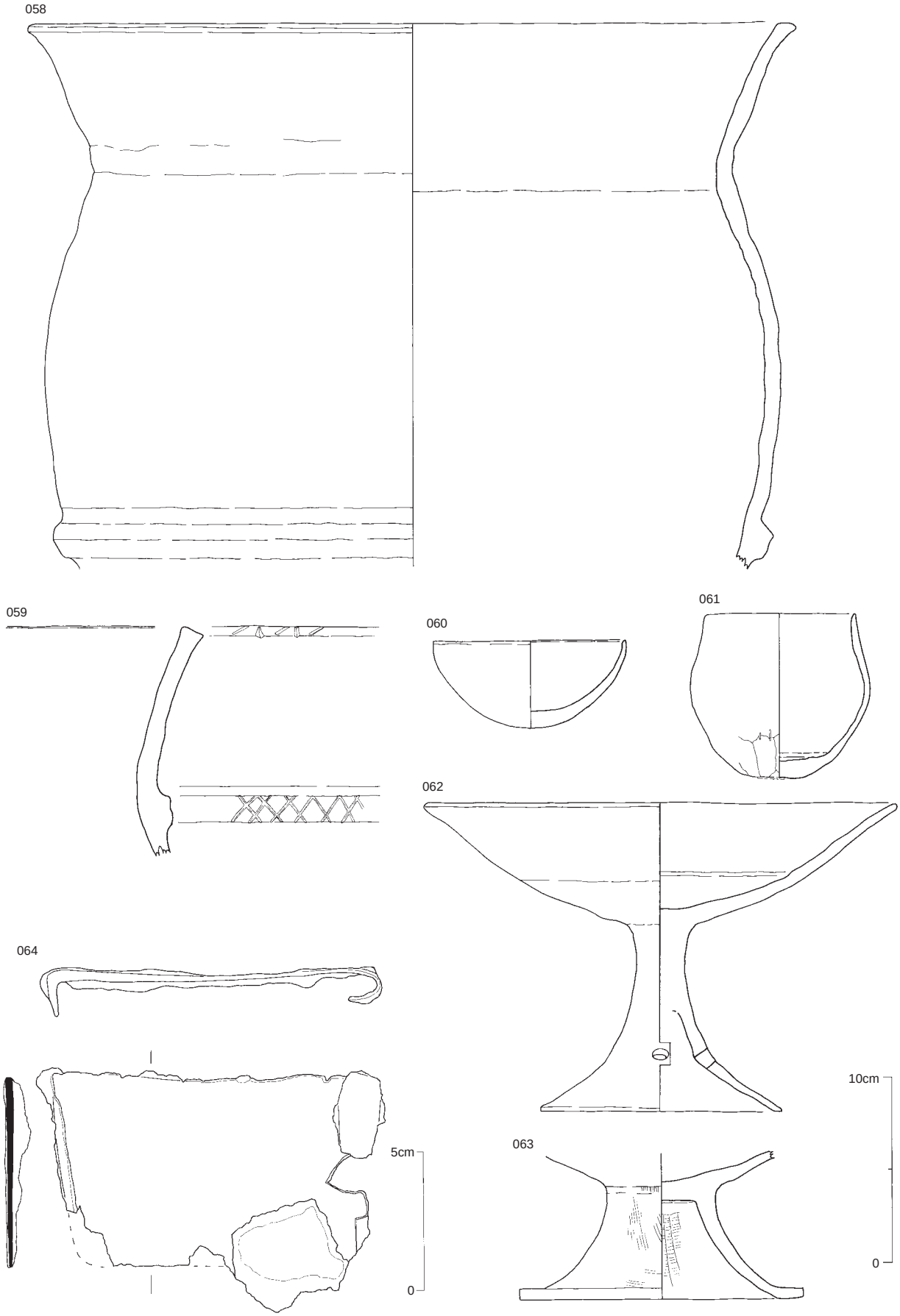


Fig.37　SC1432出土遺物２（1/3・064は1/2）

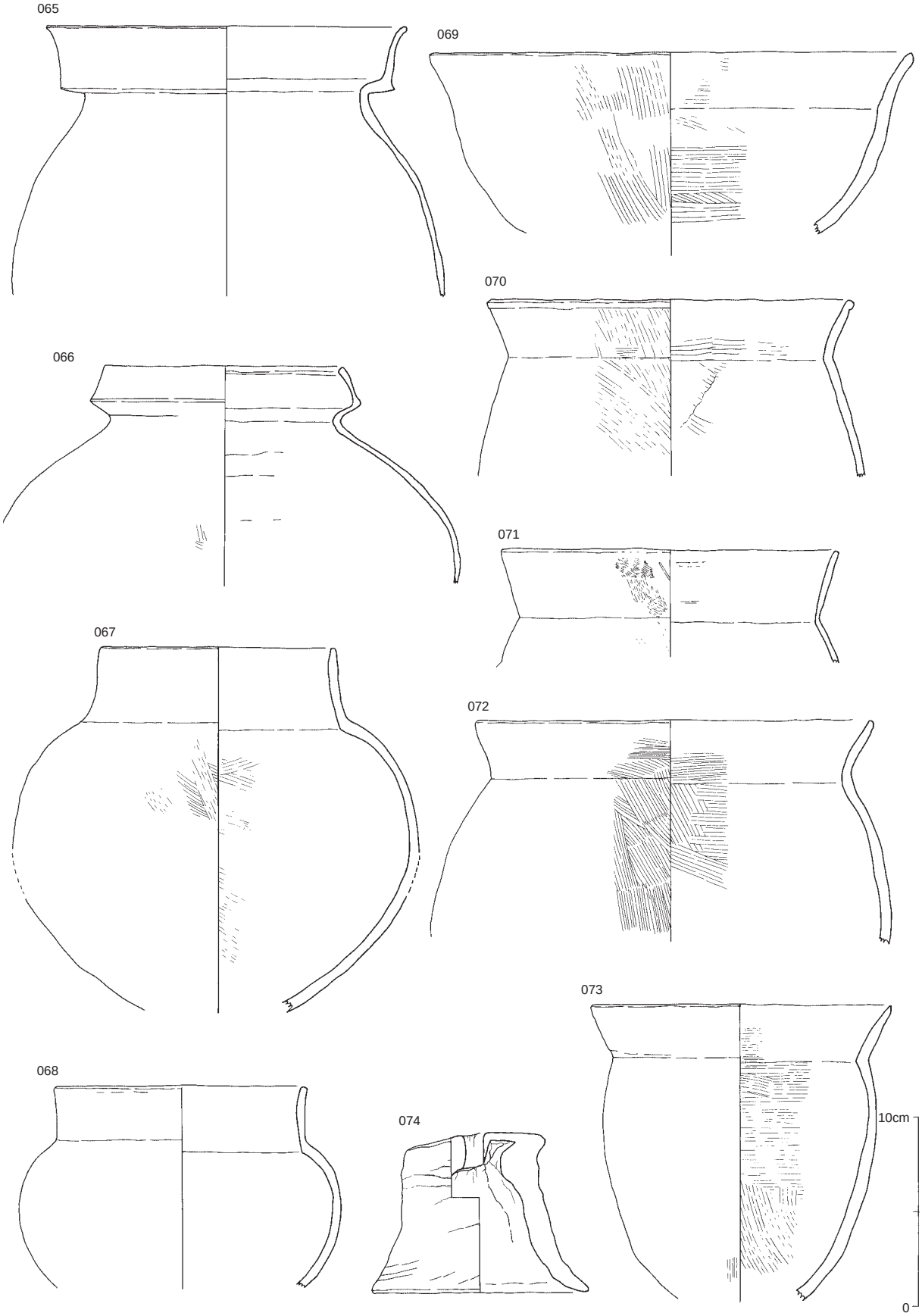


Fig.38　SC1432出土遺物3（1/3）

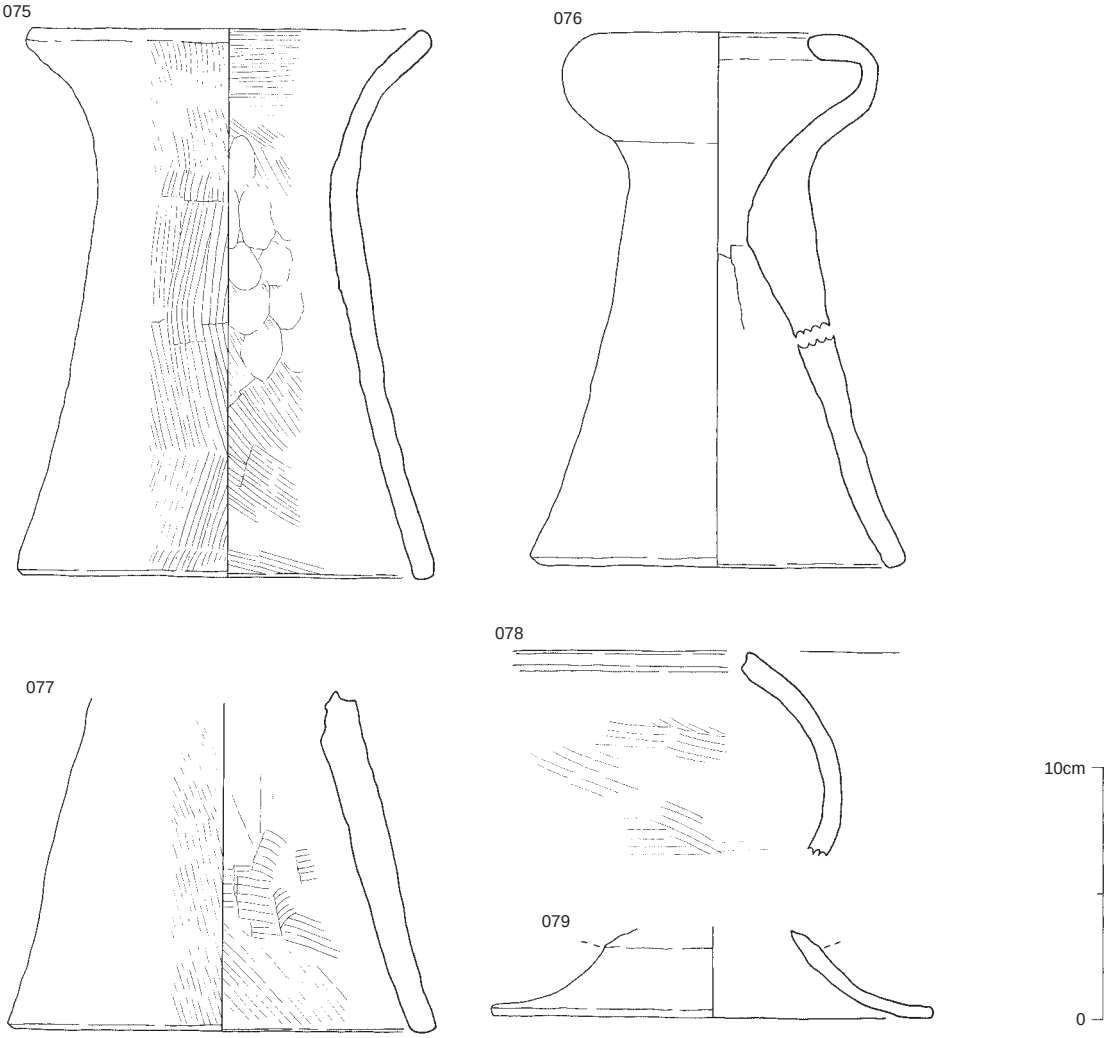


Fig.39　SC1432出土遺物4（1/3）

深く掘下げ、赤橙色粘質土で埋め戻している。柱は２本柱で長軸に平行しており、柱間は256㎝を測る。主柱穴は両側とも隅丸方形を呈し長径54～62㎝、短径49～52㎝、深さ46～63㎝を測る。両柱穴ともベット状遺構の削り出しの壁を切って掘り込む。主柱穴の間に幅33～51㎝の溝を掘り、暗褐色粘質土や黄褐色粘質土､灰黄白色粘質土などのブロックを混ぜて埋め戻してからその上に炉を築いている。溝の底面は炉の下が最も高く、それから両側の柱穴側に傾斜している。低床部は遺構検出面からの深さ21㎝を測る。南西隅のベット状遺構との際で器台、壺、甕、鉢等の破片が纏まって出土した。ただ細片が多く、図化できるまで復元できた遺物は少ない。出土遺物（Fig.43　081～086）。081は器台である。口径15㎝、器高19.5㎝を測る。082は甕である。復元口径17.6㎝を測る。外面橙色～黄橙色を呈し胎土は１㎜程の砂粒を多量に含む。083は二重口縁壺である。復元口径18.1㎝を測る。内外面とも茶褐色を呈し外面口縁に黒班がある。084は直口壺である。085は鉢である。復元口径35.8㎝を測る。内外面とも橙色を呈す。086は器台である。器高9.6㎝を測る。

SC1734（Fig.46）調査区の北西端で検出した。SC1002に切られる。平面は方形と思われる。東壁のみ遺存しており、壁はほぼ南北方向に沿う。検出面からの深さ10㎝を測る。主柱穴は不明である。

SC1739（Fig.44）調査区の南東端で検出した。著しく削平されており、南側壁溝の一部と床面の汚れのみ確認した。主軸をN－36°－Eにとる。壁溝の下に柱穴状の掘り込みがあり、底から板状鉄斧が

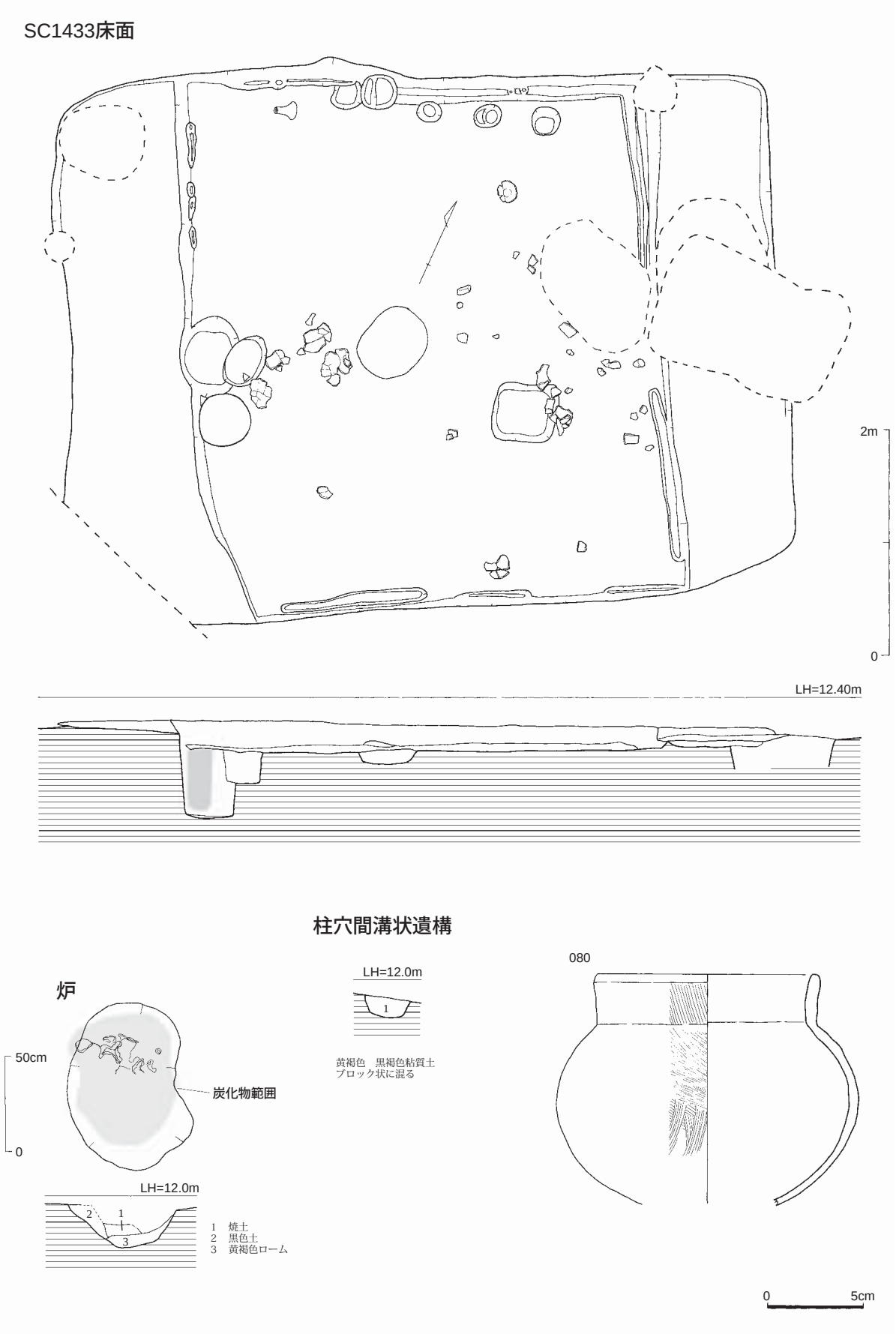


Fig.40　SC1433遺構・遺物実測図（1/50・1/30・1/3）

SC1433掘方

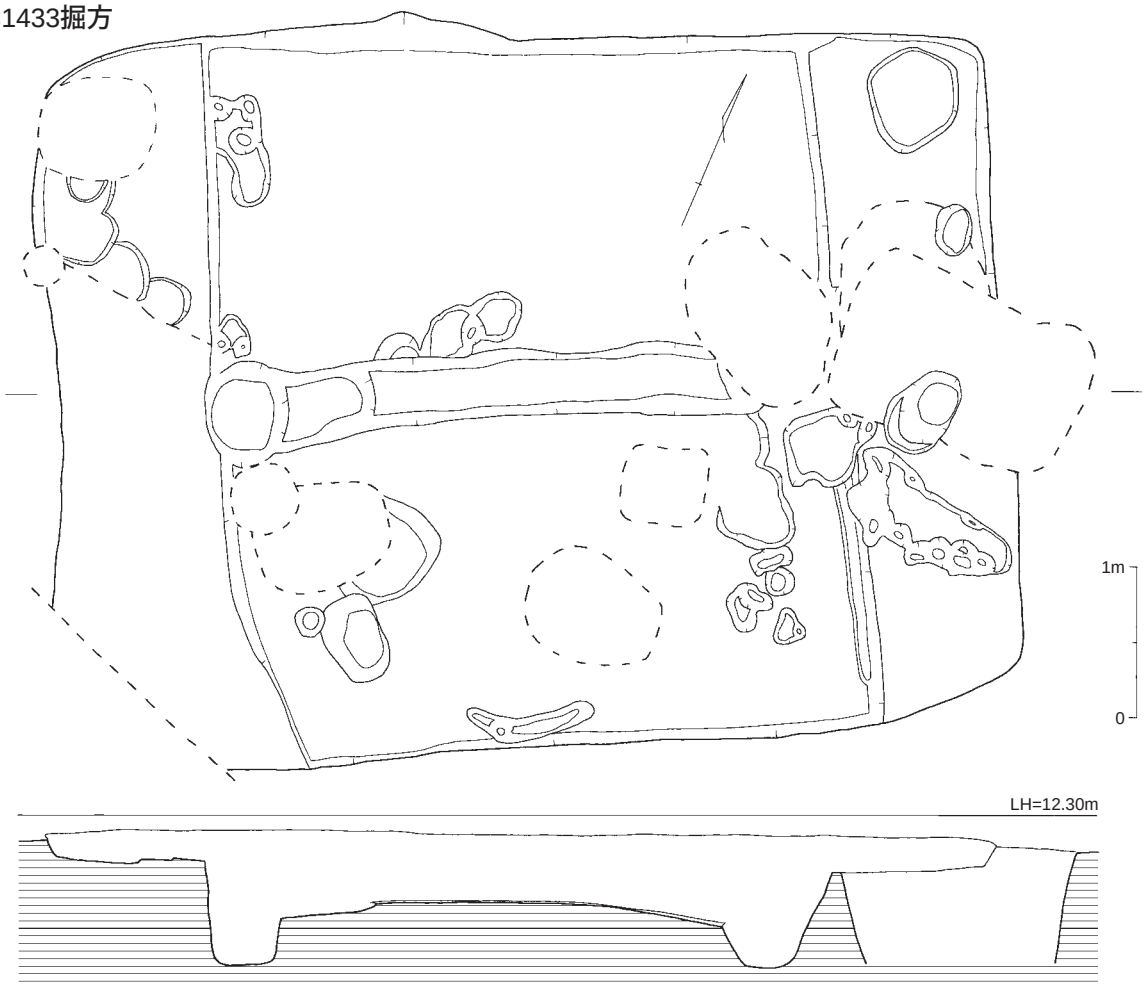


Fig.41　SC1433遺構実測図2（1/50）

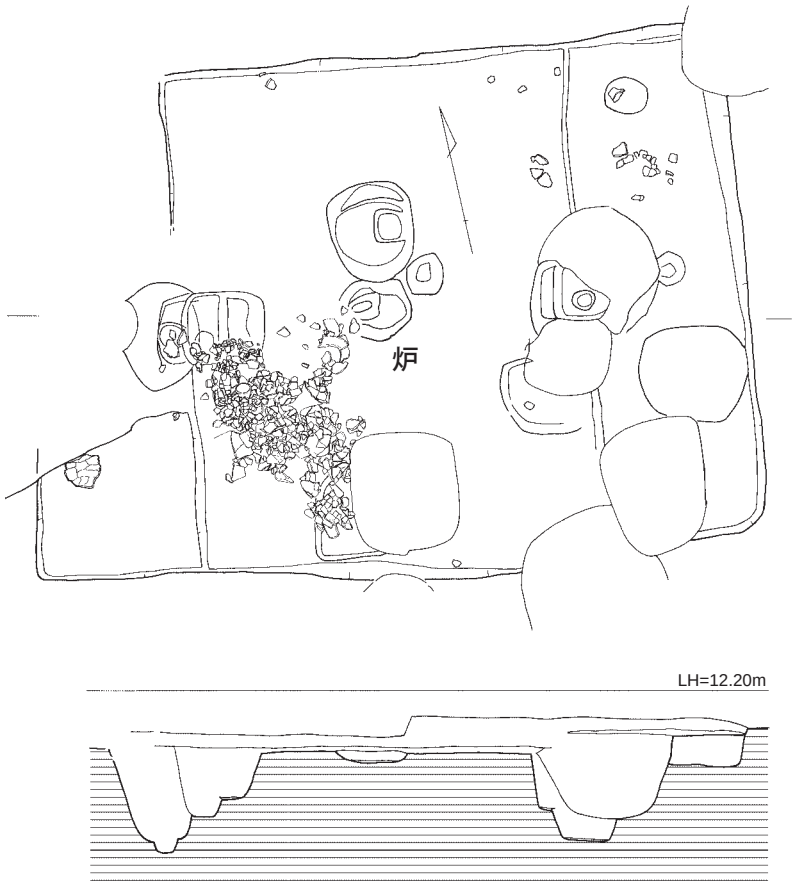
出土した。主柱穴、炉は不明である。

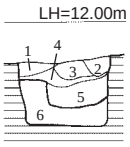
SC1852（Fig.45）南東端の台地落ち際に位置し南北に長い長方形を呈す、主軸をN－29°－Eにとる。現状で南北3.3m、東西2.35m、深さ28㎝を測る。床面西壁のＬ字型掘込みは床面からの深さ38㎝を測る。掘り込み南側に沿って粘土を幅７㎝、長さ90㎝に貼り付ける。須恵器長頸壺、坏蓋の他、弥生中期の甕、投弾が出土した。須恵器は古代溝（SD1439）からの紛れ込みの可能性がある。

SC1893（Fig.44）調査区の南東側で検出した。SC1433とSC1432に切られる。平面形は東西に長い長方形を呈し主軸をN－75°－Wにとる。両短辺にベット状遺構を持つ。遺存状態は悪くベット部の床面は削平されて残っていない。西側ベット状遺構は低床部との間に幅19～29㎝の壁を削り残して幅75㎝、検出面からの深さ42㎝の溝状に掘り下げており、検出面からの深さが32㎝である低床部掘り方底面より10㎝前後も深く掘り下げている。柱は２本柱で柱間は2.5mを測る。西側柱穴は楕円形を呈し径47㎝、深さ51㎝、東側柱穴は平面円形で径51㎝、深さ55㎝を測る。炉は柱穴間中央に位置し平面円形を呈す。径47㎝を測る。東側の柱穴で柱痕跡が確認できたが径13㎝、深さ52㎝を測る。屋内土坑は低床部北西隅を径1.5mの方形に４㎝前後掘り下げている。出土遺物（Fig.44　087）087は屋内土坑から出土した。先端に約1.4㎝の円形の孔が開く。外面は黒色、黄色、灰色が混じり孔の周囲は青灰色を呈す。内面は黒褐色を呈す。胎土は白色砂を多量に含む。鞴の羽口である可能性がある。

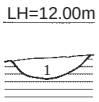
SC1955（Fig.46）調査区の北西端で検出した。SC1002、SC1734と切り合いがあるが残りが悪く新旧

SC1434床面





1　赤褐色土
2　灰黄白色粘質土
3　灰黄白色粘質土
4　灰黄白色粘質土
　　やや黒みを帯びる。
5　黄褐色粘質土
6　地山ローム



1　暗褐色粘質土と
　　黄褐色粘質土が
　　ブロック状に混
　　ざる

遺物出土状況

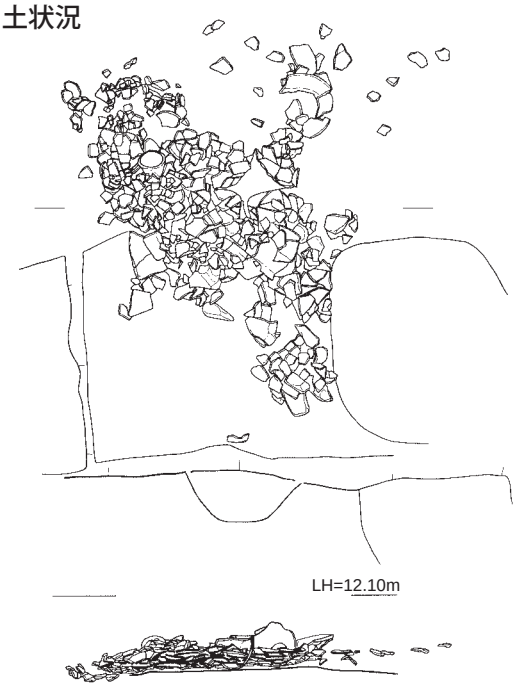


Fig.42　SC1434遺構実測図（1/50・1/30）

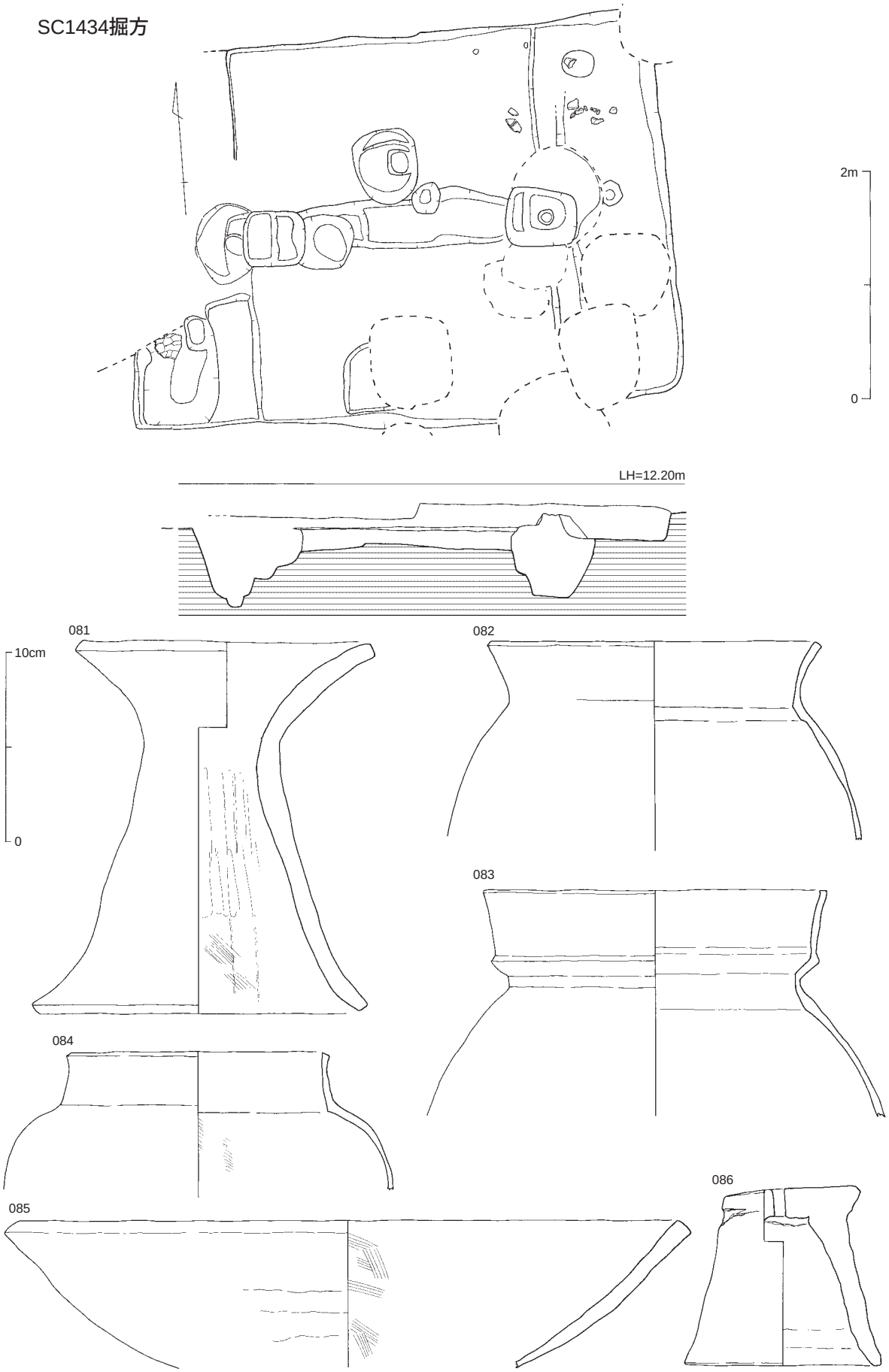
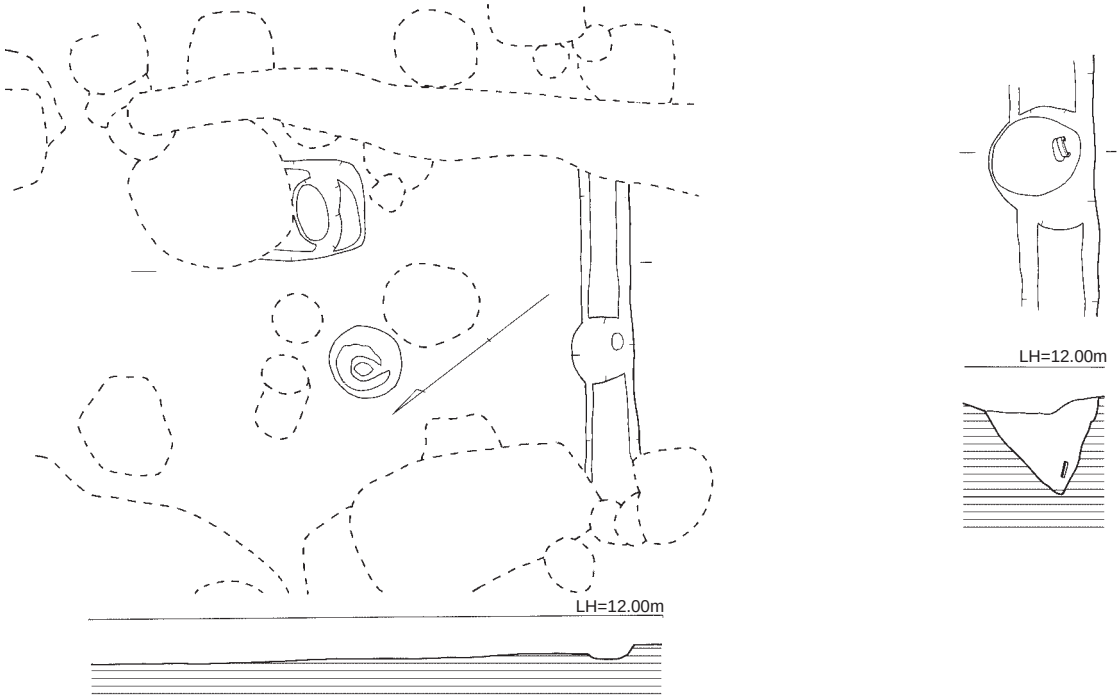


Fig.43　SC1434遺構・遺物実測図（1/50・1/3）

SC1739



SC1893

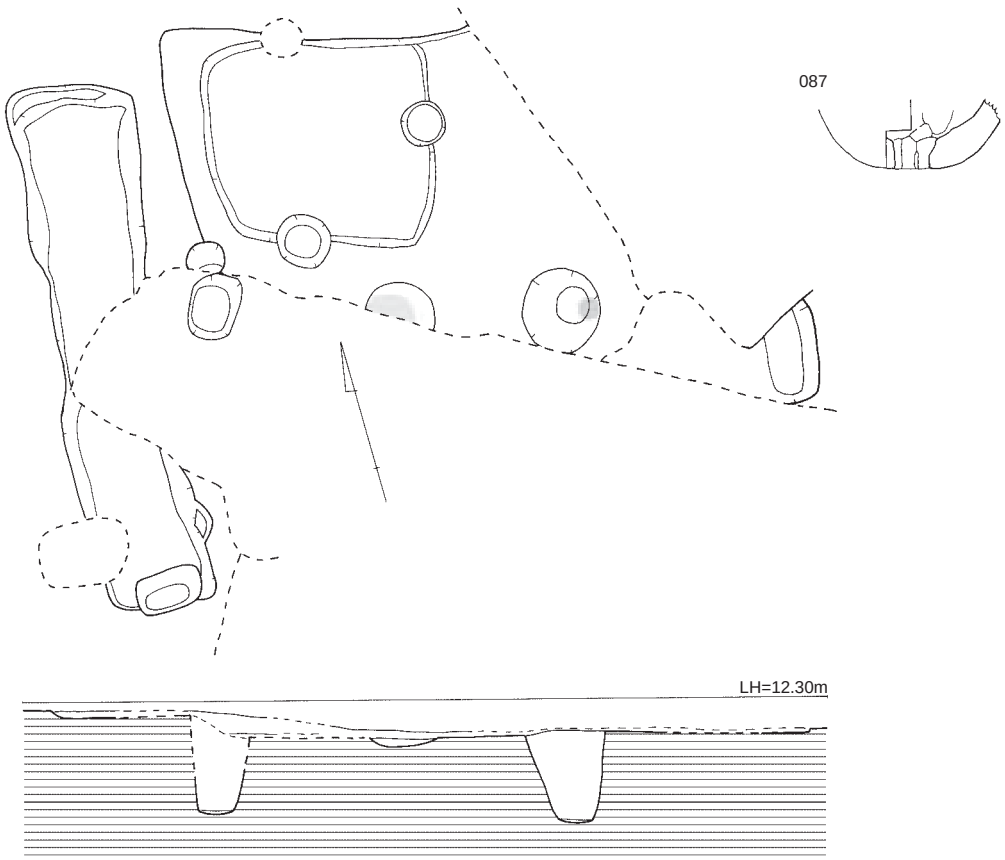


Fig.44　SC1739・SC1893遺構実測図（1/50・1/30・1/3）

は不明である。覆土中から鉢・器台などが出土した。出土遺物（Fig.47　088～096）。088・089は鉢型土器である。088は復元口径37.8㎝を測る。外面橙色で口縁から胴部に黒班がみられる。胎土は粗めで１～２㎜の砂礫を含む粘土帯と含まない粘土帯がみられる。089は復元口径29.6㎝を測る。胎土は粗く1～3㎜の砂礫を多く含む。090は器台である。上部径は約８㎝を測る。外面黄白色を呈し黒班がみられる。胎土粗く1～5㎜の砂礫を多量に含む。091～094は甕である。091は復元口径25.7㎝を測る。外面茶褐色を呈し胎土粗く器壁に孔多い。092は外面橙褐色、内面淡橙色を呈す。093は復元口径26.2㎝を測る。内外面とも黄白色を呈す。胎土粗く２㎜程の砂礫を多量に含む。094は口径14.4㎝、器高13.1㎝を測る。外面橙色を呈し底部に黒班がみられる。095は口径10.7㎝、器高11.9㎝を測る。外面は橙色を呈し、胴部下半に黒班がみられる。内面底部に赤色顔料が付着。胎土やや粗く砂礫を多量に含む。096は石製品の未製品である。わずかに楕円形を呈し径は3.2×3.0㎝を測る。孔径は0.8㎝を測る。両側から穿孔する途中である。

２）掘立柱建物の調査　調査区全体で弥生後期の住居に切られる柱穴状遺構が多数みられるため、多くの掘立柱建物が存在したものと思われるが現在その時期に該当する掘立柱建物を見つけることができていない。今後の検討課題である。

３）貯蔵穴の調査

SK1078（Fig.48）調査区西側で検出した。円形を呈し径2.34m、深さ87㎝を測る。断面はフラスコ状を呈す。西側に径67㎝を測る半円形の掘り込みがあるが、貯蔵穴に伴うかは不明である。床面直上から土器片が出土している。出土遺物（Fig.49　097～101・105～108）。097～101は甕上半部である。097は復元口径27.4㎝を測る。098は復元口径28.4㎝を測る。内外面とも茶褐色を呈し胎土やや粗く細砂を多量に含む。099は復元口径27.4㎝を測る。100は復元口径27.2㎝を測る。外面暗茶褐色を呈す。胎土は粗めで細砂を多量に含む。101は復元口径26.7㎝を測る。外面暗褐色を呈し胎土は粗めで砂礫

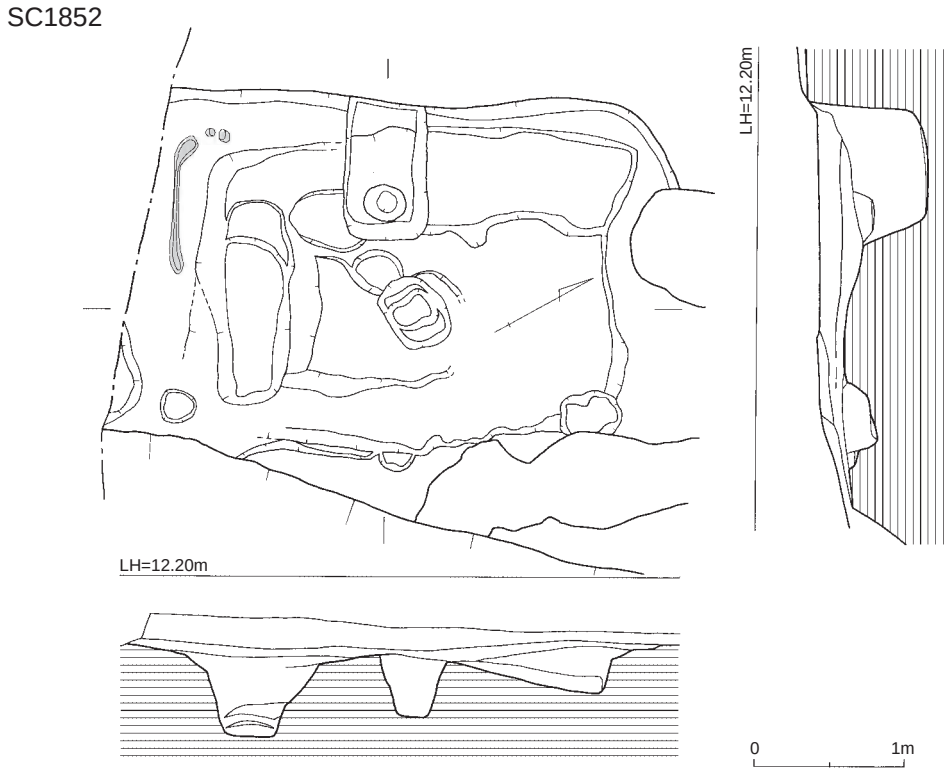


Fig.45　SC1852遺構実測図（1/50）

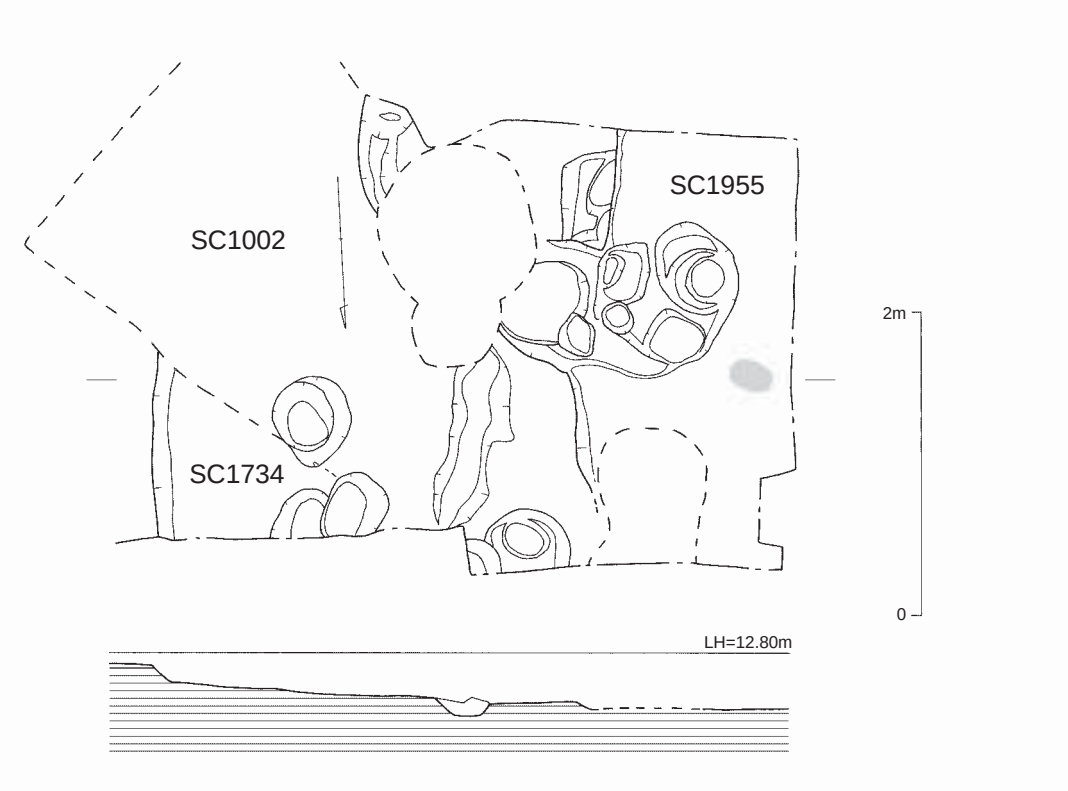


Fig.46　SC1734・SC1955遺構実測図（1/50）

を多量に含む。105～107は甕底部である。105は底径6.9㎝を測る。外面は橙色であるが一部煤が付着して黒色を呈す。貯蔵穴床面に張り付くようにして出土した。106は底径6.6㎝を測る。107は底径6.7㎝を測る。外面は底部橙色、胴部は暗黄褐色を呈す。108は器台である。復元底径9.8㎝を測る。外面橙色を呈し胎土粗い。１㎜以下の細砂を多量に含む。

SK1481（Fig.48）調査区北東端の台地落ち際で検出した。約1/2が北側の調査区外に延びる。現状で平面形は不整形を呈し東西119㎝、南北106㎝を測る。掘方は南と東側が深く抉れる。土層の堆積は若干北側が高い水平堆積で第８層の黒色粘質土は一時表土化したものか。覆土中から器台、Ｌ型口縁甕、広口口縁壺の破片が出土した。出土遺物（Fig.49　102～104）102～104は甕口縁である。102は口縁「く」の字型を呈す。外面茶褐色を呈し胎土は粗い。103は外面赤褐色を呈す。104は外面赤褐色で胎土は細砂を多く含む。焼成は良好である。口縁の一部のみの遺存である。

SK1708（Fig.48）調査区東端部で検出した。遺構南半をSC1434に切られる。平面は南北に長い長方形を呈し南東部が「コ」の字形に広がる。南北長133㎝、東西は北端で58㎝、南端で80㎝を測る。床面の深さは検出面から80㎝を測り、床面から約20㎝浮いた状態で遺物がまとまって出土した。覆土はレンズ状の堆積をなす。遺物はＬ型口縁や器台、石鏃等が出土している。

４）土坑群の調査

SK1066（Fig.50）調査区西側で検出した。平面は東西に長い長方形を呈し主軸をＮ－85°－Ｅにとる。断面は浅皿状を呈す。長径91㎝、短径30㎝、深さ13㎝を測る。底面中央に長さ73㎝、深さ10㎝の掘込みがある。床面から浮いた状態で甕の破片などが出土した。出土遺物（Fig.51　109～111）。109は壺胴部である。推定最大胴径28.3㎝を測る。内外面とも茶褐色を呈す。胴部上半に断面三角形の突帯を２条貼り付ける。胎土細かく細砂を多量に含む。110は甕口縁である。外面は赤茶褐色を呈し胎土は粗めで２㎜以下の砂礫を多量に含む。２次的に被熱している。111は壺底部である。底径9.2㎝を測る。外面暗赤褐色を呈し、底部に黒班あり。胎土は粗く細砂を多量に含む。

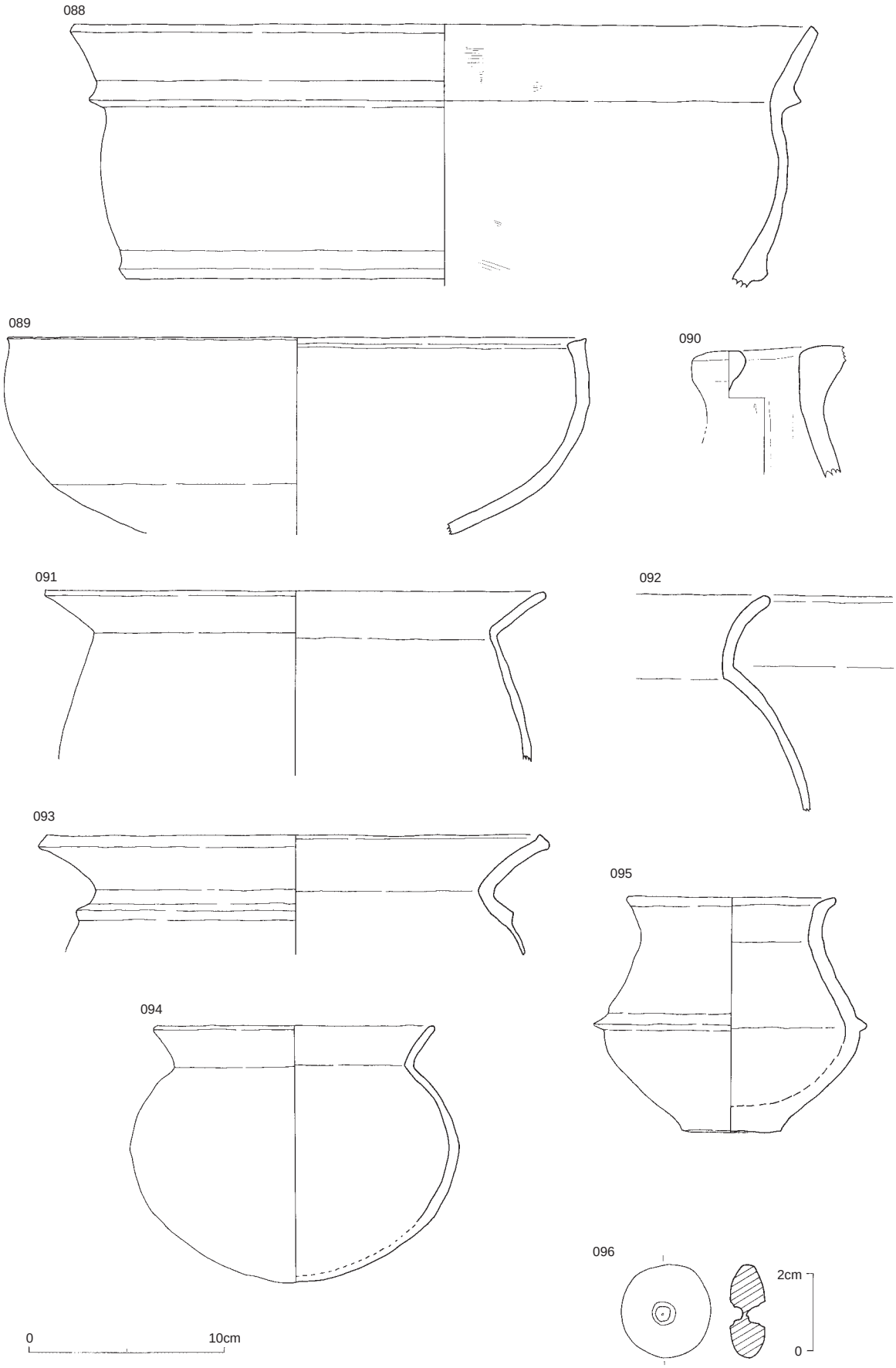
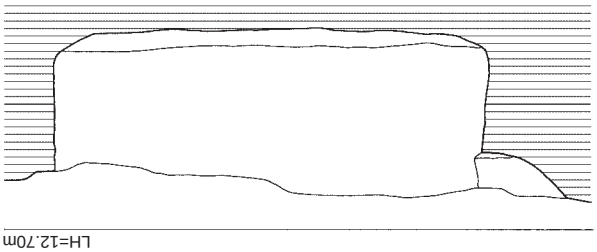
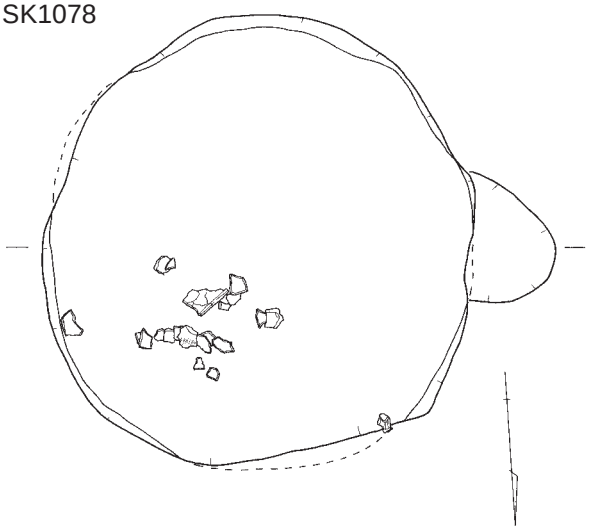


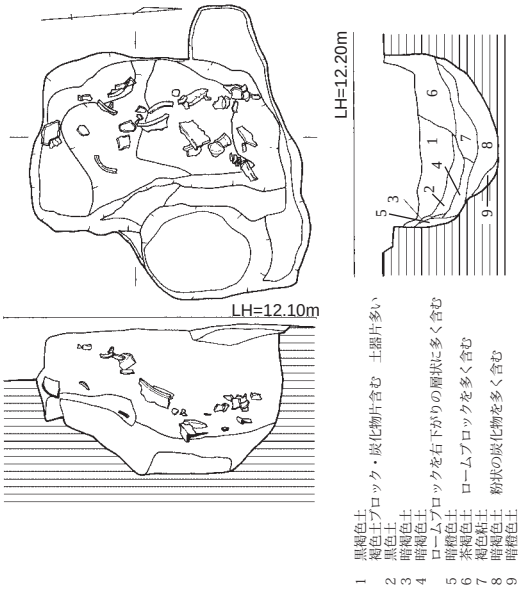
Fig.47　SC1955出土遺物（1/3・2/3）



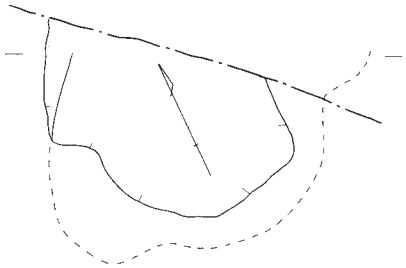
SK1078

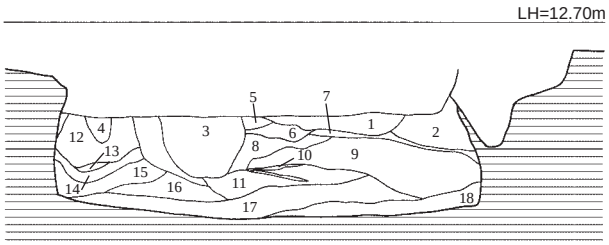


SK1708

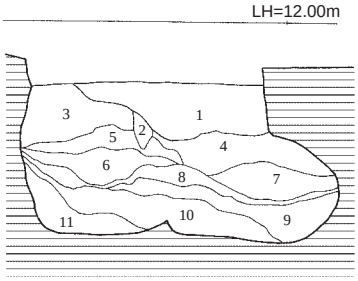


SK1481





1　茶褐色土
2　明茶褐色土　ロームブロック・黒褐色土を含む
3　茶褐色土　細かなロームブロックと黄色粘質土を多く含む
4　暗茶褐色土
5　茶褐色土
6　暗茶褐色土
7　黒色土
8　黒褐色土　褐色粘質土と黄色粘質土ブロックを多く含む
9　暗茶褐色土　橙色土・褐色粘質土のブロックを多く含む
10　黒色土
11　明茶褐色土　橙色土ブロックを多く含む
12　橙色土　黒色土を薄い層状に含む
13　茶褐色土
14　黒色土
15　暗褐色土　１cmと３mmのロームブロックと細かな黒色土を含む
16　暗橙色土　橙色土ブロックを多量に含む
17　黒褐色土　橙色土・黄白色粘土ブロックを層状に含む
18　灰色粘質土



1　暗茶褐色土　細かなロームブロックを多量に含む
2　根による攪乱
3　暗橙色土　褐色土と黒色土ブロックを含む
4　ロームブロックを層状に含む
5　暗褐色土　褐色ロームブロックを含む
6　暗橙色土
7　暗黄褐色土
8　黒色粘質土
9　明褐色土
10　褐色土　黒色土ブロックを少量含む
11　橙色土　ロームブロックを含む

0　1　2m

Fig.48　貯蔵穴遺構実測図（1/40）

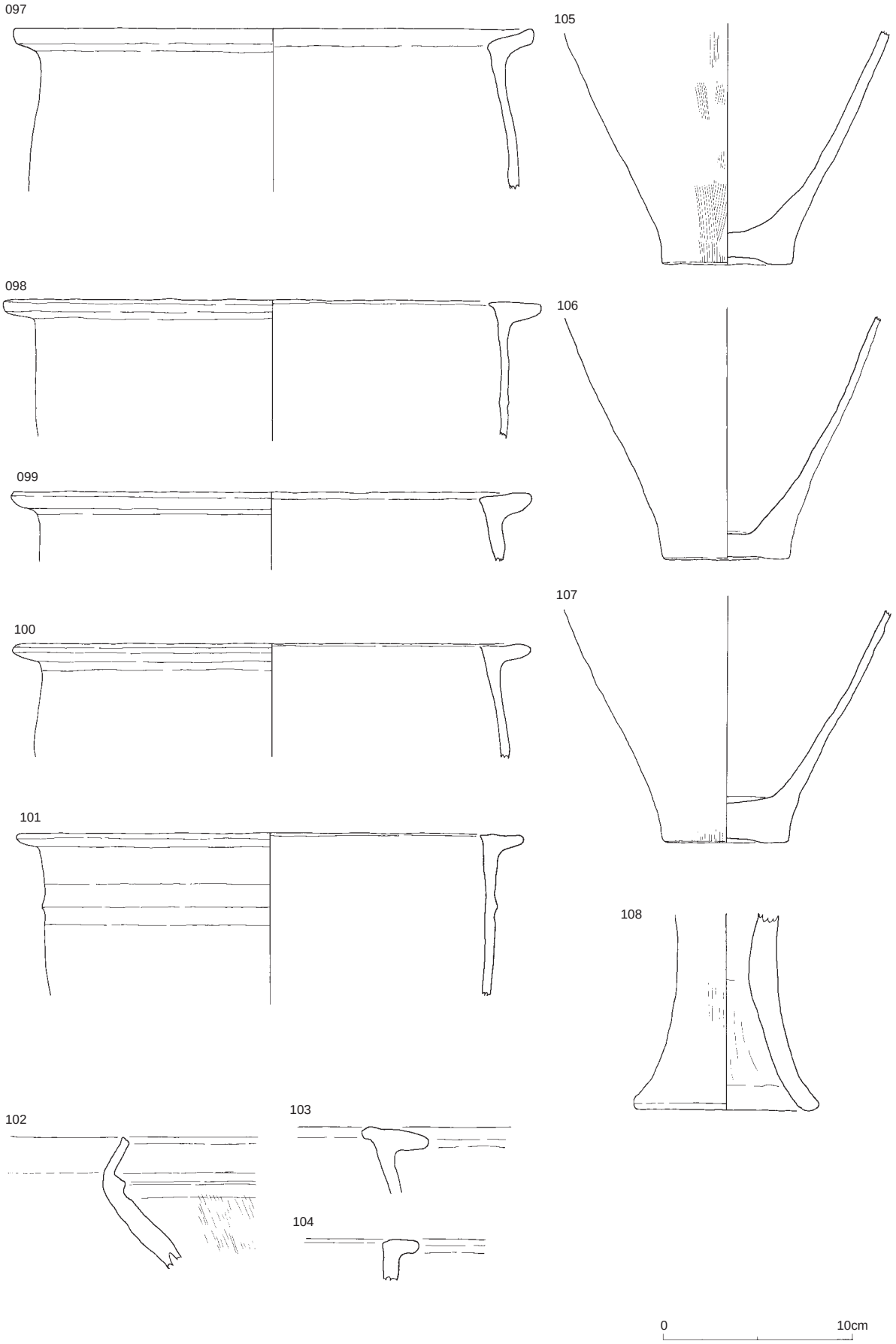


Fig.49　貯蔵穴出土遺物（1/3）

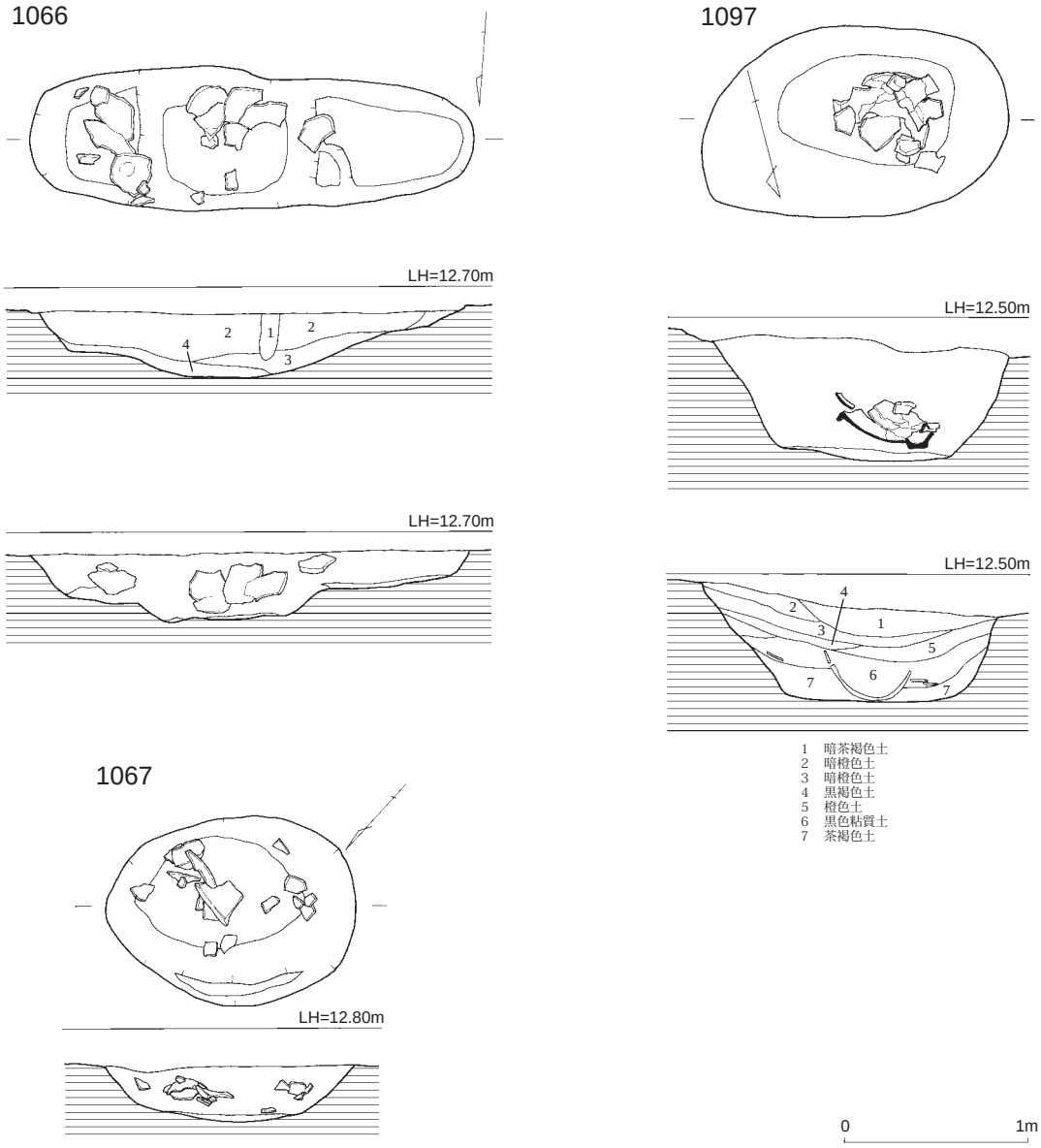


Fig.50　土坑実測図1（1/40）

SK1067（Fig.50）調査区西側で検出した。平面は楕円形、断面逆台形を呈す。主軸をＮ－48°－Ｅにとり長径102㎝、短径77㎝、深さ22㎝を測る。北側で底面から17㎝上に三日月状の段がつく。底面から10㎝程浮いた状態で広口口縁壺破片などの遺物が出土した。出土遺物（Fig.51　112・113）。壺である。112は復元口径28.2㎝を測る。外面淡黄褐色を呈す。胎土は細かく２㎜程の砂礫を多量に含む。調整は摩滅のためほとんど不明であるが外面頸部に横方向の沈線があり、それから上にが縦方向の暗文かみられる。113は壺の口縁である。

SK1097（Fig.50）調査区の北西側で検出した。SC1030に切られる。平面は東西に長い楕円形を呈し長径123㎝、短径78㎝、深さ49㎝を測る。断面は逆台形を呈す。底面直上から甕が１点出土した。底部は土坑底面に立った状態で出土した。出土遺物（Fig.51　114～117）。114～117は甕である。116は底部片である。２次的に被熱しており、外面赤褐色を呈す。117は口縁の一部を欠損し、復元口径29.8㎝、器高35.2㎝を測る。外面は橙色～黄褐色を呈し胎土は粗く径１㎜の細砂を多量に含んでいる。

SK1191（Fig.52）調査区北側で検出した東西に長い楕円形を呈す。長径111㎝、短径71㎝、深さ73㎝

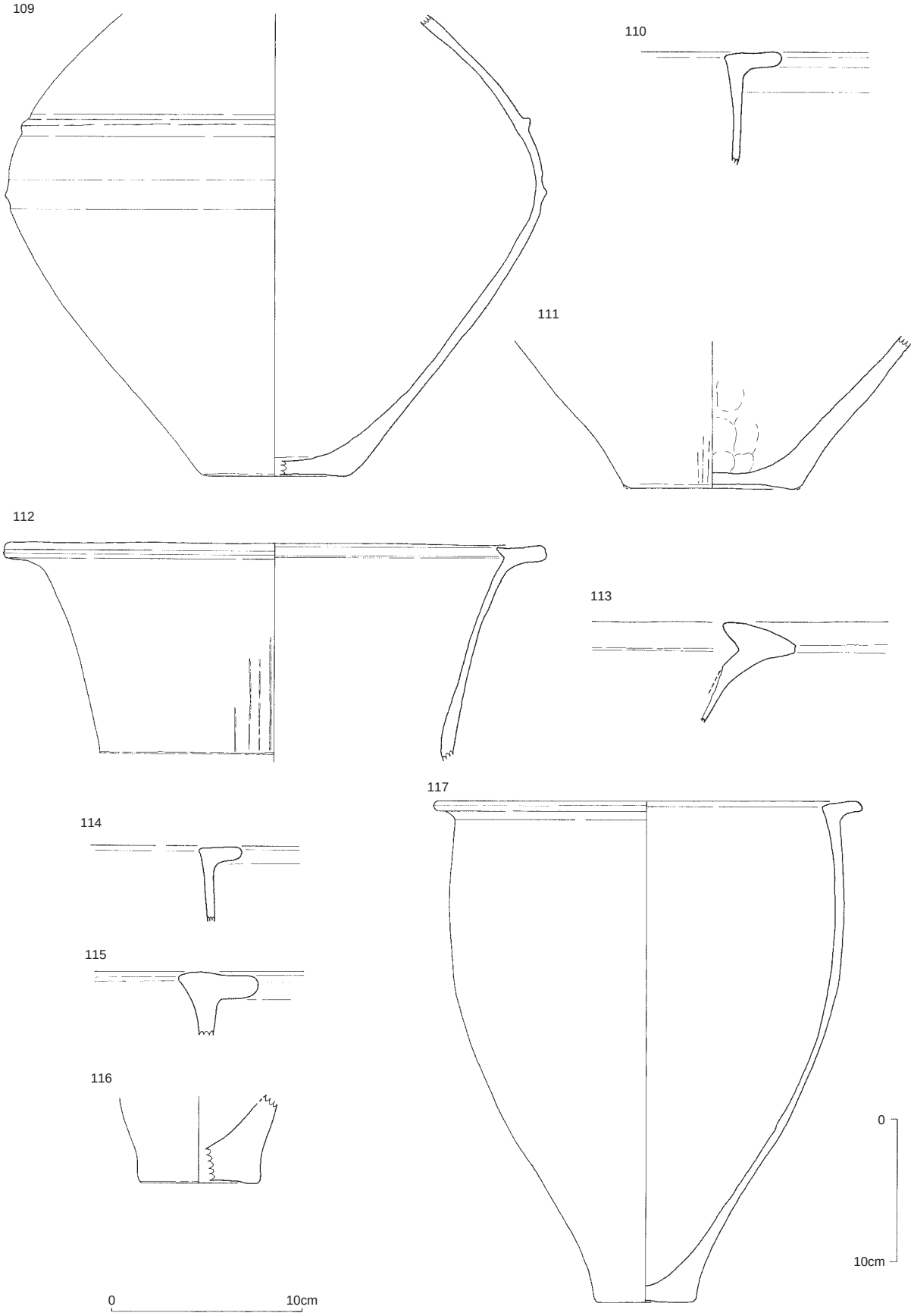


Fig.51　土坑出土遺物（1/3・117は1/4）

を測る。袋状口縁壺片が出土した。

SK1212（Fig.52）調査区北側で検出した。現状で東西138㎝、南北113㎝のいびつな方形を呈す。底面までの深さ３～５㎝を測る。底面東端を南北78㎝、東西61㎝の長方形に掘下げる。断面は逆台形で深さ21㎝を測る。掘込み際の一部に幅2～4㎝、深さ2～4㎝の溝を確認した。SC1030で検出した炉は周辺に溝を巡らしており、それに類似するものか。こちらでは焼土等は出土していない。覆土上層は橙色土、下層がロームブロックを含む褐色土である。L型口縁甕小片が出土した。

SK1213（Fig.52）調査区中央北側で検出した。平面は南北に長い長方形を呈し長径92㎝、幅91㎝を測る。遺構検出面から５㎝掘り込んだ後、底面北側を長さ59㎝、幅54㎝、深さ27㎝の長方形に掘り込む。断面逆台形を呈す。東壁際と西壁の一部に幅４㎝の壁溝状の溝がみられ、SC1030で検出した炉と類似する。ただこの土坑では焼土等は出土していない。底面から12㎝浮いた状態で台付き甕の台部分が出土した。覆土は上層が黒褐色土で下層がロームブロックを多く含む暗褐色土である。焼土は含まず壁も全く焼けていない。L型口縁甕や器台など弥生時代中期の土器が多く出土した。

SK1217（Fig.52）調査区中央南側で検出した。平面隅丸の長方形を呈し長径1.98ｍ、短径1.5ｍ、深さ18㎝を測る。北・西壁沿いに幅3～12㎝の段が付く。覆土中から多量の土器小片が出土している。遺物の時期はＬ型口縁など弥生時代中期であり、後期以降と思われる遺物は出土していない。

SK1425（Fig.52）調査区南東寄りに位置する。平面楕円形で長径66㎝、短径39㎝を測る。覆土中から甕棺片が出土した。甕棺は「く」の字口縁で、胴部の突帯にＸ形の刻目を施す後期後半の甕棺である。破片の出土状況や他時期の遺物も混じることからこれ自体が甕棺の墓壙ではなく、掘削時に出てきた土器を捨てたゴミ穴であると考えられる。しかし、破片の中には大きなものもあり、遠くから持ってきたとも思えない。当期の甕棺片は14次調査の包含層や当調査区SC1030をはじめ多く出土する。近くに墓域があったものと思われる。

５）井戸の調査　井戸と思われる円形の土坑を５基検出した。いずれもほとんど遺物が出土していない。東側60ｍに位置する11次調査で平面形や深さが類似した遺構が確認されている（SE11・SE14・SE16）。時期は弥生時代中期中頃から古墳時代前期と幅がみられる。しかし、11次調査で覆土の記載があるSE14の覆土は黒色土であるが、本調査区で検出した井戸は暗黄褐色～暗褐色を呈す粘質土で地山との色差がわずかであることや本調査区の遺構がほとんど遺物を含まないなど異なる点が多い。井戸周辺の地山の暗赤褐色ロームは検出面から30～50㎝下で暗茶褐色ロームに変わる。この層は上層に比べるとパサパサしており、透水性が高く湧水量は多い。1135・1215以外は南側をSD1115に切られる。

SE1215（Fig.53）調査区西端で検出した。古代掘立柱建物の柱穴に切られる。平面は南北にやや長い楕円形を呈し長径102㎝、深さ112㎝を測る。断面形は遺構面から約50㎝下で溜水の為やや広がるが、その下は緩やかにすぼまり、底面直上でわずかに広がる。覆土は黄褐色～暗褐色粘質土で他の井戸と同じであるが底面直上は黒色粘質である。遺物の出土はなし。

SE1915（Fig.53）調査区の中央で検出した。平面形は東西にやや長い楕円形を呈し長径122㎝、深さ101㎝を測る。断面は遺構面から85㎝下に三日月状のテラスがつく。底径65㎝を測る。覆土は暗褐色である。２月中旬時点で深さ22㎝の水が溜まった。出土遺物なし。

SE1916（Fig.53）調査区中央で検出した。現状で長径128㎝を測る。検出面から約60㎝の深さに幅約15㎝のテラスがつくが、南側が削られている。出土遺物なし。

SE1181（Fig.53）調査区の中央で検出した。南側を溝で削られているため平面形は楕円形を呈す。長径118㎝、検出面から40㎝下で逆台形にすぼまり底径は53㎝、底までの深さ92㎝を測る。

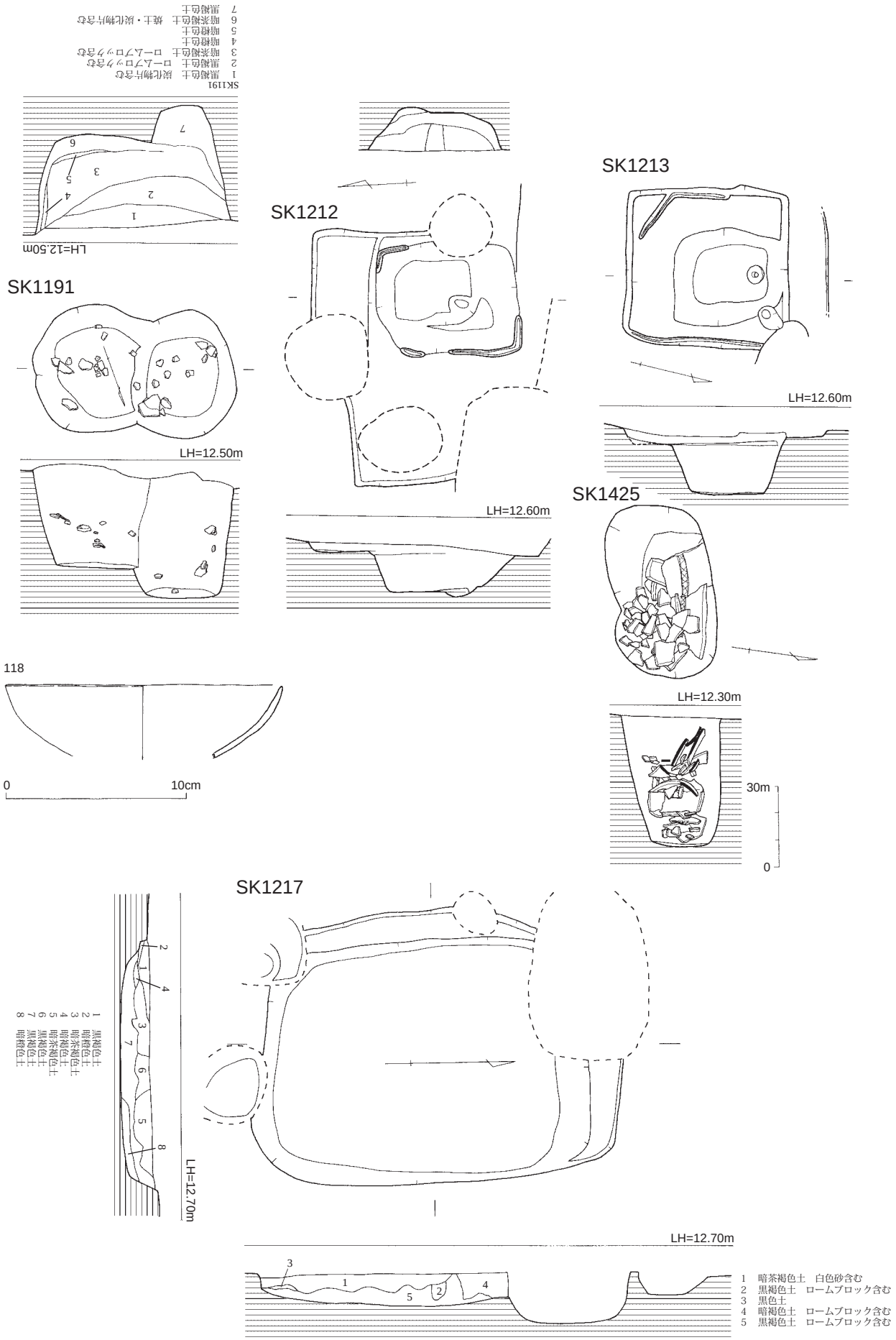


Fig.52　土坑実測図2（1/30・1425は1/20・118は1/3）

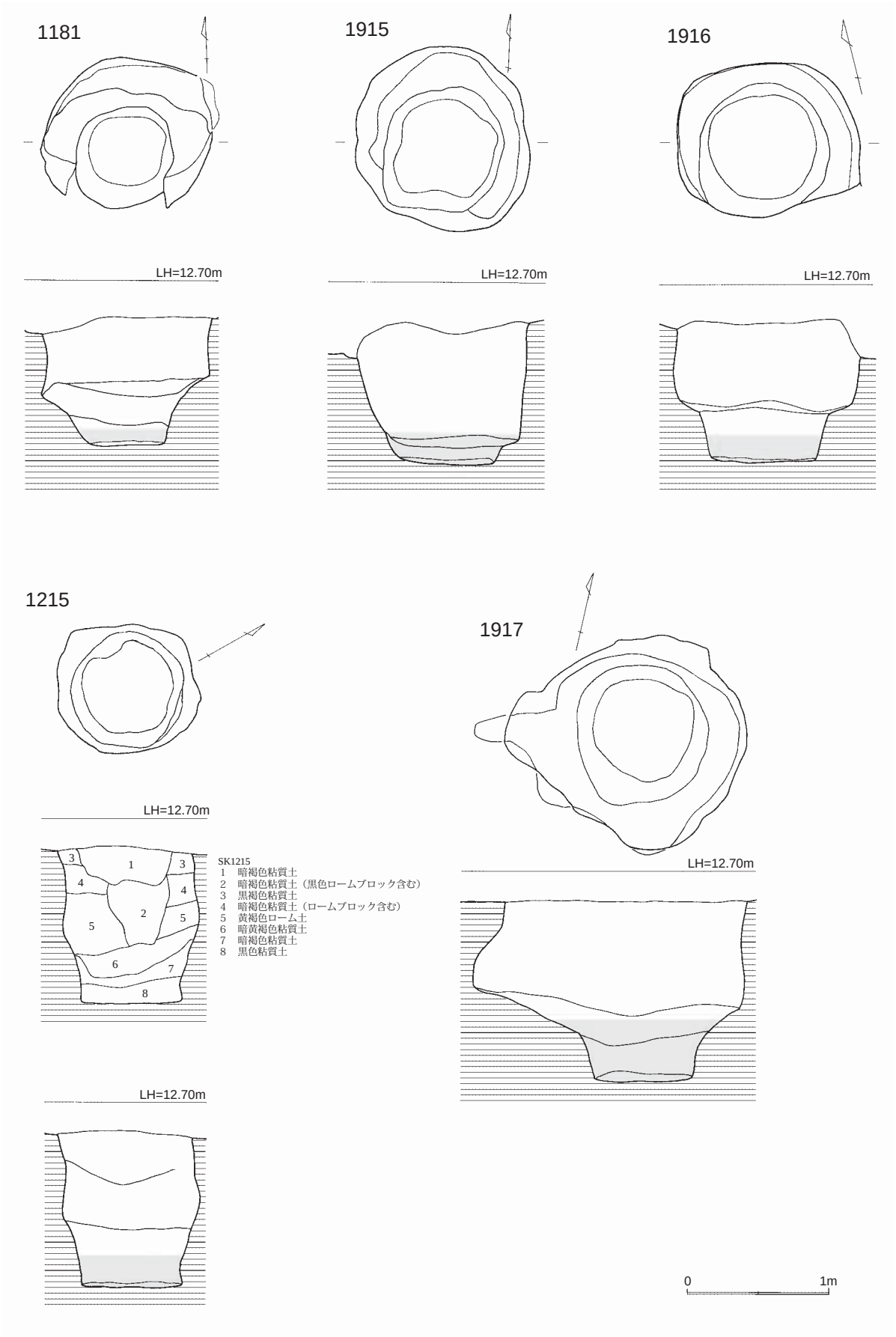


Fig.53　井戸遺構実測図（1/40）

Fig.54　周溝状遺構（SD1467）実測図（1/40）

SE1917（Fig.53）調査区中央で検出した。平面形は楕円形を呈し長径170㎝、短径150㎝、127㎝を測る。検出面から約60㎝下になだらかに傾斜したテラスがつく。テラスから上は断面フラスコ状を呈すが、下は逆台形である。テラスは他の井戸と異なり幅が広く、また傾斜の高低差が大きい。西側の一部分が大きく抉れ込んでいる。出土遺物なし。

６）周溝状遺構の調査

SD1467（Fig.54）調査区の南東端で検出した。台地の落ち際に位置し、SC1432に切られる。幅50～70㎝の溝が楕円形に巡っており長径5.3m、短径は推定で4.6mを測る。底面には高さ15㎝ほどの凹凸がみられる。また、溝底面は東端が最も深く、西に向かって上がっているため西側では削平され痕跡のみしか残っていない。覆土は下層が地山がわずかに汚れた暗褐色粘質土で上層は細かなロームフロックを薄い層状に含む黒色土で自然堆積と思われる。遺構の性格としては住居や墓などが考えられる。北西側に隣接する17次Ｂ区の調査で確認された周溝状遺構は弥生時代終末から古墳時代初頭の竪穴式住居に切られており、同時期と考えられるが周溝内で１×２間の掘立柱建物を１棟確認したため、建物に伴う溝であると考えられる。本調査区の周溝状遺構は溝内に古代の掘立柱建物の柱穴が多く残りが悪いため溝に伴う掘立柱建物を確認することはできなかった。遺物は出土していない。

3　古代の遺構と遺物

古代は掘立柱建物と溝、土坑を確認した。時期は７世紀後半から８世紀中頃である。古代の溝は調査区中央で十字に交わっており、掘立柱建物の多くは溝の東南部に位置する（Fig.55）。特に２×７間の大型掘立柱は台地際で一度建て替えられており、台地際に建てる強い理由があったと思われる。

１）掘立柱建物群の調査

SB01（Fig.56）調査区の中央やや南東側で検出した。２×２間の総柱建物である。主軸をN－6°－Eにとる。柱穴は径58～73㎝、深さ38～87㎝を測る。柱痕跡は５基で検出し径12～23㎝を測る。梁間は全長3.1m、桁行は全長3.75mを測る。柱間は芯々で1.5～1.95mを測る。弥生土器小片が出土した。

SB02（Fig.57）調査区の東側で検出した。２×３間の側柱建物である。主軸をN－80°－Wにとる。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径70～97㎝、深さ43～91㎝を測る。柱痕跡は04で検出され径23㎝を測る。梁間は全長3.7m、桁行きは全長6.15m、柱間は芯々で1.6～1.9mを測る。桁行きの２本目と３本目の間隔が広い。柱穴から瓦片や須恵器大甕片等が出土した。出土遺物（Fig.65　128～130）。

SB03（Fig.58）調査区の東端部で検出した。SB04を切る。２×３間の側柱建物で主軸はほぼ南北を向く。柱穴は隅丸方形を呈し、径73～87㎝、深さ54～91㎝を測る。柱痕跡は05、06、07、09で確認でき径21～29㎝を測る。梁間は全長3.7m、桁行きは全長5.8mを測る。柱間は芯々で1.7～2.3mを測る。SB02と同様に桁行きの２本目と３本目の間隔が広く2.4mを測るが、その他はほとんど1.7m前後である。柱穴から瓦片や須恵器付蓋、土師器坏蓋、鉄滓等が出土した。出土遺物（Fig.65　119～125）。

SB04（Fig.59）調査区の東端部で検出した２×７間の側柱建物で、主軸をN－11°－Eにとる。SB03に切られ、SB09を切る。柱穴は径68～122㎝、深さ47～110㎝を測る。柱痕跡は04、07、08、10、13、14で検出し径20～35㎝を測る。梁間は全長4.5m、桁行は全長15.5mを測る。柱間は芯々で2.0～2.4mを測る。南側中央の柱穴を欠く。01と17の間には攪乱があるが、深さは20～30㎝と浅く、柱穴が消滅

Fig.55　溝と掘立柱建物位置図（1/500）

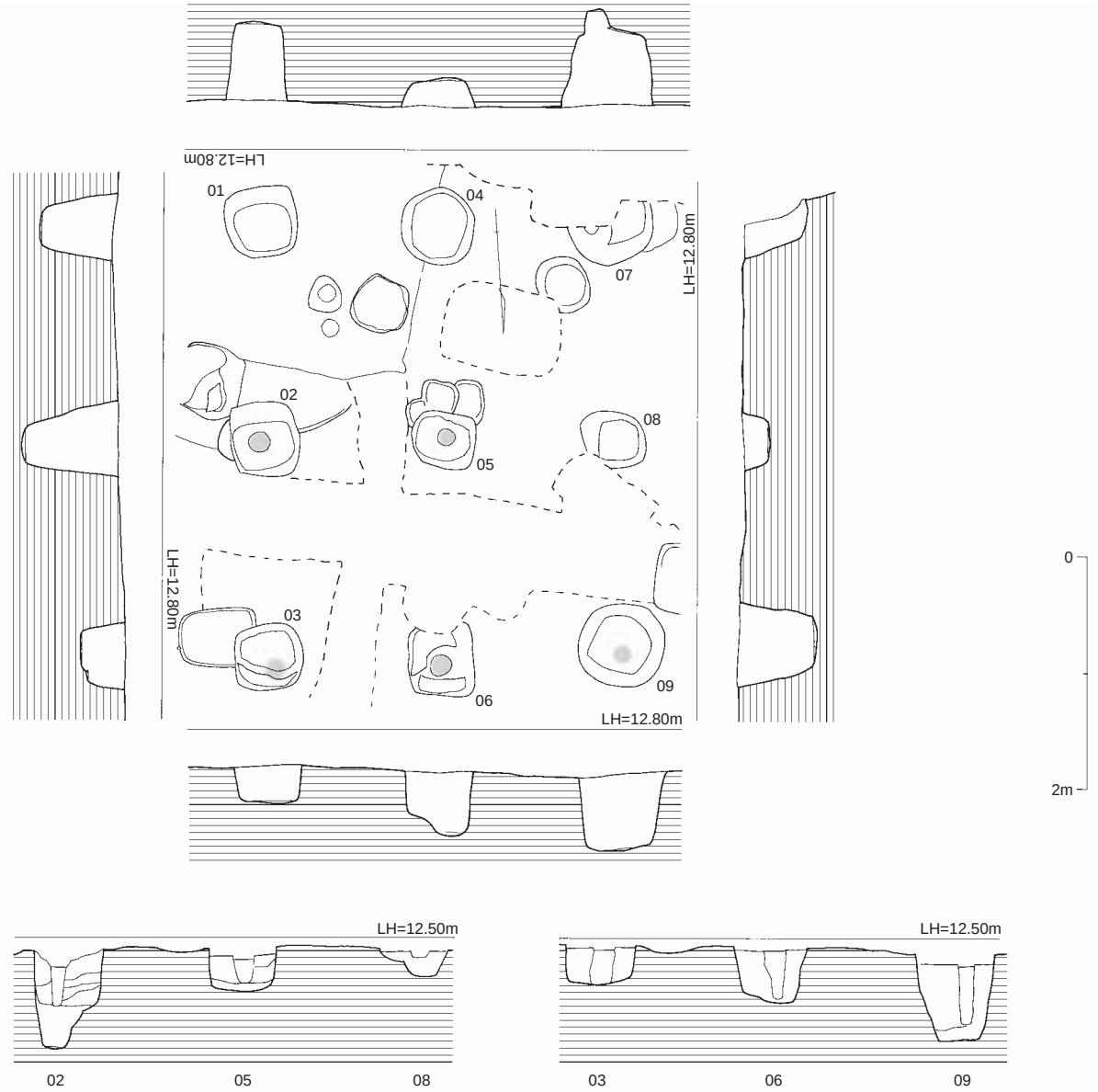


Fig.56　SB01遺構実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−01	17次A区	南北	N−6°−E	2×2	3.7	1.8	3.1	1.6	11.47	01	方形	63	59	54				Fig.56
						1.9		1.6		02	方形	63	59	53	1366			
							3.0	1.5		03	隅丸方形	58	57	34	1364			
					3.75	1.8		1.5		04	円形	66	63	26	1353			
						1.95		1.5		05	方形	56	47	32	1369			
								1.55		06	方形	64	56	56	1368			
					3.6	1.8				07	円形	62		56	1374			
						1.8				08	楕円形	54	48	32				
										09	円形	74	71	66	1370			

Tab. 1　SB01建物跡計測表

する程の深さでないので初めから無かったと考られる。柱穴から瓦片や須恵器坏蓋片等が出土しており、特に柱穴02では瓦片を根石代わりに使用している。出土遺物（Fig.65　126）。

SB05（Fig.60）調査区の東側やや北寄りに位置する。遺構の北東部分が調査区外に延びるため全容は不明であるが現状で１×３間の側柱建物である。主軸をN−76°−Wにとる。柱穴は楕円形と長方形で径62〜92㎝、深さ25〜69㎝を測る。柱痕跡は01のみで径17㎝を測る。梁間は全長4.7m、柱間は芯々で1.3〜1.7mを測る。柱穴からは弥生時代と思われる土器小片が出土した。

SB06（Fig.61）調査区の西側で検出した。SD1115をまたぐ２×６間以上の総柱建物である。主軸をN−87°−Eにとる。柱穴は円形または隅丸方形を呈し、径30〜65㎝、深さ8〜35㎝を測る。柱痕跡は

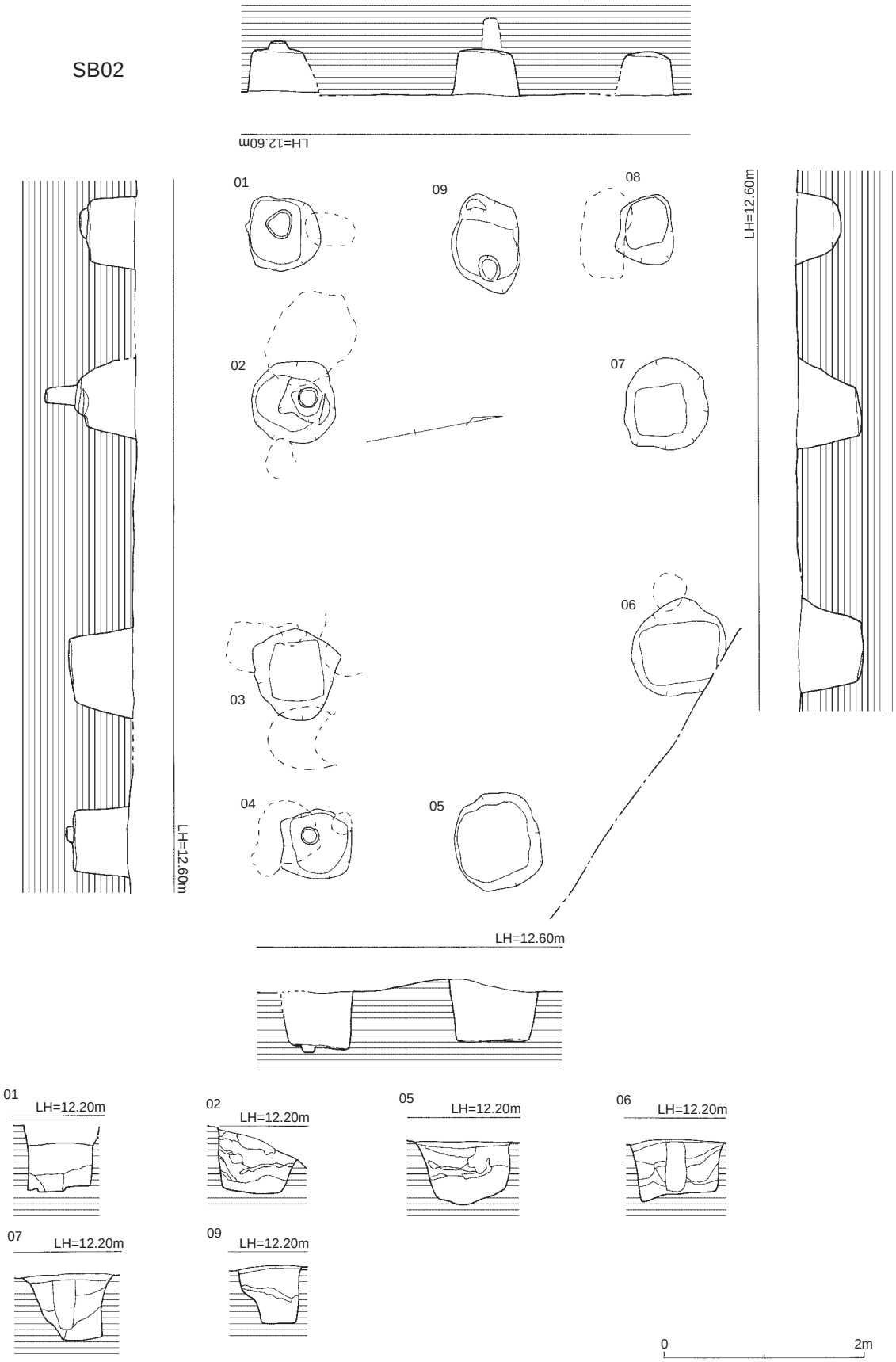


Fig.57　SB02遺構実測図（1/60）

SB03

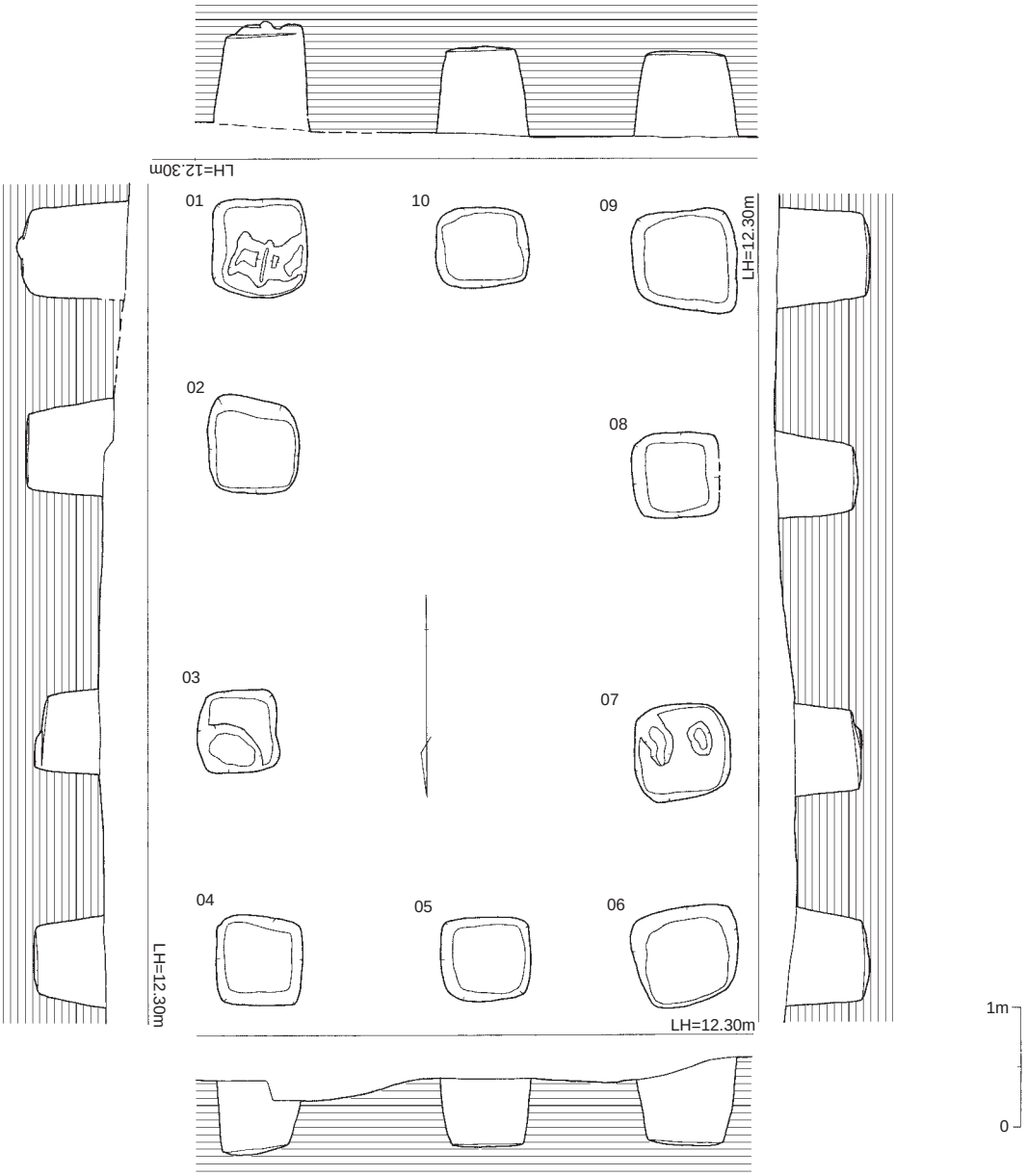


Fig.58　SB03遺構実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規　模	桁　行		梁　行		床面積	柱穴番号	形　状	規　模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB－02	17次A区	東西	N－80°－W	2×3	6.1	1.75	3.7	1.9	22.6	01	隅丸方形	85	67	77	1673			Fig.57
						2.75				02	円形	82	82	91	1409	須恵器甕、土師質瓦		
						1.6				03	不整形	91	87	63	1584	須恵平瓦、長径壺		
								1.9		04	方形	71	71	65	1588	須恵器高台付坏		
					6.15	6.15				05	方形	97	87	63	1590	須恵器坏蓋片		
						2.5				06	長方形	97	93	63	1681	須恵器大甕片		
						1.8				07	円形	93	84	64	1677			
								1.8		08	方形	70	59	43	1322			
										09	長方形	84	67	78	1672	土師器坏蓋片	7～8世紀	

Tab. 2　SB02建物跡計測表

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規　模	桁　行		梁　行		床面積	柱穴番号	形　状	規　模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB－03	17次A区	南北	N－1°－E	2×3	5.8	1.6	3.7	2.0	21.5	01	方形	81	77	91	1449	須恵器瓦片		Fig.58
						2.4		1.7		02	隅丸方形	81	73	72	1458	須恵器坏蓋		
						1.8				03	方形	67	67	54	1569	土師器坏蓋		
							3.6	1.8		04	方形	73	71	61	1568			
								1.8		05	隅丸方形	73	71	58	1566	瓦片		
					5.8	1.7				06	著方形	87	79	71	1565	鉄滓		
						2.3				07	隅丸方形	78	79	55	1564	須恵器坏蓋、鉄滓		
						1.8				08	方形	73	69	68	1543			
								1.7		09	長方形	87	85	76	1542	須恵器坏蓋	7世紀後半	
										10	長方形	77	66	68				

Tab. 3　SB03建物跡計測表

SB04

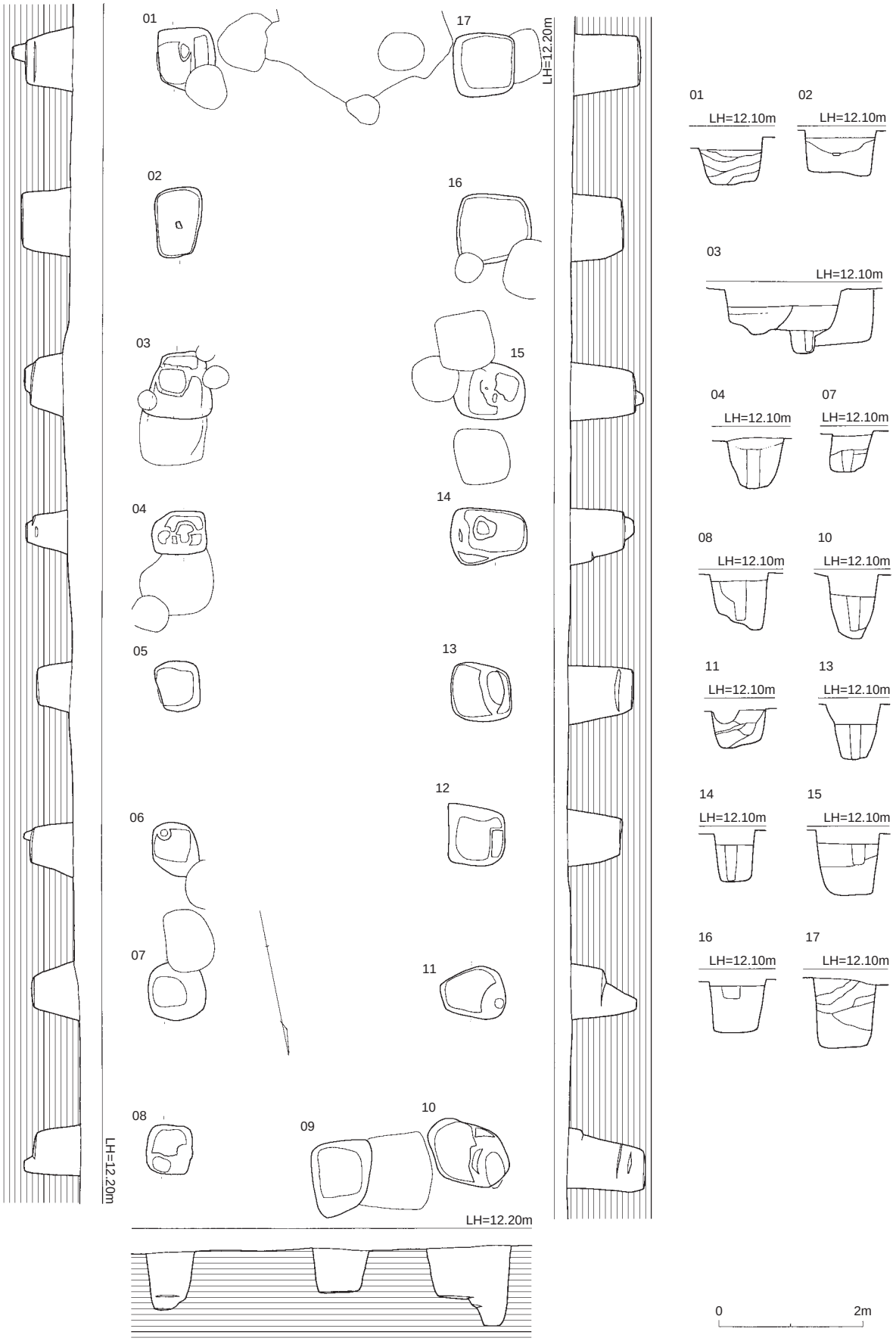


Fig.59　SB04遺構実測図（1/80）

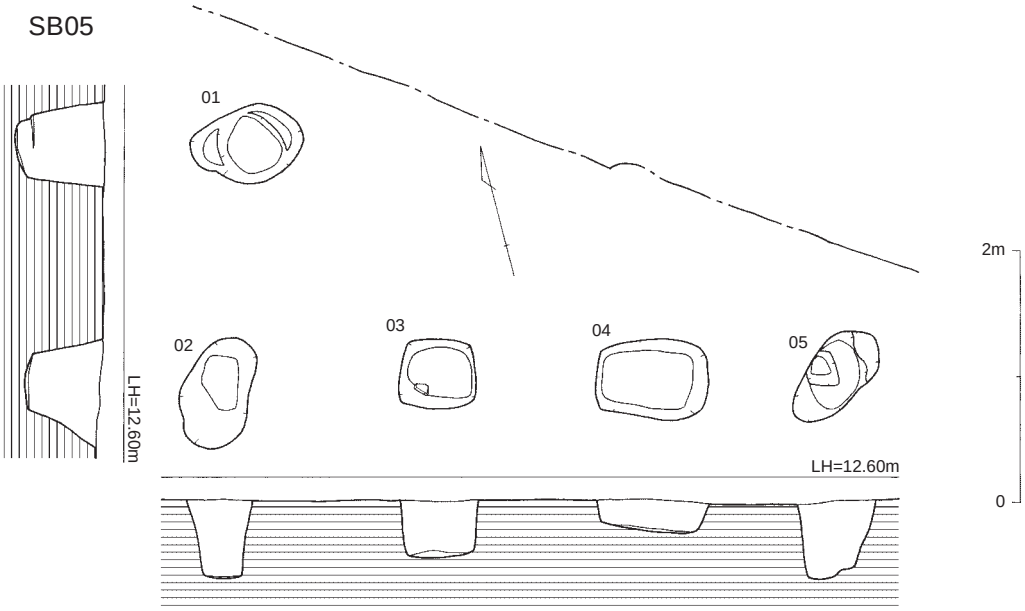


Fig.60　SB05遺構実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−04	17次A区	南北	N−11°−E	2×7	15.5	2.1	4.5		69.75	01	方形	89	79	83	1436	須恵器高坏		
						2.4				02	長方形	95	66	67	1435	瓦、須恵器付蓋	7世紀末	
						2.1				03	方形	93	81	55	1700			
						2.1				04	長方形	76	61	58	1463			
						2.3				05	方形	72	63	47	1470			
						2.1				06	隅丸方形	75	62	64	1490	須恵器平瓦		
						2.3				07	隅丸方形	82	81	65	1491			
							4.4	2.3		08	方形	68	63	79	1495			
								2.1		09	方形	85	83	63	1498			
						2.3				10	楕円形	122	81	110	1718			
						2.3				11	不整形	88	71	89	1572			
						2.1				12	方形	81	78	79	1571			
						2.2				13	隅丸方形	83	79	93	1570	須恵器平瓦、坏蓋片		
						2				14	長方形	107	79	89	1459			
						2.3				15	隅丸方形	98	81	103	1544	須恵器坏蓋		
						2.3				16	方形	106	98	73	1445	須恵器大甕片		
										17	方形	89	86	93	1442			

Tab. 4　SB04建物跡計測表

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−05	17次A区	東西	N−76°−W	(2)×3	4.7	1.7		1.8		01	楕円形	92	61	69	1634			
						1.7				02	楕円形	92	54	62	1895			
						1.3				03	長方形	62	55	45	1642			
										04	長方形	89	64	25				
										05	楕円形	87	46	61	1645			

Tab. 5　SB05建物跡計測表

確認できなかった。梁間は全長4.2m、桁行きは全長12.3mを測る。柱間は芯々で1.2～2.9mを測る。桁行き中央の柱列が中心からかなり北側にずれている。溝を意識して柱を北側に移動させたと考えられる。溝と同時存在し、その溝をまたぐことや他の大型掘立柱建物と離れて建つことから建物の性格としては橋・トイレ等が考えられる。他の掘立柱建物と異なり柱穴の堀方が浅い。（Fig.65　127）。

SB07（Fig.62）調査区の北西側で検出した２×２間の側柱建物で主軸をN－１°－Eにとる。SC1030・1031を切る。円形または隅丸方形を呈し、径36～58㎝、深さ11～32㎝を測る。柱痕跡は確認することができなかった。梁間は全長4.1m、桁行きは全長5.1mを測る。柱間は芯々で1.9～2.8mを測る。遺物が出土していないため明確な時期は不明であるが一応古代の遺構として報告する。

SB08（Fig.63）調査区の東端部で検出した２×３間の側柱建物で主軸をN－８°－Eにとる。SB09を切る。柱穴の平面形は円形または隅丸方形を呈し径37～73㎝、深さ32～79㎝を測る。柱痕跡は10でのみ確認し、径８㎝を測る。梁間は全長5.3m、桁行きは全長3.6mを測る。柱間は芯々で1.6～2.0mを測る。柱穴から瓦片や須恵器甕片が出土した。

SB09（Fig.64）調査区東端の台地落ち際で検出した。SB04とSB08に切られる。２×７間の側柱建物

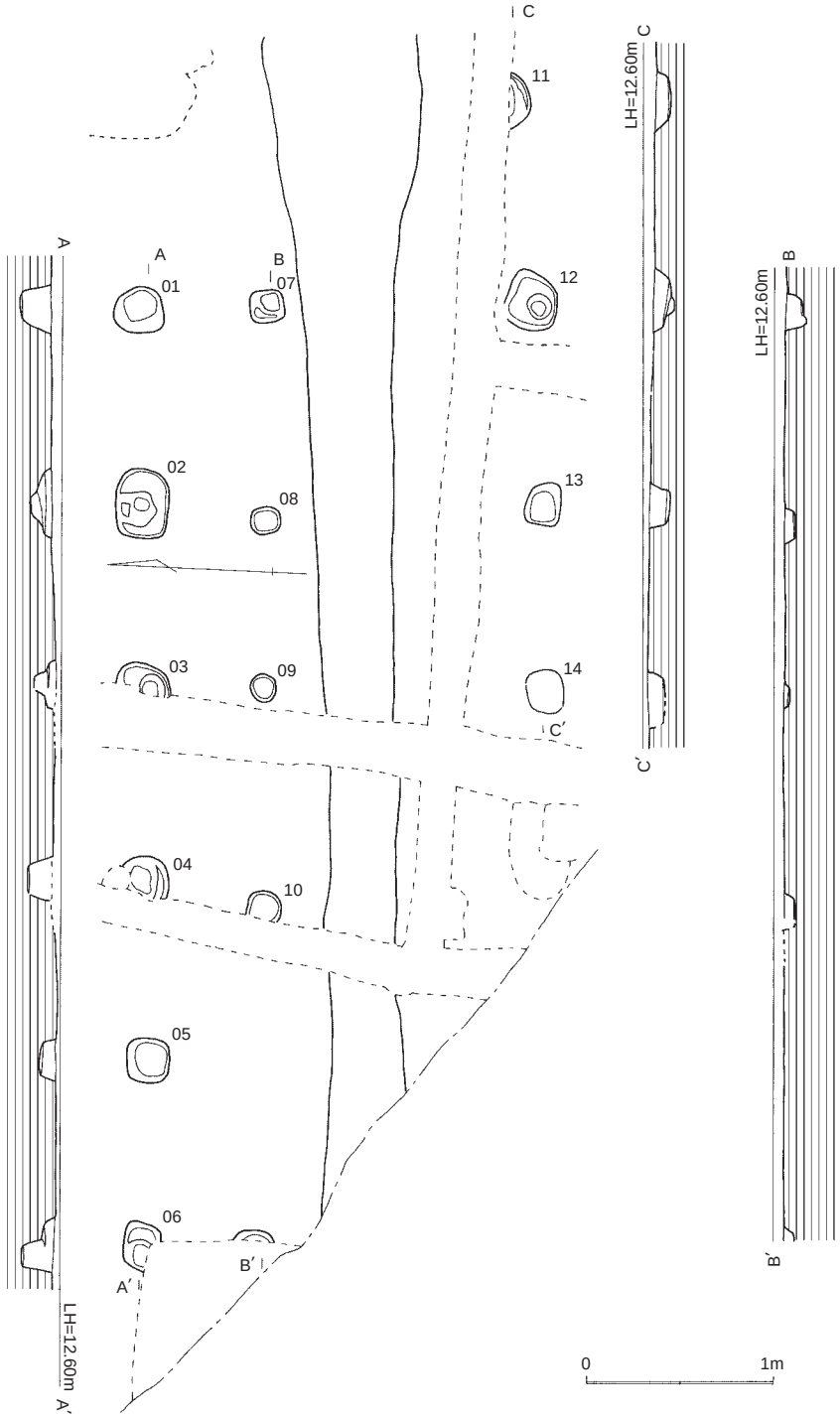


Fig.61　SB06遺構実測図（1/80）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規　模	桁　行		梁　行		床面積	柱穴番号	形　状	規　模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−06	17次A区	東西	N−87°−E	2×6(5)	12.3	2.1	4.1	1.3		01	円形	55	48	35	1179			Fig.61
						2	4.2	1.4		02	楕円形	73	57	23	1178			
						2.1	4.2	1.3		03	不明	57		23	1173			
						1.8		1.3		04	円形	56		28	1167			
						2.1				05	隅丸方形	47	46	18	1073			
								1.2		06	長方形	52	39	33	1072			
								2.8		07	方形	37	34	16	1186			
								2.8		08	方形	31	28	10				
								2.9		09	円形	30	28	8				
										10	円形	37		7	1168			
										11	不明			9				
						2.2				12	不明	58		16	1244			
						2.1				13	隅丸方形	65	55	22	1242			
						2				14	方形	46	39	22	1238			
										15	隅丸方形	58		17				

Tab. 6　SB06建物跡計測表

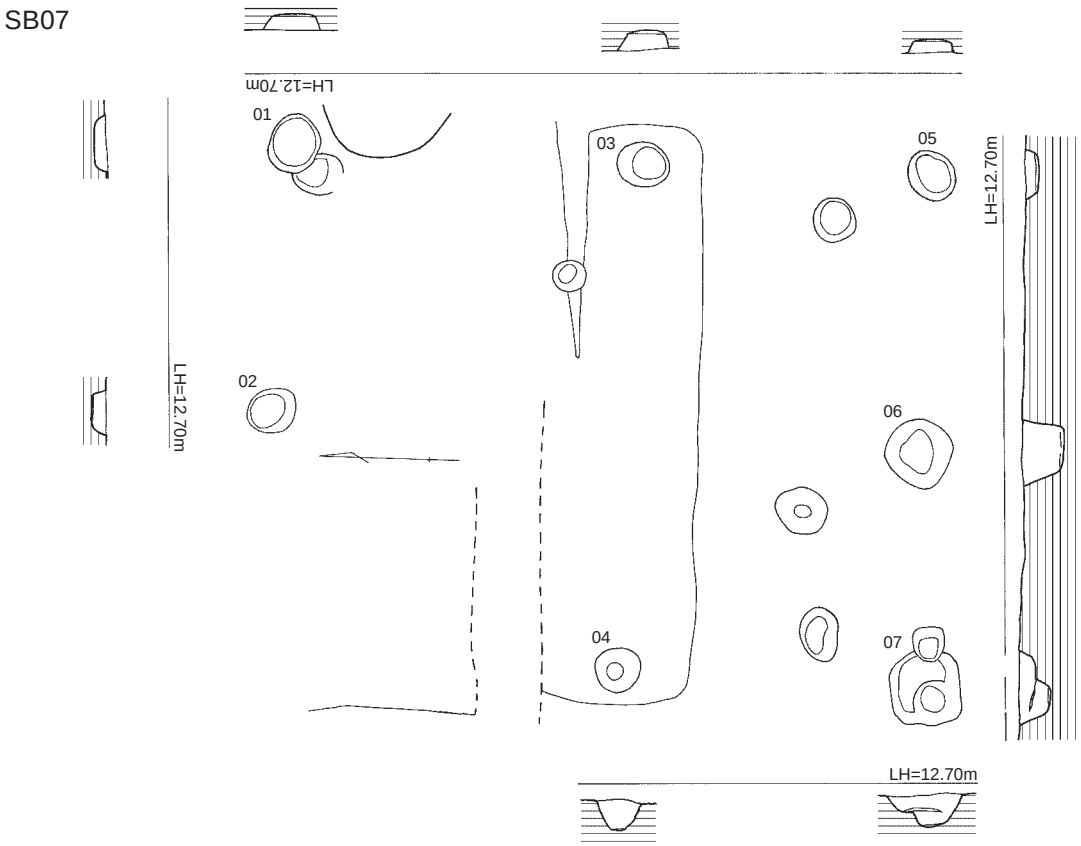


Fig.62　SB07遺構実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−07	17次A区	南北	N−1°−E	2×2	5.1	2.8		2.1	20.9	01	楕円形	46	39	13	1065			Fig.62
										02	楕円形	42	34	11				
						2.3				03	楕円形	41	36	15	1059			
						2.5				04	円形	36	35	24				
							4.1	2.2		05	円形	43	36	11				
								1.9		06	隅丸方形	52	50	32	1086			
										07	隅丸方形	58	56	26				

Tab.７　SB07建物跡計測表

で主軸をN－６°－Eにとる。柱穴掘方は径55～109㎝、深さ33～101㎝を測る。梁行きは4.8m前後、桁行は15.1mを測る。柱間は芯々で2.1～2.2mを測る。遺構の南側は台地から谷部へと延びる。北側が調査区外に延びる可能性があるが現状で２×７間の建物である。柱穴02と07、02と08、03と09間には対応する小柱穴があるが、実際に同建物の柱であるのか確定できない。柱穴04は瓦片を根石代わりに使用している。SB09、SB04、SB03の切り合いから掘立柱建物は少なくとも２回の建て替えがあり、このSB09は今のところもっとも古い建物である。この掘立柱建物の根石として瓦片が再利用されていることから瓦葺き建物はこれら大型掘立柱建物群に先行することが判明した。これまでは瓦当文様が１種であることなどから井尻Ｂ遺跡の古代建物は短期に廃れるという古代地方寺院に多いパターンで考えられてきたが少なくとも２回の建て替えにより瓦葺き建物が廃絶した後も掘立柱建物群が存続したことが判ってきた。瓦葺き建物の建築が７世紀第４四半期として、建物群が建替えられながらいつまで続くのか今後の課題である。出土遺物（Fig.79　213）。須恵質の丸瓦片である。青灰色で一部紫色を呈す。胎土は茶褐色で粗く砂粒を多く含む。

２）溝の調査　調査区の中央部分で南北方向の溝とそれに直行する東西方向の溝を確認した。この十字形溝の埋没時期差を確認するため、遺構番号は交差部分と東西南北で分け、交差部分を1692、中央より西側を1115、南側を1247、北側を1248、東側を1249とした。

SD1247（Fig.4・66）中心から南側で9.5m分確認した。幅1.4m、深さ69㎝を測る。断面は南端の土

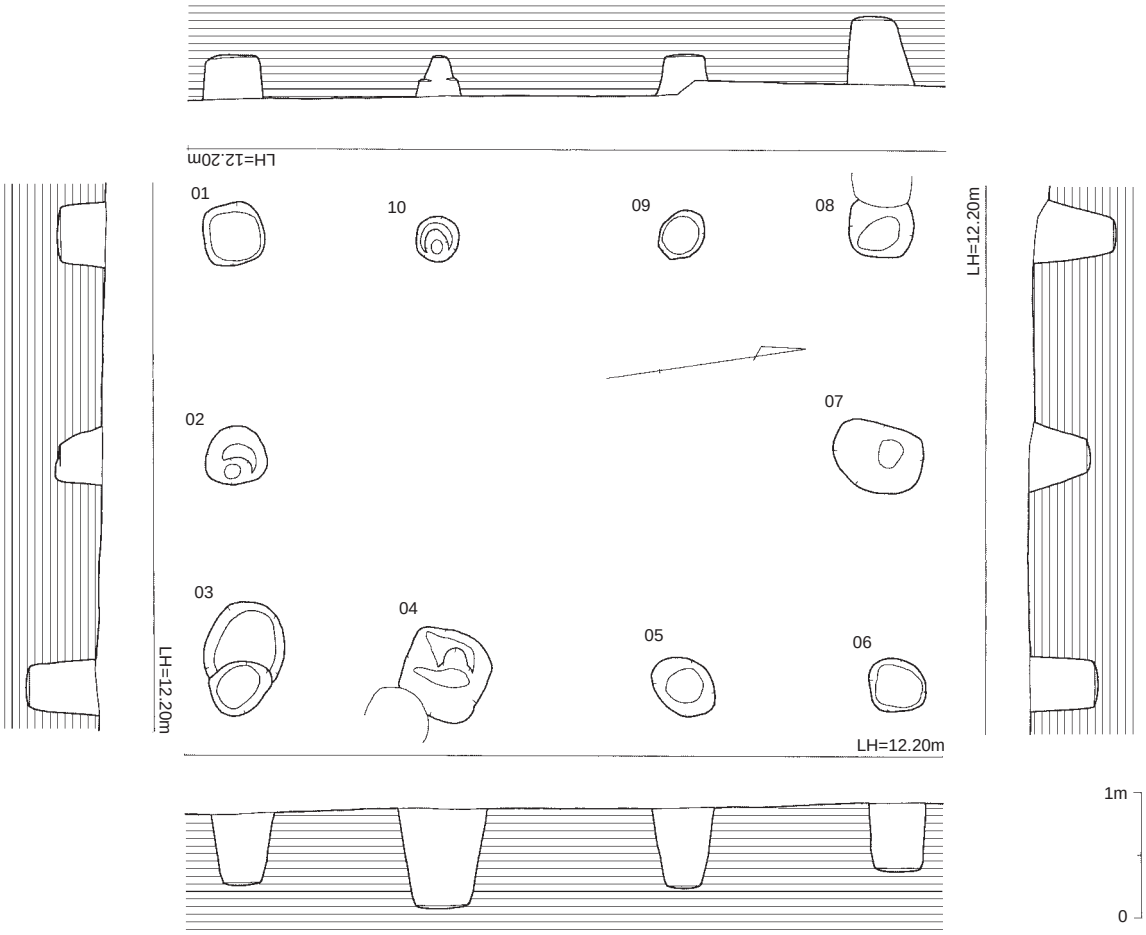


Fig.63　SB08遺構実測図（1/60）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規　模	桁　行		梁　行		床面積	柱穴番号	形　状	規　模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB−08	17次A区	南北	N−8°−E	2×3	5.2	1.6	3.5	1.8	19.1	01	隅丸方形	50	48	48	1704	平瓦、須恵器甕		Fig.63
								1.7		02	円形	47	45	38	1507			
					5.3	1.7				03	円形	49	41	55	1701			
						1.9				04	方形	71	68	79	1474			
						1.7				05	楕円形	57	39	62	1558			
							3.6	1.8		06	隅丸方形	44	43	53				
								1.8		07	不整形	73	54	49	1494			
						1.6				08	楕円形	52		63				
						2				09	楕円形	42	34	32	1864			
										10	円形	37	36	32				

Tab.８　SB08建物跡計測表

層Ａでは底面から35㎝は垂直に立ち上がり、その後急に広がるＹ字型を呈す。覆土は暗茶褐色を呈しロームブロックを多く含む。最下層はやや粘質土で、水が溜まることもあったと思われる。底面に鍬の刃痕跡が２列みられる。刃の幅は約10㎝を測る。上層の広くなった部分で瓦・須恵器などの遺物が多く出土した。約140ｍ南の第３次調査で検出した古代の溝はこの延長上に位置し、断面も同形である。底面のレベルも３次調査の北端と本調査区の南端では20㎝しか違わない。出土遺物（Fig.68 131～136）。131は須恵器坏蓋である。薄いボタン状の摘みを持つ。132は須恵器坏である。口径9.7㎝を測る。133は須恵器鉢である。復元口径13.9㎝、器高7.4㎝を測る。外面灰色と暗赤褐色を呈す。134は須恵器高坏である。坏部は焼成中のヒビ割れで約1/3が傾く。器高7.8㎝を測る。135は平瓶の取手である。136はガラス小玉である。径3.2㎜を測り、色は水色を呈す。

SD1248（Fig.4・66）中心から北側で調査区内で13.5ｍ確認した。幅1.35ｍ、深さ33㎝を測る。断面は浅皿状を呈す。覆土は上側3/4が遺物を多く含む暗茶褐色土で、最下層は暗橙色土である。流水・溜水の痕跡はみられない。出土遺物（Fig.68　137～142）。137は須恵器坏である。138は円面硯である。復元口径20.1㎝を測る。淡橙色を呈し、非常に軟質である。脚に長方形透しを施す。139は土師

Fig.64　SB09遺構実測図（1/80）

Tab. 9　SB09建物跡計測表

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模（桁行×梁行）	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	柱穴番号	形状	規模 長径	規模 短径	規模 深さ	旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
SB−09	17次A区	南北	N−6°−E	(2)×7	15.1	2.2			72.5	01	不明	63		33	1760	須恵器丸瓦		
						2.1				02	長方形	81	67	72	1614			
						2.1				03	長方形	91	64	58	1485			
						2.2				04	円形	55	52	89	1713			
						2.1				05	円形	60	58	83	1621			
						2.2				06	隅丸方形	93	87	101	1461			
						2.1				07	楕円形	95	78	83	1464			
						2.1				08	長方形	109	79	91	1469			
						2.1				09	方形	75	67	74	1488			
						2.2				10	円形	83	81	82	1483			
										11	円形	83		46	1497			

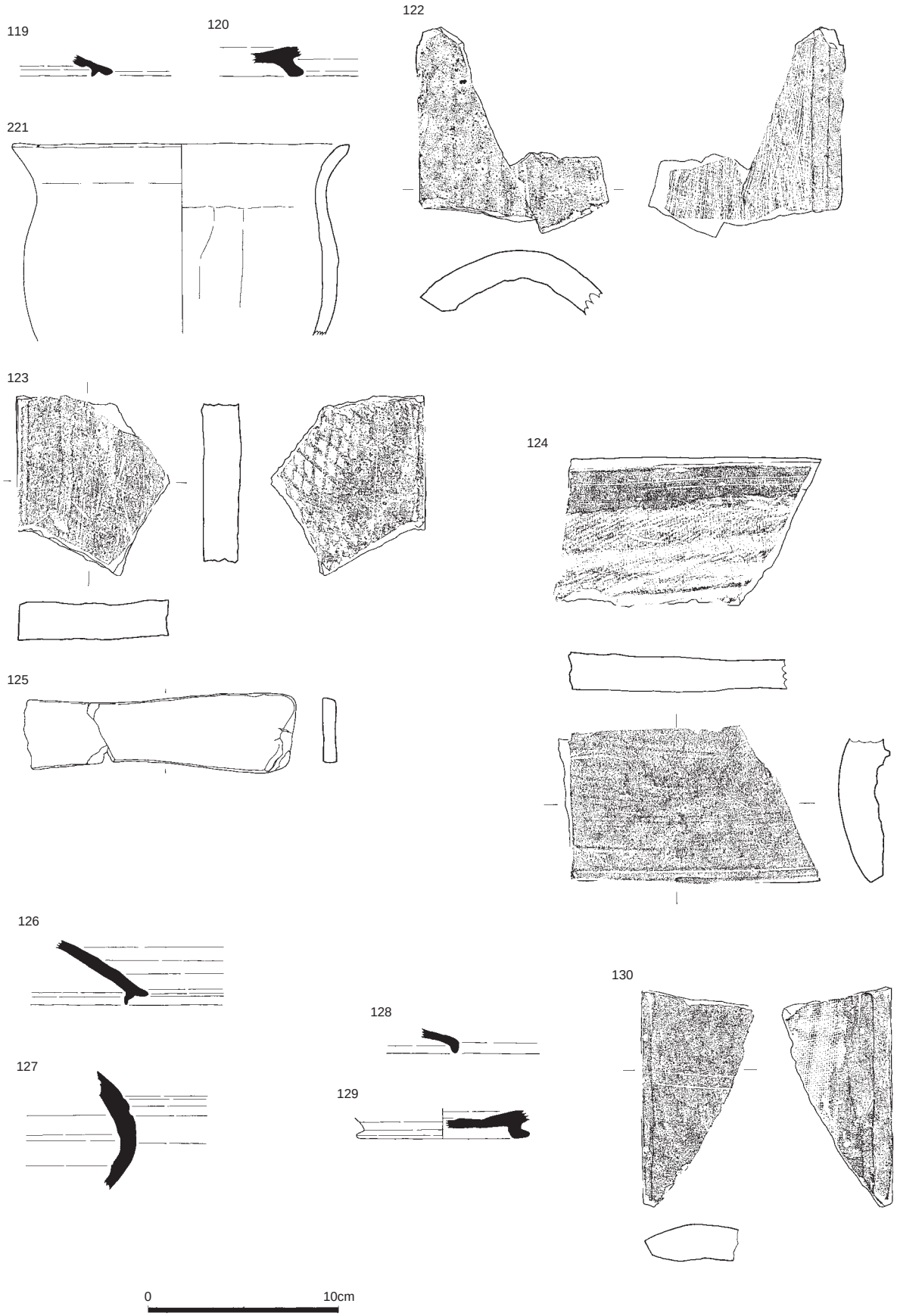


Fig.65　掘立柱建物出土遺物（1/3）

質の甑である。復元口径18.7㎝、器高14.6㎝を測る。底部には幅1.8㎝の粘土帯がつく。140は土製品である。淡橙白色を呈し胎土は細かく砂礫少ない。軟質である。目はわずかな窪みで表現し、口先は尖り嘴と思われる。頸部は頭から垂直に下に延び、長い。端部は破損ではなく、胴部に貼り付けたらしい平坦面である。全体から水鳥をモチーフにしていると考えられる。141は石弋である。砂岩製で刃部の途中から先端を欠く。現状で長さ12.2㎝、幅7.3㎝、刃部厚さ1.7㎝、基部厚さ1.1㎝を測る。142は完形の壺である。口径9.8㎝、器高11.5㎝を測る。外面は橙色～黄色で胎土は細かい。

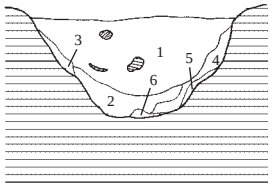
SD1249（Fig.4・66）中心から東側に延びる溝で調査区内で18m確認した。幅1.45m、深さ55㎝を測る。断面はおおよそ逆台形を呈し、底面から20㎝上で断続的なテラスがみられる。覆土は上層が暗褐色粘質土で瓦・土師器・須恵器等を多く含む。下層は黒褐色粘質土で焼土小ブロック等を含む。この溝のみがSD1247とつながっている。出土遺物（Fig.69　143～159）。143～145は須恵器坏蓋である。143は復元口径14.8㎝、器高3.1㎝を測る。外面暗灰色を呈し、胎土やや粗い、外面にヘラ記号あり。144は復元口径14.8㎝を測る。口縁が全体的に歪む。平面楕円形を呈す。145は口径11.6㎝、器高1.9㎝を測る。外面灰白色、内面青灰色を呈し胎土精良である。146～152は須恵器高台付坏である。146は口径13.4㎝、器高4.5㎝を測る。灰色を呈し、胎土粗く砂粒多く含む。147は復元口径15.1㎝、器高4.1㎝を測る。暗青灰色を呈し胎土粗く砂粒多量に含む。焼成良好。148は口径15.3㎝、器高4.3㎝を測る。外面青灰色を呈し胎土はやや粗めで細砂を含む。調整は全体に粗いナデを施し、器形は一部歪む。149は底径11.1㎝を測る。外面は青灰色を呈し胎土は細砂を多量に含む。焼成は良好である。150は口径13.2㎝、器高4.7㎝を測る。外面は灰色～灰白色を呈す。胎土は細かい。調整は坏部と高台はナデ、坏部外底部はケズリを施すが全体的に粗い。軟質である。151は口径15.1㎝、器高5.4㎝を測る。外面灰白色を呈す。胎土細かく砂粒含む。口縁はやや直線的でわずかに外反する。短く断面台形の高台がつき、外底部はヘラ削りで残りは丁寧なナデを施す。152は復元口径15.6㎝、器高5.9㎝を測る。外面灰白色で胎土は細かい。焼成は不良で生焼け状態である。153は土師質の高台付坏である。底径10.2㎝を測る。淡橙色を呈し、胎土細かく砂粒ほとんど含まない。154は須恵器高坏である。復元口径15.2㎝を測る。155・156は須恵器鉢である。155は口径14.9㎝を測る。156は歪みが大きく平面楕円形を呈す。長径16.6㎝を測る。外面上半は黒色、下半は青灰色を呈す。青灰色の範囲は正円を呈しており、焼成時に伏せて焼き、上に別の鉢をかぶせたものと思われる。胎土細かく1㎜以下の細砂を多量に含む。焼成良好。157は甑取手である。158は鉢である。淡橙色を呈し、胎土粗く砂粒を多量に含む。159は甕である。復元口径22.1㎝を測る。外面橙色を呈す。

SD1115（Fig.4・66）中心から西側の溝で調査区内で14.5m確認した。幅1.6m、深さ63㎝を測る。断面は逆台形で覆土は暗褐色粘質土である。底面はSD1247・1249の間に削り出しの段を持つ。上層から瓦が出土したが、坏や高坏など器はほとんど出土していない。

SD1692（Fig.4・66・67）溝の交差部分である。十字溝の切り合いを確認するためこの部分では平面での精査と小トレンチによる土層確認を行ったが、溝同士の切り合いは確認できなかった。覆土は上層が茶褐色粘質土、下層が黒褐色粘質土である。上層の茶褐色粘質土から瓦片がまとまって出土した。瓦片は丸瓦と平瓦が交互に並んだ部分があり（Fig.67　瓦出土状況図）、屋根からまとまって落下した可能性がある。出土遺物（Fig.70　160～175）。160～162は須恵器坏蓋である。160は復元口径15.3㎝、器高3.1㎝を測る。161は復元口径17.4㎝を測る。162は灰白色を呈し胎土細かい。焼成は良好である。163・164は須恵器高台付坏である。163は復元口径14.4㎝を測る。焼成時の歪みが口縁が波打つ。暗青灰色を呈し胎土粗い。164は坏部のみの残存である。復元口径15.7㎝を測る。暗灰色を呈す。内面は灰釉が薄く付着。165は須恵器坏である。口径15.2㎝を測る。外面灰白色を呈し胎土やや粗い。

1247土層B

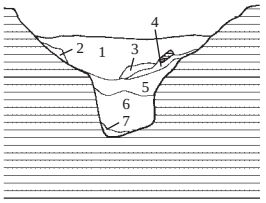
LH=12.70m



1　暗茶褐色土　遺物多く含む
2　暗茶灰褐色土
3　茶褐色土
4　茶褐色土　ロームブロックを多く含む
5　暗橙色土
6　暗橙色土

1247土層A

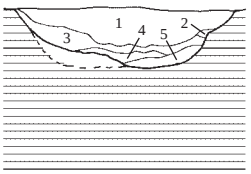
LH=12.50m



1247A
1　暗茶褐色土　土器片多く含む
2　茶褐色土　ロームブロック含む
3　暗茶褐色土
4　暗橙色土
5　茶褐色土　ロームブロック多く含む
6　暗茶灰褐色土
7　暗橙色土

1248土層C

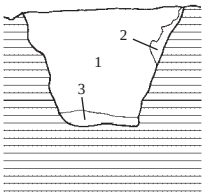
LH=12.70m



1248土層C
1　暗茶褐色土　土器片多く含む
2　暗茶褐色土
3　茶褐色土　ロームブロックを多量に含む
4　暗茶褐色土
5　暗橙色土　土器片をわずかに含む

1115東土層

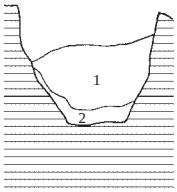
LH=12.60m



1115東土層
1　暗褐色粘質土（ローム小片・炭化物含む）
2　暗赤褐色土
3　暗黄褐色粘質土

1115西土層

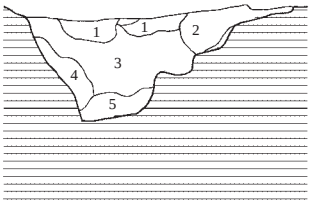
LH=12.60m



1115西土層
1　暗褐色粘質土
2　暗黄褐色粘質土（ロームブロックを多く含む）

1692東壁

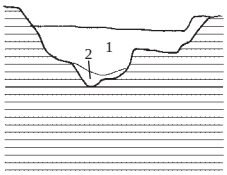
LH=12.60m



1692東壁
1　黄色粘質土
2　黒色粘質土（黄色小ブロック含む）
3　黒色粘質土
4　黒色粘質土（黄色ブロック含む）
5　黄赤褐色ローム

1249土層B

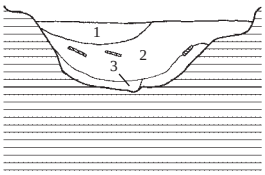
LH=12.60m



1249B
1　暗褐色粘質土
　（焼土・土器片・ロームブロックを多く含む）
2　黒色粘質土

1249土層C

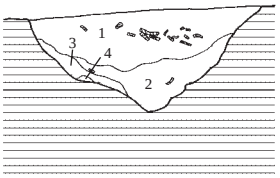
LH=12.60m



1249C東壁
1　暗褐色粘質土　土器片を多量に含む
2　黒褐色粘質土（黄色土を粒状に多く含む）
3　暗黄褐色粘質土

1249土層C東

LH=12.60m

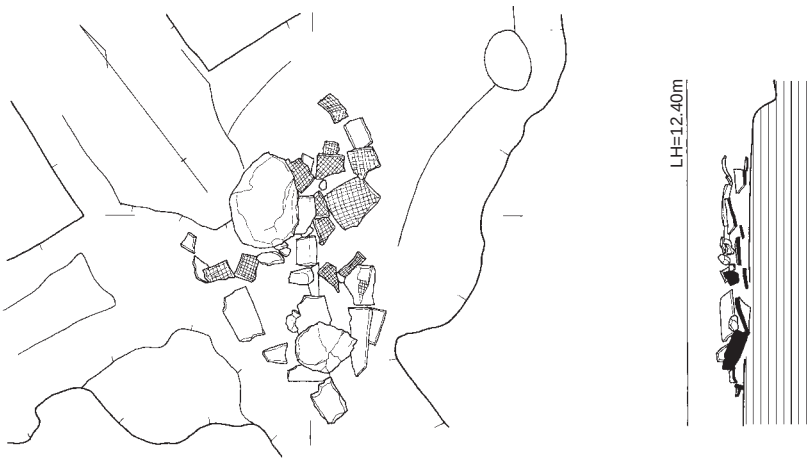


1249C東端
1　暗黄褐色粘質土
2　暗褐色粘質土
3　暗褐色粘質土
4　黒褐色粘質土（焼土小ブロック含む）

0　1　2m

Fig.66　溝土層図（1/40）

瓦出土状況図



遺構図

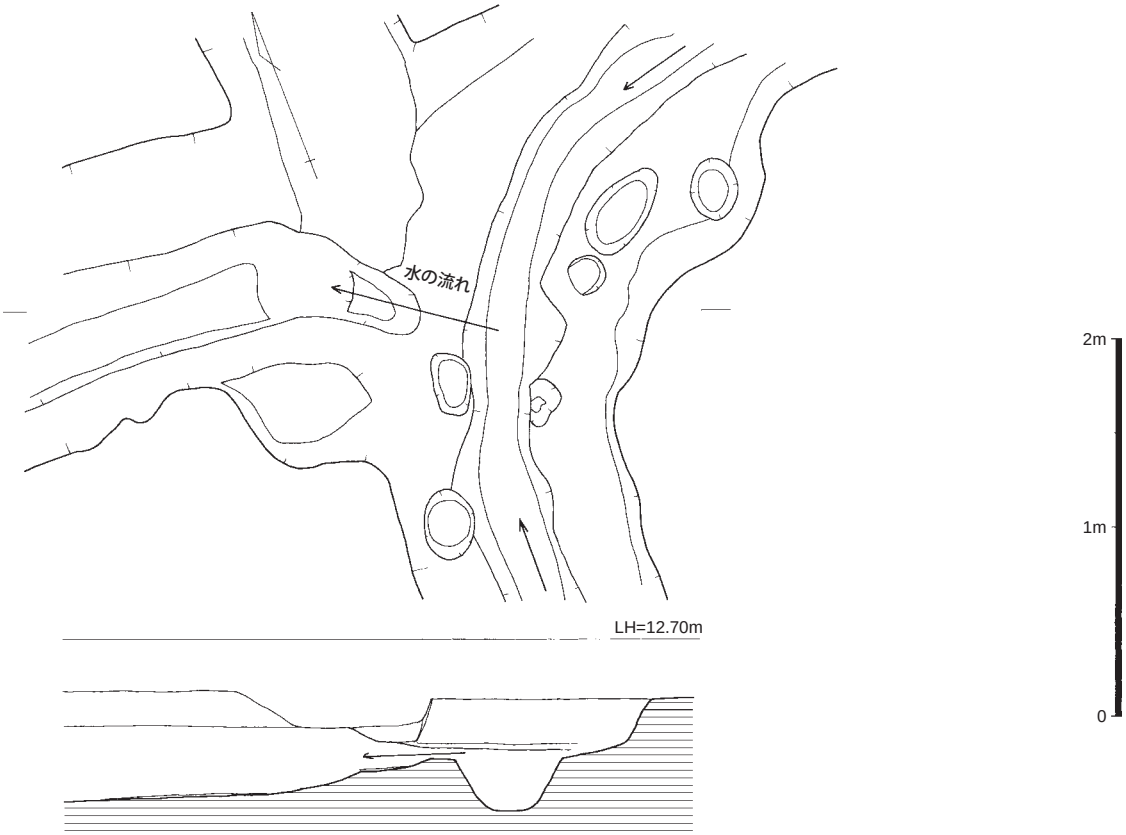


Fig.67　溝中央部（SD1692）瓦出土状況図・遺構図（1/40）

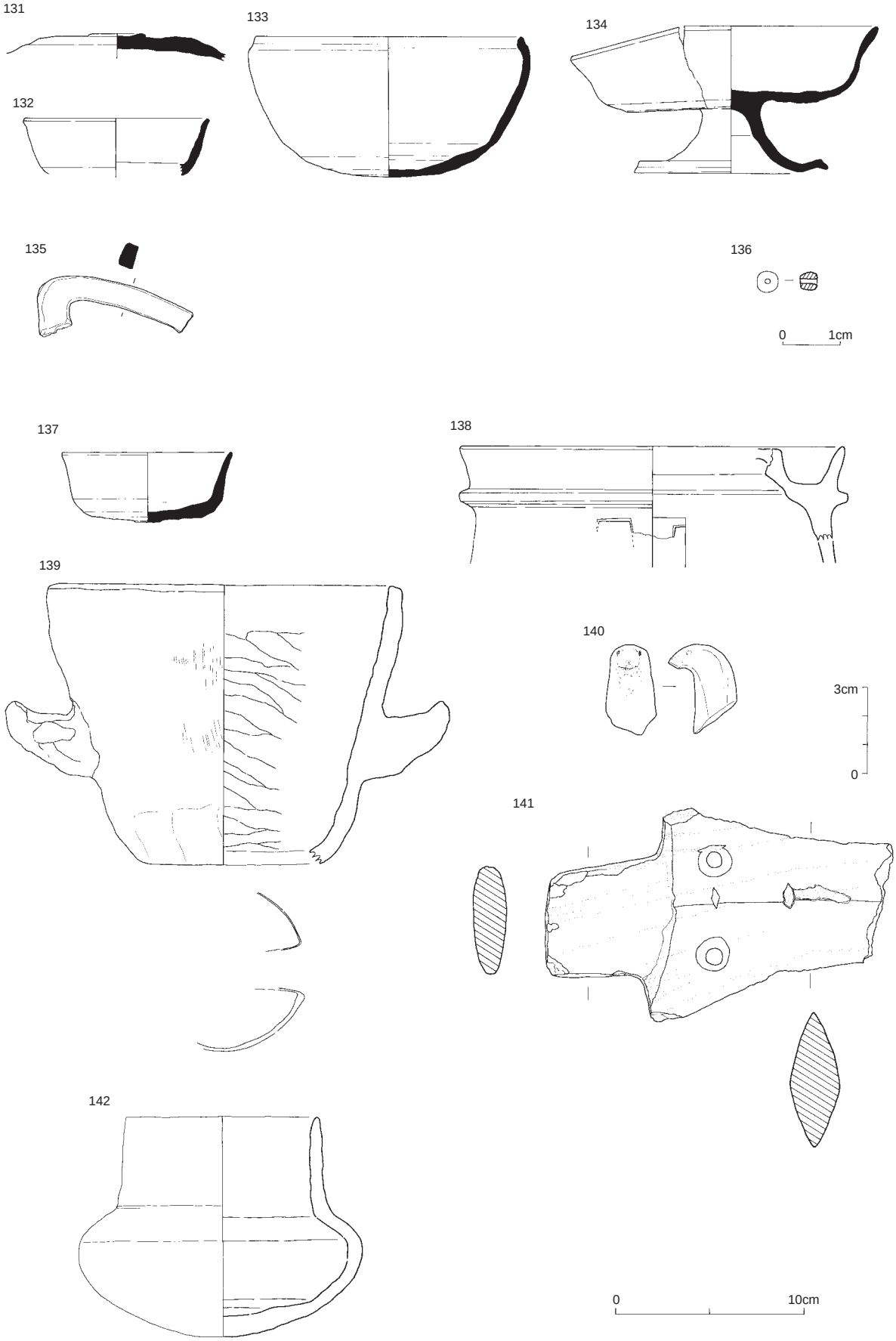


Fig.68　SD1247・1248出土遺物（1/3・140、141は1/2・136は1/1）

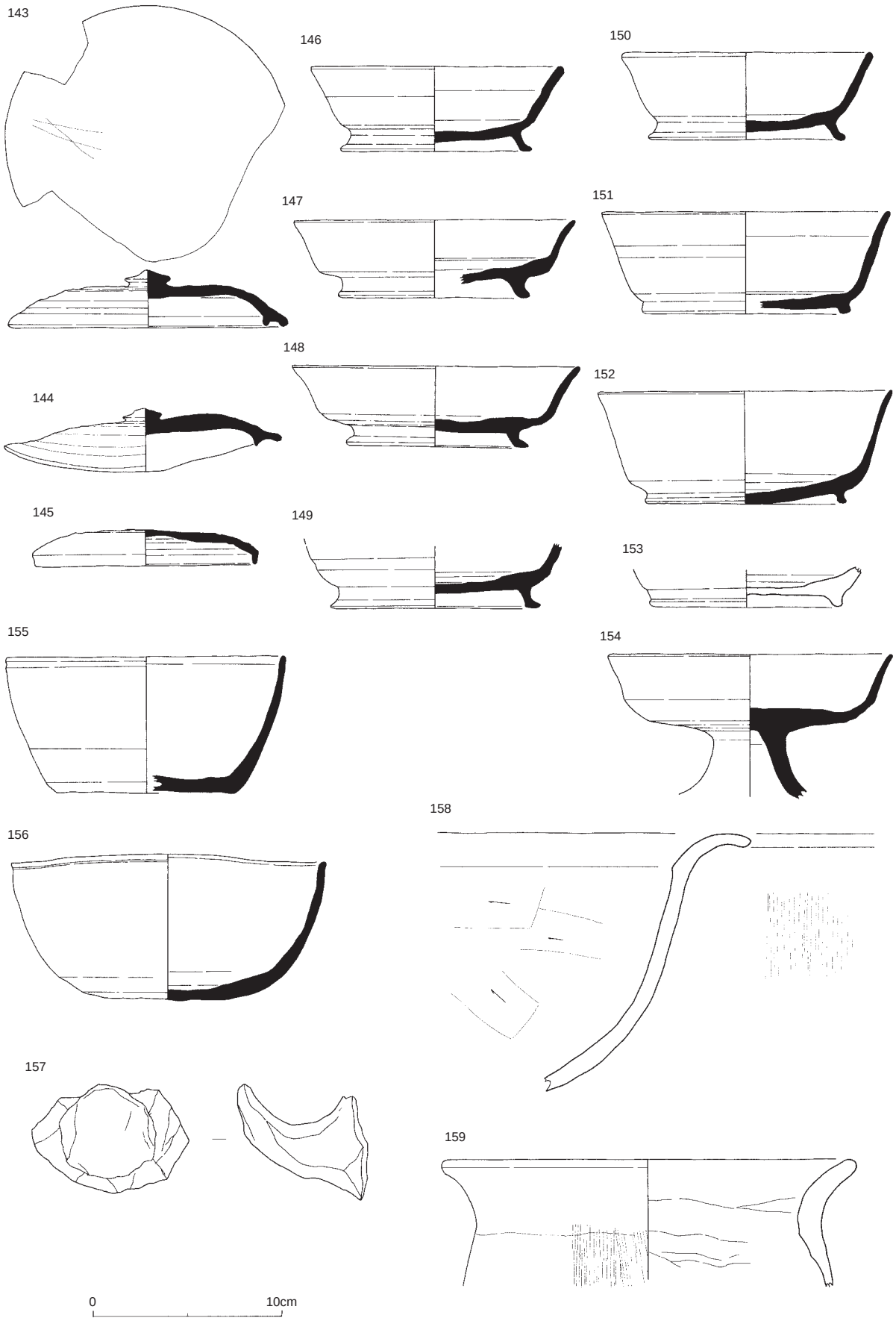


Fig.69　SD1249出土遺物（1/3）

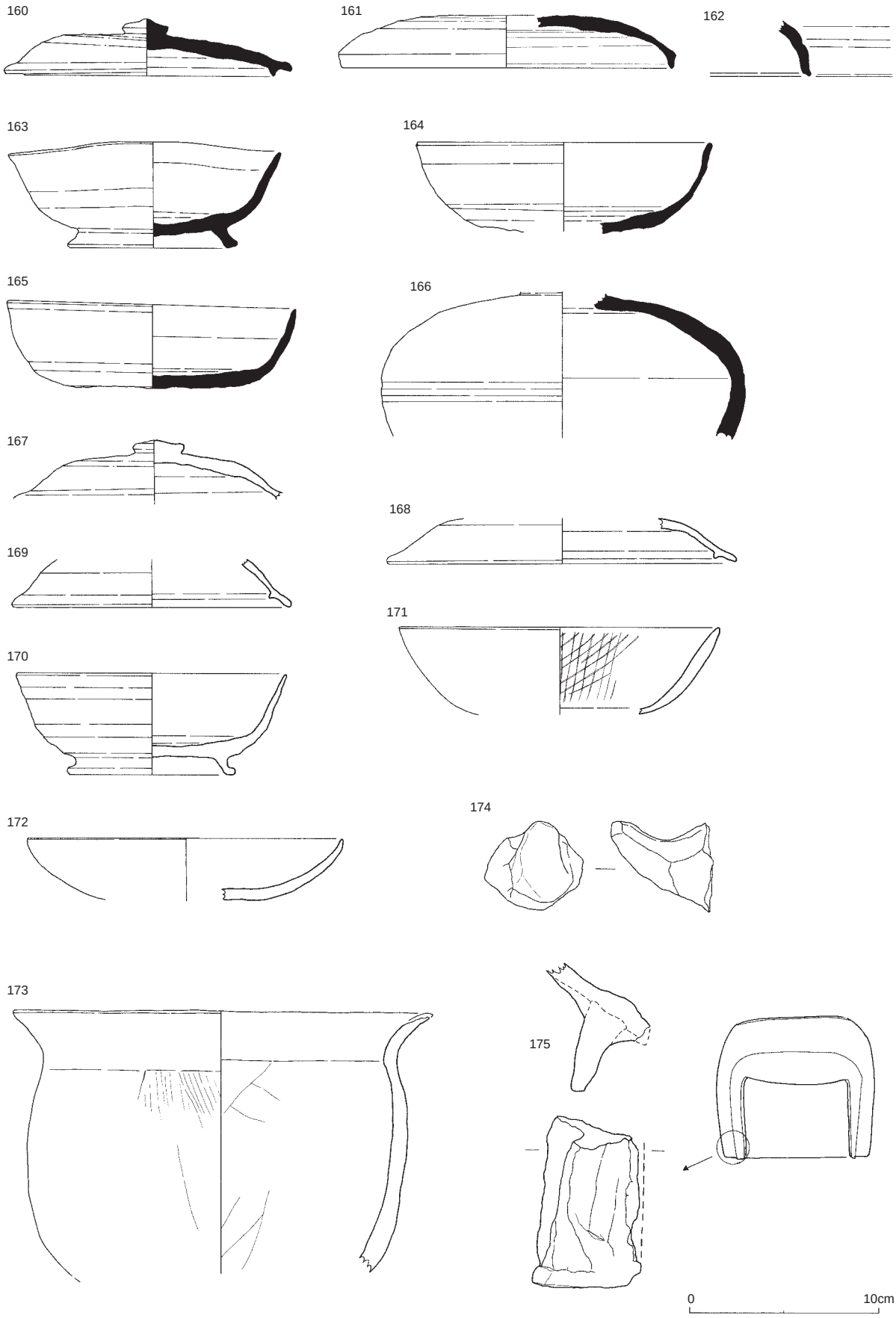


Fig.70　SD1692出土遺物（1/3）

Fig.71　十字溝出土瓦実測図1（1/4）

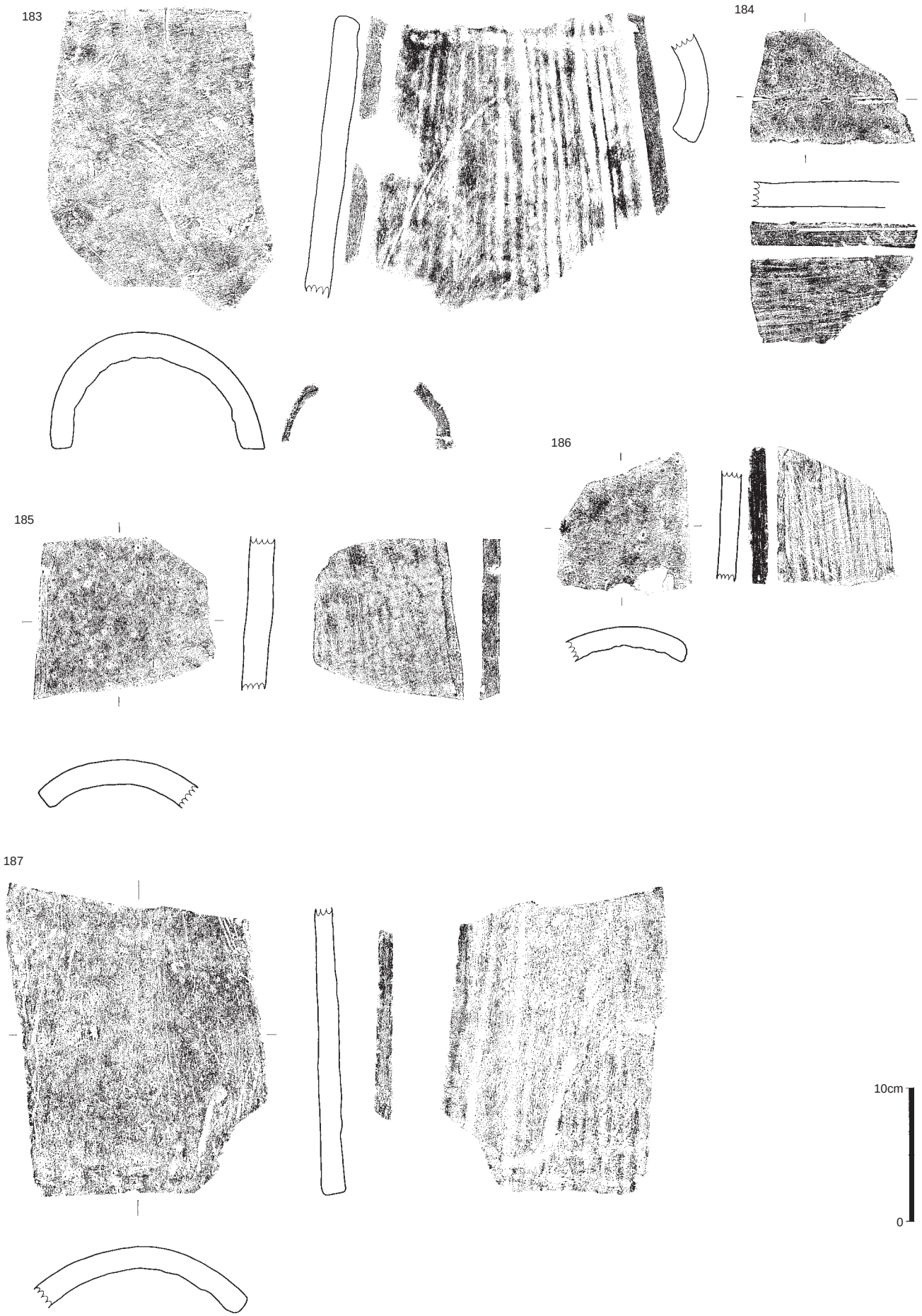


Fig.72　十字溝出土瓦実測図2（1/4）

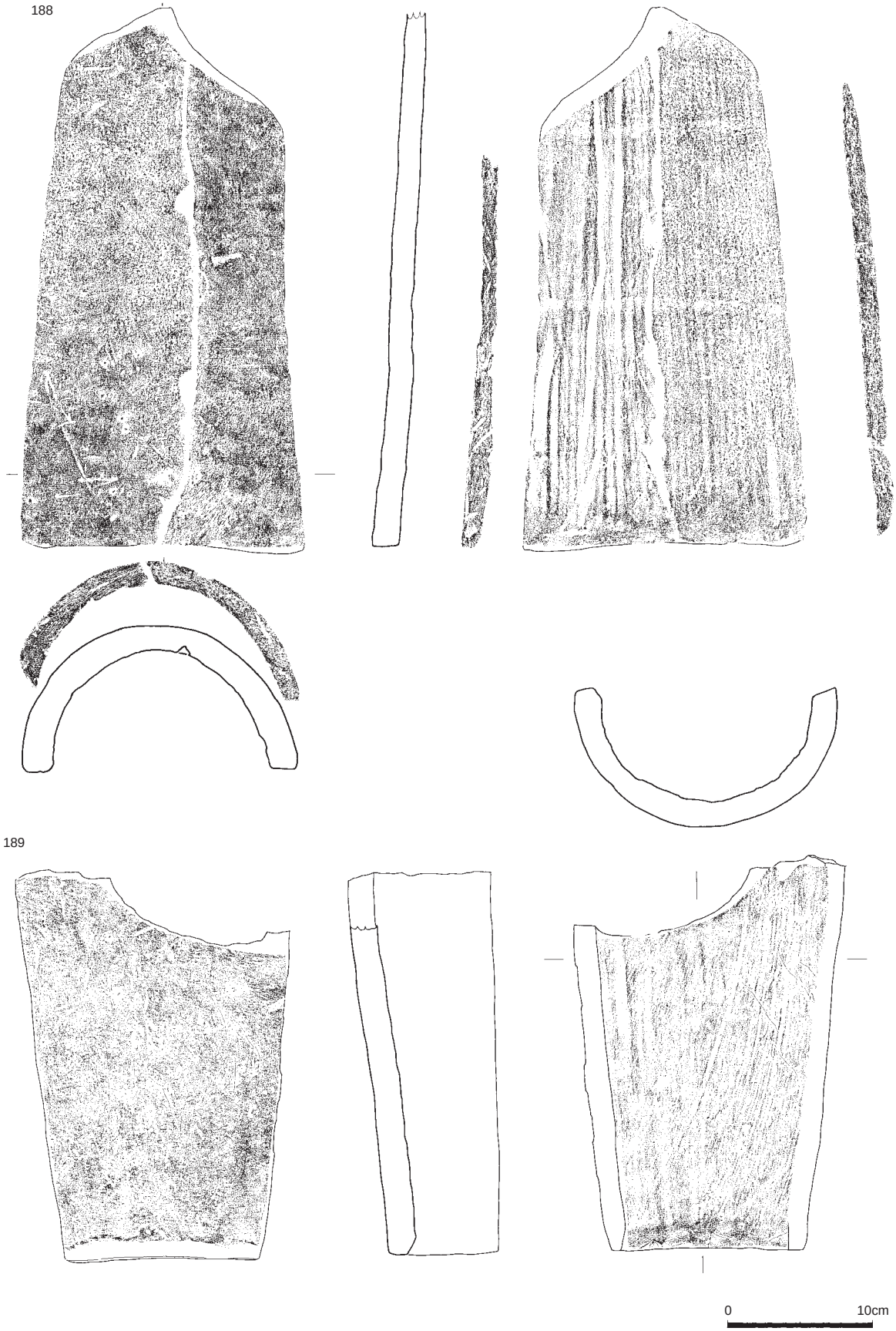


Fig.73　十字溝出土瓦実測図3

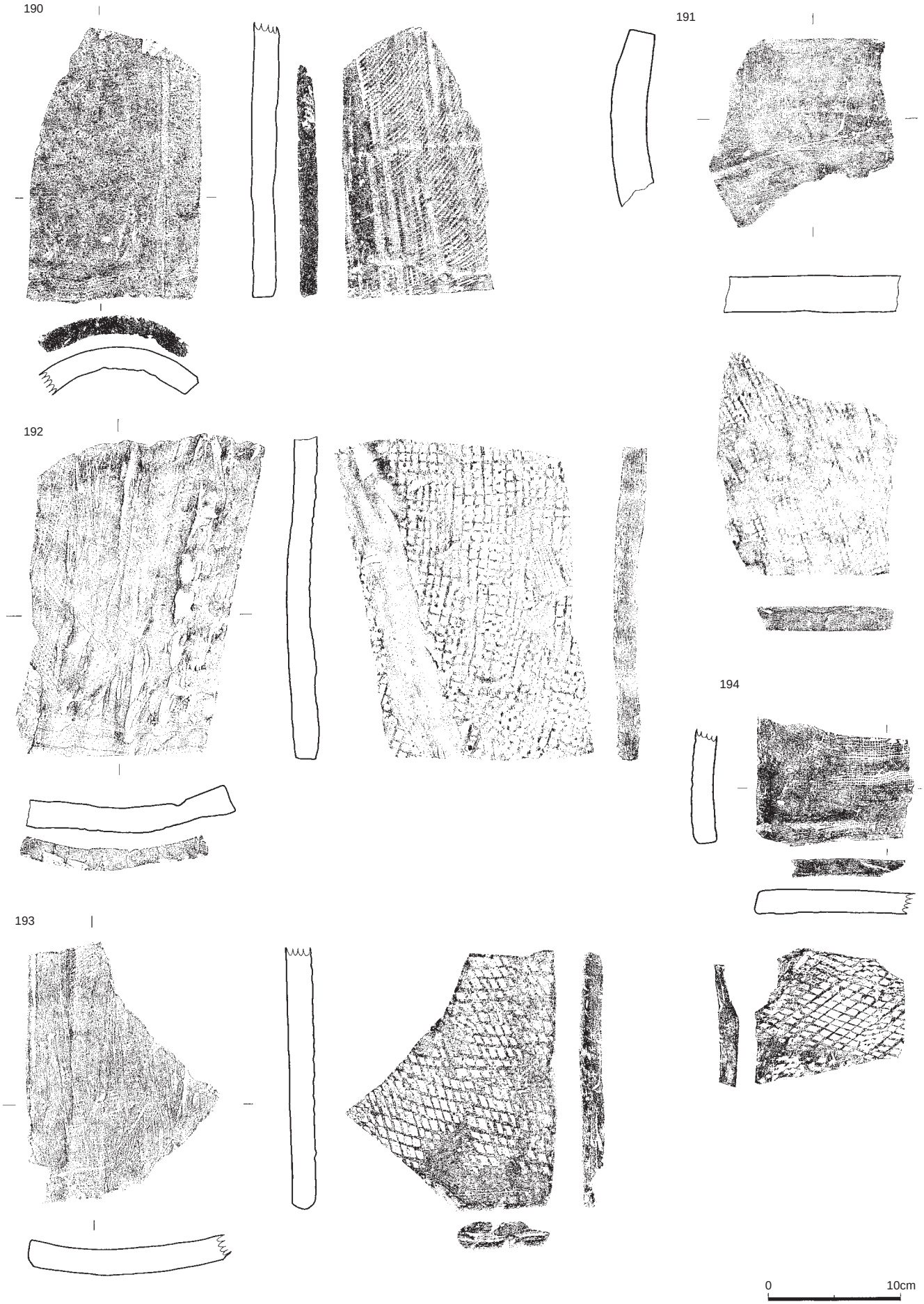


Fig.74　十字溝出土瓦実測図4（1/4）

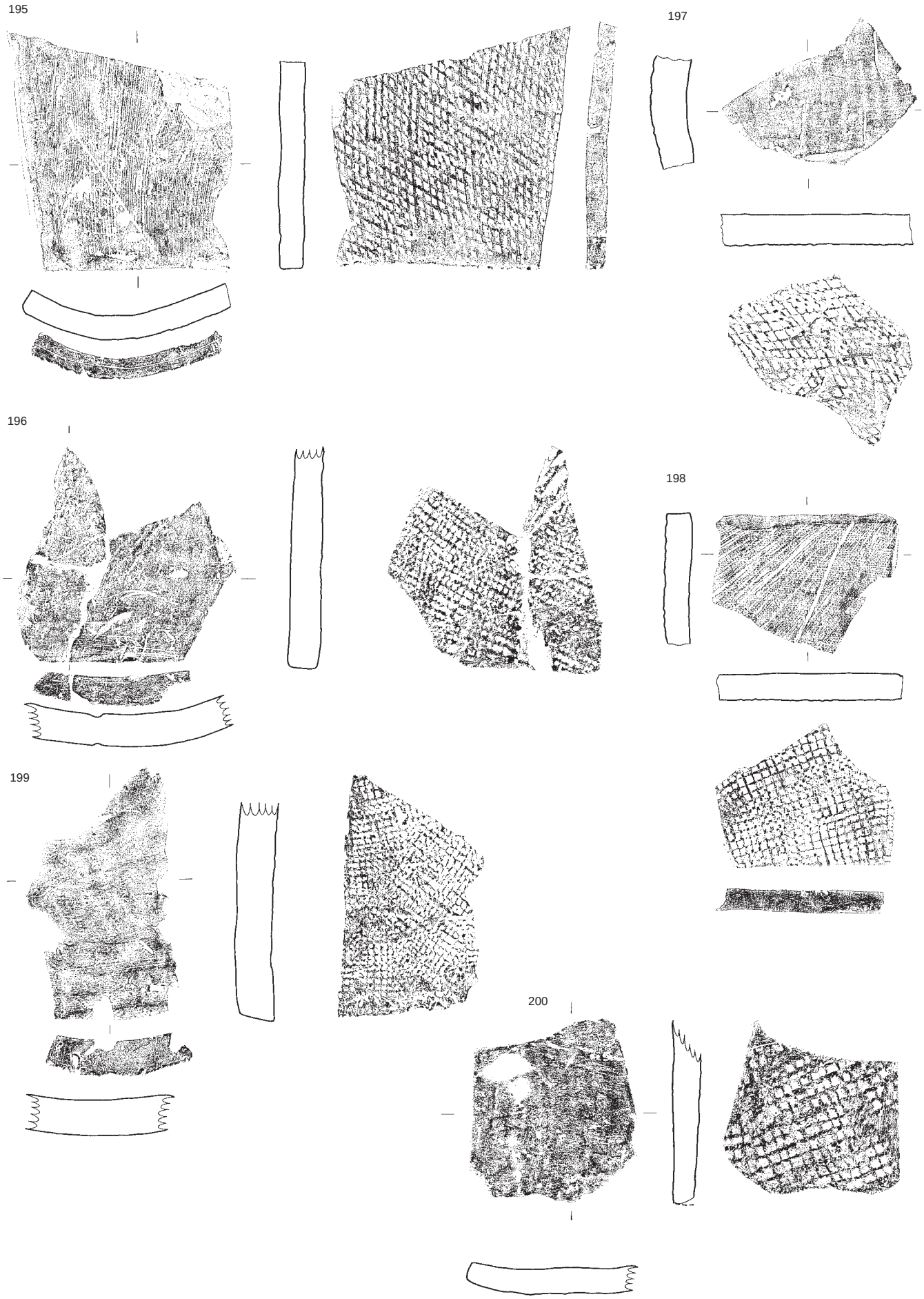


Fig.75　十字溝出土瓦実測図5（1/4）

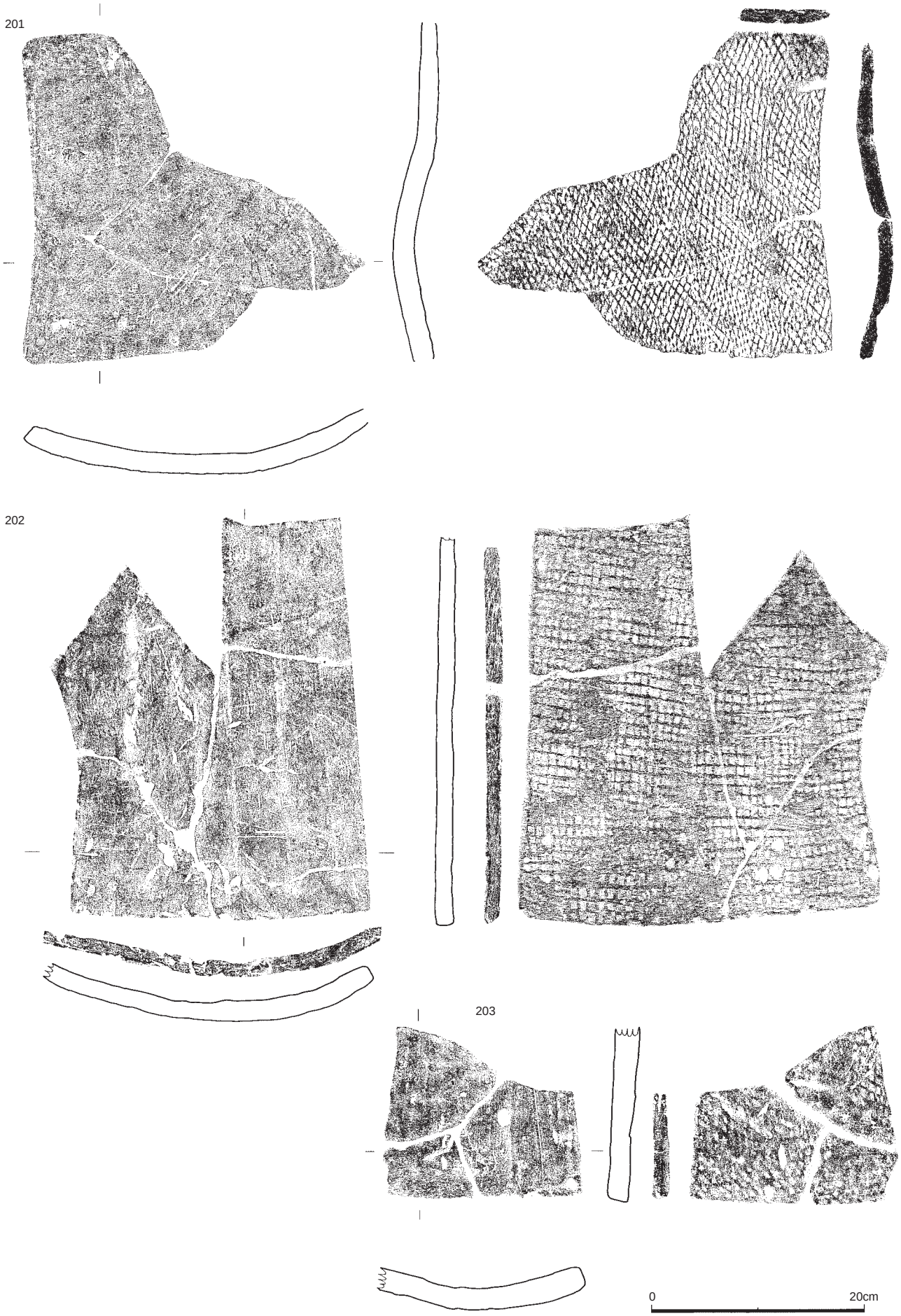


Fig.76　十字溝出土瓦実測図6（1/5）

Fig.77　SD1439出土遺物（1/3）

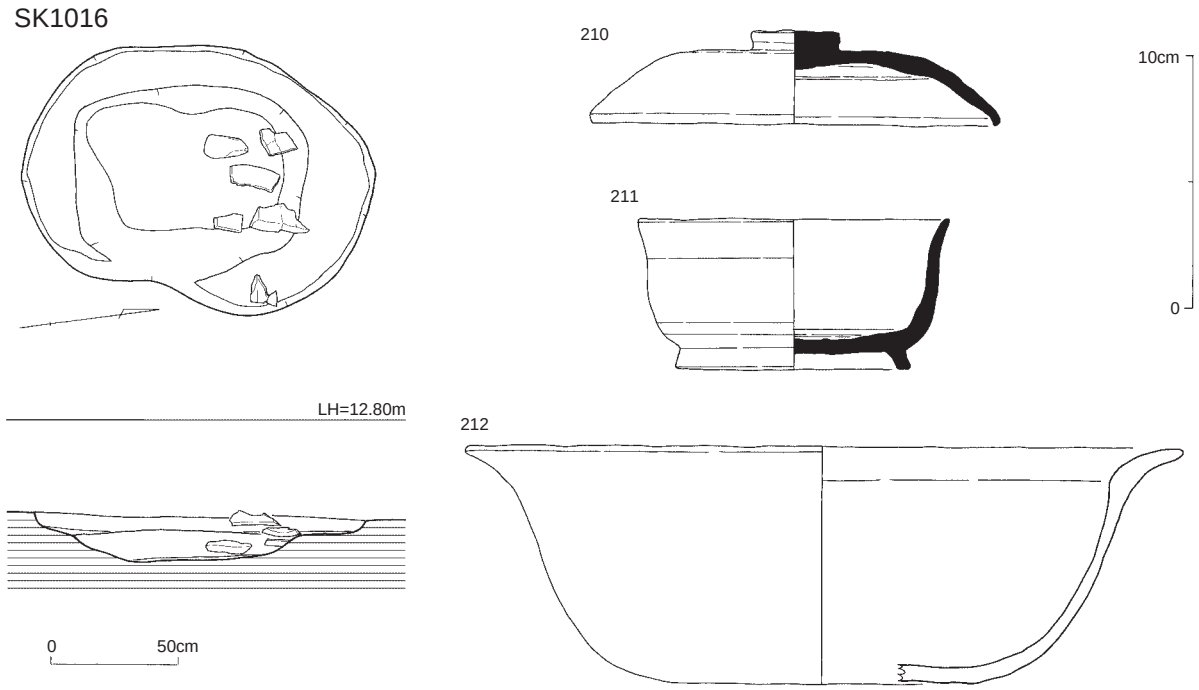


Fig.78　土坑遺構遺物実測図（1/30、1/3）

遺物番号	遺構	瓦種	凸　面	凹　面			備　考
	1115	丸瓦	ナデ	布目→ナデ		竹状模骨痕	
	1115	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
176	1115	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
	1115	丸瓦	ナデ?	ナデ	軟質		
	1115	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1115	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
190	1115	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1115	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
177	1247	丸瓦			軟質	百済系単弁	瓦当
	1247	丸瓦	ナデ	ナデ			
	1247	丸瓦	ナデ	布		竹状模骨痕	
	1247	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1247	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1247	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1247	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1247	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
	1247	丸瓦	ナデ	布目圧痕	軟質		
178	1247	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
196	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質		
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質		
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
197	1247	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1247	平瓦	斜格子タタキ	ナデ	軟質		
	1247	平瓦	格子タタキ	ナデ?	軟質		
	1247	平瓦	不明	ナデ?	軟質		
	1247	平瓦	カキ目?	同心円タタキ			
	1247	平瓦	格子タタキ	不明	軟質		
195	1247	平瓦	斜格子タタキ	布→カキ目			
191	1247	平瓦	格子タタキ	布→ナデ	軟質		
192	1247	平瓦	格子タタキ(一部ナデ)	布→ナデ			
	1247	平瓦	ナデ?	布目→ナデ	軟質		
	1247	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1247	平瓦	細かな格子タタキ	布目→ナデ			
193	1247	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
194	1247	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1247	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1248	丸瓦	布目圧痕	ナデ		竹状模骨痕	
	1248	平瓦	斜格子タタキ	カキ目→ナデ			
182	1249	丸瓦	ナデ	粗いナデ			文字瓦
	1249						根石として使用
	1249	瓦?	ナデ?	ナデ?			
	1249	瓦?小片					
183	1249	丸瓦	ナデ	布目		竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ	ナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ	不明		竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ	布目			
179	1249	丸瓦	ナデ	布目→ケズリ			
	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質	竹状模骨痕	
181	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1249	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1249	丸瓦	ナデ	布目→粗いナデ			
185	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
180	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
184	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕			
	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕			
	1249	丸瓦	ナデ	布目圧痕	軟質		
	1249	丸瓦	ナデ?	布目?	軟質		
	1249	丸瓦	ナデ?	布目→ナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	ナデ?	布目→ナデ	軟質		
123	1249	丸瓦	不明	丁寧なナデ?	軟質		
	1249	丸瓦	不明	不明	軟質		
	1249	丸瓦	不明	不明	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦	不明	布目圧痕	軟質	竹状模骨痕	
	1249	丸瓦(無段)	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
	1249	小片 不明					
	1249	不明					
122	1249	平瓦	斜格子タタキ				
	1249	平瓦	格子?タタキ	ナデ	軟質		
	1249	平瓦	格子タタキ	ナデ			
199	1249	平瓦	格子タタキ	ナデ			

遺物番号	遺構	瓦種	凸　面	凹　面			備　考
200	1249	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1249	平瓦	布目→ナデ	格子タタキ			
	1249	平瓦	タタキ	不明			
	1249	平瓦	タタキ	不明	軟質		
124	1249	平瓦	不明(タタキ?)	不明	軟質		
	1249	平瓦	格子タタキ	布→ナデ			
198	1249	平瓦	格子タタキ	布→ナデ			
	1249	平瓦	格子ナデ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1249	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1249	平瓦	格子タタキ	布目圧痕			
206	1439	丸瓦	布目	丁寧なナデ			
207	1439	平瓦	斜格子タタキ	布目→ケズリ			
208	1439	平瓦	斜格子タタキ	布目→ケズリ			
209	1439	平瓦	斜格子タタキ	布目→ケズリ		竹状模骨痕	
189	1692	丸瓦	ナデ	粗いナデ			
	1692	丸瓦	ナデ	ナデ	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	ナデ?	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	ナデ?	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	布目		竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
187	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ			
	1692	丸瓦	ナデ	布目→ナデ	軟質		
	1692	丸瓦	ナデ	布目→粗いナデ?	軟質	竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	ナデ	布目圧痕	軟質		
188	1692	丸瓦	ナデ	布目圧痕	軟質		
186	1692	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	丁寧なナデ	粗いナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1692	丸瓦	丁寧なナデ	粗いナデ	軟質	竹状模骨痕	
	1692	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質	胎土赤褐色	
	1692	平瓦	格子タタキ	ナデ			
	1692	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質		
	1692	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質		
	1692	平瓦	格子タタキ	ナデ	軟質		
201	1692	平瓦	斜格子タタキ	ナデ			
	1692	平瓦	不明	ナデ	軟質		
	1692	平瓦	布目→ナデ	ナデ			
	1692	平瓦	格子タタキ	不明	軟質		
	1692	平瓦	斜格子タタキ	不明			
	1692	平瓦	格子タタキ	布	軟質		
	1692	平瓦	格子タタキ	布目→ケズリ			
	1692	平瓦	タタキ	布目→ナデ			
202	1692	平瓦	タタキ	布目→ナデ			
203	1692	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1692	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1692	平瓦	格子タタキ	布目→ナデ			
	1692	平瓦	格子タタキ→一部ナデ	布目→ナデ			
	1692	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1692	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ	軟質		
	1692	平瓦	斜格子タタキ	布目→ナデ			
	1692	平瓦	格子タタキ	布目圧痕			
	1692	平瓦?小片					
	1692	平瓦			軟質		
	1692	平瓦					
	1692	平瓦					
	1692	平瓦					
	1692	平瓦					
130	1584	丸瓦	ナデ	布目圧痕			
213	1713	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	根石として使用
	1726	平瓦	格子タタキ(一部ナデ)	布目圧痕			
	1811	平瓦	斜格子タタキ	布目圧痕			
	4017	丸瓦	ナデ	布目圧痕		竹状模骨痕	

Tab.10　瓦出土一覧表

焼成不良である。166は須恵器長頸壺である。最大胴径19.3㎝を測る。167～169は土師質坏蓋である。167は復元口径18.6㎝を測る。外面暗褐色を呈し胎土は細かく砂粒をわずかに含む。外面上部はケズリ、後はナデと調整は須恵器と同じである。168は復元口径18.5㎝を測る。169は復元口径14.8㎝を測る。淡褐色を呈し焼成は不良、軟質である。170は土師質高台付坏である。復元口径14.3㎝、器高5.3㎝を測る。外面橙色を呈す。調整は坏部底部と胴部下半がケズリ、後はナデを施す。171は土師器坏である。復元口径17.1㎝、器高4.8㎝を測る。外面は赤色顔料のものと思われる赤褐色を呈し、胎土は雲母片をわずかに含む。外面は丁寧なケズリ、内面はミガキを施す。やや軟質である。172は土師器坏である。復元口径16.7㎝を測る。外面は口縁赤橙色、底部黒褐色を呈す。胎土細かく砂粒わずかに含む。173は甕である。復元口径22.3㎝を測る。外面橙色を呈し、胴部に黒班あり。胎土細かく砂粒わずかに含む。調整は口縁はナデ、外面胴部上半はハケ、下半はケズリ、内面はケズリを施す。175は竈である。暗黄褐色を呈す。外面は粗いナデ、内面は粗いケズリを施す。

SD1439（Fig.4）調査区の南東端で検出した。中央溝が方位に規制された直線の溝なのに対し、台地際に沿って蛇行する。幅40～47㎝、深さ14㎝を測る。断面浅皿状を呈す。出土遺物（Fig.77　204～209）。204は須恵器坏蓋、205は須恵器高台付坏、206は須恵器丸瓦、207～209は須恵質の平瓦である。

溝出土瓦（Fig.71～76　176～203）。176はSD1115、177・179はSD1247、178・180～187は1249、188・189はSD1692から出土した。177は瓦当で白色を呈し軟質。190～203は平瓦である。190はSD1115、191～197はSD1247、198～200はSD1249、201～203はSD1692から出土した。

３）土坑の調査

SK1016（Fig.78）調査区北西側で検出した。SC1005を切る。平面は南北に長い楕円形で長径14.1㎝、短径9.9㎝、深さ18㎝を測る。東側を除き床面から12㎝上にテラスを持つ。須恵器坏等が出土した。出土遺物（Fig.78　210～212）。210は土師質坏蓋である。復元口径16.3㎝、器高3.7㎝を測る。外面赤橙色を呈す。８世紀初頭から前半。211は須恵器高台付坏である。復元口径12.3㎝、器高3.95㎝を測る。外面灰茶褐色。212は土師質の鉢である。復元口径28.3㎝、器高9.4㎝を測る。外面は赤橙色で、胴部下半から底部は煤のため黒色を呈す。胎土粗く径１㎜の砂粒を多量に含む。やや軟質。

４）その他の出土遺物（Fig.79　213～221）213はSB09の根石として出土した。214は土製品である。1580から出土した。祭祀用のミニチュアか。長さ3.7㎝、幅1.8㎝、厚さ0.8㎝を測る。橙褐色を呈し、上側先端は黒色を呈す。軟質である。下端を欠損する。215は石製品である。1834から出土した。孔から半分に割れている。穿孔中の破損か。現状で長さ5.7㎝、幅2.1㎝を測る。216は土製の取手である。SD1249から出土した。217はミニチュアの椀である。SD1249から出土した。平面形は楕円形を呈し、口径4.0～4.3㎝、深さ3.2㎝を測る。暗赤褐色を呈し、外面の2/3は黒班である。218はSD1249から出土した石英長石班岩の小片である。平面と側面も一部熱により黒色化しており、鋳型の破片と思われる。219はSC1430から出土した。全体的に表面が薄く剥落しているが、残りの部分は熱のため薄く赤化している。胎土は白色の細かな粘土を使用している。青銅器生産に関連した鋳型中子である可能性があると思われる。220は投弾である。1852から出土した。長さ3.5㎝、径1.9㎝を測る。外面赤橙色を呈し調整はハケ目を施す。221は石剣の切先である。泥岩製である。SC1341から出土した。現状で長さ2.5㎝、幅1.9㎝、厚さ3.5㎜を測る。先端が欠損し、鎬部分が剥落するなど遺存状態は悪い。いわゆる戦闘によって使用された石剣の切先が骨にあたって折れたものと思われるが石剣の切先が墓から出土するのは前期末から中期前半であり、竪穴式住居と時期的に合わないため、本来人骨とともに甕棺内にあったものが甕棺とともに掘り出され、廃絶していた住居に捨てられたものと思われる。

小結

古代の遺構としては掘立柱建物群、溝、土坑を検出した。出土した遺物の時期は７世紀後半から８世紀中頃までである。この中で遺物が多く出土した十字溝出土遺物は瓦、須恵器高台付坏・高坏、鉢などを主とするが土師器も多く出土し、甕・鉢・甑・椀の他に移動式竈の破片も少なくとも２個体分が出土している。これらの土器、特に出土須恵器の時期は７世紀後半と考えられ、７世紀末か８世紀初頭には溝が埋没したと考えられる。これにより溝の掘削が７世紀後半～末に遡るのは確実で、文字瓦にかかれた「評」の使用が701年の大宝律令までとされることと矛盾せず、またこの溝が瓦葺き建物と同時期であることも確実と考えられる。溝の切合いに関しては、前述したように十字の溝が同時に使用されたのかを確認するために溝中央部で何度も精査を行い、またトレンチによる土層断面観察を行ったが切合いを確認することはできなかった。底面まで掘り下げた結果から東側と南側は底面がつながる１本の溝であることは判明した。しかし、北側と西側は両方とも溝の断面形や底面レベル、出土する遺物などが異なる。西側溝は出土遺物が少なく、瓦を多少含む他は坏などの器物の出土は少ない。北側出土遺物は瓦を含まず、わずかに須恵器坏や硯の破片が出土している。特に北溝は瓦を含まないことから建物廃絶前に埋没した可能性があり、他の溝と若干埋没の時期差があると考えられる。また、東溝と南溝から出土する瓦はほとんどが溝の上層から出土しており、下層からは出土していない。このことから瓦葺き建物が廃絶する前にすでに溝が埋まり始めていたことを示している。

溝の性格　北側の溝は底面レベルが現地表面から31㎝と浅く、流水や水が溜まった痕跡は見られない。東西南は現地表面からの掘り込みがそれぞれ54㎝、62㎝、67㎝で土層の観測から少なくとも溜水する

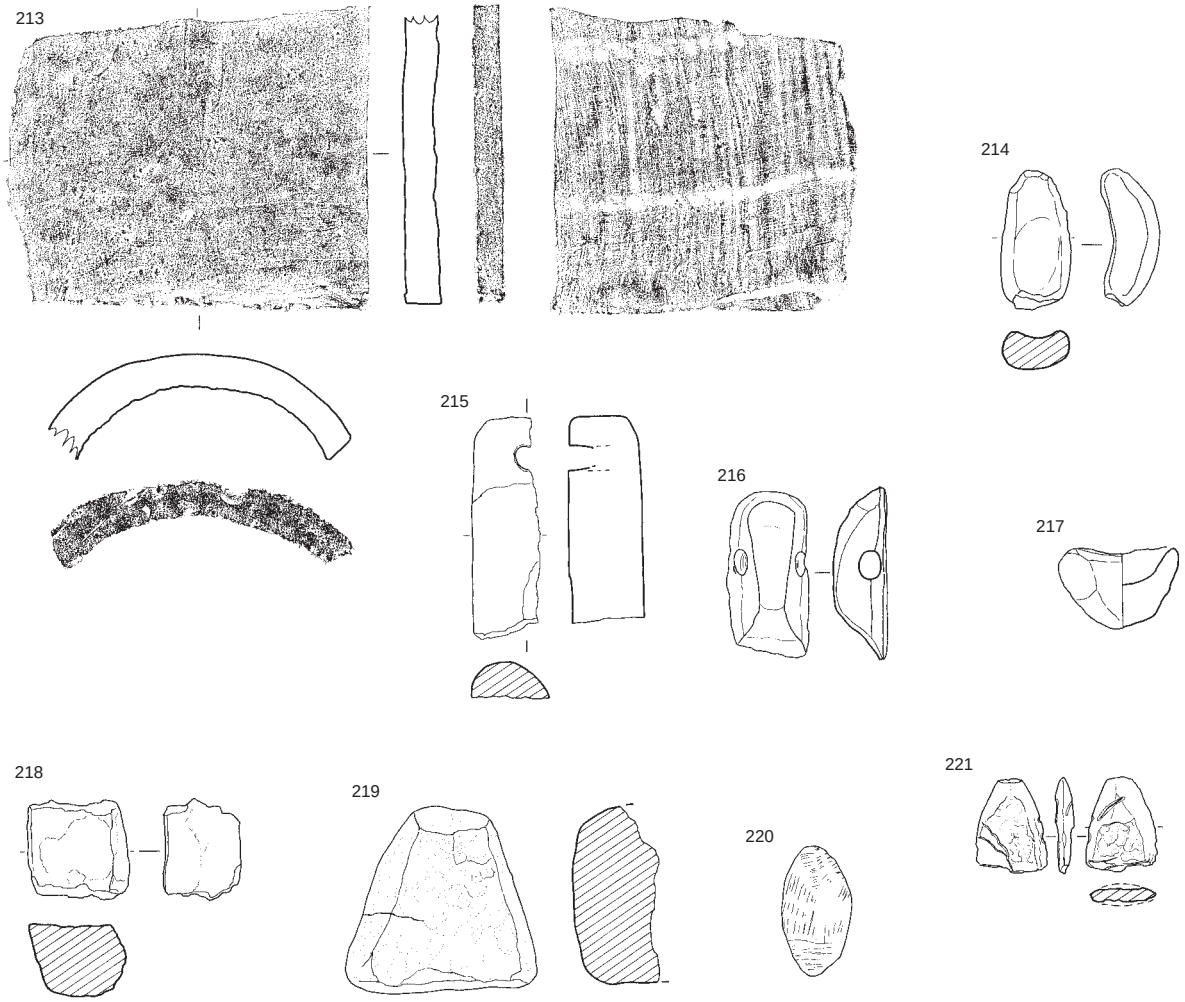


Fig.79　その他の出土遺物（1/2・213は1/4）

事があったと考えられる。南と東溝は底面が繋がっており、底面レベルは十字中心部が一番低い。雨により溜水したときは中心部にポンプを入れると南・東溝の水は完全に排水することができた。西溝底面と南東溝底面の間には高さ27㎝の段が削り出されており、南・東溝の約半分の高さまで水が溜まると西溝に流れ出るようになっている。削り出しされた高まりは堤防の役割を果たし、東・南溝に水を貯めオーバーフローした水を西溝に流し、また西溝からの逆流を防ぐ役割を持つと考えられる。ただし台地上であるため流れ込む自然河川があるわけではなく、水の供給源としては雨水と井戸の排水が考えられる。その為、水の流れは弱く、削出しの高さまでは早く埋没している。西溝の底面は調査区内では西側が深くなるものの台地西端までは550mと距離があるため直線的な排水路は現実的ではないと思われたが、2001年のＤ区の発掘調査や台地北端の22次調査でＡ区からおよそ200m西の台地中央を南北に貫く幅約４mの大溝が検出されたため、南・東溝から流れてきた水は西溝を通って大溝に流れ込み、台地北側の低地に排水していた可能性が出てきた。ただ南北の大溝は現道路に沿っているためD区内では下水工事で破壊されており、現時点では時期を確定することができていない。今後の調査で明らかになることを期待したい。台地北端にはＦ区で検出された様な溝を掘削し台地東側の低地を水田化するための水を引こうとしているが、大溝はこの台地北端をまわる溝とつながっていた可能性も考えられる。また、南溝は140m南に位置する第３次調査の南北溝と同一の溝である可能性があることは前述したが、現在の地形からの知見では３次と１７次調査地点を直線で結ぶとその間には浅い谷が入ると予想されており、また直線上の地点で行われた民間開発に伴う試掘調査トレンチにおいて確認された溝状遺構は３次調査から北に延びた溝の可能性があるが、これが試掘トレンチ内で西へ曲がっていることから、現段階ではまだ確実ということはできない。

掘立柱建物の時期と性格　東端部に位置する大型掘立柱建物は２回建て直されているが、瓦葺き建物はこれらの掘立柱建物に先行すると考えられる。溝からは礎石の破片と思われる石も出土しており、いままで井尻Ｂ遺跡で出土した瓦が一棟の瓦葺き建物に使用されたとすると大型の礎石建物であると考えられる。その後礎石建物から掘立柱建物へ変化し２回建て替えを行っている。井尻Ｂ遺跡の古代遺構群は瓦葺き建物や溝などから８世紀初めに多く建てられた寺院の一つと考えられ「井尻廃寺」と

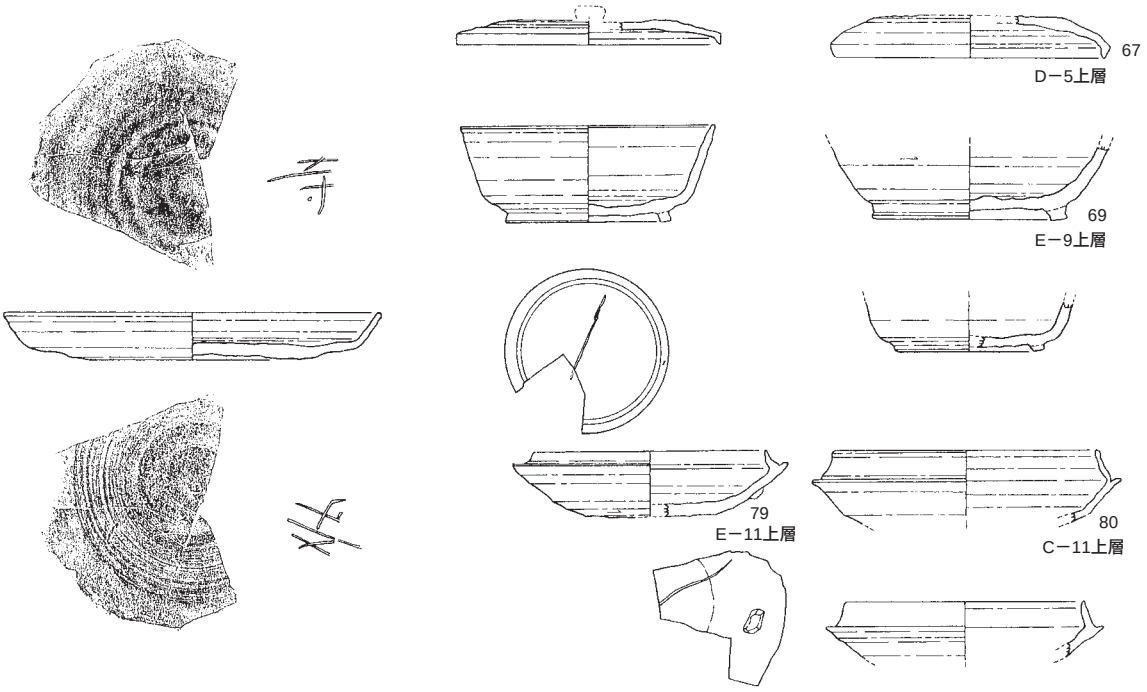


Fig.80　第11次調査出土刻書土器（1/4）

『井尻B遺跡７』福岡市埋蔵文化財調査報告書644集から転載

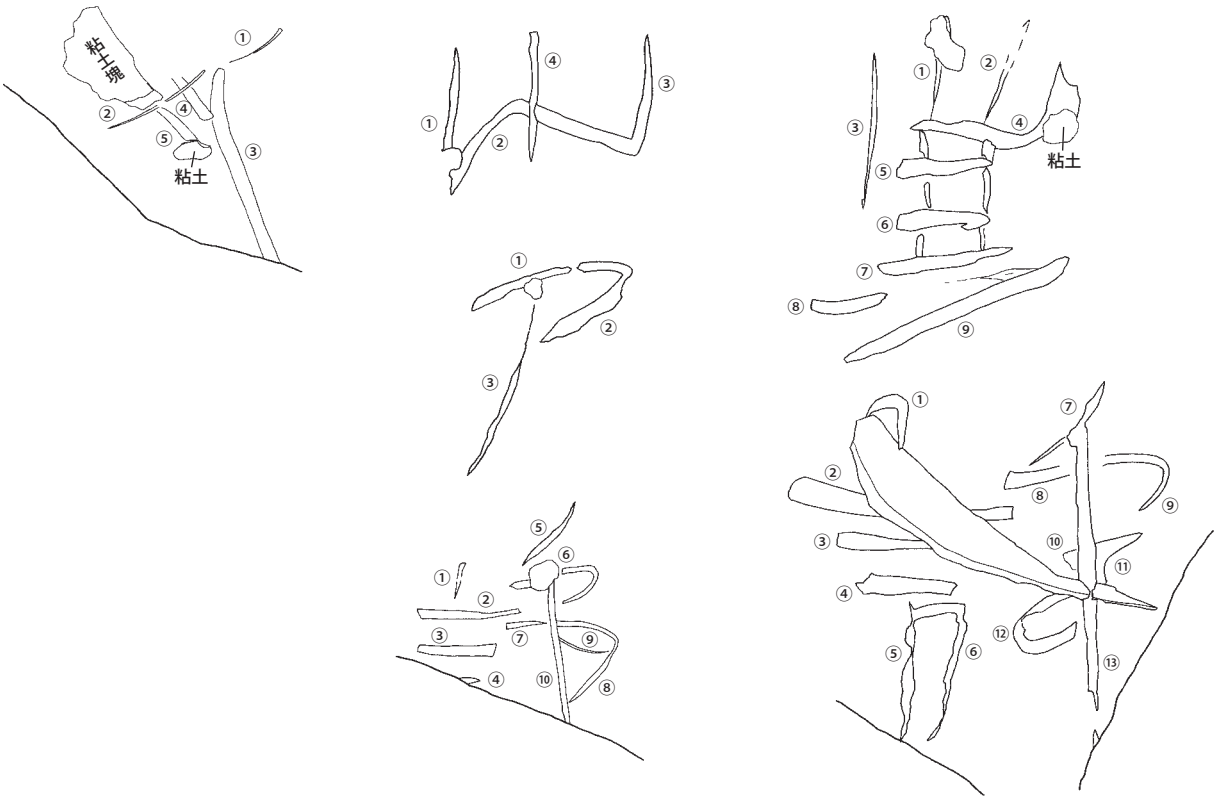


Fig.81　SD1247出土文字瓦文字実測図（約5/3）

呼ばれることが多い。また、それを証明するように第11次調査では包含層から「寺」と線刻された土師質の皿が出土している（Fig.80）。それとともに出土した須恵器は８世紀前半から中頃で掘立柱建物が建てられた７世紀後半から８世紀中頃のうち後半期に寺が存在したことは確実と考えられる。

文字瓦　文字が線刻されていたのは丸瓦凹面で、焼成前にヘラ状の工具を使用して線刻している。図の左は文字であると確定できないが、調整の粗いナデとは明らかに角度が異なるため、文字である可能性は高い。他の文字と同じ角度になるよう記載した。中央は「山部評」である。出土以来多数の方に御教示頂いたが２番目の文字に関しては「部」の略字であるというのはほとんど共通していた。また、右端第１字は「豊」という解釈が多かった。線刻は２つの「評」の字の特徴や「山」の①から②への跳ね上げ方と「豊」の③から④への跳ね上げ方が似ているなど中央と右側の字は似た部分が多く同じ人物による線刻と思われる。文字の上に粘土塊が付着しており、その表面にもナデが確認できることから文字は瓦の制作途中で刻まれたことが判る。また、「山部」「豊」の地名は和名抄には記載されておらず「評」から「群」へ移行する時に消滅したと考えられる。瓦に線刻された地名は普通産地を表すが一つの瓦に複数の評名、群名を記した例はなく、今のところ瓦の性格についてもよく判らない部分が多い。今後、地名の場所の特定が瓦の性格を理解する上で重要な鍵を握ると考えられる。また周辺から６世紀後半の須恵器が出土しているがこれが７世紀後半の掘立柱建物群となにか関係があるのか、また７世紀後半の瓦葺き建物から８世紀半ばに廃絶するまでの全期間寺として使用されていたのかなど不明な点が多くこれからの調査による解明が期待される。

第Ⅲ章　Ｅ区の調査（Fig.82～192、Pl.13～30）

１．調査概要

今回の井尻Ｂ遺跡群17次調査（Ｅ区）は、同遺跡群のほぼ北側の端付近に位置する。Ｅ区周辺は地形的に南東から北西方向に伸びる井尻低丘陵の脊梁部から考えるとこれの西側一帯にあたり、丘陵が緩やかに西側の沖積地へ向かって傾斜する地形にあるものと考えられる。

今回調査で検出された遺構は、弥生時代中期前葉から弥生時代後期末にかけての墓地や集落跡である。その主要な遺構を記すこととする。

（弥生時代中期墓地）

調査区の北西側を中心に間隔をもって検出された甕棺墓地である。大型甕棺墓１基と小児甕棺墓５基である（Ｋ01～06）。中期前葉の汲田式から中期中葉の須玖式甕棺を含む時期の墓地で、副葬遺物は出土していない。しかしながら、調査区内の弥生後期竪穴住居跡の埋土内に中期大型甕棺の大破片が出土することなどから、墓地は更に広域の範囲であったことが想定できる。

（弥生時代中期集落）

弥生後期が主体の調査区の集落跡の中に中期初頭～前葉の竪穴住居跡、一部は貯蔵穴と考えられる土壙群が見いだされる。長方形の小型竪穴住居１軒（SC10）や土壙５基（SK01・04、07・08等）以上が相当しよう。遺物では城ノ腰式土器類や朝鮮系無文土器甕や玄武岩製太型蛤刃石斧、黒曜石剥片類などが目立つものであろう。特にSK07土壙は、中期初頭期の長方形の貯蔵穴かと考えられ、大量の土器類が出土している。また、調査区内では遺物量の少ない土壙も他にあり、この中期段階の所産のものも更にあるのではないかと想定される。

（弥生時代後期集落）

調査区の中で主体を占めるのがこの時期の遺構である。遺構は、竪穴住居跡９軒（SC01～09）と掘立柱建物群13棟（SB01～13）及び井戸跡３基（SE01～03）、その他ピット群である。

竪穴住居跡は、調査区外に伸びるものも多く、全体の形状をとらえきれない面もあるが、ほぼ長方形のプランで両短辺側にベッド状の遺構を配し、床面の炉を挟んで主柱穴が２本という形態が全体に共通する形態では無いかと推察される。

また、掘立柱建物は、１×１間・１×２規模のもので倉庫と考えられる。数的には１×２間規模のものが多いが、建物同士或いは竪穴住居跡と重複しており、当然に時期の新古があることが分かる。住居によっては、床面出土の遺物が大量のものもあり、また埋土中の土器類に中期甕棺の大破片が混じるものもある。次に、井戸跡は調査区の南東側で見つかっているが、いずれも八女ローム層の湧水を利用する素掘りの井戸で、現在でも湧出量は相当である。井戸内からは当該期の土器類を中心とした遺物が出土している。

また、他に性格不明の土壙や建物としてまとめきれないピット群が検出されている。このうち時期が明らかでない土壙群は調査区の北側に比較的集中しているもので、貯蔵穴や土壙墓などの可能性を持ったものもあると考えている。

以下では、竪穴住居跡・掘立柱建物・土壙・井戸・甕棺墓などの各遺構の順に出土状況、共伴遺物についての説明を加えて行くこととしたい。

２．竪穴住居跡群の調査（Ｆig.82〜118、Pl.13・14）

SC01住居跡（Fig.82〜88、Pl.13・14）

本住居跡は、調査区の南東隅で検出された。東壁および南北壁の一部が調査区外となっている。壁の残存は良好でなく、全体に約10cm程度を残すにすぎない。東西方向に長いプランをとり、円形の炉を挟んで２本の主柱穴を配する。

また、西・東壁側に連続しないベッド状施設を付設する。住居跡覆土や床面からの遺物の出土は少なく、図化できる土器類は僅かである。

②平面プラン（Fig.84〜86）

住居跡は、現状南壁で4.5m以上、西壁4mを測る東西方向に長い長方形プランを呈する。なお、北壁長は3.2m以上となる。西壁及び東壁側に対置して幅1m程度のベッド状遺構を配置する。

また、ほぼ長軸線に沿う住居跡床に２本の主柱穴とこの間に円形の炉を設けている。また、北壁・南壁・西壁に沿って断続的は壁溝が見られるが、これらは直線的な浅い溝というよりも小型のピットが不連続的に繋がった結果の様に観察できる。

住居プラン形成時の掘方は、Fig.86に見るように南北壁に沿う部分の浅い不整な掘り込みや床面の不整形な浅いピット及びベッド形成のための大まかな削り出しなどを窺うことができる。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.84〜87）

ベッド状遺構は、西壁に特徴的に残っている。北側の天端で幅約85cm、南側天端で120cmを測り、ほぼ１m程度の幅員をもつ。また、高さは低く、床面から僅かに上がった程度で、壁側から床面側へ傾斜する。ベッドには、住居跡の中軸線付近に壁側から床面方向に向かって溝状の施設を設けている。天端間で約40〜60cm、下面で10〜20cm程度の規模で、溝の終わる床面側に西側の主柱穴を配置している。なお、覆土は、殆ど暗褐色土〜灰褐色である。

主柱穴は、前述のように西壁のベッド沿いと炉を挟んだ東側にある２本である。主柱穴間の距離は、心芯で2.5mを測る。炉の東側の主柱穴は、長径40cm以上、短径40cm程度の長円形をなす掘り方である。深さは床面から50cmを測る。また、掘り方の検出面で柱痕跡が確認でき、その径は20cm前後の規模と考えられる。掘り方内の埋土は、柱痕が黒褐色土で、周辺の埋土は灰褐色土となっている。

また、炉西側にあるもう一方の主柱穴は、東に隣接する他の浅いピットと切り合っているものの径50cm程度を測る不整な方形に近い掘り方である。掘り方の検出面では柱痕跡が確認でき、その径は15cm程度の規模となろう。掘り方内の埋土は、柱痕跡が灰褐色土で、他の周辺部は灰褐色土と黄褐色〜灰黄褐色土との互層をなし、版築状に埋め戻されたことが観察できる。

次に壁溝は、前述のように住居跡の北壁、南壁の一部と西壁に観察することができる。北壁では、幅10cm、長さ50〜60cmの溝状となる断続的な部位を壁近くで観察できるが、北壁東側の隅部付近ではこれに加えて径が10〜5cm程度の小型で浅い円形ピットが断続的に配置されているのが見られる。また、西壁部でも隅部を中心に浅い溝状の部位と径5cm程度の小ピットが連なる部位が見られる。更に南壁の中間部の一部に小溝・小ピットが観察される部位がある。

このような壁面下に浅い溝状をなしたり、或いは径10〜5cm程度の小ピットがほぼ20cm程度の間隔で配置されるのは、排水的機能と言うよりも住居の壁支持材の位置を反映した者と考えることができよう。

④炉跡（Fig.87）

炉跡は、住居跡のほぼ中央に位置していると考えられる。形状は南北方向に長い長円形を呈する。

炉は、南北径が75〜80cm、東西径60cm強の規模で、深さは10〜15cmを測る。炉断面は中央部が深

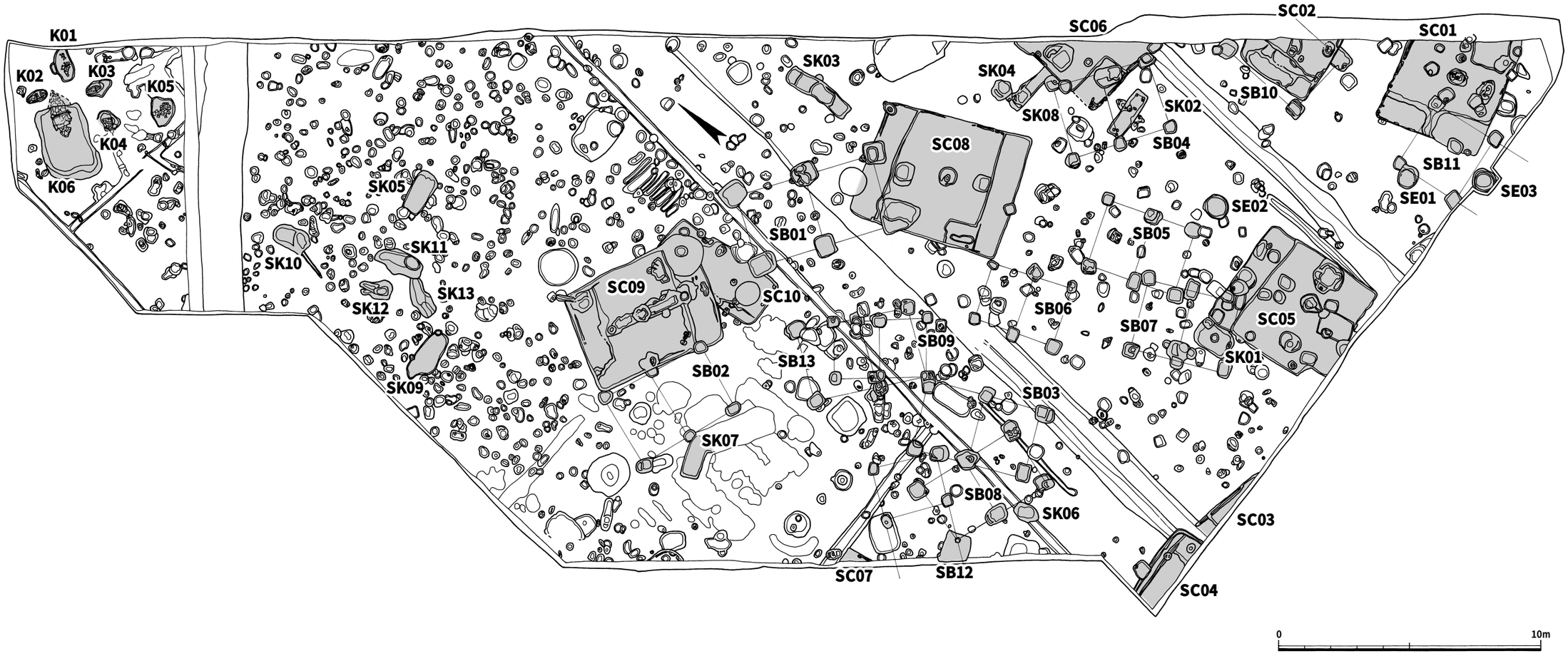


Fig.82　御供所井尻線調査Ｅ区遺構出土状況全体図

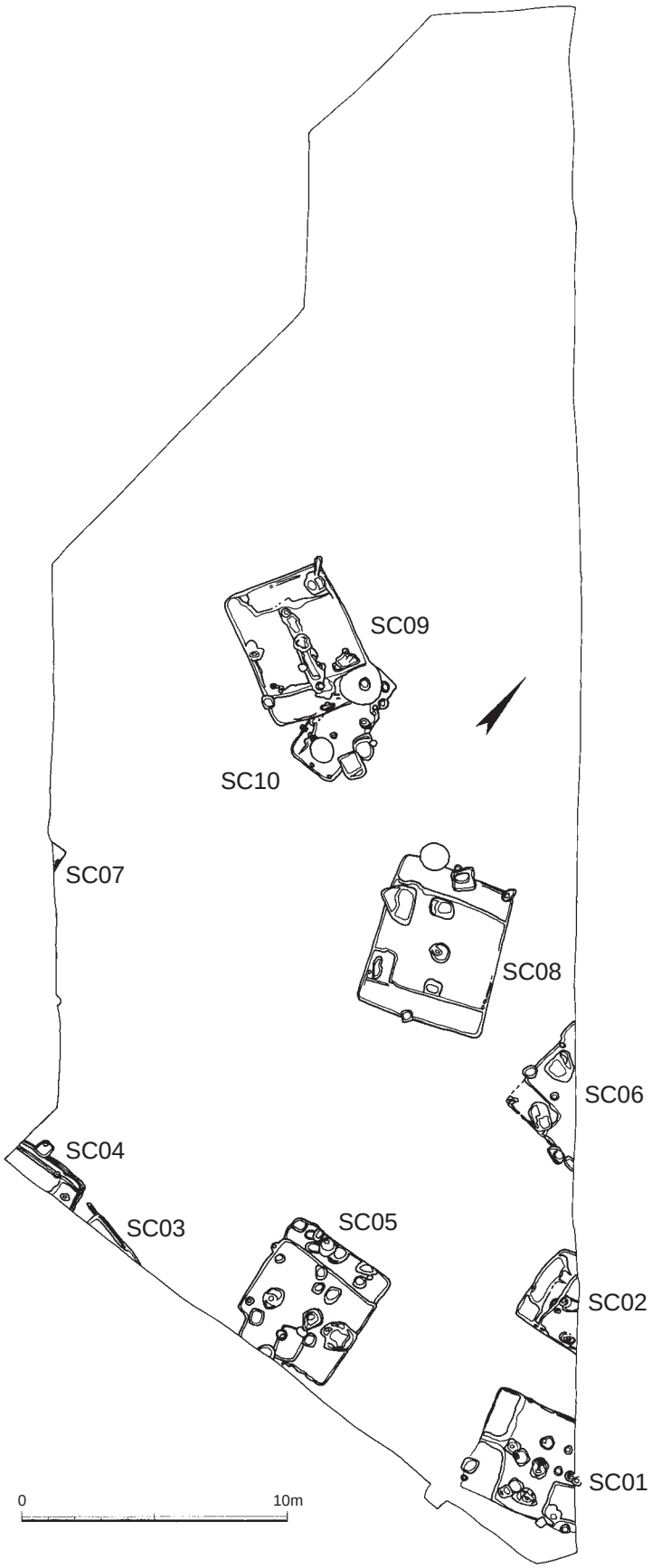


Fig.83　竪穴住居跡出土状況全体図

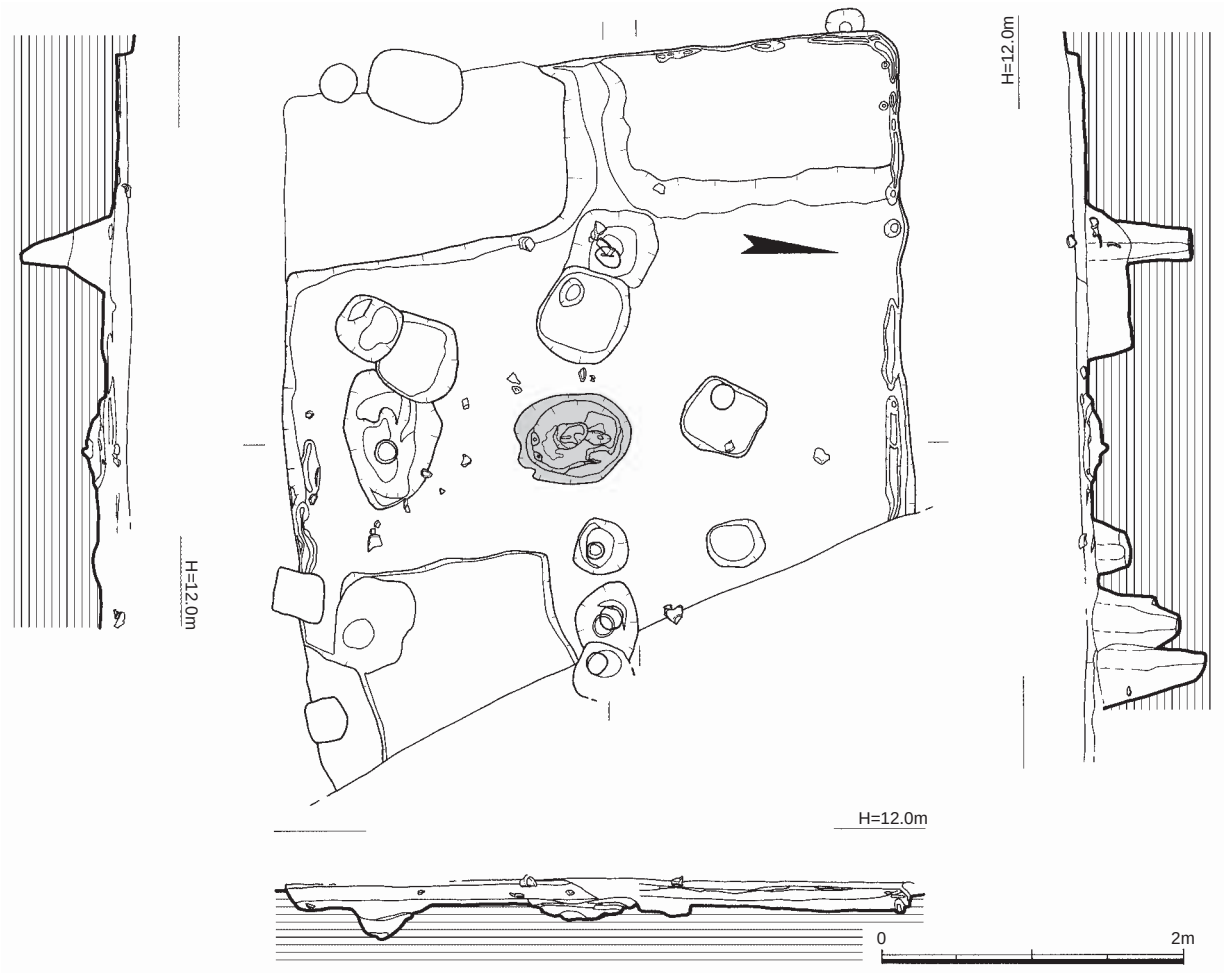


Fig.84　SC01住居跡出土状況実測図（1/50）

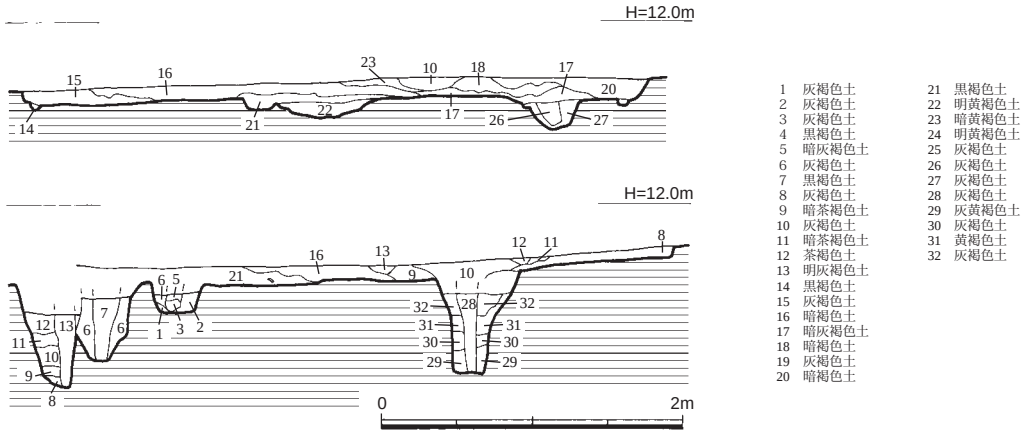


Fig.85　SC01住居跡土層断面実測図（1/50）

く、浅い皿状の形状をなす。底面には不整形の窪みが多く見られる。

底面の最下面は、それほど焼けてはいないが、縁辺部は燃焼による火に遭っており、赤変している。炉内の埋土は、Fig.87にみるように最下部に黒褐色土、この上に灰褐色土がつまっている。また、炉跡周辺を含めて住居の床面に炭化物を含む灰層が広く残る状況はない。

⑤出土遺物（Fig.88、Pl.26）

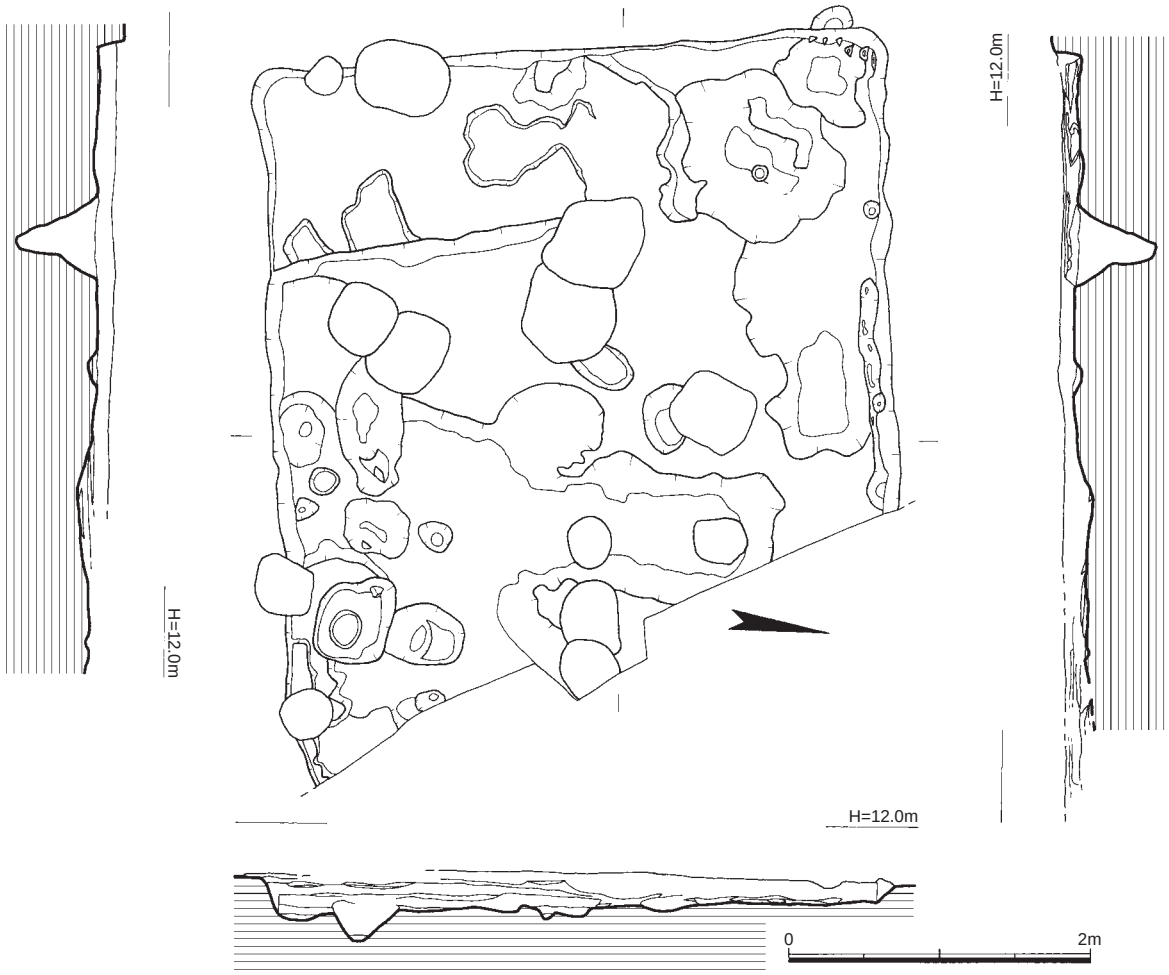


Fig.86　SC01住居跡掘方出土状況実測図（1/50）

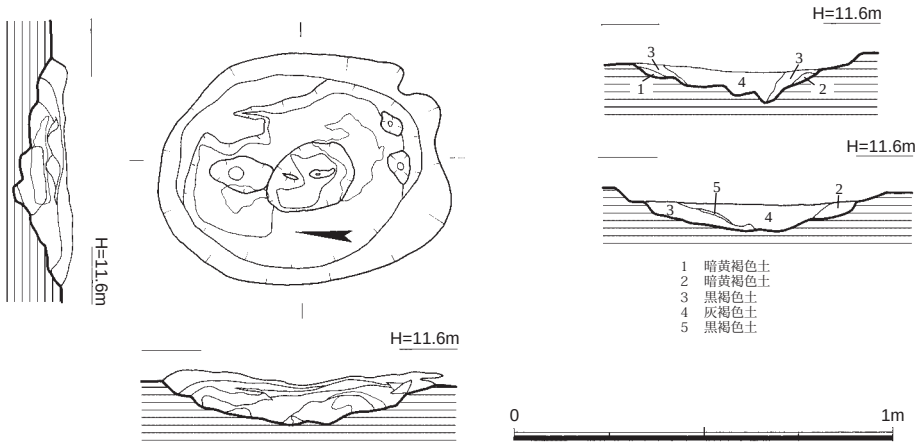


Fig.87　SC01住居跡炉跡出土状況実測図（1/20）

本住居跡で出土した遺物類は非常に少量であり、出土土器類類では細片が多く、図に供することのできるものは多くない。

03002は、小型器台の底部破片である。全体に器壁が厚く、底部端の畳付きは小さい。器面は内外面共に荒れが著しく、調整痕を十分に観察することができない。

内面には僅かに絞りと考えられる縦方向の隆起線が見られる。器色は、外面下半が淡赤褐色を呈

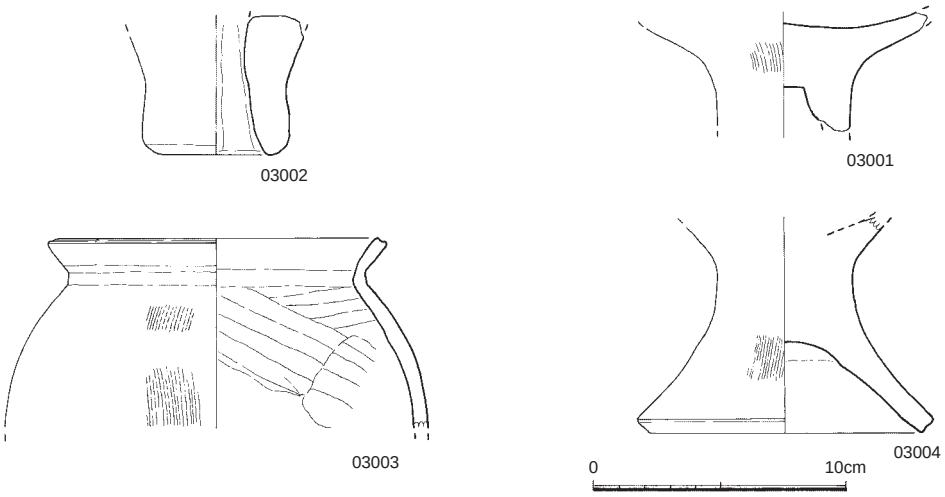


Fig.88　SC01住居跡出土遺物実測図（1/3）

し、他は暗褐色となる。 底部径5.8cm、残存高5.8cmを測る。胎土は粗で、焼成も軟質である。

03001は、高杯の脚部付け根付近の破片である。内外面共に器面の磨滅が著しいが、外面の一部に荒いタテハケメを残す。器色は、外面が赤褐色～暗褐色、内面淡赤褐色～赤褐色を呈する。筒部の径5.5cm、残存高5.8cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

03004は、器台或いは台付き鉢か。分厚い中実となる筒部を有し、裾は外方に踏ん張る形態となる。器面は内外共に荒れが著しいが、脚の一部に非常に細かいタテハケメを残す。

器色は、外面が淡灰色で、外底部は淡灰褐色を呈する。また、上端の残存部は黒灰色となる。

底部径11.9cm、筒部径5.4cm、残存高8.4cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

03003は、球状の胴部にく字形に屈曲して立ち上がる短い口縁部を付す壷である。全体に薄手の造りである。口縁部内面はやや跳ね上げ状となり、上端部は窪む。

器面調整は、外面口縁部が強いヨコナデで、頸部以下は細かいタテハケメが残る。また、内面は口縁部にヨコナデ、これ以下の胴部はヘラ状のもので底部方向から斜めにナデ上げて調整している。

また、器色は、外面が淡赤褐色、内面が暗赤褐色を呈する。口径は13.4cm、残存高7.5cmを測る。胎土は密で、焼成は軟質である。

以上少量ではあるが、出土土器類から本住居跡は弥生時代後期中頃の所産と考えられよう。

SC02住居跡（Fig.83・89～92、Pl.14・26）

本住居跡は、調査区南東隅に検出された。SC01住居跡の北側３m弱の距離にあたる。住居は全体の西側半分以下が検出され、東半は調査区外となっている。残存する形状から比較的小型の長方形プランをもつ住居と考えられる。また、西壁側にはベッド状遺構の痕跡が残り、おそらく東側壁にも対置する位置に同施設が付設されているものと推測される。また、住居内埋土や床面からの遺物出土量は比較的まとまったものがある。

②平面プラン（Fig.89～91）

本住居跡は、東辺が調査区外であることから、検出できたのは南・北壁の一部と西壁であり、全体の1/2以下での形態判断となる。全長が残る西壁は３m、一部が残る南壁が2.8m以上であることと西壁のベッド裾にある主柱穴の位置から判断すると本住居跡は東西に長い長方形プランをもつものであろう。住居掘り方には特別な作業は見えないが、西側ベッド部分が溝状に掘り方されている。調査範囲が限られているために炉跡や対置する位置にあると想定される主柱穴・ベッド状遺構については不

詳である。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.89～91）

ベッド状遺構は、西壁に沿って付設されていたが、張り土の一部を取り払っているために、ここでは住居構築の際の下部の掘り方の一部が露出しかかり、断面では中央がやや窪む形となっている。現況での規模は、幅60cm前後を測り、ほぼ西壁に取り付く。

主柱穴の１本は、住居跡中軸線上にあり、ベッド上端から50cmほど中央寄りに付設されている。主柱穴の掘り方は、40cmほどの円形を呈し、深さ70cmほどの規模を測る。主柱穴では柱痕跡は確認できなかったが、埋土の主要部分は褐色粘質土である。

また、壁溝については特に見ることはできない。

④出土遺物（Fig.92、Pl.26）

本住居跡では床面直上を中心とする位置で多量の土器類を主体とする遺物が出土した。それらは直口壷、甕、高杯、器台、鉢、石包丁破片などである。

（土器類）03014は、底部の尖る薄づくりの甕である。頸部は良くしまり、口縁部は緩く外方に開く。内外面共に器面の磨滅が著しく、器面調整を明らかに観察できない。外面胴部には大黒斑が見られる。口径18.8cm、器高28.5cm、頸部径15.3cmを測る。器色は、外面が暗褐色で、内面淡褐色を呈する。胎土は粗で、焼成は軟質である。床面より15cm上部位置で出土。内面からの二次穿孔が見られる。

03013も器壁が薄く、底部がやや尖る形態の甕である。倒卵形の胴部に緩く外開する口縁部を付す。口縁端部外面はヨコナデのためか、やや下方に突出する。

全体に器面の磨滅が見られる。器面調整は、外面口縁部が荒い縦ハケメ調整後に弱いヨコナデで、胴部は同様の荒いタテハケメ調整が残る。内面は、口縁部が荒い横ハケメで、胴部では底部方向からの荒いタテメが残る。口径19.8cm、器高29.8cmを測る。

Fig.89　SC02住居跡出土状況実測図（1/50）

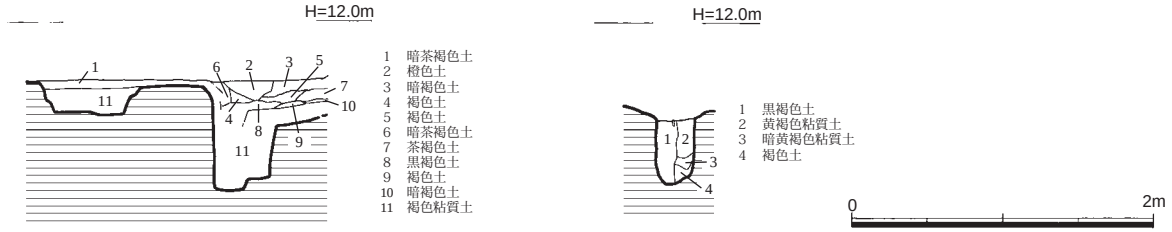


Fig.90　SC02住居跡土層断面実測図（1/50）

胴部下半には黒斑が多く見られる。器色は、内外面共に暗褐色を呈する。胎土は粗で、焼成も軟質である。

03017は、扁球状の胴部に緩く外方に開く口縁部を持つ甕である。

器面調整は、口縁の内外面ヨコナデを施す。また、胴部外面には非常に荒い縦ハケメを施す。内面の口縁部には荒い横ハケメ調整後に胴部との境に指オサエを施す。

口径は20.4cmである。器色は、暗褐色である。胎土は粗で、焼成は軟質である。壁内出土。

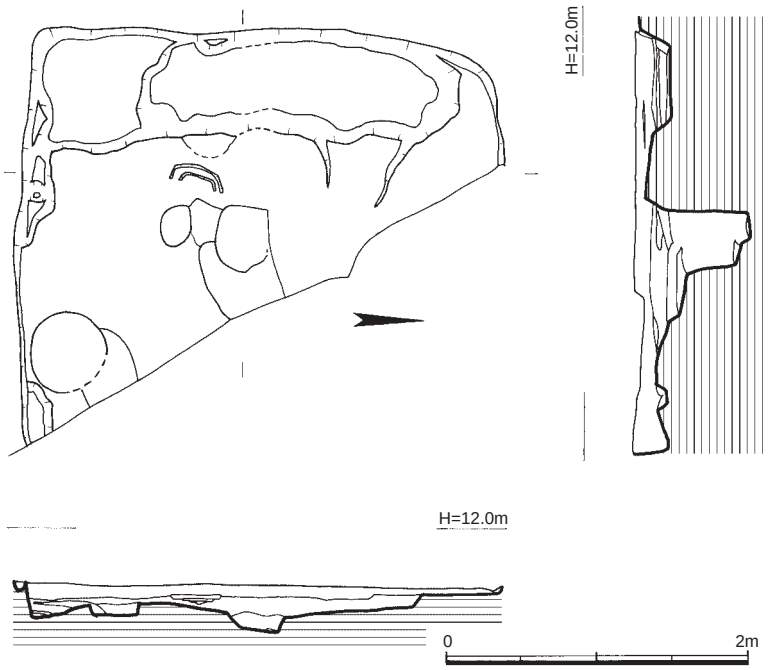


Fig.91　SC02住居跡掘方出土状況実測図（1/50）

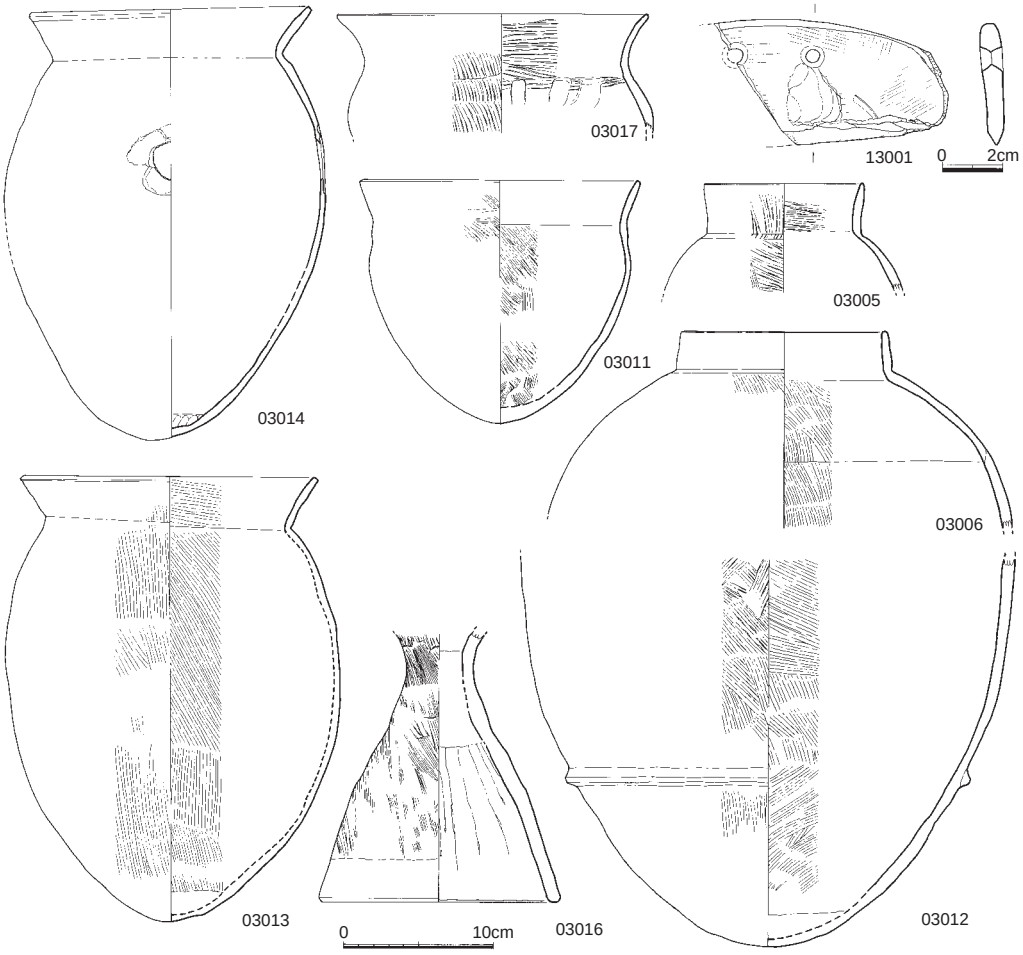


Fig.92　SC02住居跡出土遺物実測図（1/5）

03011は、底部の尖る小型甕である。薄手の造りである。口縁部の内外面はヨコナデで、頸部付近の外面および胴部内面は細いハケメ調整が残る。外面は器面の剥落が著しい。器色は淡褐色である。口径18.6cm、器高16cm前後を測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。壁内出土。

03005は、直口小型壷破片である。半球状の胴部にほぼ直立する口縁を付す。器面調整は、外面口縁部に荒いタテハケメ、胴部以下に同様の斜め方向のハケメを施す。内面は、口縁部でヨコナデを残し、胴部以下は光沢を持つほどのヘラナデを施している。器色は、灰褐色を呈する。口径は10.6cm、残存高7.2cmを測る。胎土は粗で、焼成は堅緻である。

03006・03012は、同一個体と考えられる大型の直口壷である。最大径が上部にあり、緩い肩部となる形態である。口縁部は短く、やや内傾気味に立ち上がる。また、胴部の下端近くには頂上部が丸く、断面が鈍い三角形をなす突帯１条を巡らす。器面は内外面共に磨滅が著しい。

器面調整では、外面胴部に非常に荒い縦・斜めのハケメ調整が残る。また、口縁部は丁寧なヨコナデを施している。また、内面の口縁部はヨコナデで、胴部内面は外面と同様の荒いハケメ調整となっている。器色は、外面が淡赤褐色～淡黄褐色で、内面は淡黄褐色～淡褐色を呈する。外面には肩部以下に焼成時の黒斑が数多く見られる。口径は13.8cmを測る。 胎土は、石英粗砂の混入が多く、粗である。また、焼成は軟質である。

03016は、支脚か。中空の脚部である。脚裾が大きく開く器形である。脚の上部で良くしぼっており、これから口縁部に向かって外方に開くものと思われる。器面は調整が粗雑で、凹凸が著しい。器面調整には、外面が細かいハケメを用い、その後に脚部端の内外にはヨコナデを加えている。内面は脚部下半近くが工具による縦方向のナデ、上面では横方向のケズリが見られる。また、脚上部ではしぼりを加えている。外面には焼成時の黒斑が多く見られる。器色は、外面が淡黒灰色で、内面は暗赤褐色を呈する。脚径16cm、残存高18cmを測る。 胎土は粗で、焼成は軟質である。

（石器）13001は、背部が丸く、刃部が直線的な杏仁形石包丁の破片である。２孔を穿ち、必要な研磨も施されており、製品として仕上がっている。小豆色凝灰岩製。複元長11.5cm程度か。

他に高杯では、薄造りで、浅く、杯部の口縁と胴部の境界が緩い段を持ち、口縁部が長く外方に発達したものも見られる。

本住居跡は、以上の出土土器類から弥生後期後半から終末期の所産と考えられる。

SC03住居跡（Fig.83・93・94、Pl.15・27）

本住居跡は、調査区南西端のSC04住居跡の東側に隣接して検出された。出土状況では、SC04の東壁に切られていると考えられることから、同住居跡より古い時期のものと想定される。大半は調査区外にあり、詳細についての情報は殆ど無いと言える。

②平面プラン（Fig.93）

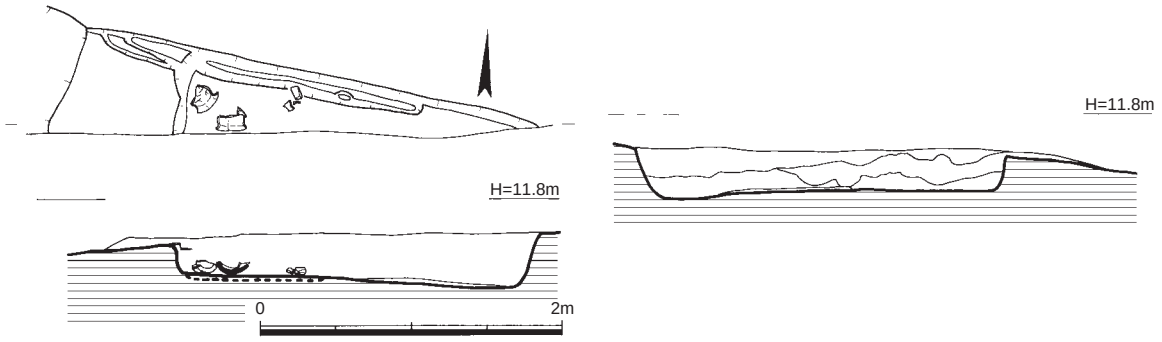


Fig.93　SC03住居跡出土状況実測図（1/50）

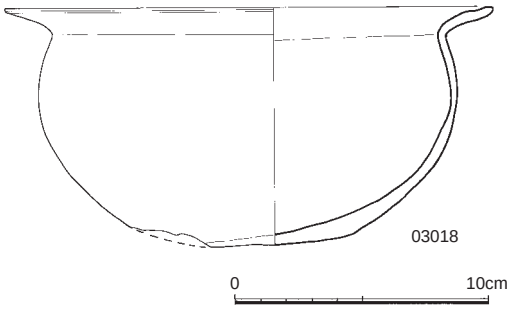


Fig.94　SC03住居跡出土遺物実測図（1/3）

本住居跡は、北壁で残存長3mを測る。また、西側にベッド状遺構を伴う形状から東西方向に長い長方形プランをなすものと考えられる。

③出土遺物（Fig.94、Pl.27）

03018は、床面出土の薄造りの鉢である。不安定な平底を有し、口縁部は緩くしまる頸部から垂れ気味に外反する。

内外面共に器面の荒れが激しい。器色は外面淡褐色で、内面暗褐色を呈する。口径19.2cm、器高9.3cmを測る。 胎土は粗で、焼成は軟質である。

SC04**住居跡**（Fig.95・96、Pl.15・27）

本住居跡は、調査区の南西端で検出された。殆どが調査区外となっている。北壁及び東壁の一部を窺えるにすぎない。東壁側にベッドが付くものかも知れない。

②平面プラン（Fig.95）

北壁・東壁に沿って壁溝が巡り、また北壁側にはこれと平行して20cm内側に小溝が設けられている。更に東壁には幅1m程の平行する溝が走ることからベッドの掘り方の一部まで掘り下げた可能性を考えると、この住居跡は東西に長い長方形プランである可能性がある。

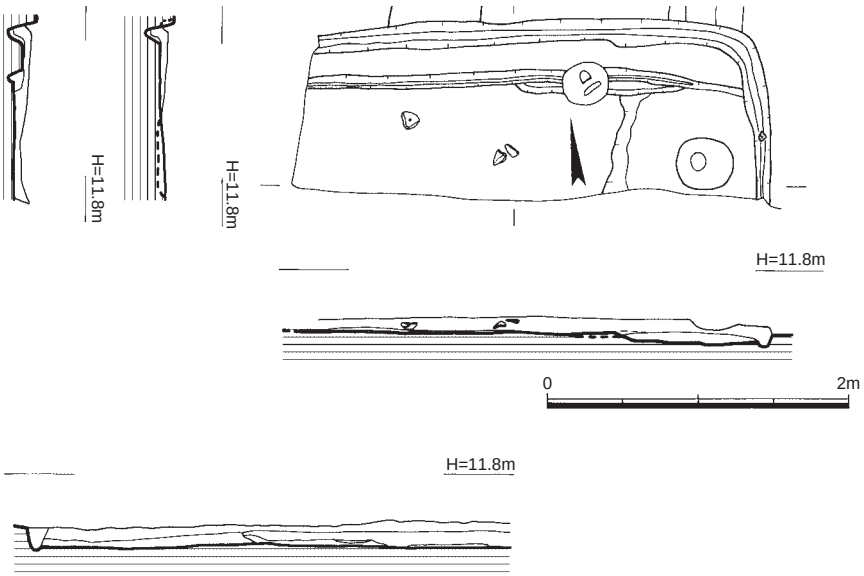


Fig.95　SC04住居跡出土状況実測図（1/50）

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.95）

ベッドは東壁に付設されていた可能性がある。幅は1m前後である。

主柱穴の位置は不詳である。また、壁溝は、外周を取り巻くものと北壁にさらに付設される壁溝も見られる。

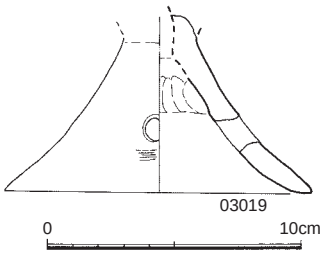


Fig.96　SC04住居跡出土遺物実測図（1/3）

④出土遺物（Fig.96、Pl.27）

03019は、高杯脚部破片である。外開する脚で、中位に4個の透かし孔を穿つ。外面の一部に横ハケメ、内面に指オサエが残る。

器色は外面が淡黄褐色、内面淡赤褐色を呈する。脚径12.1cmを測る。 胎土は密で、焼成は堅緻である。

SC05**住居跡**（Fig.83・97〜101、Pl.16・27）

本住居跡は、調査区南端に位置し、遺構のほぼ全体を検出したものと考えられる。長軸を南北方向

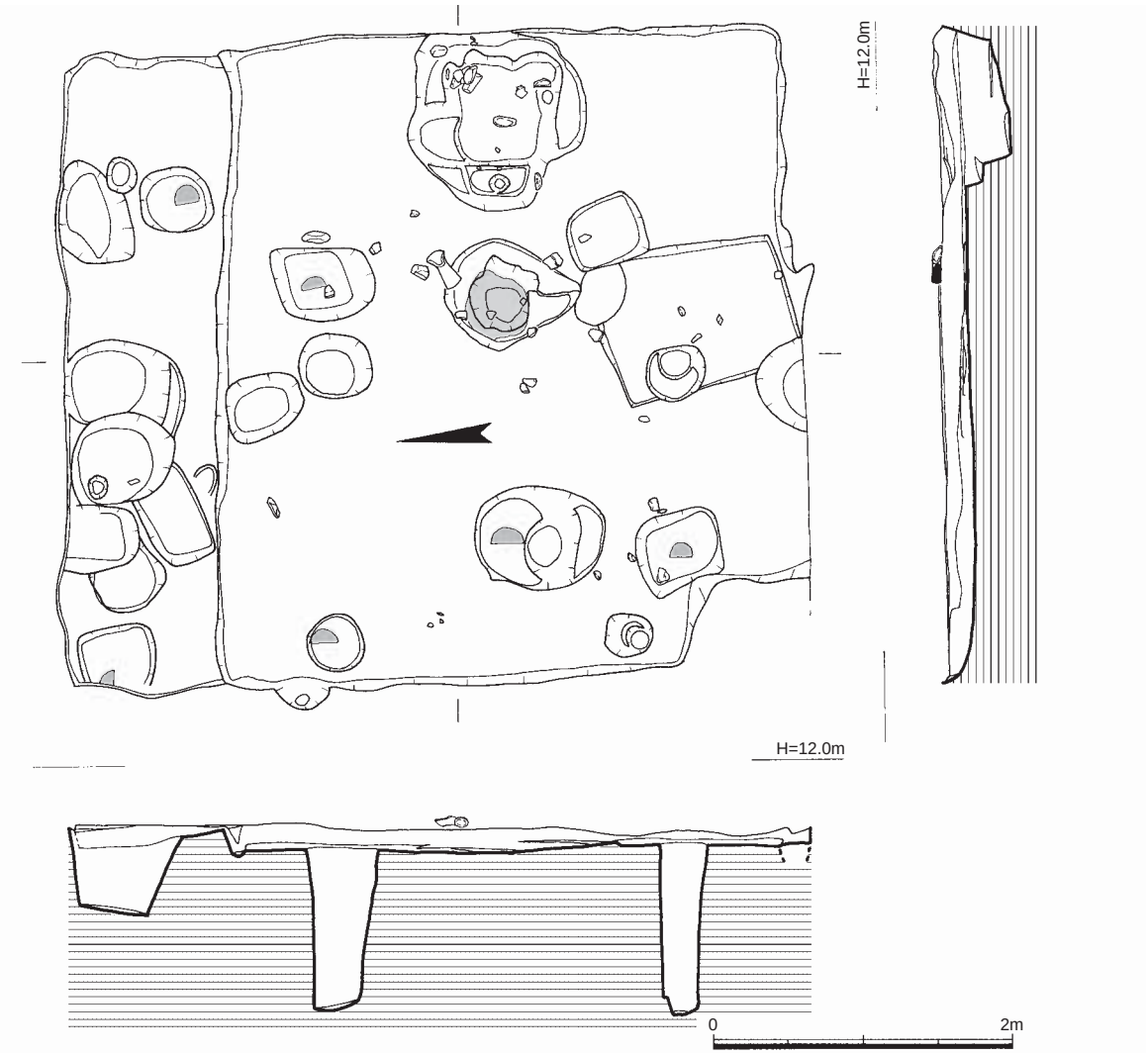


Fig.97　SC05住居跡出土状況実測図（1/50）

に向け、北壁と南壁側にベッドを付設し、床面には炉跡を挟んで主柱穴２本を配置する構造と考えられる。壁高も15～20cm程度を残している。

②平面プラン（Fig.97～99）

南辺の南壁、東・西壁の一部が未調査区域である。出土状況から、住居の規模は北壁長が4.2m、東壁長4.8m以上、西壁長4.9m以上であると考えることができる。また、長軸線の中央を結ぶ主柱穴の位置から炉跡を挟んでほぼシンメトリーの形状となると考えると、南北長5.8m前後・東西長4.2m程度の規模の長方形プランである可能性がある。また、南北壁に沿って幅１m程度のベッドを付設している。床面の主柱穴は２本で、やや東側にずれて炉が設けられている。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.97～99）

ベッド状遺構は、北壁で幅約1m、床面との比高差15cm前後の規模である。また、南壁側のベッドは西南隅で突出部が見られ、やや北側ベッド部分とは異なるが、同規模のものが張り付く可能性が考えられる。

主柱穴は、南北それぞれのベッド裾から70～80cmの床面中軸線上に２本が確認できる。両柱は芯心で2.3mの間隔を測ることができる。北側の主柱穴は、径50×40cmの長円形で、深さ105cm前後の掘り方で、柱痕跡の径は30cm前後である。南側の主柱穴は、40×35cmの円形で、深さ115cm前後を測る掘り方で、柱痕跡の径は15cm前後である。

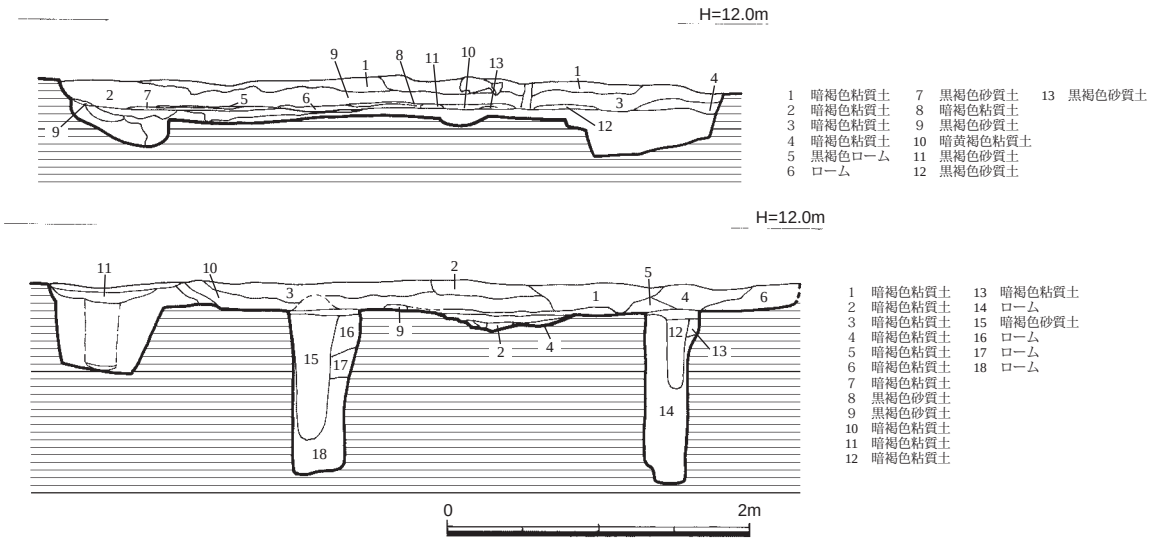


Fig.98　SC05住居跡土層断面実測図（1/50）

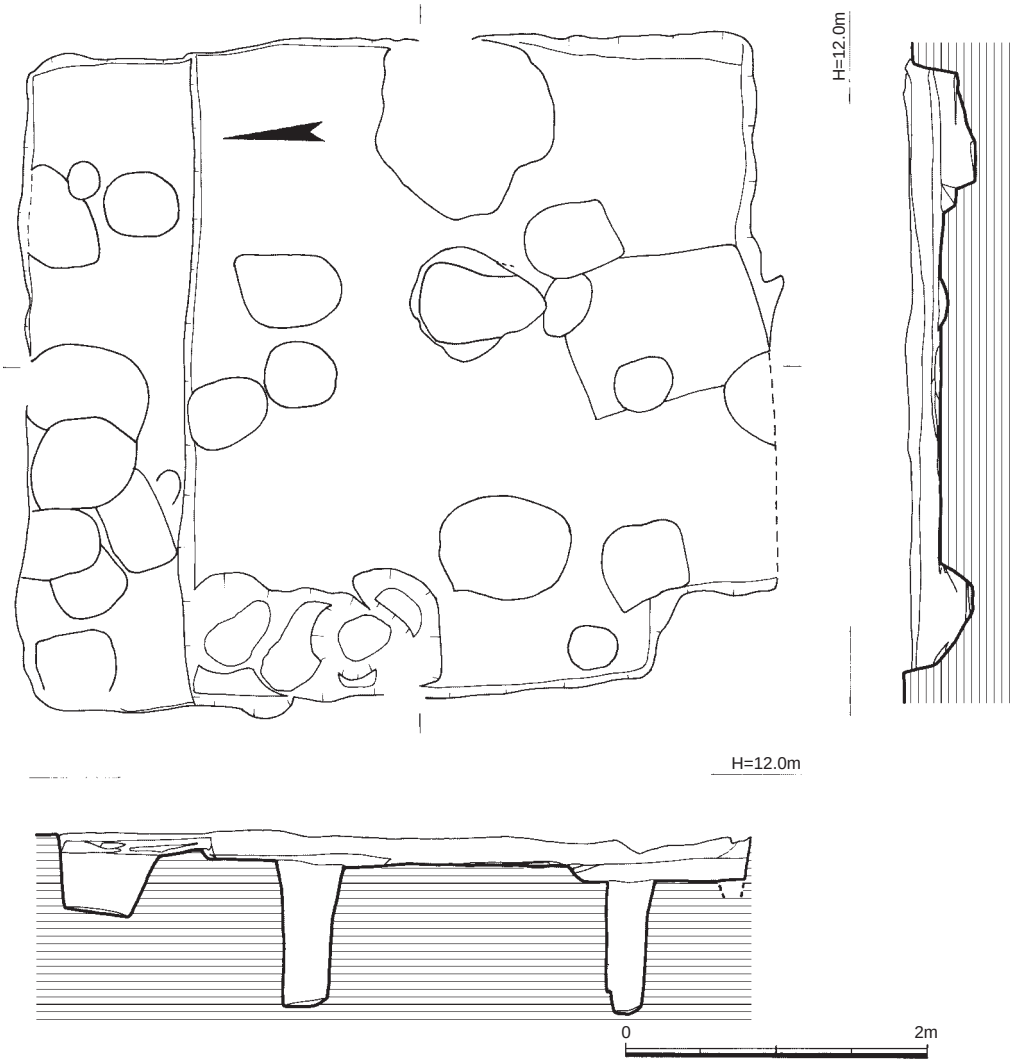


Fig.99　SC05住居跡掘方出土状況実測図（1/50）

壁溝は、北壁のベッド裾に沿って幅10cm程度の浅いものが確認できる。

④炉跡（Fig.100）

炉跡は、前述のように主柱穴のほぼ中間に位置するが、やや東壁側に片寄って切られている。

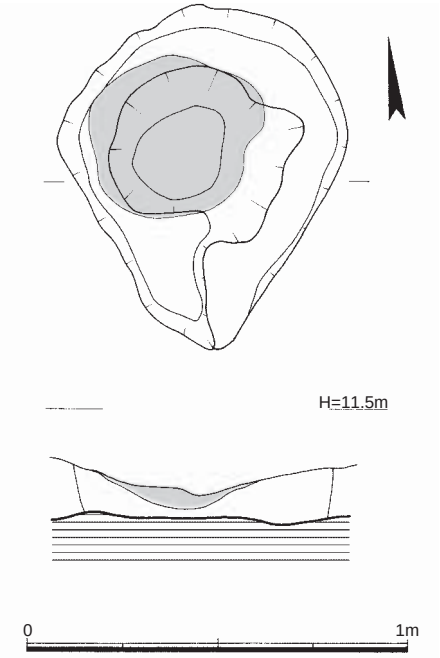


Fig.100　SC05住居跡炉跡出土状況実測図（1/20）

長軸を南北方向に向けた不整円形の炉である。北側で径が80cm強、南北の長径で90cm程度を測る。断面では立ち上がりは小さく、中央部に僅かに焼土が見られる。

⑤出土遺物（Fig.101、Pl.27）

（土器類）03022は、上端部が内傾して屈曲する二重口縁壷の小破片である。全体的に磨滅のため調整は観察することができない。

器色は、淡褐色を呈する。胎土は粗で、焼成も軟質である。ベッド状遺構の張り土除去で出土。

03023は、小型の短頸壷である。外方に開く小型の口縁部をもつ。内外面共に器面の磨滅が激しい。

器面調整は、外面口縁部がヨコナデか。胴部には荒いタテハケメの痕跡がを窺うことができる。また、内面は調整不詳である。器色は、内外面共に淡赤褐色を呈する。口径は11.4cm、残存高5.5cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

03021は、不安定な平底を持つ壷底部である。レンズ状の断面をなし、外端部がやや上がる。底部径７cmを測る。器面調整は、器面の荒れのために不詳である。器色は、外面が淡黄褐色、内面が淡灰色を呈する。 胎土は粗で、焼成は軟質である。

03020は、器壁が非常に厚い造りの器台である。中空の器台であるが、外方に開く口縁部分をのぞき器壁が２cmを越えるものとなっている。

全体に器面の磨滅や剥落が顕著である。器面調整は、外面の口縁部端や脚部端にヨコナデが施され、他の胴部では細いタテハケメが顕著に残る。また、内面の下部ではヘラ状のものでナデを加えている。器色は、赤褐色～黒褐色を呈する。口縁部径14.3cn、脚部径13.3cm、器高20.7cmを測る。胎土は粗で、焼成も軟質である。

（石器）13002は、背部が曲線を描く杏仁形に近い小型の石包丁である。背部近くに２孔を穿つ。両面からの穿孔である。孔の間隔は芯心で2.3cmを測る。刃部の研ぎ出しは両面からである。

全長は10.8cm、身幅3.6cmを測る。使用石材は安山岩系統か。角閃石が顕著に見られる。使用され

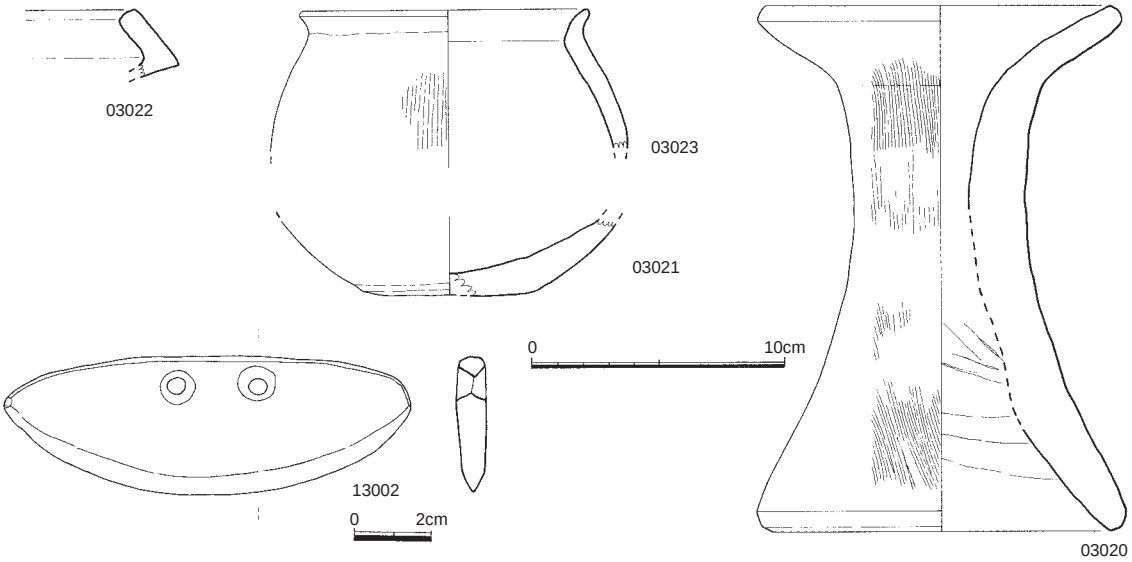


Fig.101　SC05住居跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

る石材の中では数少ない種類であるかも知れない。

（鉄器）図示はしていないが、住居内埋土で出土した遺物の中に、小型袋状鉄斧（全長７cm・頭部―袋部３cm・刃部４cm）と小型手鎌（長さ５×3.2cm・厚さ１cm）の周辺おりまげ部分の片方を残す製品が出土している。

SC06住居跡（Fig.83・102・103、Pl.16・27）

本住居跡は、調査区の東壁に片寄って検出された。調査区で確認できたのは西壁と南壁の一部のみであり、南西隅のコーナー付近の形状が１ヶ所明らかとなっている。

南壁でのコーナー付近のベッド状の高まりやこれと平行して走る壁溝から、本住居はSC01住居に見られた短辺側の壁にベッドを付設する形式に類似した長方形住居の可能性がある。

②平面プラン（Fig.102）

現状では、住居の規模は南壁の壁溝の延長が2.5m以上、西壁で3.9m以上を測ることができる。

また、南西隅の壁溝に平行して配置されている幅約1m、天端の長さ1.8mの区画は南壁に伴うベッド状遺構の西側部分にあたると考えられる。

また、住居内の埋土からは比較的まとまった量の土器類が出土した。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.102）

ベッドは、南壁の西側隅に見られる規模ものが東側隅にも同様に付設されるのではないかと想定される。

また、南壁と同様のベッド状遺構は北壁にも付設される可能性がある。

主柱穴については、不詳である。

壁溝は、南壁に見られるように小溝とともに小ピットを伴う状況が他の壁面にも想定できる。

その他、炉跡は調査区内では痕跡が見あたらない。

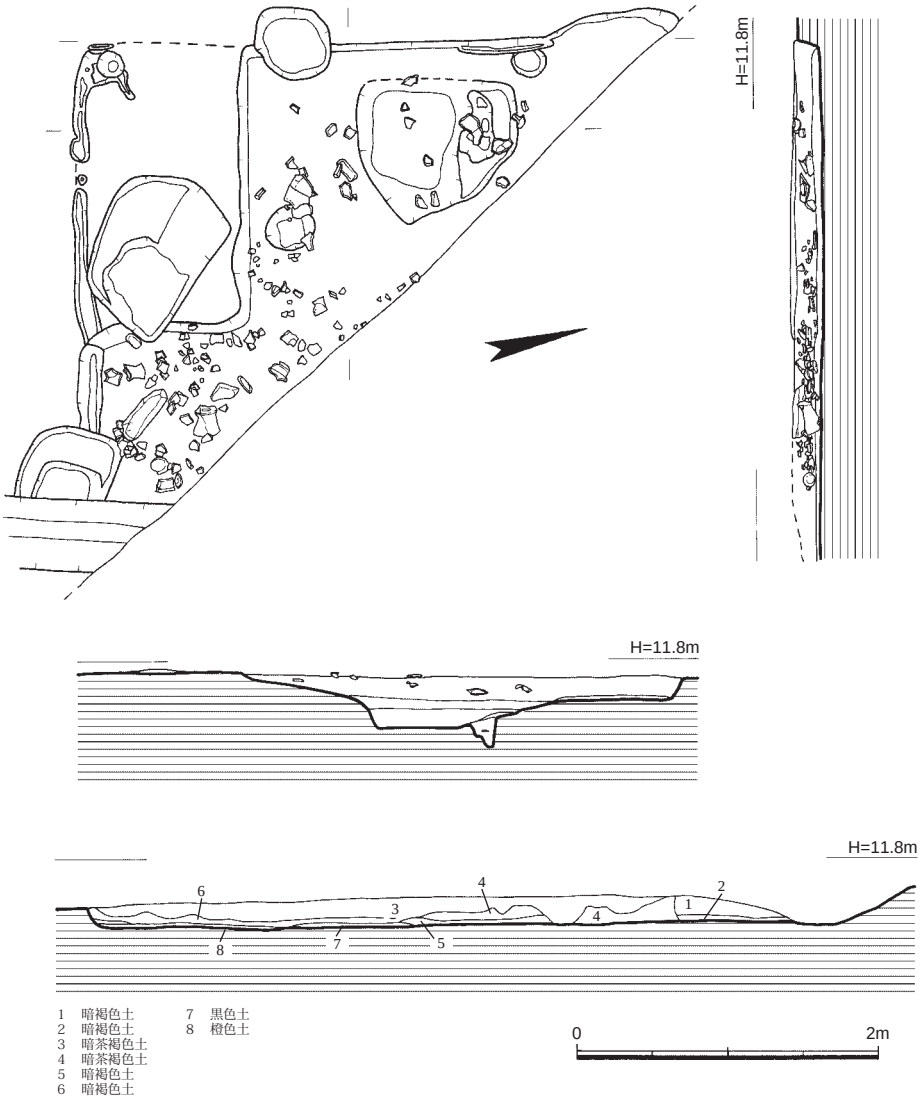


Fig.102　SC06住居跡出土状況実測図（1/50）

④出土遺物（Fig.103、Pl.27）

03025は、口縁端部が直立する二重口縁壷破片である。頸部に１条の三角突帯を巡らす。口径15.5cmを測る。内外面共に荒れが激しい。器色は外面が淡灰褐色で、内面は淡褐色を呈する。 胎土は粗で、焼成も軟質である。床面直上出土。03029は、端部が内傾して屈曲部に緩い稜を持つ袋状口縁壷である。器面の磨滅は激しいが、外面の一部に荒いタテハケメ調整が残る。器色は内外面共に暗赤褐色を呈する。口径は20.4cmを測る。 胎土は粗で、焼成も軟質である。

03028は、小型の短頸壷である。端正な造りで、口縁部は急激に外開して、内面には鋭い稜を持つ。器面は内外共に磨滅が激しい。器面調整は不明である。口径は10.3cm、残存高8.5cmを測る。器色は、外面が淡赤褐色で、内面は暗褐色～褐色を呈する。 胎土は密で、焼成は軟質である。

03024は、口縁部を欠く甕である。しまりのない頸部から緩く立ち上がる。器面は内外面共に荒れのために不詳である。外面の下部には黒斑が見られる。器色は内外面共に淡赤褐色を呈する。最大部径21cmを測る。 胎土は粗で、焼成は堅緻である。03030は、小型壷の底部か。やや上げ底気味で、内底部は隆起する。底部径6.5cmを測る。器面は内外面共に荒れが激しい。器色外面は黒褐色～淡灰褐色、内面黒灰色～明灰色を呈する。 胎土は粗で、焼成は軟質である。

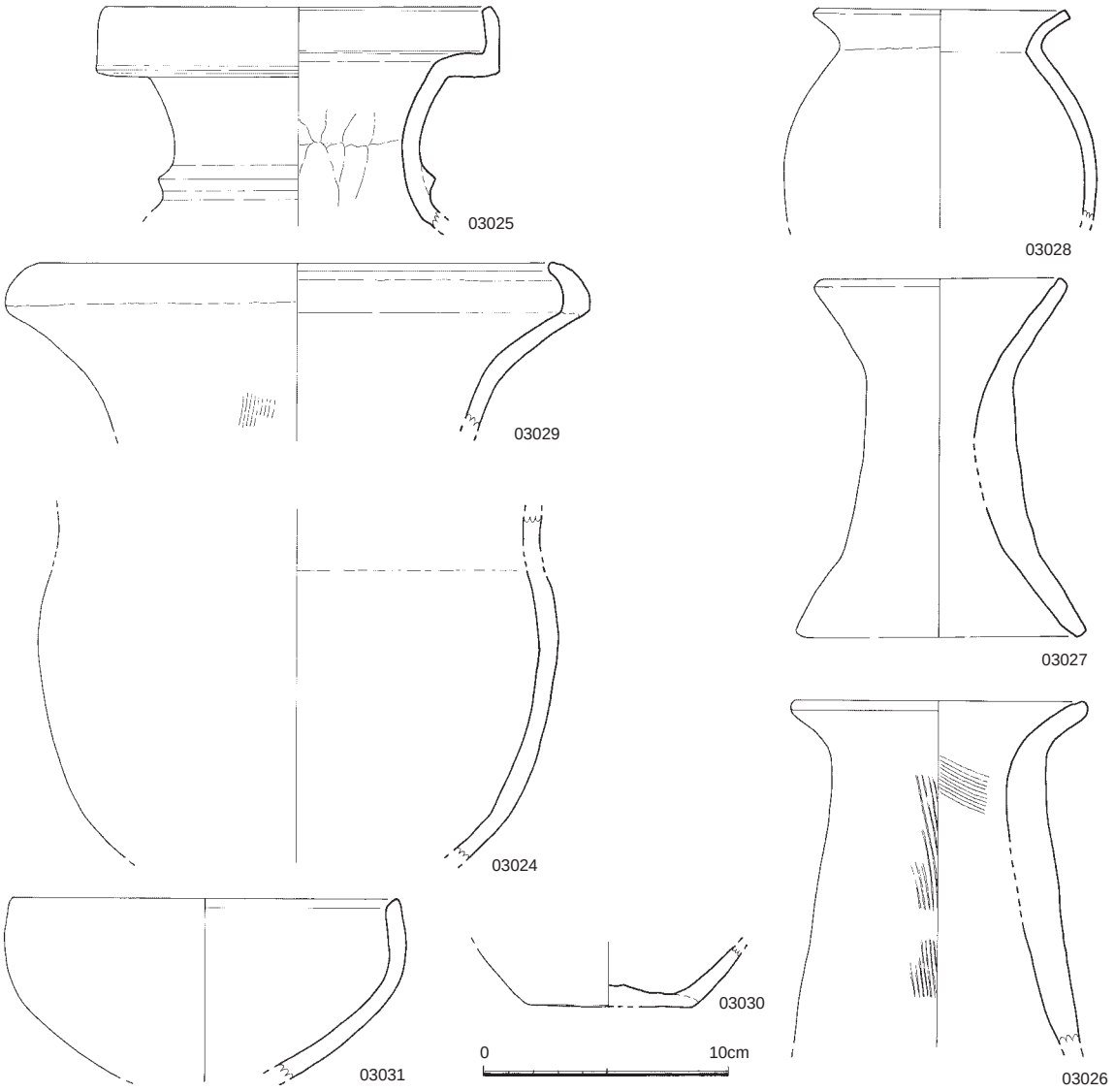


Fig.103　SC06住居跡出土遺物実測図（1/3）

03027は、口縁部・脚部が対称形をなす器台である。口縁部径9.5cm、脚部径11cm、器高14.5cmを測る。 胎土は粗で、赤色粒・石英粗砂を多く混入する。焼成は軟質である。床面直上出土。

03026は、脚部を欠失する器台である。器面調整は、外面及び内面上部に荒いハケメ調整を施す。内面下部には浅い指オサエが残る。器色は、内外面共に淡黄褐色を呈する。口径12cm残存高13.9cmを測る。胎土は密で、焼成も堅緻である。床面直上出土。

03021は、椀である。淡黄褐色を呈する。口径15.4cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。床面直上出土。

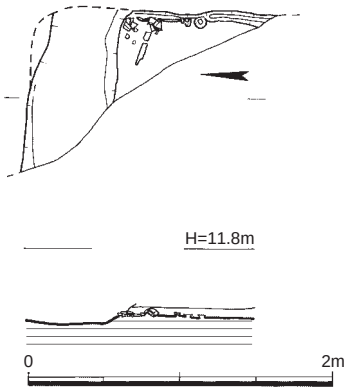


Fig.104　SC07住居跡出土状況実測図（1/50）

SC07住居跡（Fig.83・104・105、Pl.17）

本住居跡は、調査区の南西境に一部が検出された。住居の北壁と東壁の一部である。形状から北壁側にベッドを付設する可能性が高い。

②平面プラン（Fig.104）

北東側のコーナーを残すのみである。東壁が1.6m以上、北壁が1m以上の規模となる。また、北壁に沿う幅0.6mの浅い溝状遺構は住居の掘り方の部分まで掘りすぎた結果と考えられるもので、ベッド位置にあたる。このことからこの住居は、北側壁にベッド状遺構をもち、軸線が南北方向を向く長方形住居と考えられる。

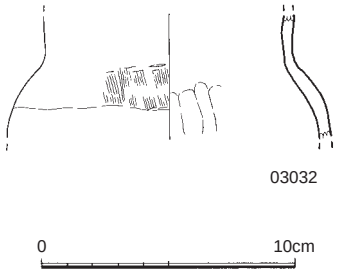


Fig.105　SC07住居跡出土遺物実測図（1/3）

③出土遺物（Fig.105）

03032は、口縁端部・胴部下半を失う直口壷である。頸部のしまりが少ない。器面調整は、外面胴部にヘラ状のものでなで下ろし調整を加える。また、内面胴部には指オサエが残る。頸部径は10.3cmを測る。器色は、黒褐色を呈する。 胎土は密で、焼成も堅緻である。
床面直上出土。

SC08住居跡（Fig.83・106〜110、Pl.17・27）

本住居跡は、調査区中央に位置し、長軸が南北方向を向く長方形住居である。調査区内では数少ない完掘住居である。住居は、南北壁側にベッド状遺構を付設し、両ベッドの裾位置に主柱穴２本を配し、この中間に炉を切っている。住居内の埋土からの出土遺物の量はそれほど多くない。主柱穴の抜き穴等からの出土も見られる。

②平面プラン（Fig.106〜108）

住居は、現況では南壁長4.8m、北壁長4.45mであり、北壁に対してやや南壁が長い。また、東壁長5.55m、西壁長5.6mを測る規模となり、やや歪ながら南北に長い長方形プランを呈する。

住居に伴う諸施設では、南北壁と西壁の一部にベッド状遺構がある。さらに北壁の外周側と東壁の外周側には細い断続的な溝が伴っている。

主柱穴は、ベッド裾に各１本ずつが配され、この間に円形の炉があるが、両者は住居の主軸からややはずれた斜め方向の配置となっている。

また、住居の掘り方は、南北壁のベッド状遺構下では壁に平行する浅い溝を掘削する。また、北側主柱穴から炉跡方向に連結する様に溝が掘削され、南側の主柱穴及び炉跡が計画的に配置されたこと

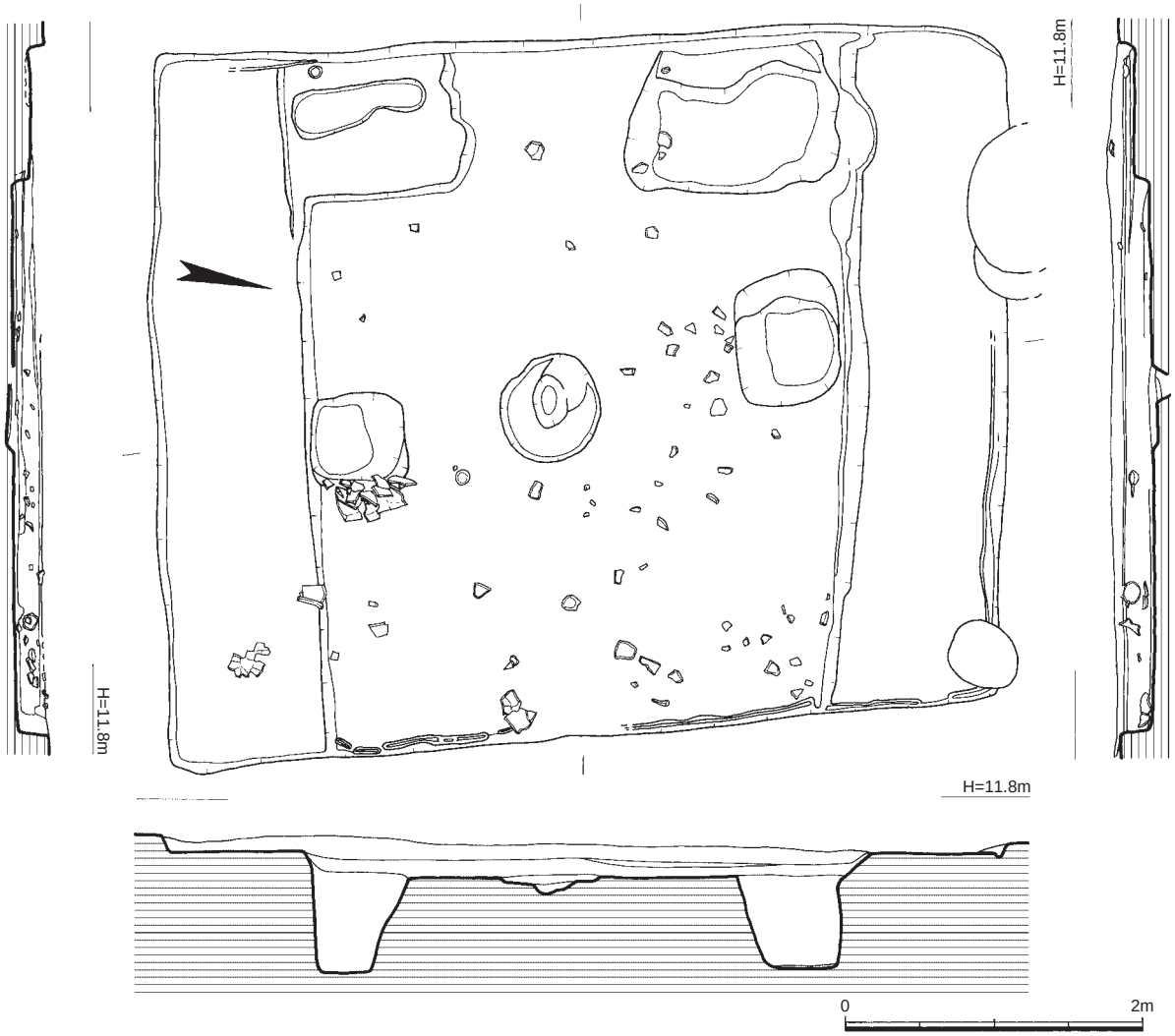


Fig.106　SC08住居跡出土状況実測図（1/50）

を窺わせる。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.106〜108）

ベッドは、北側壁側の天端で幅80cm、床面との高さ20cmを測る。また、南側壁ではやや広く、天端で幅約１m、床面との比高20cm程度を測る。また、南壁の西側ではベッドが鍵の手に曲がり、西壁に沿うように付設されている。

主柱穴は、前述のようにベッドの裾に配置されているが、実際の位置は本住居の中軸からややずれており、住居の北西から南東方向を斜に切る線上に配置されている。南側の主柱穴は、径が60cm前後の隅丸方形をなし、深さは65cm程度を測る。また、北側の主柱穴は90×70cm規模の隅丸長方形を呈し、深さは60cm程度である。主柱穴間の距離は、芯心で3.2m程度を測る。なお、検出時には柱痕跡が確認できていない。

④炉跡（Fig.109）

炉は、主柱穴のほぼ中間に位置する。その規模は、東西長70cm、南北長65cmを測り、やや東西に長い不整円形を呈する。中心はやや北側にあり、深さは20cm程度を測る。一部に焼土の広がりが見られる。

⑤出土遺物（Fig.110、Pl.27）

（土器類）03037は、大型の鉢である。不安定な小型の底部を有する。口縁部は長く、緩やかに外

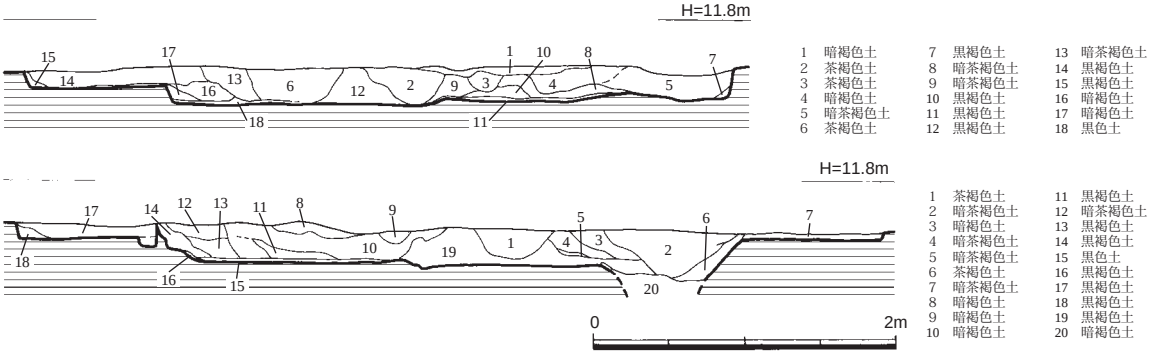


Fig.107　SC08住居跡土層断面実測図（1/50）

方に伸びる形態となる。器面は内外ともに剥落が多い。破片は南側主柱穴内出土の土器と接合関係にある。器面調整は、胴部の内外面に細かいタテ・ヨコのハケメ調整を残す。口縁部内面に大黒斑が見られる。また、器色は、外面が暗赤褐色で、内面は暗褐色を呈する。口径は、36cm、残存高14cmを測る。胎土は粗で、焼成は軟質である。

03042は、口縁部が直立気味に立ち上がり、小型の不安定な平底をもつ中型甕である。全体に器壁は厚く、胴部の中位付近に低い幅広の「コ」字形突帯を１条めぐらす。口縁部は、端部に従って器壁

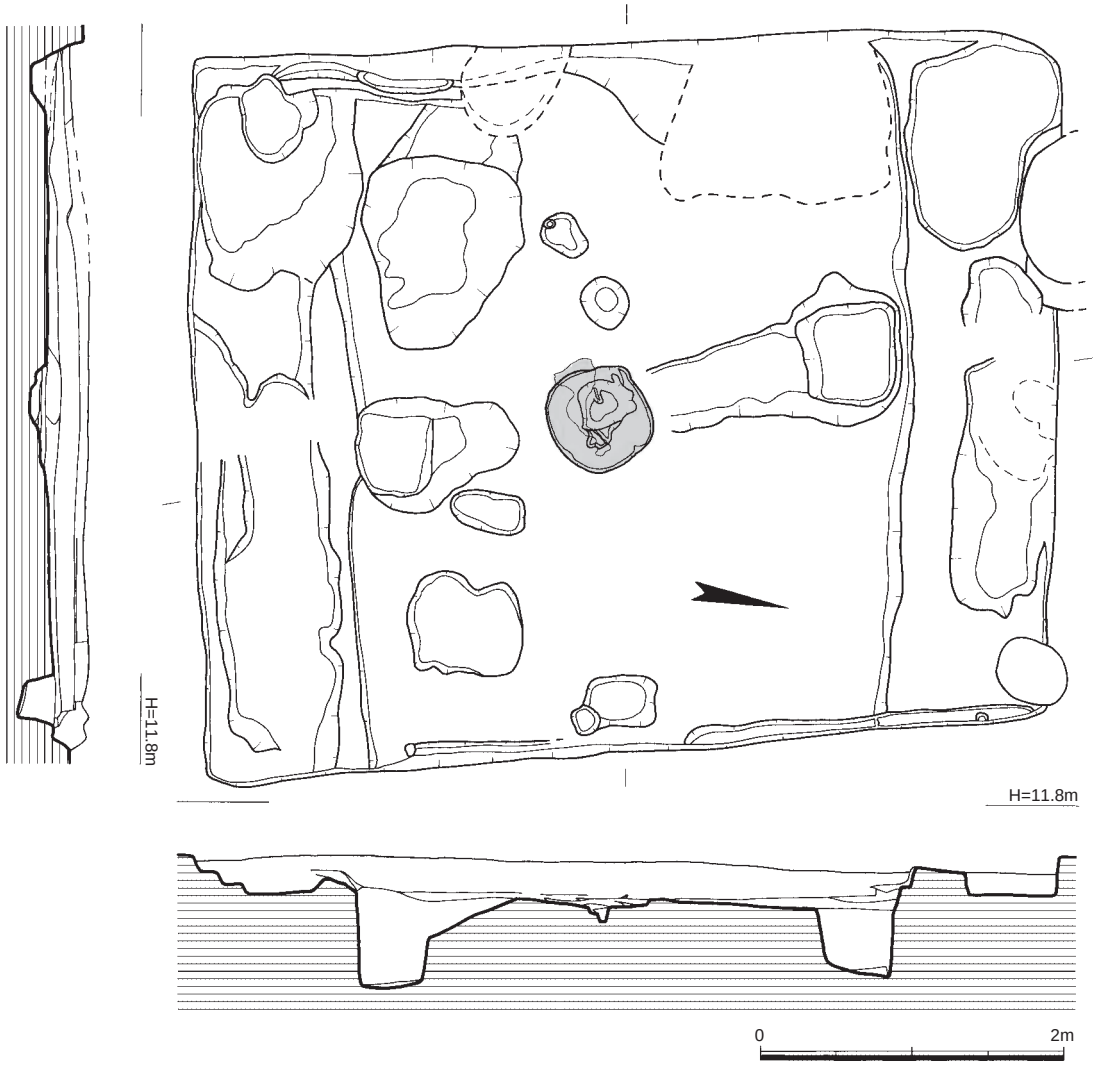


Fig.108　SC08住居跡掘方出土状況実測図（1/50）

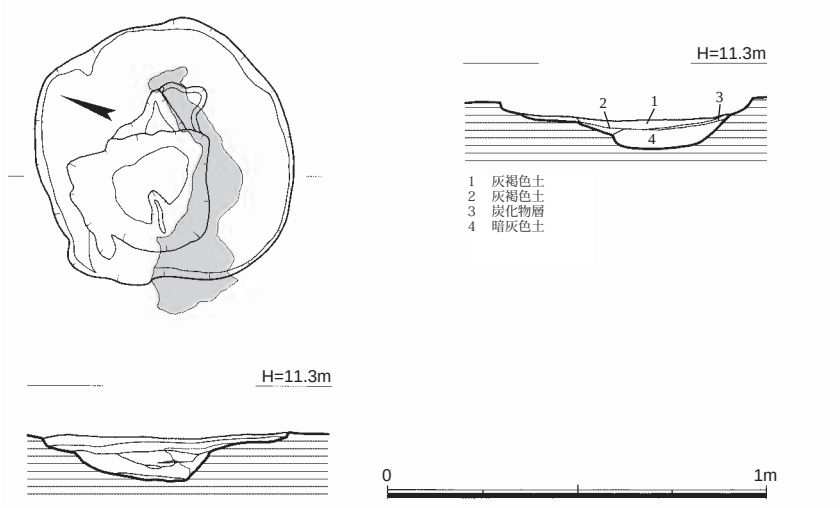


Fig.109　SC08住居跡炉跡出土状況実測図（1/20）

が厚く、端部は工具によるナデ調整によるものか平坦面をなしている。器は、内外面共に器面の磨滅が激しく、調整は不明である。

器色は、内外面共に暗赤褐色を呈する。口径26.8cm、器高36.7cmを測る。 胎土は粗で、焼成は堅緻である。南側主柱穴出土。

03041も南側主柱穴出土の直口壷である。口縁端部を欠く。不安定な平底を有し、扁球形の胴部からしまり無く、ほぼ垂直に立ち上がる。

胴部には内面からの二次穿孔を加え、直径６cm程の大穴を開けている。器面調整は、外面胴部で

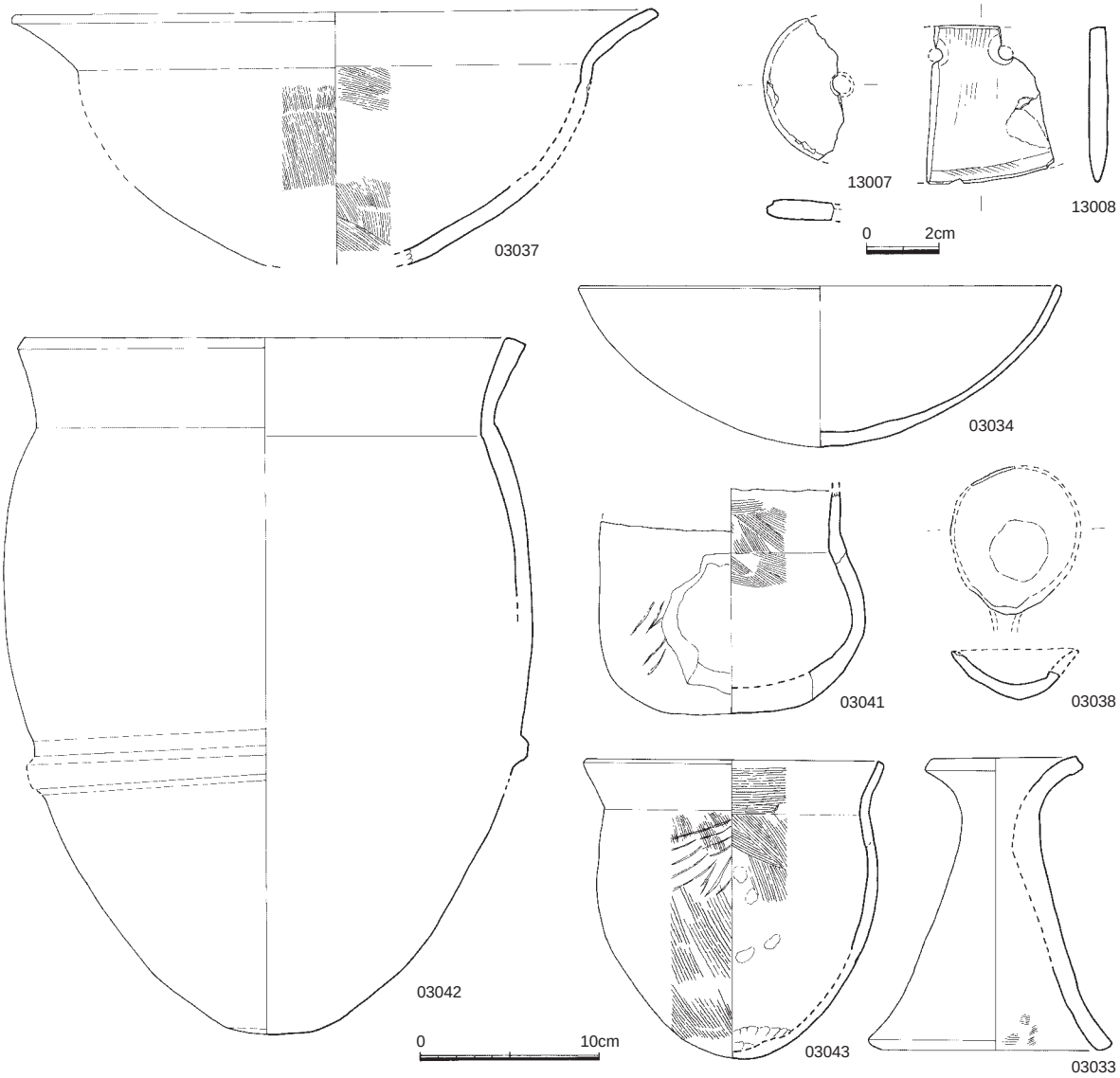


Fig.110　SC08住居跡出土遺物実測図（1/4・1/2）

斜めのタタキ調整後、ヨコナデを加える。また、底部はヘラケズリを加えている。内面は、口縁部・胴部上位に細かいハケメ調整が残る。器色は、外底部には使用時からのススが付着している。器色は、内外面共に暗赤褐色を呈する。胴部径14.7cm、残存高12.6cmを測る。 胎土は粗で、焼成も軟質である。住居廃棄時の祭祀遺物か。

03043は、北側主柱穴出土の小型甕である。底部はやや尖り気味で、口縁部も非常に緩く外方に開く形態である。器面調整は、外面口縁部～頸部にヨコナデを加える。胴部の上部では斜めの荒いタタキ調整後に細かいタテハケを施す。また、胴部の中位から下部にかけてはタタキ調整後に荒い斜め・縦方向のハケメを施している。外底部は磨滅している。内面は細かいハケメ調整が口縁部・胴部上半に残る。他は指オサエが内底部等に見られる。口径は16.8cm、器高16.5cmを測る。 胎土は粗で、焼成は軟質である。

03034は、尖底状の底部をなす大型椀である。底部を除き、非常に薄い造りである。器面は、内外面共に荒れが激しく、調整は不詳である。口縁部に黒斑が残る。器色は内外面共に暗赤褐色を呈する。口径は27cm、器高9cmを測る。 胎土は粗で、焼成は堅緻である。

03033は、小型の中空器台である。口縁部に比して脚部が大きく開き安定感を与える土器である。器面は内外面共に荒れが激しく、脚部の内面に一部細かいハケメ調整が残る。器色は、外面が黒褐色～暗褐色で、内面暗褐色を呈する。口縁部径8.7cm、脚径13.6cm、器高16.2cmを測る。 胎土は粗で、焼成も軟質である。

（土・石製品）13007は、滑石製紡錘車の破片である。約1/2が残る。復元径4.5cm前後・厚さ5mm程度のサイズと考えられる。

03038は、土製杓子である。取っ手部分を欠いている。楕円形を呈し、長径8cm、短径7.2cmを測るサイズである。 胎土は粗で、焼成は軟質である。床面直上出土。

13008は、石包丁破片である。両刃。砂岩製。西側壁貯蔵穴内出土。

SC09住居跡（Fig.83・111～115、Pl.18・19・28）

本住居跡は、調査区北側中央に位置し、長軸を東西方向に向ける長方形住居である。住居の北東隅を攪乱で失う。また、住居の北壁及び南壁に沿っては幅0.8～1mのベッド状施設を配し、中軸線上には主柱穴２本と中央に円形炉を切る。

この住居では床面や埋土からまとまった量の遺物が出土した。この中には該期の土器類とともに弥生時代中期後半期の大型甕破片などの土器類や扁平磨製石斧などの遺物も混在して出土しており、後期集落以前の墓地等の存在が周辺部に予測される。

②平面プラン（Fig.111・112）

住居は、現状では北壁が4m以上、南壁5m、東壁3m以上、西壁3.9mを測る規模で、東西方向に長い長方形プランを呈する。東西壁側にはそれぞれベッドを付設し、各ベッドの裾には主柱穴をおく。また、これらに挟まれた床面中央には円形炉を切っている。他に、本住居跡では、外周の各壁下に沿って壁溝を巡らしている。住居掘り方（Fig.112）の特徴では、両主柱穴の間が幅50cm前後の直線的な溝で連結されていることである。

③付属施設（ベッド・主柱穴・壁溝）（Fig.111・112）

ベッドは、東西壁に対置し対置にみられる。東壁部分では幅1m・床面との比高20cm程度である。また、裾部に幅30cmほどの溝を付設する。また、西壁では幅約90cmで、壁直下に幅15cm程度の溝を沿わせる。

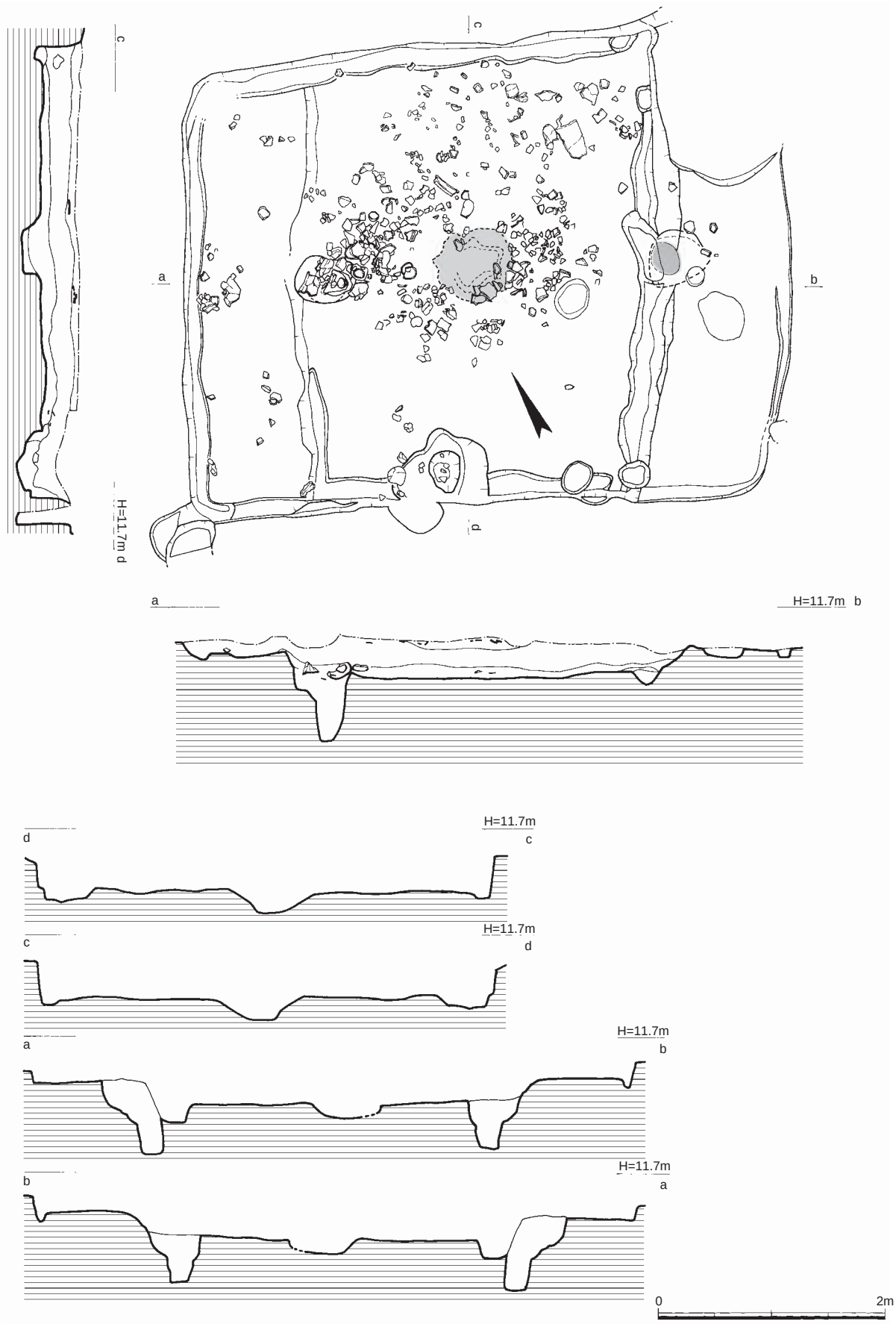


Fig.111　SC09住居跡出土状況実測図（1/50）

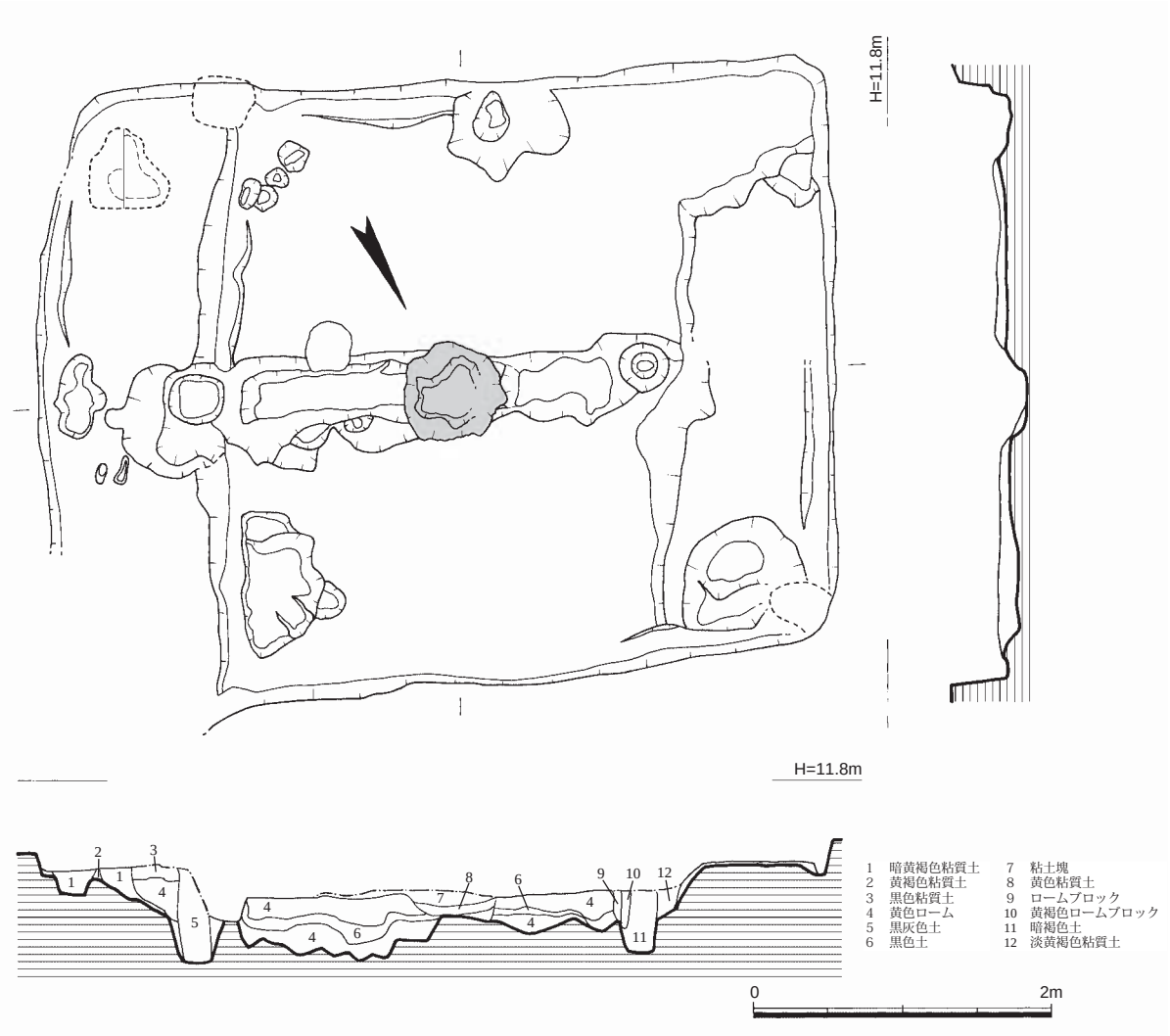


Fig.112　SC09住居跡掘方出土状況実測図（1/50）

主柱穴は、軸線上に２本配されている。東側の主柱穴は径が50cm程度の不整円形をなす掘り方で、深さ40cmを測る。また、西側の主柱穴もまた径が50cm程の長円形掘り方で、深さは55cm程度である。なお、両主柱穴間の距離は芯心で3.2mを測る。

④炉跡（Fig.113）

炉は、住居跡床面中央に配置される。主柱穴を連結する溝状の遺構を埋め戻した後に炉体を掘り込んでいる。炉は、東西・南北が0.7mを測る不整な円形を呈する。中央部がやや深くなり、15~20cmを測る。炉周辺には、焼土・灰などの散乱は見られない。

⑤出土遺物（Fig.114・115、Pl.28）

（土器類）03072は、丸底の大型甕である。緩く外反する口縁部下と胴部下半に断面コ字形の突帯を巡らす。突帯上には斜めの原体刻み目を施す。器面調整は、内外面共に細かいハケメを施す。器色は淡橙色を呈する。 胎土に1～2mmの粗砂が多い。口径44cm、器高51cmを測る。

03052は、不安定な平底の甕である。胴部の最大径が中位にあり、口縁部は緩く外反する。器面調整は、胴部外面の中位以下にはタタキが見られ、上半部および内面上部は細かいハケメを施す。また、内底部は細かいハケメ調整後にナデを施す。口径23cm、器高27cmを測る。

03048は、不安定な底部を持つ小型の甕である。口縁部は短く、緩く外開する。器面調整は、外面

上部が板状工具によるナデで、下部は底部からのヘラケズリである。また、内面はナデ調整。器色は橙色である。胎土に砂粒多く混入、焼成は、堅緻である。口径11.2cm、器高13.9cmを測る。

03059は、尖底に近い丸底の小型甕である。口縁は短く、く字に屈曲する。器面調整は、内面及び外面の上半部は細かいハケメ調整で、下半部はケズリ状のヘラナデである。器色は黒褐色を呈する。胎土は径1～2mmのは粒を混入。焼成は堅緻である。口径10.4cm、器高14.5cmを測る。

03060は、尖底の小型甕である。調整は、口縁内外面がヨコナデ、胴部外面荒いタテハケ～ヘラナデ、胴部内面はヘラナデを施す。器色は橙色である。口径14.6cm、器高13.9cmを測る。

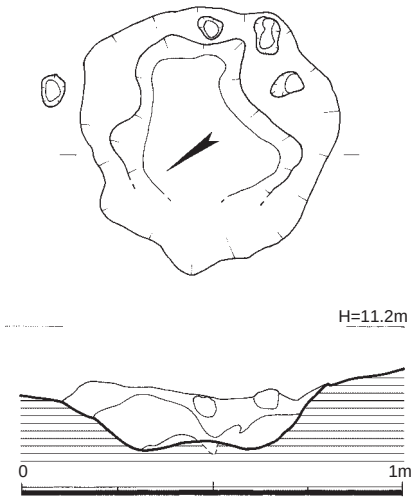


Fig.113　SC09住居跡炉跡出土状況実測図（1/20）

03054は、底部を欠く甕である。口縁部外面は工具によるナデで、胴部以下では細かいハケメ調整の他にヘラナデを残す。また、内面はナデ、指ナデを残す。口径は16cmを測る。

03062は、底部を欠く直口壷である。口縁端部は面取りを行い、角張っている。器面調整は、外面が細かいタテハケメが残り、内面口縁部にも部分的にハケメが残る。また胴部はなで調整か。器色は、橙色を呈する。 胎土に径1～2mmの砂粒を混入。焼成は軟質である。口径14cmを測る。

03049は、半球状の胴部に短く屈曲する口縁をもつ甕である。内外面共に単位の荒いハケメを縦・斜め・横方向に施す。

器色は、内外面共に淡赤色を呈する。胎土に径1～3mm砂粒を混入。焼成良好。口径は12cmを測る。

03044は、薄手の小型壷である。半球形の胴部に強く屈曲する口縁部をもつ。外面は二次焼成を受けている。調整は荒れのため不詳で、内面に斜めのナデが残る。胎土に1～2mmの砂粒を混入。器色は、赤褐色を呈する。口径10cmを測る。03061は、口縁部を各く小型甕である。底部は小さく不安定な平底である。器面調整は、外面が指オサエ後にナデで、内面がナデ調整である。器色は褐色で、胎土に1～2mmの砂粒を混入。焼成はやや軟質である。底部径2.6cmを測る。

03064は、嘴状突起を持つ支脚頭部である。頭部平坦面に１孔を穿っている。全面ナデ調整である。器色は褐～赤褐色である。胎土に1～2mmの砂粒混入。焼成は良好である。

03058は、頭部の小さい器台である。内外面共にハケメ調整を施す。器色は赤褐色で、胎土・焼成とも良好である。口径8cm、器高14～14.3cm、脚径13.4cmを測る。03068は、長頸壷口縁部である。内外面共に細かいハケメ調整を施す。器色は橙色で、胎土に砂粒を多く混入する。焼成は堅緻である。口径は17.4cmを測る。03069は、裾部の外開する器台脚部である。端部は跳ね上がる。内外面共に細かいハケメ調整を施し、内面には指ナデが顕著に残る。脚部径15cmを測る。胎土に砂粒を多量に含む。焼成は堅緻である。03070は、頭部が急激に外開する器台である。脚部を失う。外面にはタタキ後にタテハケメ、内面は指ナデである。胎土に砂粒多く、焼成は堅緻である。口縁部径15cmを測る。

03055は、小型鉢である。不安定な平底をなす。調整は、外底部を除き、全面にハケメが明瞭に残る。口径13.4cm、器高6.5cmを測る。03065は、底部が臍状となる小型椀である。内湾気味に立ち上がる。器面調整は、外面がナデ、内面がヨコナデである。口径8.6cm、器高5.1cmを測る。03063は、手捏の小型鉢である。外面は、指オサエ後に板状工具によるナデ調整、内面ナデである。03053は、不安定な底部を持つ小型の椀である。調整は、外面が縦方向のヘラナデ、内面は内底部にハケメ、他

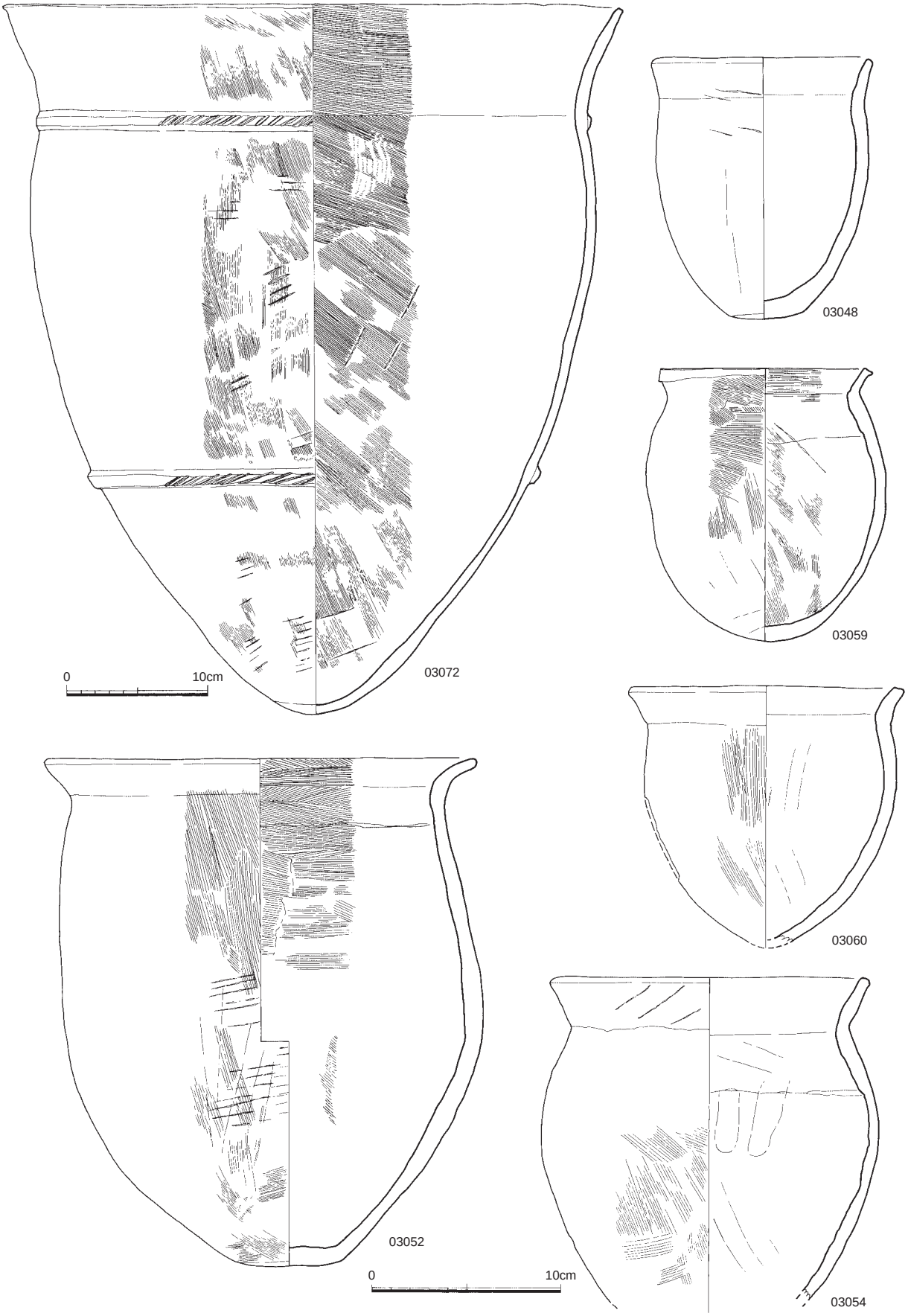


Fig.114　SC09住居跡出土遺物実測図（1）（1/3・1/4）

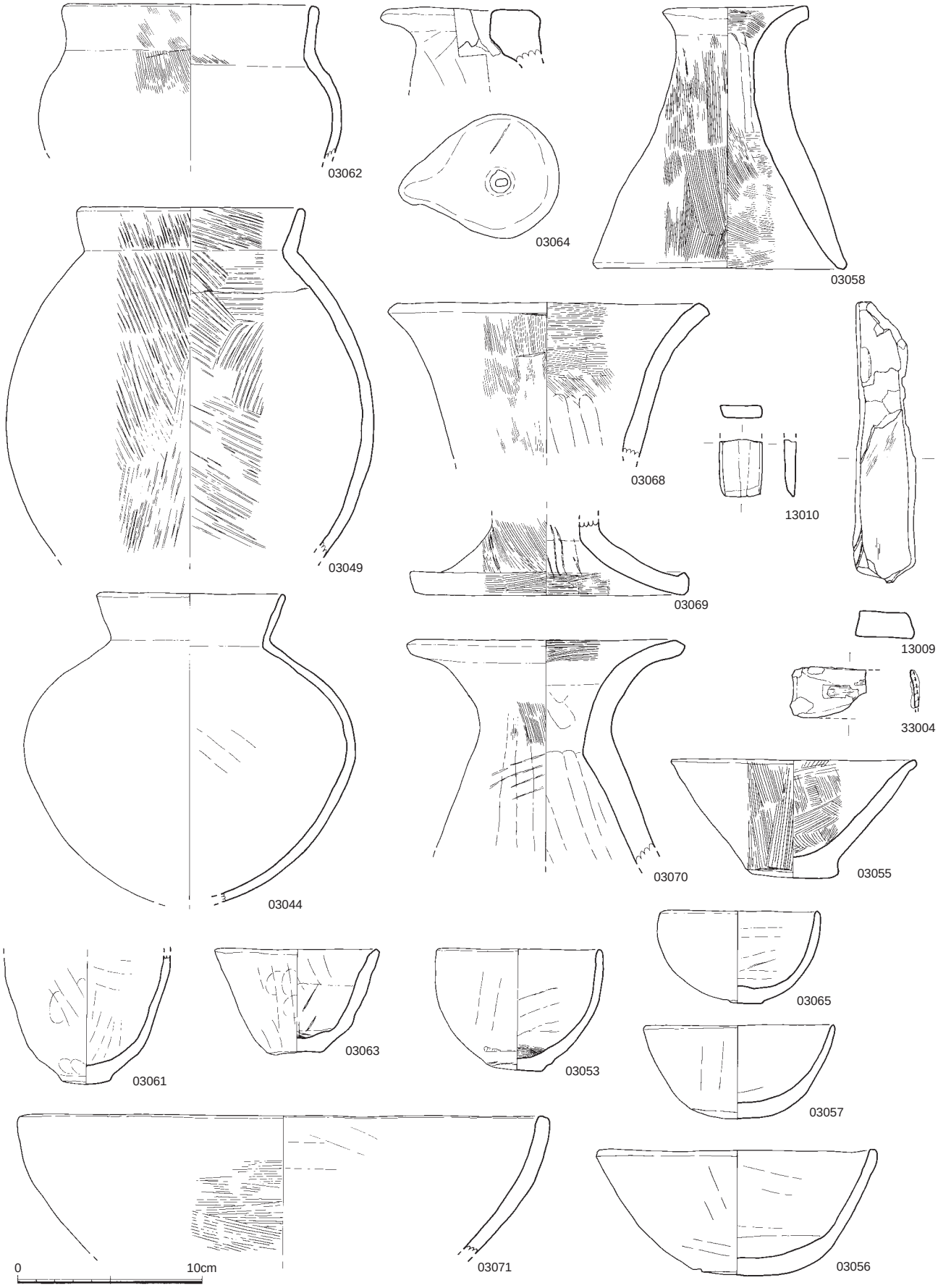


Fig.115　SC09住居跡出土遺物実測図（2）（1/3）

はヨコナデである。焼成は良好である。口径9cm、器高6.7cmを測る。03057は、丸底をなす小型の椀である。外面はヘラナデ、内面ナデか。口径10.4cm、器高5cmを測る。03056は、やや歪な丸底をなす椀である。外面はヘラナデ、内面はナデか。口径15cm。

03071は、底部を失う大型鉢である。外面は横ハケメで、内面にヘラナデが残る。焼成は堅緻である。口径28cmを測る。

（鉄器）33004は、摘み鎌破片である。部分的に木質が残る。ベッド上出土。

（石器）13010は、扁平片刃石斧破片である。頭部を失う。粘板岩か。他時期の遺構からの混入か。13009は、手持ち砥石である。四面共に砥石として使用している。一部に刃先痕と思われる痕跡が顕著に残る。粘板岩製か。

SC10住居跡（Fig.83・116〜118）

本住居跡は、調査区中央に位置し、弥生後期住居のSC09によって切られている。また、攪乱によって北西側、南東側壁を失っている。

②平面プラン（Fig.116・117）

住居は、攪乱が多く、南北方向に長い、長方形プランをなす。現状規模では、北壁が1.4m以上、南壁1.85m、東壁4.55m、西壁1.4m以上を測ることができる。従って本住居跡は、短辺が1.9m前後、長辺が4.5m前後の非常に幅の狭い長方形プランと考えることができる。

また、主柱穴や炉跡など明瞭な付属する施設は伴っていないが、他の調査区（D区）で同規模の竪穴遺構が検出され、主柱穴が長辺の壁面に沿って検出され、また炉跡も明瞭であることから住居跡と考

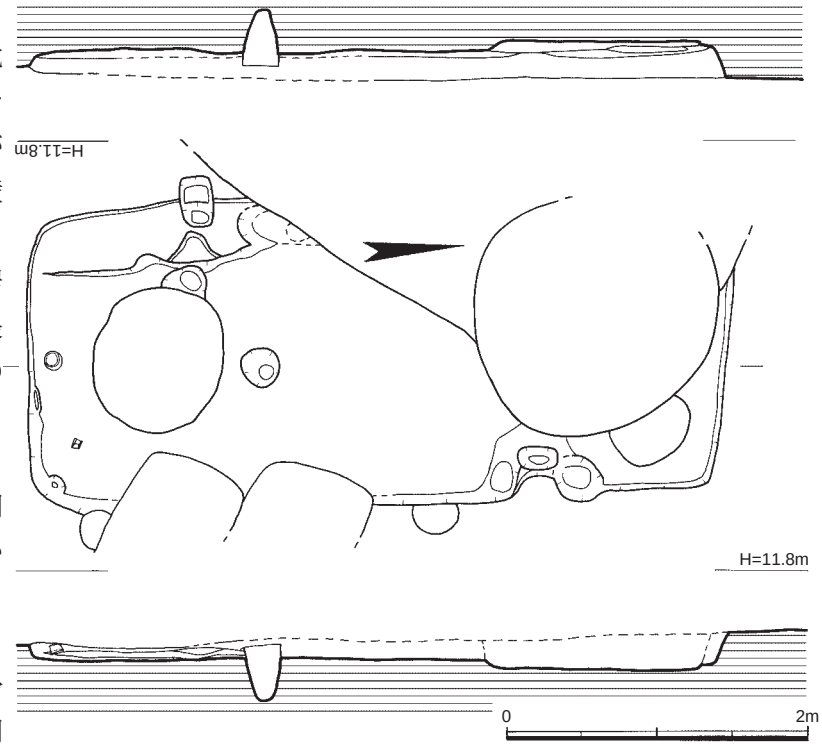


Fig.116　SC10住居跡出土状況実測図（1/50）

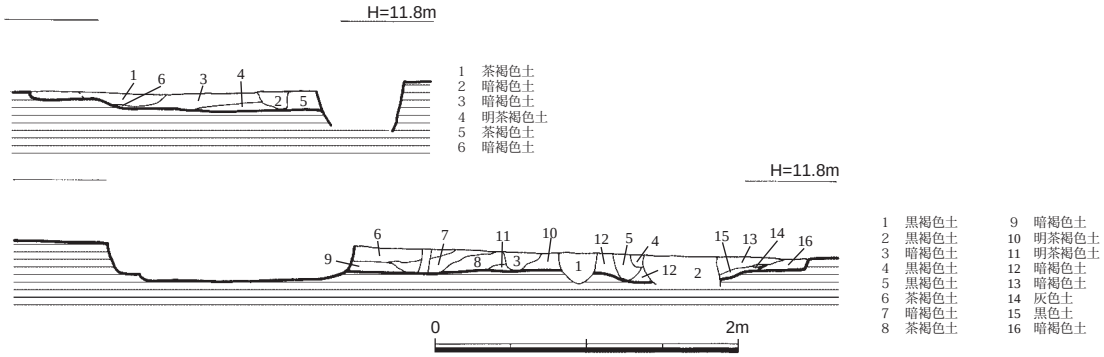


Fig.117　SC10住居跡土層断面実測図（1/50）

えている。

③出土遺物（Fig.118）

03081は、小型壷の口縁部である。口縁は肥厚し、端部は丸味をもっている。焼成は、軟質である。

03082は、非常に分厚い、上げ底の甕底部である。外底部は指オサエ、他はナデ調整を施す。器色は暗褐色を呈する。胎土に砂粒を多量に混入する。焼成は、軟質である。底部径は6.6cmを測る。これらは中期初頭の所産である。

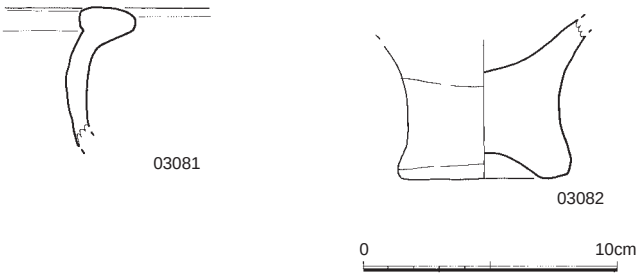


Fig.118　SC10住居跡出土遺物実測図（1/3）

3．建物群の調査（Fig.82・119〜154）

概　要

E区で検出された掘立柱建物は、13棟（SB01〜13）を数える。その規模は、基本的に梁行き１間・桁行き２間の建物が殆どを占めるものと考えられる。

建物群は、調査区の南東側に集中して検出され、弥生時代後期竪穴住居群の分布範囲とほぼ重複する範囲にあり、時期的には前後する例があるものの、住居跡とセットをなし、住居と倉庫の関係にあるものと考えられる。出土状況からは南北棟よりも東西棟建物が多く見られる。

また、規模的にはSB01建物のように柱間距離が長く、柱掘方も方形で大型の建物も見られるが、殆どの建物は規模の小さいものが多い。

柱掘方内からの出土遺物類はそれほど多くはなく、細片となったものが多いが可能な限り図化して造営時期の把握を行った。

以下、13棟の掘立柱建物の個別について説明を加えていくこととする。

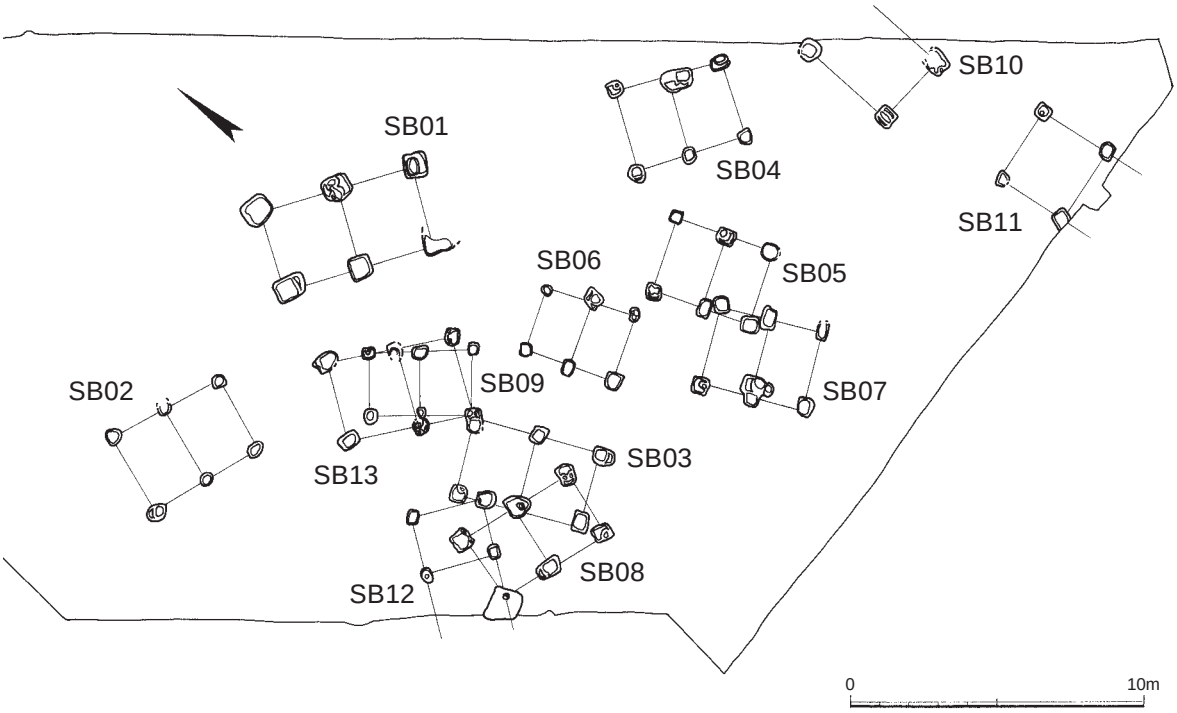


Fig.119　建物群出土状況全体図

SB01建物（Fig.120〜122）

本建物は、調査区の北西側で検出され、SC08竪穴住居と重複しており、これより新しい時期の掘立柱建物（倉庫）と考えられる。

（規模）

建物は、長軸方位がＮ－58°－Ｗを向く東西棟建物で、規模は桁行き・梁間が２×１間である。

また、桁行きの実長は、5.5mを測り、柱間寸法は2.75mである。梁間の実長は2.8mとなっている。床面積は、15.4㎡程度である。

（出土状況）

建物の掘り方は、規模相当の６個分をほぼ確認することができ、掘り方内にも柱痕が遺存していた。

北側の掘り方１は、長径100cm、短径90cm、深さ75cm程度を残す規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。また、隅部に寄って認められた柱痕の規模は径が30cm内外の円形を呈する。埋土内から弥生中期土器破片が出土している。

掘り方２は、現状で長径100cm、短径85cm、深さ75cmの程度の規模で、平面形は掘り方１と同様の隅丸長方形を呈する。掘り方のほぼ中央で検出された柱痕は、径が25cm規模の円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕埋土が暗黄褐色土で、周辺は黒褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層である。図化できる弥生後期土器類が若干出土している。

掘り方３は、現状の長径が85cm、短径80cm、深さ75cmを測る規模である。平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方で検出した柱痕は径が20cm以上の円形を呈する。

掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が黒褐色土で、周辺の埋め戻しが暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層である。埋土内から弥生後期土器破片が出土している。

掘り方４は、現状で攪乱によって掘り方のほぼ東側半分を失っているが、各辺の規模が残っているためその規模が明らかである。長径は80cm、短径70cm、深さ63cmを測る規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方の中央付近で検出できた柱痕は約20cm以上の規模の円形を呈する。

掘り方の埋土から弥生後期土器の破片が出土している。

掘り方５は、現状での長径が85cm、短径が70cm、深さ90cmを測る規模である。平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方内で確認できた柱痕は径が35cm前後の規模の円形を呈する。

掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗茶褐色土で、周辺の埋土は暗茶褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層となっている。断面観察では柱痕の底面は掘り方底部まで達していない。また、掘り方埋土内から器台破片が出土している。

掘り方６は、現状の長径が100cm、短径75cm、深さ75cmを測る規模で、平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方の隅部で検出できた柱痕は、径が25cm程度の規模の円形を呈する。

掘り方の土層断面は、柱痕が黒褐色土で、周辺の埋土は暗橙色土と黒色土の互層をなしている。掘り方埋土内から弥生中期土器の破片が出土している。

（出土土器）（Fig.122）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB01	E区	東西棟	N−58°−W	2×1間	5.50	2.75	2.80	2.80	15.40	1	隅丸長方形	100	90	75	3226	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.120
										2	隅丸長方形	100	85	75	3221	弥生式土器	〃	Fig.120
										3	隅丸長方形	85	80	75	3362	後期弥生式土器	〃	Fig.120
										4	隅丸長方形	80	70	63	3356	後期弥生式土器	〃	Fig.120
										5	隅丸長方形	85	70	90	3183	弥生式土器	〃	Fig.120
										6	隅丸長方形	100	75	75	3167	中期弥生式土器	〃	Fig.120

Tab.11　SB01建物跡計測表

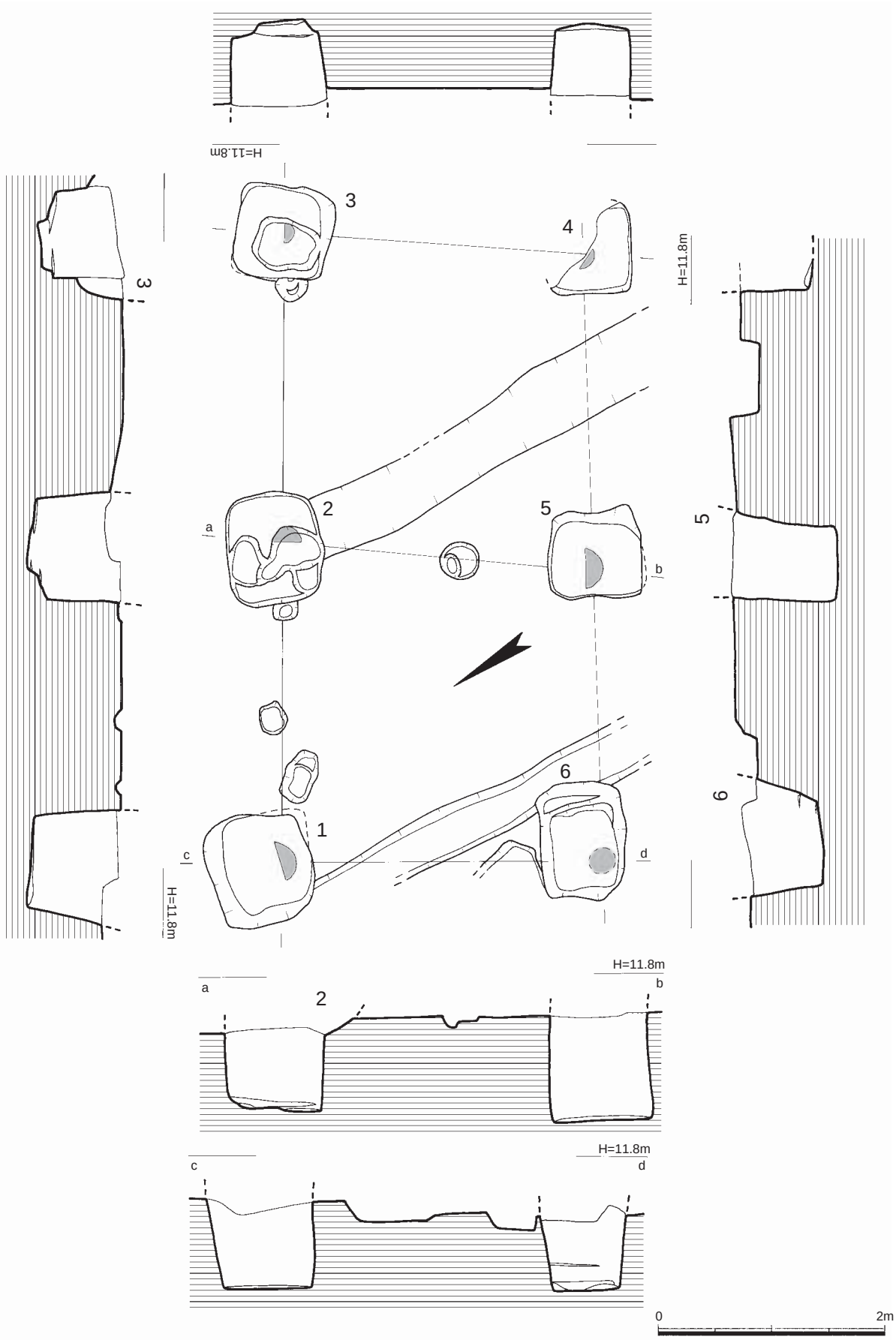


Fig.120　SB01建物出土状況実測図（1/50）

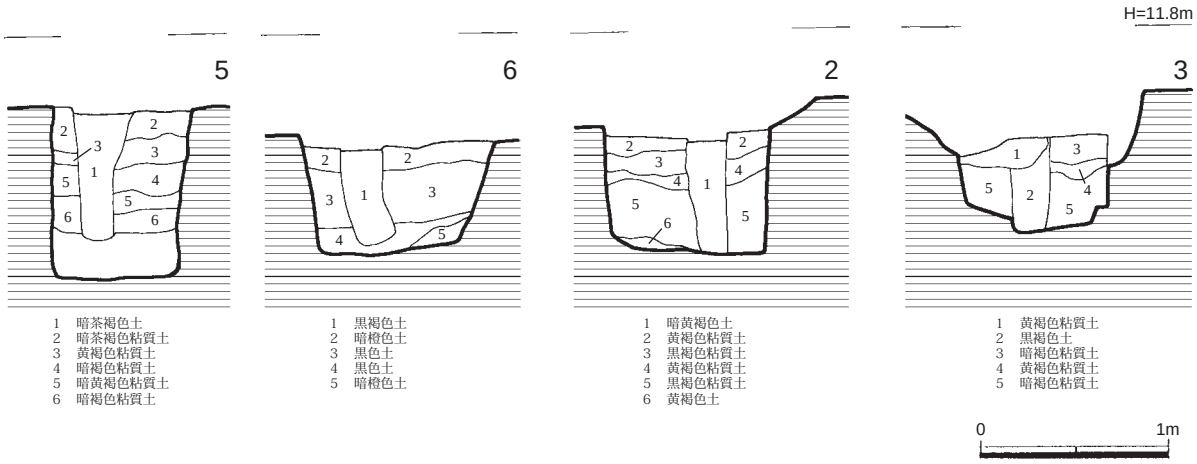


Fig.121　SB01建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

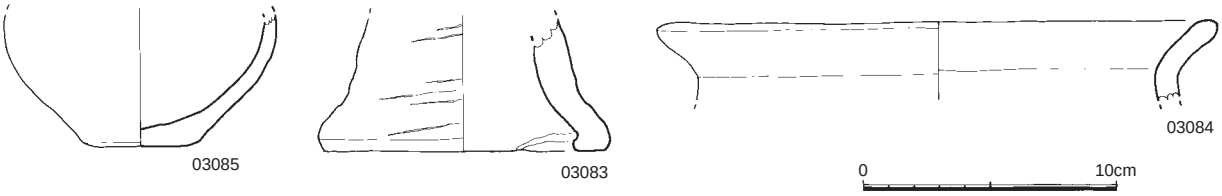


Fig.122　SB01建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

03085は、掘り方２内埋土出土の小型壷である。不安定な平底を有する。器面の磨滅が激しい。器色は、赤褐色を呈する。 胎土に砂粒を多く混入。焼成は軟質である。底部径4.6cmを測る。

03084は、厚手の甕破片である。断面く字形を呈する。磨滅が激しい。胎土に砂粒を多く含む。器色は、赤褐色を呈する。焼成は堅緻である。口径は22cmを測る。

03083は、掘り方５埋土内出土の器台である。外面に板小口調整の痕跡、内面はナデである。脚部は踏ん張って、畳み付は平坦面をなす。底部径11cmを測る。

SB02建物（Fig.123〜125）

本建物は、ＳＢ01建物の西側に位置し、SC09竪穴住居跡と切り合っており、これより新しい。検出建物の中では中間的な規模の倉庫と考えられる。

（規模）

建物は、長軸方位がＮ－70°－Ｗを向いた東西棟建物である。また、建物規模は、桁行き２間、梁間１間である。また、桁行きの実長は、4.20mで柱間は2.10mを測る。梁間は2.70mを測る。床面積は、11.35㎡規模と考えられる。

（出土状況）

掘り方１は、現状で長径が60cm、短径50cm、深さ50cmの規模で、不整円形を呈する。掘り方内で

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB02	E区	東西棟	N−70°−W	2×1間	4.20	2.10	2.70	2.70	11.35	1	不整円形	60	50	50	3274	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.123
										2	隅丸長方形	48	25以上	50	3297	〃	〃	Fig.123
										3	隅丸長方形	45	43	50	3280	―	〃	Fig.123
										4	隅丸長方形	60	45	50	3279	―	〃	Fig.123
										5	隅丸方形	50	50	38	3299	弥生式土器	〃	Fig.123
										6	不整円形	65	55	48	3298	―	〃	Fig.123

Tab.12　SB02建物跡計測表

確認できる柱根は径が10cm強の円形を呈する。掘り方土層断面は、柱痕が暗茶褐色土で、周辺の埋土は暗褐色土と黄褐色土で占められる。

掘り方２は、現状で長径が48cm、短径25cm以上、深さ50cm規模の隅丸長方形を呈する。掘り方内で確認できる柱痕は15cm程度の円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕が暗褐色土で、周辺埋土は暗褐色粘質土・黄褐色粘質土で占められる。

掘り方３は、現存で長径が45cm、短径が43cm、深さ50cmの隅丸長方形を呈する。掘り方内の柱痕は径が20cm程度の円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗茶褐色土で、周辺の埋土は黄褐色粘質土と暗褐色粘質土の互層となっている。

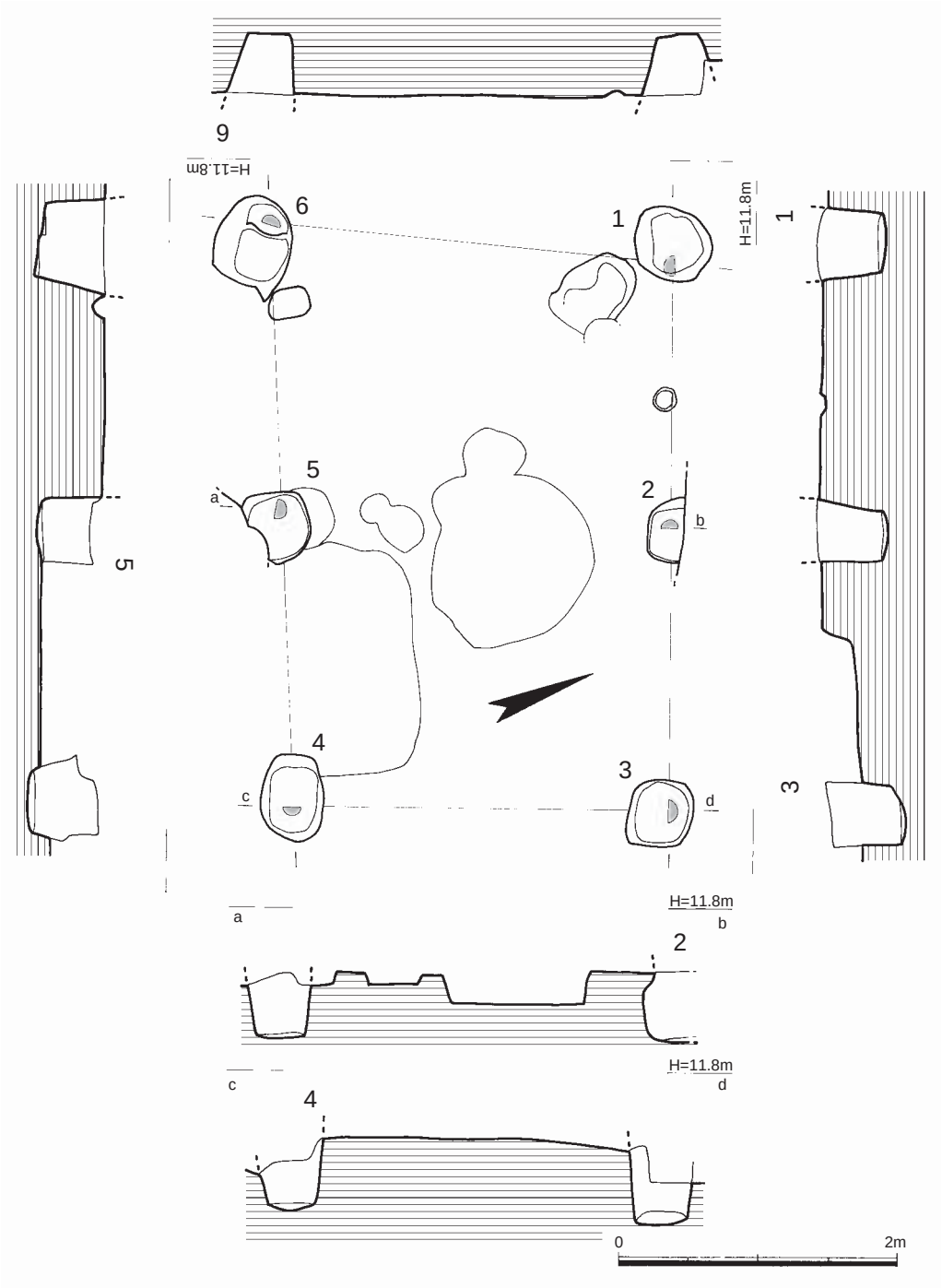


Fig.123　SB02建物出土状況実測図（1/50）

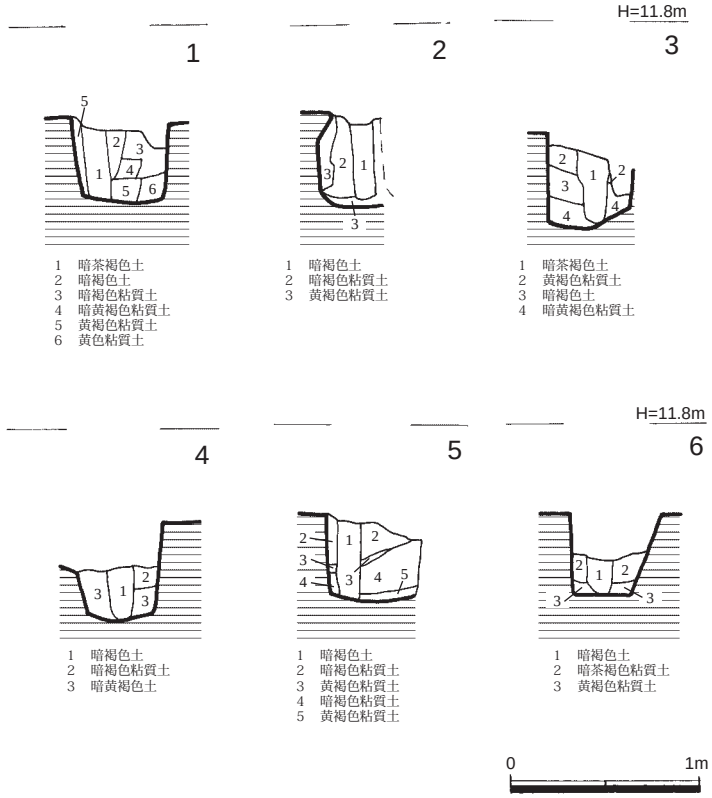


Fig.124　SB02建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

Fig.125　SB02建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

掘り方４は、現存で長径が60cm、短径45cm、深さ50cm規模の隅丸長方形を呈する。掘り方内の柱痕は径が15cm強の円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗褐色土で、周辺の埋土は暗黄褐色土・暗褐色粘質土の互層となっている。遺物の出土は見られない。

掘り方５は、現存で、長径が50cm、短径で50cm、深さ38cmを測る規模で、平面形は隅丸方形を呈する。掘り方内で確認できる柱痕は、径が15cm程度を測る円形である。

掘り方土層断面は、柱痕埋土が暗褐色土で、周辺埋土は暗褐色粘質土と黄褐色粘質土の互層である。埋土内から弥生中期土器甕が出土している。

掘り方６は、現存で、長径が65cm、短径が55cm、深さ48cmを測り、平面形は不整円形を呈する。掘り方内で確認できる柱痕は、径20cm弱程度を測る円形である。

掘り方の土層断面は、柱痕埋土が暗褐色土で周辺の埋土は暗茶褐色土と黄褐色粘質土の互層となっている。

（出土遺物）（Fig.125）

03086は、掘り方５の埋土から出土した甕破片である。口縁上端は垂れ、外面は尖る。胎土に砂粒の混入が多い。器色は橙色を呈する。焼成はやや軟質である。

SB03建物（Fig.126～128）

本建物は、調査区の南西側の比較的密集した建物群の１棟である。

（規模）建物は、長軸方位がＮ－24°－Ｗに向く、南北棟建物で、桁行きと梁間の規模は２×１間である。

また、桁行きの実長は4.20mで、柱間は1.80m・2.30mをそれぞれ測る。梁間は2.60mである。床面

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB03	E区	南北棟	N−24°−W	2×1間	4.20	1.80/2.30	2.60	2.60	10.90	1	隅丸長方形	85	55	55	3195	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.126
										2	隅丸長方形	65	50	60	3129	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.126
										3	隅丸長方形	70	60	55	3096	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.126
										4	隅丸長方形	70	50	60	3093	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.126
										5	不整方形	80	75	60	3190	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.126
										6	隅丸長方形	64	60	50	3192	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.126

Tab.13　SB03建物跡計測表

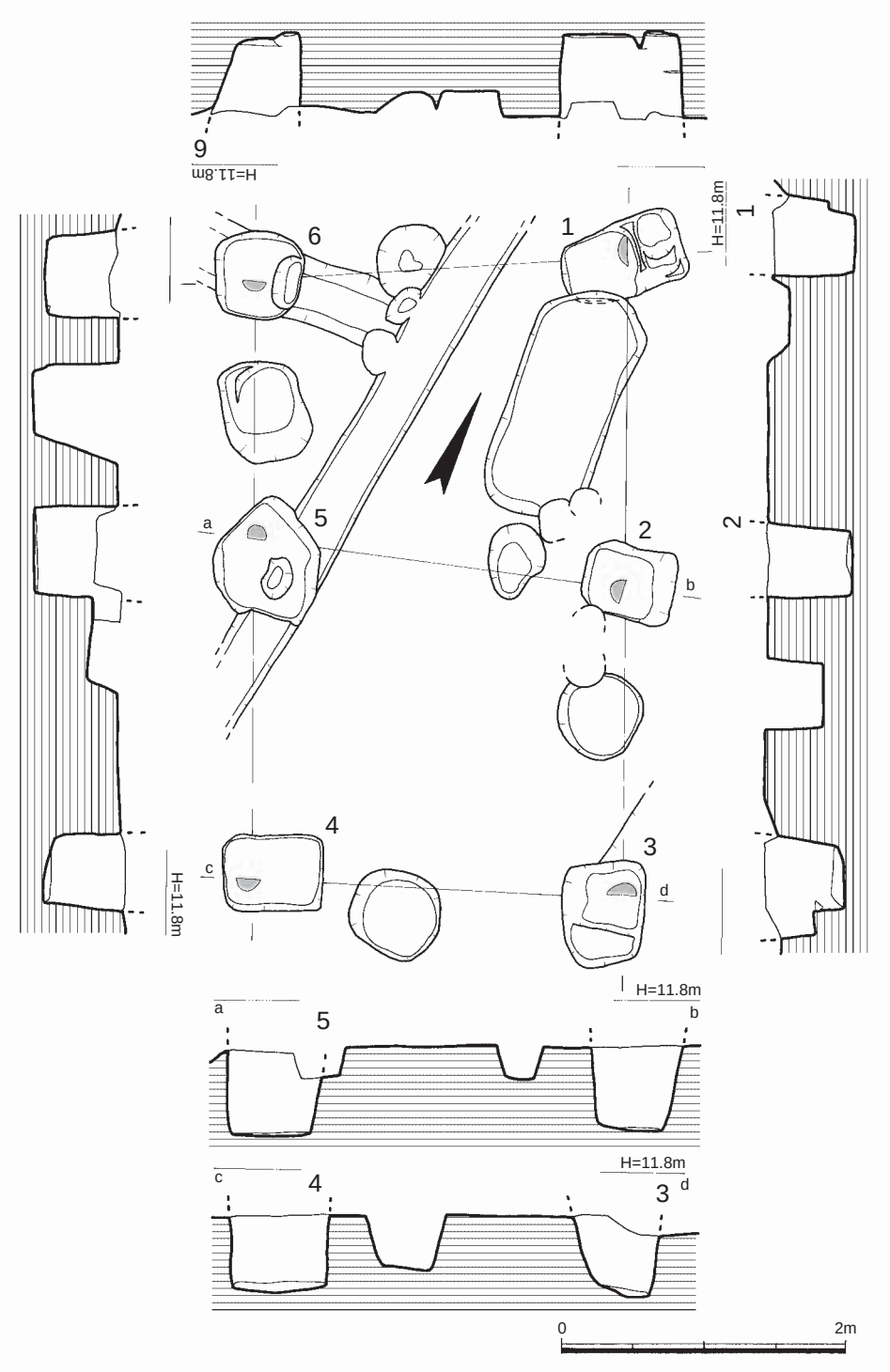


Fig.126　SB03建物出土状況実測図（1/50）

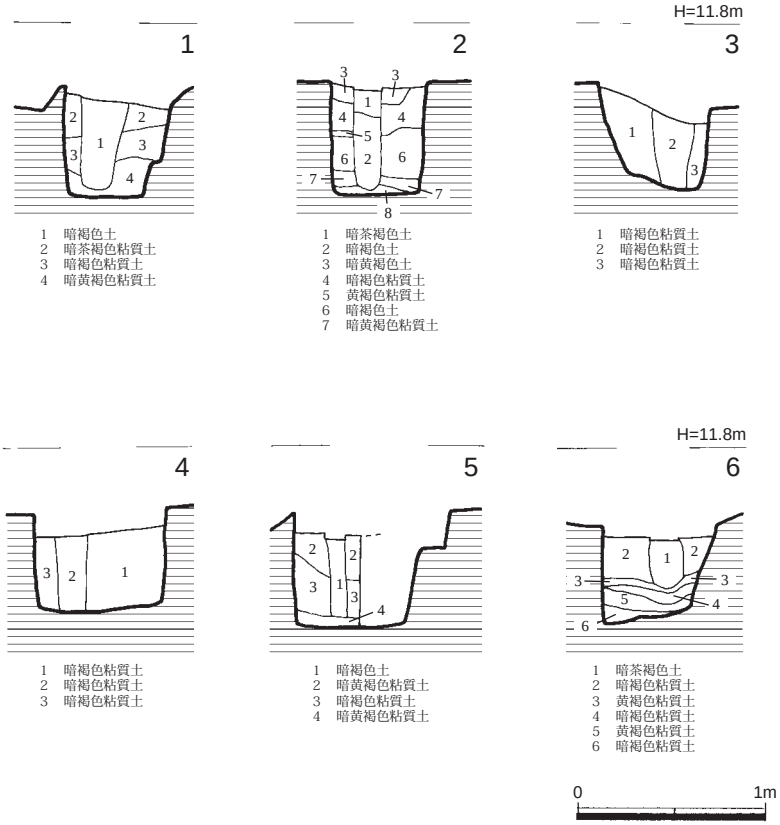


Fig.127　SB03建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

積は、10.9m規模と考えられる。

（出土状況）

掘り方１は、現況で、長径が85cm、短径が55cm、深さ55cmを測り、平面形は隅丸長方形を呈する。掘り方内で確認できた柱痕は、径が20cm弱規模で、円形を呈する。掘り方土層断面は、柱痕埋土が暗褐色土で、周辺の埋土は暗褐色・暗黄褐色粘質土の互層である。

掘り方２は、現存で、長径65cm、短径50cm、深さ60cmを測り、平面形は隅丸長方形となる。

掘り方内で確認できる柱痕は、径が15cm程度の規模の円形を呈する。掘り方土層断面は、掘り方１と同様の柱埋め戻しが観察できる。

掘り方３も隅丸長方形を呈し、長径が70cm、短径が60cm、深さ55cmの規模である。掘り方内で確認できる柱根は、径が20cm規模の円形を呈する。掘り方土層断面は、柱痕埋土が暗褐色粘質土である。

掘り方４も隅丸長方形を呈し、現状で長径が70cm、短径50cm、深さ60cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径が20cm弱の規模で、円形を呈する。掘り方土層断面は、掘り方３と類似する。

掘り方５は、平面形が不整な方形を呈し、現況で長径が80cm、短径が75cm、深さ60cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径が15cm程度の円形である。掘り方の土層断面は、掘り方１・２にほぼ類似する。

掘り方６は、隅丸長方形を呈し、長径が64cm前後、短径が60cm、深さ50cm程度の規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径が20cm弱で、円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕が暗茶褐色

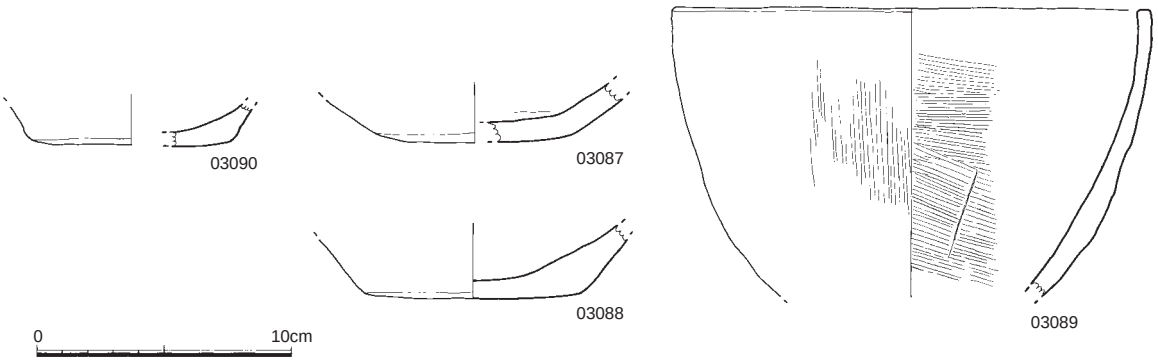


Fig.128　SB03建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

土で、柱根は掘り方底部まで達していない。

（出土遺物）（Fig.128）

03088は、不安定な平底の甕で、掘り方３の埋土から出土した。器色は淡黄色を呈する。内外面共に磨滅が著しい。焼成は軟質である。底部径8.4cmを測る。

03087は、不安定な平底を持つ甕底部である。掘り方４の埋土内で出土。器色は外面が暗褐色で、内面灰褐色を呈する。

03089は、掘り方５の埋土内で出土した鉢口縁部破片である。外面は、上部が荒いタテハケメで、下部はヘラナデ調整である。また、内面は横ハケメ調整である。口縁端部はヨコナデである。焼成は堅緻である。口径は、19cmを測る。

SB04建物（Fig.129〜131）

本建物は、調査区の東辺近くで検出された建物で、SC06住居跡と重複している。

（規模）

建物は、長軸方位をＮ－55°－Ｗに向ける東西棟建物である。建物の桁行きと梁間規模は２×１間である。桁行きの実長は、4mで、柱間長2mを測る。梁間長は2.8mである。また、床面積は、11.2㎡規模と考えられる。

（出土状況）

建物の掘り方は、何れも平面形が隅丸長方形を呈する。

掘り方１は、現状で長径が60cm、短径が50cm、深さ50cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径15cm程度である。柱痕周辺の埋土は、黄褐色粘質土・黒褐粘質色土の互層である。掘り方埋土から弥生後期の土器破片が出土した。

掘り方２は、現状で長径が55cm、短径50cm、深さ48cmの規模である。掘り方内で確認できた柱痕の径は、15cm程度である。掘り方の柱埋め戻し土は掘り方１と類似する。埋土中から弥生後期の土器破片が出土した。

掘り方３は、現状では長径が54cm、短径は50cm、深さ48cmを測る。掘り方内で確認できた柱痕は、径20cm弱である。掘り方の埋め戻しは、掘り方１と殆ど同一の手法を執る。埋土内より弥生後期の土器破片が出土している。

掘り方４は、東側半分を欠損するが、長径60cm、短径50cm以上、深さ40cmを測る。柱痕は確認されなかった。埋土から弥生中期の土器が出土している。

掘り方５は、現状で長径が54cm、短径50cm、深さ30cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径10cm強を測り、円形を呈する。掘り方の土層断面は、柱痕埋土が暗茶褐色土で、周辺埋土が暗褐色粘質土・暗黄褐色粘質土の互層となっており、掘り方２などと共通する埋め戻しを行っている。埋土から弥生後期の土器破片が出土している。

掘り方６は、長径が60cm、短径が55cm、深さ40cmを測る規模である。掘り方内で確認できた柱痕

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB04	E区	東西棟	N−55°−W	2×1間	4.00	2.00	2.80	2.80	11.20	1	隅丸長方形	60	50	50	3162	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.129
										2	隅丸長方形	55	50	48	3067	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.129
										3	隅丸長方形	54	50	48	3072	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.129
										4	隅丸長方形	60	50以上	40	3078	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.129
										5	隅丸長方形	54	50	30	3077	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.129
										6	隅丸長方形	60	55	40	3220	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.129

Tab.14　SB04建物跡計測表

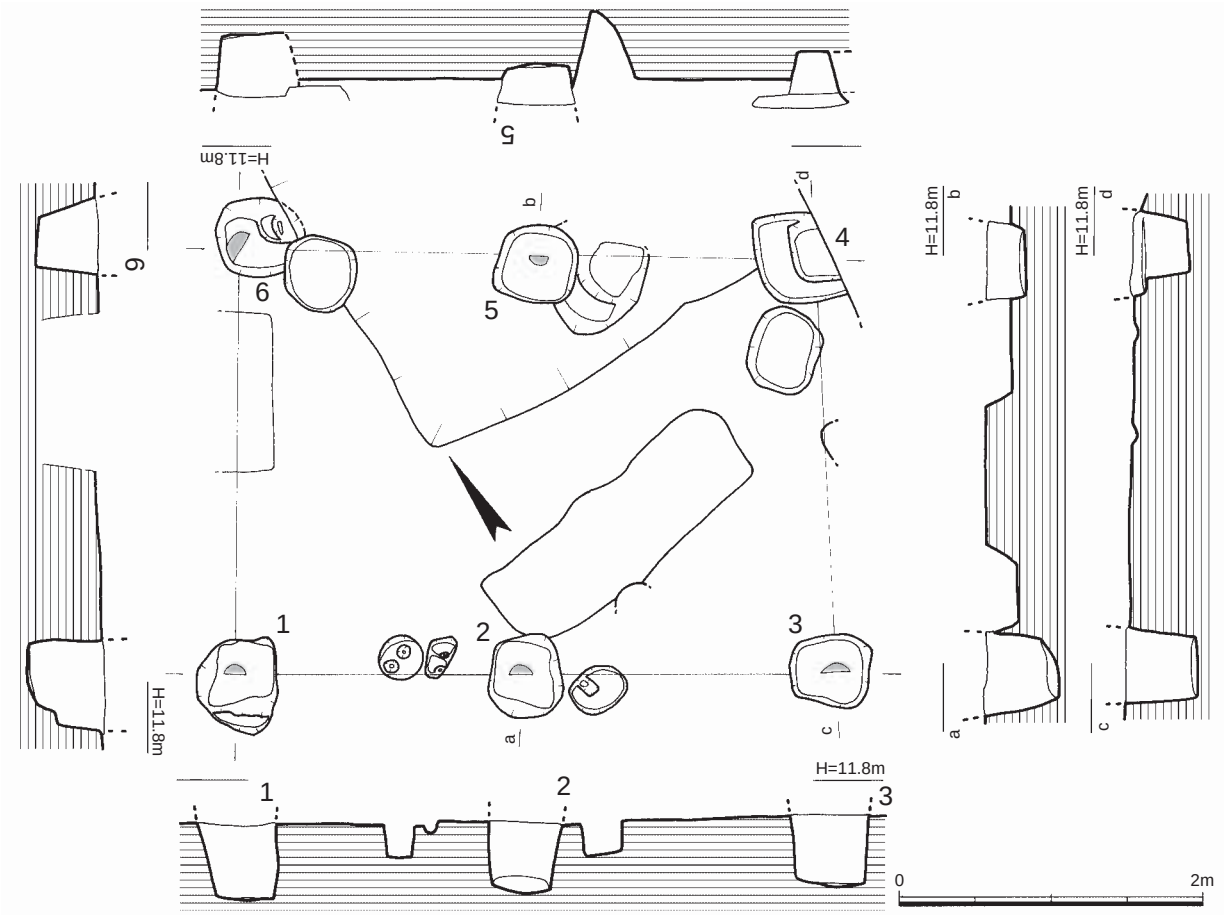


Fig.129　SB04建物出土状況実測図（1/50）

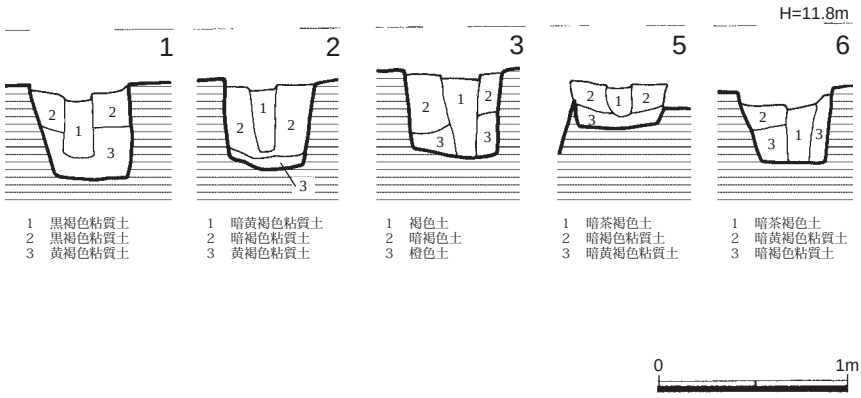


Fig.130　SB04建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

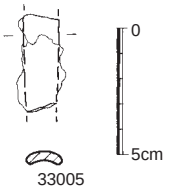


Fig.131　SB04建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

は径が20cm程度の規模である。掘り方土層断面は、暗黄褐色土・暗褐色土を交互に詰める手法である。埋土内から弥生後期の土器破片が出土している。

（出土遺物）（Fig.131）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB05	E区	南北棟	N−21°−W	2×1間	3.60	1.80	2.60	2.60	9.36	1	隅丸長方形	55	50	65	3115	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.132
										2	隅丸長方形	65	45	50	3054	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.132
										3	隅丸方形	60	60	54	3056	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.132
										4	円形	50	53	60	3060	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.132
										5	隅丸長方形	65	55	65	3023	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.132
										6	隅丸長方形	50	48	42	3112	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.132

Tab.15　SB05建物跡計測表

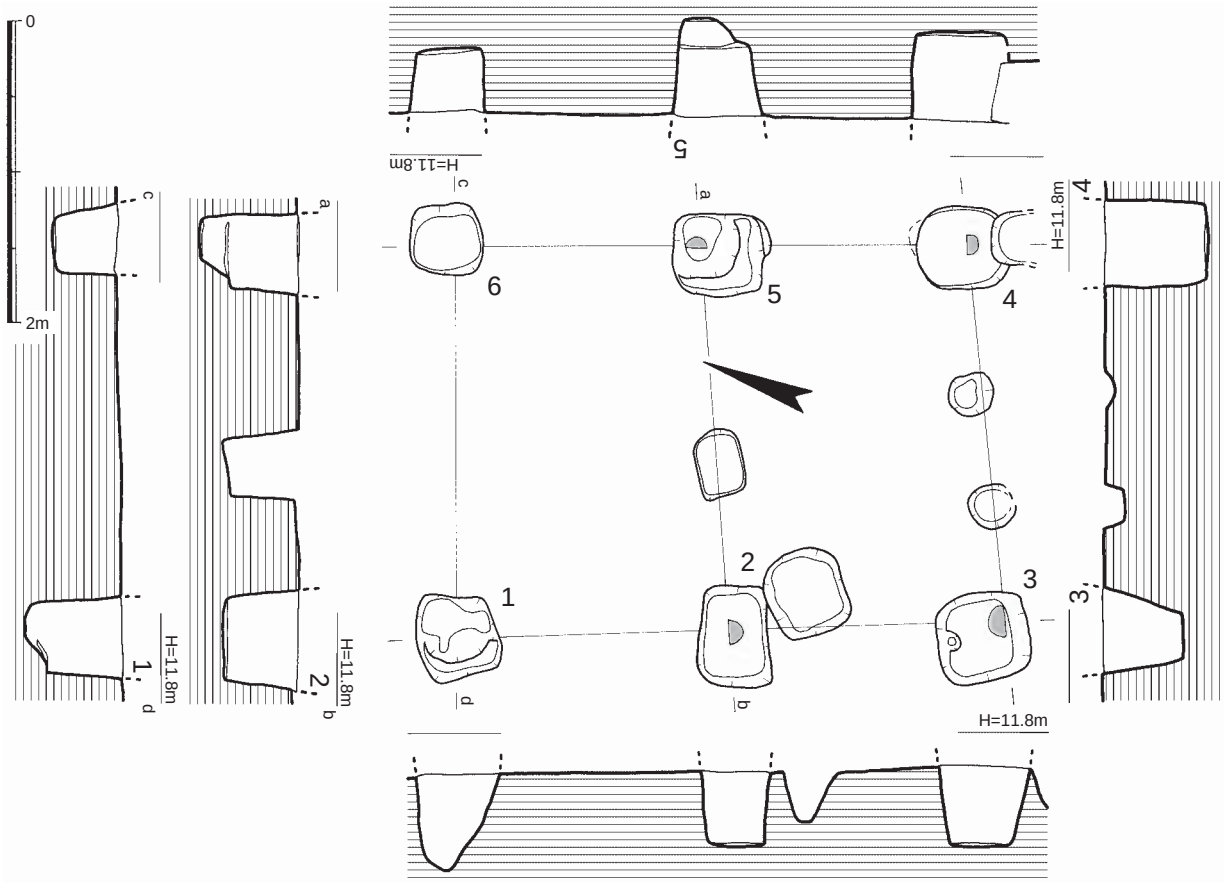


Fig.132　SB05建物出土状況実測図（1/50）

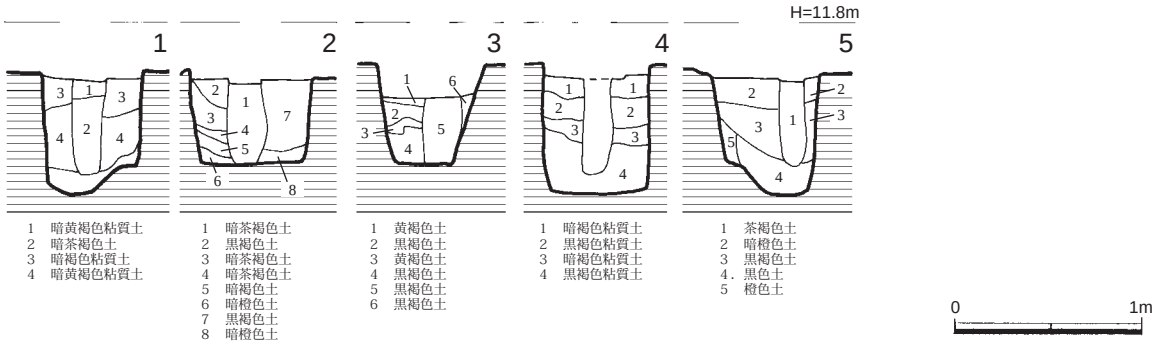


Fig.133　SB05建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

33005は、鉄ヤリガンナ破片である。刃部は欠損する。残存長3.9cm、身幅1.3cm、身厚4mmを測る。

SB05建物（Fig.132～134）

本建物は、調査区南側の中央で検出された。SB04建物の西側に隣接し、ほぼ同規模の建物である。

（規模）

建物は、長軸方位をＮ－21°－Ｗにとる南北棟建物である。桁行き・梁間の規模は、２×１間である。桁行きの実長は、3.6mで、柱間は1.8mを測る。梁間は2.6mである。また、床面積は、9.36㎡程度となる。

（出土状況）

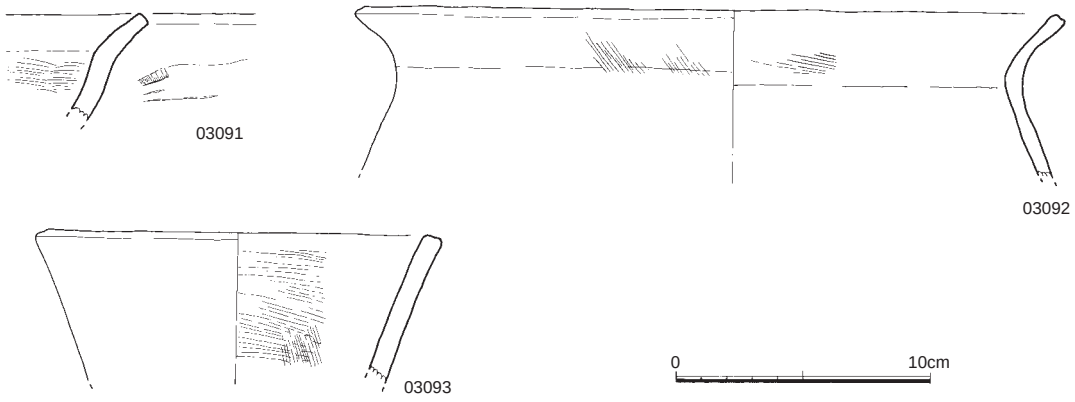


Fig.134　SB05建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

掘り方は、全体に小型で、その形状も隅丸長方形に近いものが多い。掘り方６個のうち、掘り方１・６では掘り方内で柱痕を検出することができなかったが、同１の土層断面で柱痕を確認できた。

また、掘り方２～５では柱痕の規模は径15cm程度の円形である。柱の埋め戻しは、色調と粘度の異なる土壌を交互に付き固めて行っている。また、掘り方１・４・５では柱痕は掘り方の底面まで達していない。

掘り方１～４では掘り方から弥生中期の土器破片が出土した。また、掘り方５・６では弥生後期の土器類が出土している。

（出土遺物）（Fig.134）

図化できたのは、掘り方５の埋土から出土した土器類のみである。

03091は、椀の小片である。口縁が緩い屈曲をもつ。外面は、口縁端部でヨコナデ、これ以下でヘラナデ（？）調整か。内面は横ハケメ調整。器色は、外面が黒褐色、内面褐色を呈する。 胎土は密で、焼成は堅緻である。

03092は、磨滅の激しい甕口縁部破片である。口縁部は端部でやや跳ね上げ状となる。頸部付近に斜めのハケメ調整が見られる。 胎土には砂粒を多く混入する。焼成は軟質である。口径は26cmを測る。

03093は、広口壷の口縁部破片である。器面調整は、外面はナデか。内面に横ハケメを残す。 胎土に砂粒の混入が多い。焼成は堅緻である。口縁部径14cmを測る。

SB06建物（Fig.135・136）

本建物は、調査区南側の中央部で検出された。ＳＢ05・07建物と長軸を揃える位置にある。

（規模）

建物は、長軸方位をＮ－16°－Ｗに向ける南北棟建物である。桁行きと梁間の規模は、２×１間である。桁行きの実長は、3.20mで、柱間はそれぞれ1.5m・1.6mを測る。梁行は、2.20mである。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB06	E区	南北棟	N−16°−W	2×1間	3.20	1.50/1.60	2.20	2.20	7.04	1	長方形	60	36	30	3248	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.135
										2	不整方形	60	55	60	3148	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.135
										3	長方形	50	35	42	3120	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.135
										4	隅丸方形	55	55	35	3099	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.135
										5	隅丸長方形	54	44	25	3138	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.135
										6	隅丸長方形	54	45	18	3245	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.135

Tab.16　SB06建物跡計測表

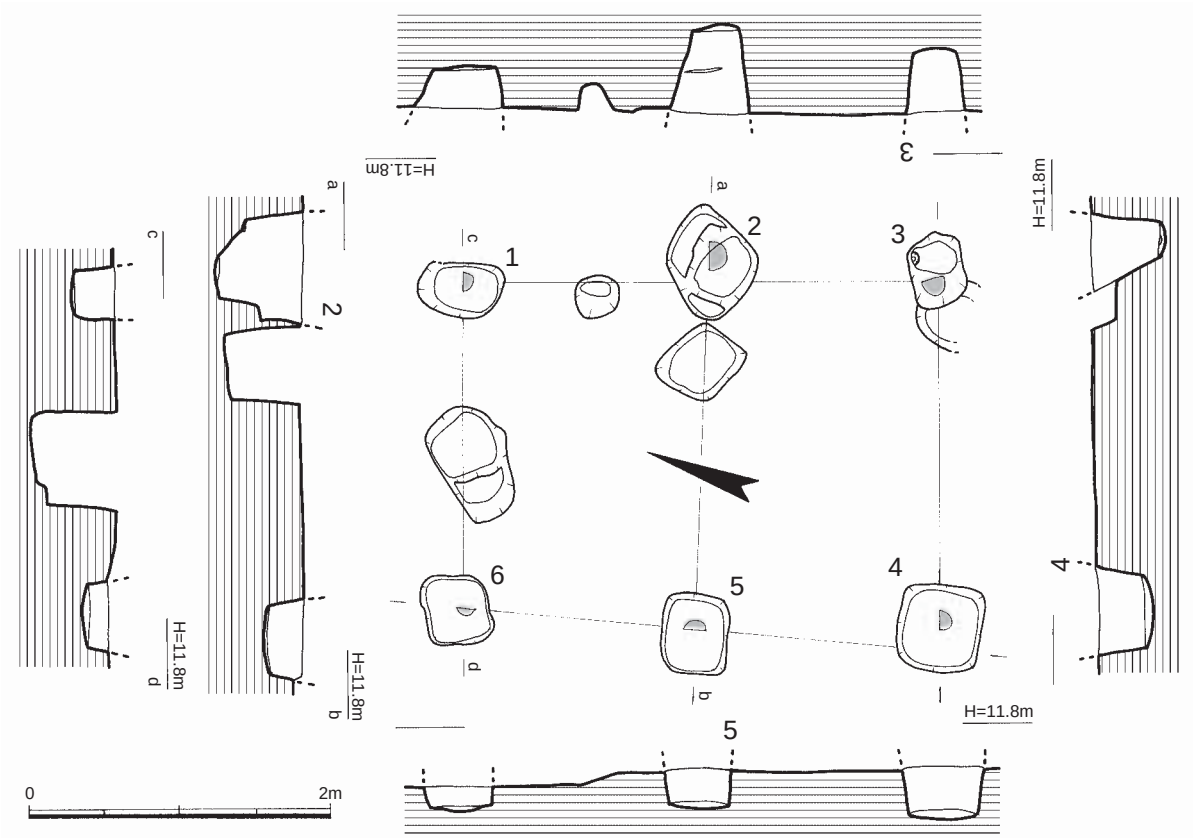


Fig.135　SB06建物出土状況実測図（1/50）

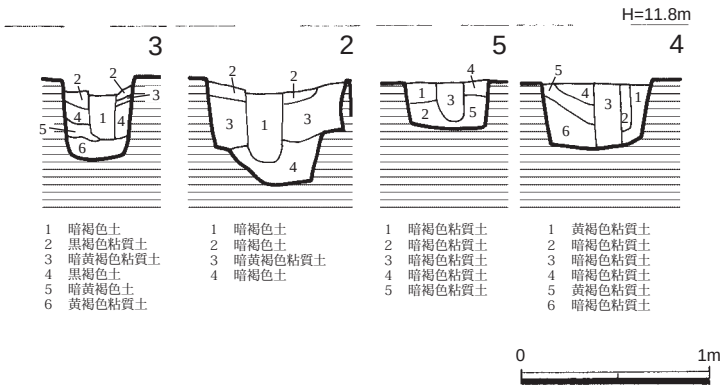


Fig.136　SB06建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

また、床面積は7㎡程度である。

（出土状況）

柱掘り方は、６本が残る。規模はほぼ近いもので、長方形や隅丸方形の形状のものが多い。また、一部を除いて上部の削平が激しく、遺存の悪いものも見られる。掘り方内で確認できる柱痕は、径が15cm前後の規模のものが殆どである。

また、掘り方の土層断面では、柱痕周辺の埋め戻しに色調の違う粘質土を交互に投入し、版築状に固める共通手法が見られる。

掘り方３～６の埋土内からは弥生後期の土器破片も出土しているが、図化することのできる土器類は非常に少なく、時期を明確に示せない。

SB07建物（Fig.137～139）

本建物は、調査区の南端に近いSB05建物の西で検出された。建物の規模では中間的なものと考えることができる。

（規模）

建物は、長軸方位が、N－23°－Wに向く南北棟の建物である。桁行きと梁間規模は、２×１間である。また、桁行きの実長は、3.70mで、柱間は1.8m・1.9mをそれぞれ測る。梁間は2.65mとなる。

また、床面積は9.8㎡程度と考えられる。

（出土状況）

柱掘り方は、切り合いのある２ヶ所を除き、平面形はほぼ隅丸長方形若しくは方形を呈する形状となる。削平のために残りはあまり良くない。

掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径15～20cmを測る。柱埋め戻しの際の埋土は、色調の違う土壌を交互に投入して固めており、共通する手法である。

掘り方の埋土のうち、掘り方２・４・６では弥生後期土器の破片も出土しているが、図化できるものは少なく、掘り方１出土の窪み石が唯一である。

（出土遺物）（Fig.139）

13012は、掘り方１出土の窪み石である。平面中央の両面に打痕によるくぼみを設けて磨り石として使用している。砂岩製。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB07	E区	南北棟	N−23°−W	2×1間	3.70	1.80/1.90	2.65	2.65	9.80	1	隅丸方形	58	50	34	3053	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.137
										2	隅丸長方形	78	50	35	3055	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.137
										3	隅丸長方形	65以上	40	25	3203	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.137
										4	隅丸長方形	70	50	35	3037	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.137
										5	隅丸方形?	60以上	50	45	3047	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.137
										6	隅丸長方形	60	58	45	3301	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.137

Tab.17　SB07建物跡計測表

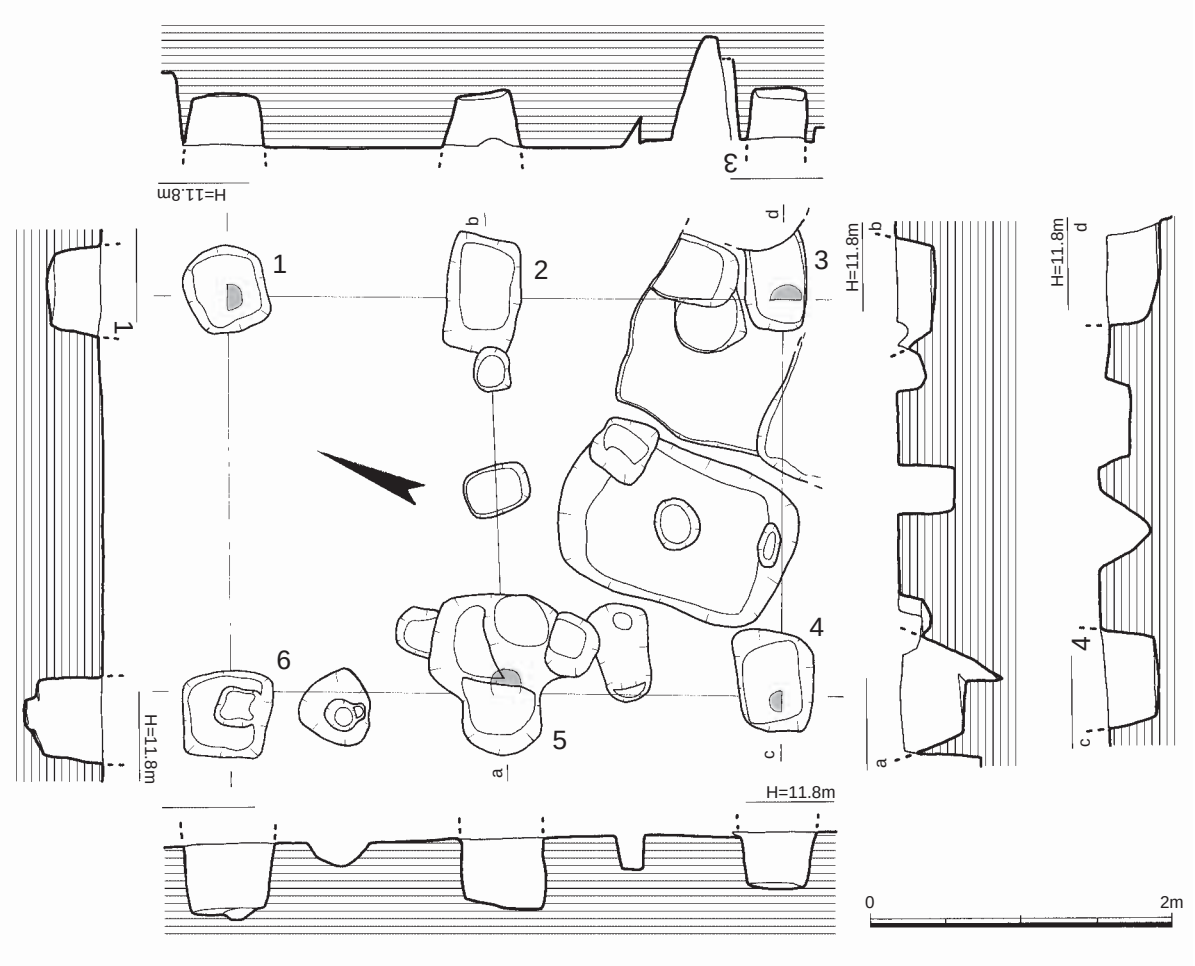


Fig.137　SB07建物出土状況実測図（1/50）

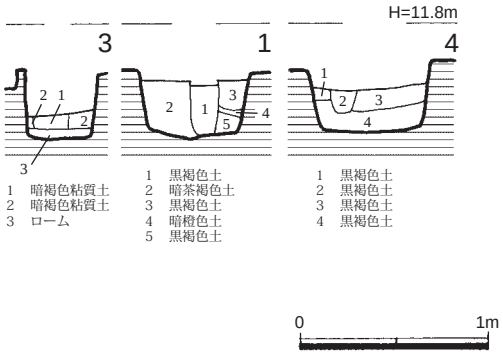


Fig.138　SB07建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

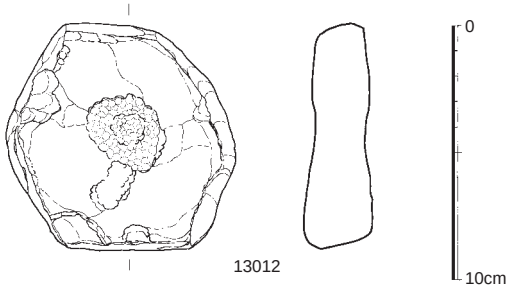


Fig.139　SB07建物柱穴出土遺物測図（1/3）

SB08建物（Fig.140～142）

本建物は、調査区の南西隅で検出された２×１間規模の側柱建物である。

（規模）

建物は、長軸方位がＮ－72°－Ｗを向いた東西棟建物である。また、桁行きと梁間の規模は、２×１間である。桁行き実長は、4.3mで、それぞれの柱間は2.3m・1.9mを測る。梁間は2.5mを測る。

また、床面積は10.8㎡程度の規模と考えられる。

（出土状況）

柱掘り方は、６個の分が全体揃って検出された。形状は隅丸長方形～同方形のもので占められる。

掘り方１は、現状で長径が75cm、短径が60cm、深さ55cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径20cm程度の規模である。埋土内からは弥生式小型甕破片が出土している。

掘り方内の土層断面は、柱痕埋土が暗褐色粘質土で、周辺の埋土は暗褐色粘質土と黄褐色粘質土との互層となっている。

掘り方２は、形状が不整な方形をなしている。現状では長径が80cm、短径75cm、深さ55cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径15cm内外と考えられる。埋土内からの土器類の出土は無かった。掘り方内の土層断面は、柱痕部が暗褐色土で、周辺の埋土は黄褐色粘質土と暗褐色粘質土との互層となっている。

掘り方３は、平面の形状が隅丸方形を呈する。現状では長径が62cm、短径が62cm、深さ74cmを測る。掘り方埋土内から弥生後期土器の破片が出土している。

また、掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗茶褐色土である。また柱痕周辺の埋土は色調の異なる粘質土を交互に投入して突き固めている。

掘り方４は、撹乱のために全体の形状を残さないが、底面に柱痕が一部残り、柱列上に乗る。柱痕は円形で、深さは15cmを測る。

掘り方５は、他に比較して遺存状況が良好である。平面形状は隅丸長方形を呈し、現状で長径が90cm、短径が60cm、深さ60cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径20cm前後と考えられる。また、埋土内からは弥生後期の土器破片が出土している。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB08	E区	東西棟	N−72°−W	2×1間	4.30	2.30/1.90	2.50	2.50	10.80	1	隅丸長方形	75	60	55	3095	弥生式土器	弥生後期	Fig.140
										2	不整方形	80	75	55	3190	―	弥生後期	Fig.140
										3	隅丸方形	62	62	74	3193	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.140
										4	隅丸長方形?	―	―	15	―	―	弥生後期	Fig.140
										5	隅丸長方形	90	60	60	3098	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.140
										6	隅丸長方形	62	60	75	3219	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.140

Tab.18　SB08建物跡計測表

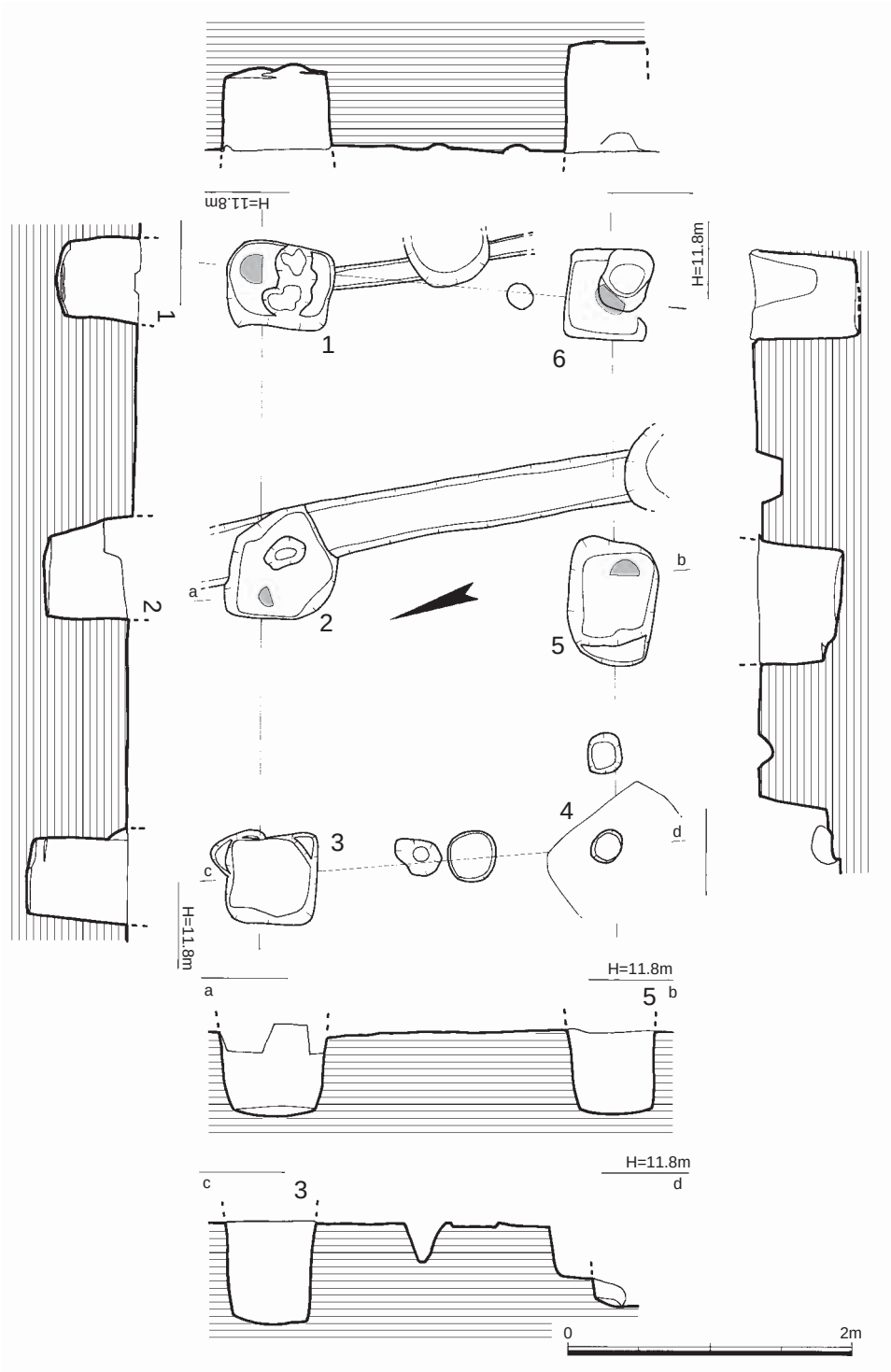


Fig.140　SB08建物出土状況実測図（1/50）

掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗褐色土で、他は色調の異なる粘質土を交互に投入して突き固めている。

掘り方６は、平面形が隅丸長方形を呈する。現状では長径が62cm、短径60cm、深さ75cmを測る。埋土内から弥生中期土器の破片が出土した。

（出土遺物）（Fig.142）

03094は、掘り方１で出土した小型甕である。不安定なレンズ底を有する。内外面ともにナデ調整

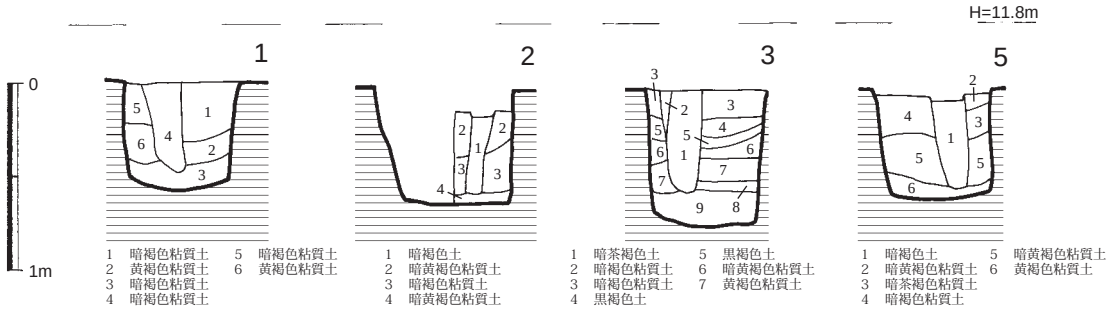


Fig.141　SB08建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

を施す。胎土には砂粒を多く含む。器色は、内外面ともに淡黄色を呈する。焼成はやや軟質である。底部径2cmを測る。

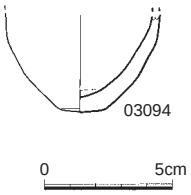


Fig.142　SB08建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

SB09建物（Fig.143・144）

本建物は、調査区の南西側で検出された比較的小規模の側柱建物である。

（規模）

建物は、長軸方位をN－38°－Wに向ける南北棟建物である。桁行きと梁間の規模は、２×１間である。また、桁行きの実長は2.9mで、それぞれの柱間は1.5mと1.4mである。梁間は、1.7mを計る。床面積は、5㎡程度を測る。

（出土状況）

掘り方は、削平が著しく、下部しか残らない。平面形はすべて隅丸長方形を呈する。

掘り方１は、現状で長径が40cm、短径が36cm、深さ30cmを測る。掘り方内で確認される柱痕は、ほぼ中央にあり、径10cm程度の規模である。掘り方埋土から弥生後期の土器破片が出土した。
掘り方内の土層断面は、柱痕が暗褐色土で、周辺の埋土は暗褐色・黄褐色の粘質土を交互に投入する。

掘り方２は、現状で長径が44cm、短径が36cm、深さ24cmを測る。埋土中から弥生後期の土器破片が出土した。掘り方上面で確認できた柱痕は、径15cmを測る。掘り方土層断面では、明瞭に柱痕が残る。

掘り方３は、現状で長径が36cm、短径が34cm、深さ10cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径15cm程度を測る。

掘り方４は、現状で長径が70cm、短径が40cm、深さ48cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、掘り方の隅に寄っており、径20cm程度の規模と考えられる。掘り方の土層断面は、柱痕の埋土が暗褐色土で、周辺埋土は色調の異なる粘質土を交互に投入して突き固めている。

掘り方５は、現状で長径が46cm、短径が40cm、深さ30cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径10cm程度を測る。埋土内から弥生後期の土器破片が出土している。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB09	E区	南北棟	N－38°－W	2×1間	2.90	1.50/1.40	1.70	1.70	5.00	1	隅丸長方形	40	36	30	3189	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.143
										2	隅丸長方形	44	36	24	3187	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.143
										3	隅丸長方形	36	34	10	―	―	弥生後期	Fig.143
										4	隅丸長方形	70	40	48	3195	―	弥生後期	Fig.143
										5	隅丸長方形	46	40	30	3211	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.143
										6	隅丸長方形	40	38	44	3127	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.143

Tab.19　SB09建物跡計測表

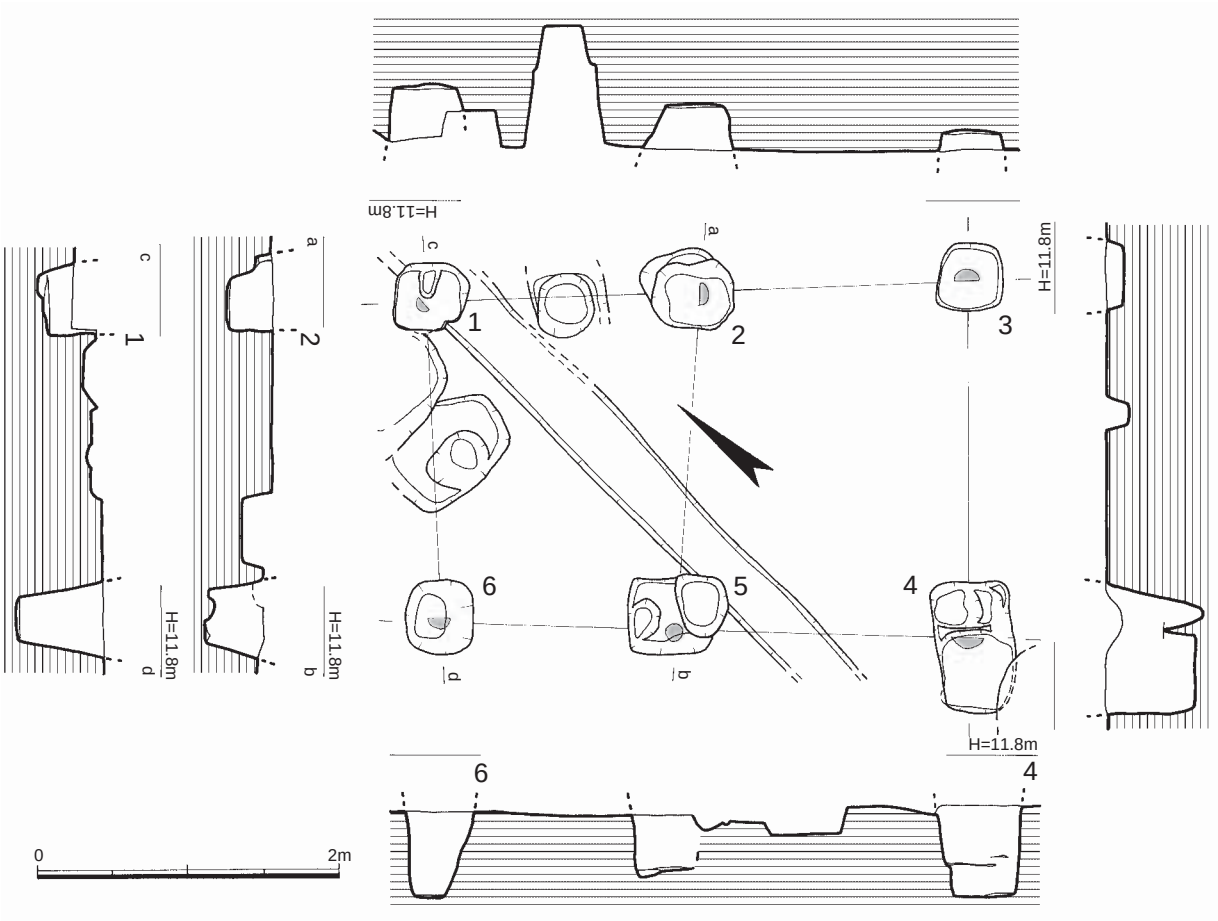


Fig.143　SB09建物出土状況実測図（1/50）

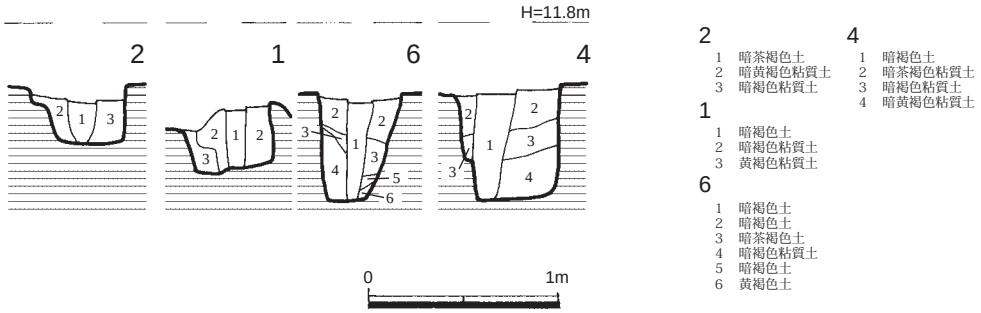


Fig.144　SB09建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

掘り方６は、現状で長径が40cm、短径が38cm、深さ44cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径15cm程度の規模と考えられる。埋土内からは弥生後期の土器破片は出土している。

掘り方の土層断面は、柱痕埋土が暗褐色土で、周辺埋土は色調の異なる壌土を交互に投入して突き固めている。

SB10建物（Fig.145・146）

本建物は、調査区の南東隅にかかる建物で、調査区外に延びる。検出できた掘り方の状況から本来は２×１間規模の建物ではないかと推定される。

（規模）

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規　模	桁　行		梁　行		床面積	柱穴番号	形　状	規　模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB10	E区	南北棟	N−65°−W	2×1間?	3.70以上	3.40	2.70	2.70	10.0以上	1	隅丸方形	70	70	50	3107	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.145
										2	隅丸方形	60	60	55	3014	中期弥生式土器	弥生後期	Fig.145
										3	円形	72	70	65	3020	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.145

Tab.20　SB10建物跡計測表

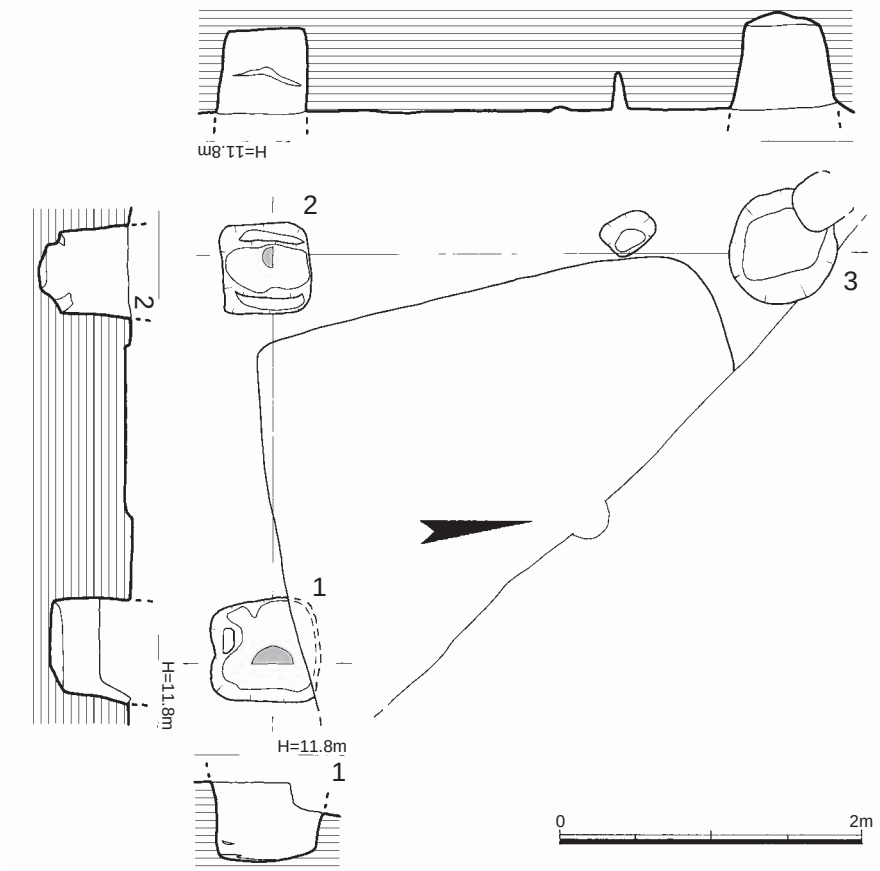


Fig.145　SB10建物出土状況実測図（1/50）

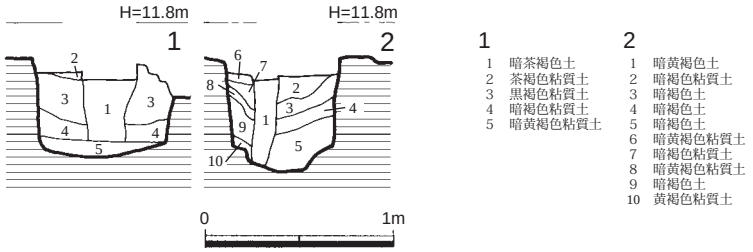


Fig.146　SB10建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

建物は、長軸方位をN−65°−Eに向ける南北棟建物である。その規模は２×１間程度と考えられる。桁行きの実長は、3.7m以上で、柱間の分る一間長が3.4mを測る。梁間は2.7mを測る。また、床面積は10㎡以上と考えられる。

（出土状況）

柱掘り方で検出できたものは３個にとどまっている。

掘り方１は、平面形が隅丸方形を呈する。

現状では長径が70cm、短径が70cm、深さ50cmを測る。掘り方内の柱痕は、径が25cm程度の規模である。

掘り方２は、同形を呈する。現状で長径が60cm、短径が60cm、深さ55cmを測る。掘り方内で確認できる柱痕は、径15cm程度の規模である。

掘り方３は、円形を呈し、径70cm程度、深さ65cmを測る。掘り方内埋土からは弥生後期の土器破片が出土した。

SB11建物（Fig.147〜149）

本建物は、調査区南東隅で検出された。南側で調査区外となっているため規模は１×１間以上と考えられる。

（規模）

建物は、長軸方位がN−４°−Wに向く南北棟建物である。規模は１×１間以上のものと思われる。

桁行き・梁間長ともに2.6mを測る。また、床面積は5.2㎡以上と考えられる。

（出土状況）

掘り方１は、隅丸長方形をなし、長径が60cm、短径が55cm、深さ44cmを測る。

掘り方２は、隅丸長方形を呈し、現状では長径が48cm以上、短径が48cm、深さ30cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径が20cm程度の規模と考えられる。掘り方内の埋土から弥生中期・後期土器の破片が出土している。掘り方土層断面では、柱痕部の埋土が暗褐色土で、周辺の埋土は粘質の暗褐色土と黄褐色土を交互に投入している。

掘り方３は、隅丸長方形を呈し、現状で長径が55cm以上、短径が54cm、深さ35cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕は、径が15cm程度の規模である。埋土内からは弥生中期・後期の土器破片が出土している。

掘り方４は、平面が不整な隅丸方形を呈する。現状で長・短径が50cm、深さ42cmを測る規模である。柱痕の規模は、径20cm程度と考えられる。埋土内から弥生中期・後期土器の破片が出土している。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模（桁行×梁行）	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	床面積(㎡)	柱穴番号	形状	規模 長径	規模 短径	規模 深さ	旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
SB11	E区	南北棟	N−4°−W	1×1間	2.60	2.60	2.60	2.60	5.20	1	隅丸長方形	60	55	44	3002	―	弥生後期	Fig.147
										2	隅丸長方形	48以上	48	30	3010	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.147
										3	隅丸長方形	55以上	54	35	3018	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.147
										4	隅丸方形	50	50	42	3007	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.147

Tab.21　SB11建物跡計測表

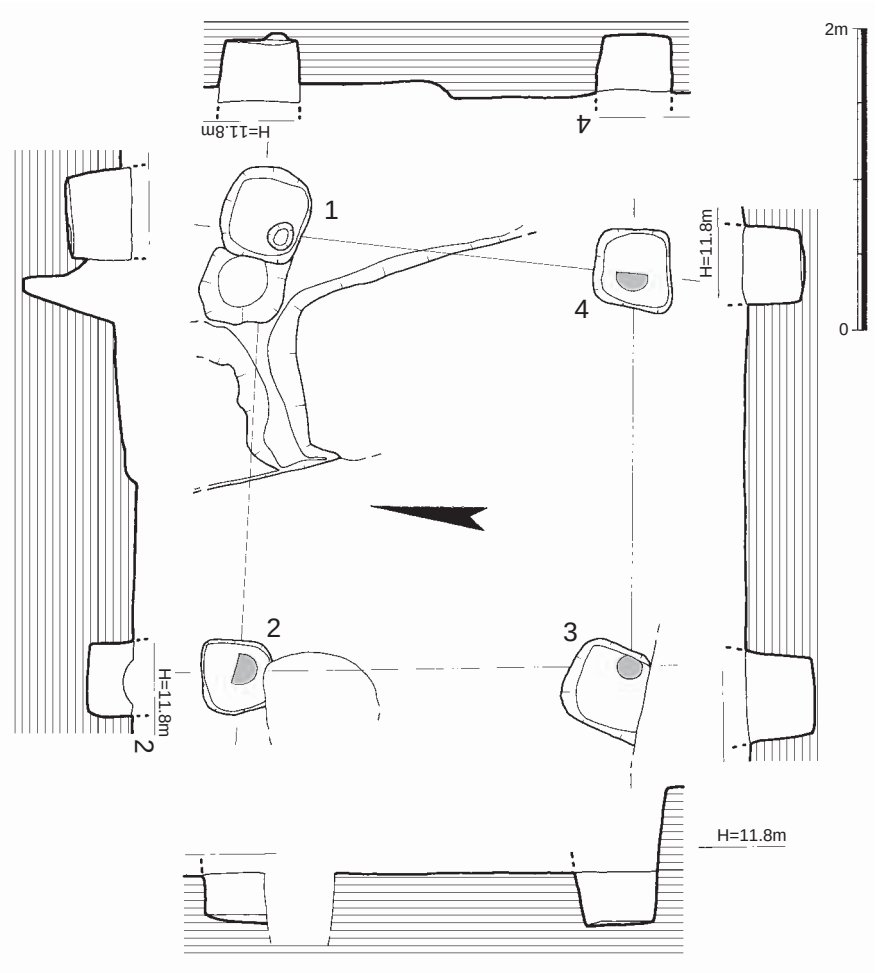


Fig.147　SB11建物出土状況実測図（1/50）

（出土遺物）（Fig.149）

03095は、掘り方３出土の甕破片である。外開する口縁部は、端部がやや垂れる。調整は、内外面ともに荒いハケメを施す。器色は、外面が褐色、内面が淡橙色を呈する。胎土は密で、焼成も堅緻である。

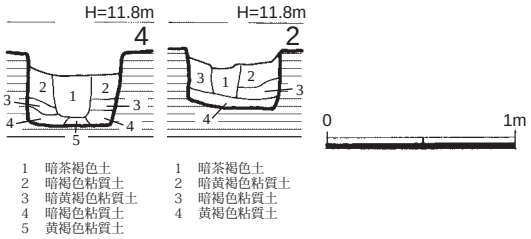


Fig.148　SB11建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

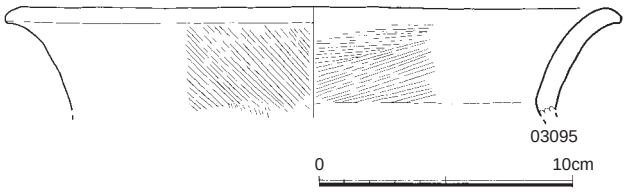


Fig.149　SB11建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

SB12建物（Fig.150・151）

本建物は、調査区の南西端出検出された。建物は西側の調査区外に伸びているが、周辺建物の規模と大きく変わる点はなく、２×１間規模の建物と考えられる。

（規模）

建物は、長軸方位がN－38°－Eを向く南北棟建物である。桁行きと梁間の規模は２×１間程度となるか。また、桁行きの実長は、3.4m以上で柱間長1.8mを測る。梁間は2.5mを測る。床面積は、8.5㎡以上と考えられる。

（出土状況）

柱掘り方で規模若しくは柱位置が分るものは、５個である。

掘り方１は、平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が70cm、短径が60cm、深さ6ocmを測る規模である。

また、掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径10cm程度である。掘り方の土層断面では、柱痕が暗褐色土、周辺が黄褐色土・暗黄褐色土の互層となっている。

掘り方２は、やや小振りで、平面形が隅丸方形を呈する。

現状では長径が50cm、短径が42cm、深さ48cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径10cmを測る。

掘り方の土層断面には柱痕が明瞭に観察できる。柱痕部分の埋土は、暗褐色土で、周辺の埋土は暗褐色・黄褐色の粘質土の互層となっている。

掘り方３は、他の掘り方によって自身の掘り方形状を残さないが、掘方の隅に片寄って、径20cm程の小ピットがあり、これが柱位置と考えられる。深さは上部から測って70cmとなる。

掘り方４は、平面形が隅丸長方形になると考えられる。

現状では、長径が55cm、短径が40cm、深さ30cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕の規模は、10cm強と考えられる。

掘り方５は、平面形が隅丸長方形を呈する。

現状では長径が50cm、短径が40cm、深さ40cmを測る規模である。

掘り方の埋土内からは弥生後期土器の破片が出土している。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB12	E区	南北棟	N−38°−E	2×1間以上	3.40以上	1.80	2.50	2.50	8.50以上	1	隅丸長方形	70	60	60	3191	―	弥生後期	Fig.150
										2	隅丸長方形	50	42	48	3194	―	弥生後期	Fig.150
										3	―	―	―	70	―	―	弥生後期	Fig.150
										4	隅丸長方形	55	40	30	―	―	弥生後期	Fig.150
										5	隅丸長方形	50	40	40	3253	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.150

Tab.22　SB12建物跡計測表

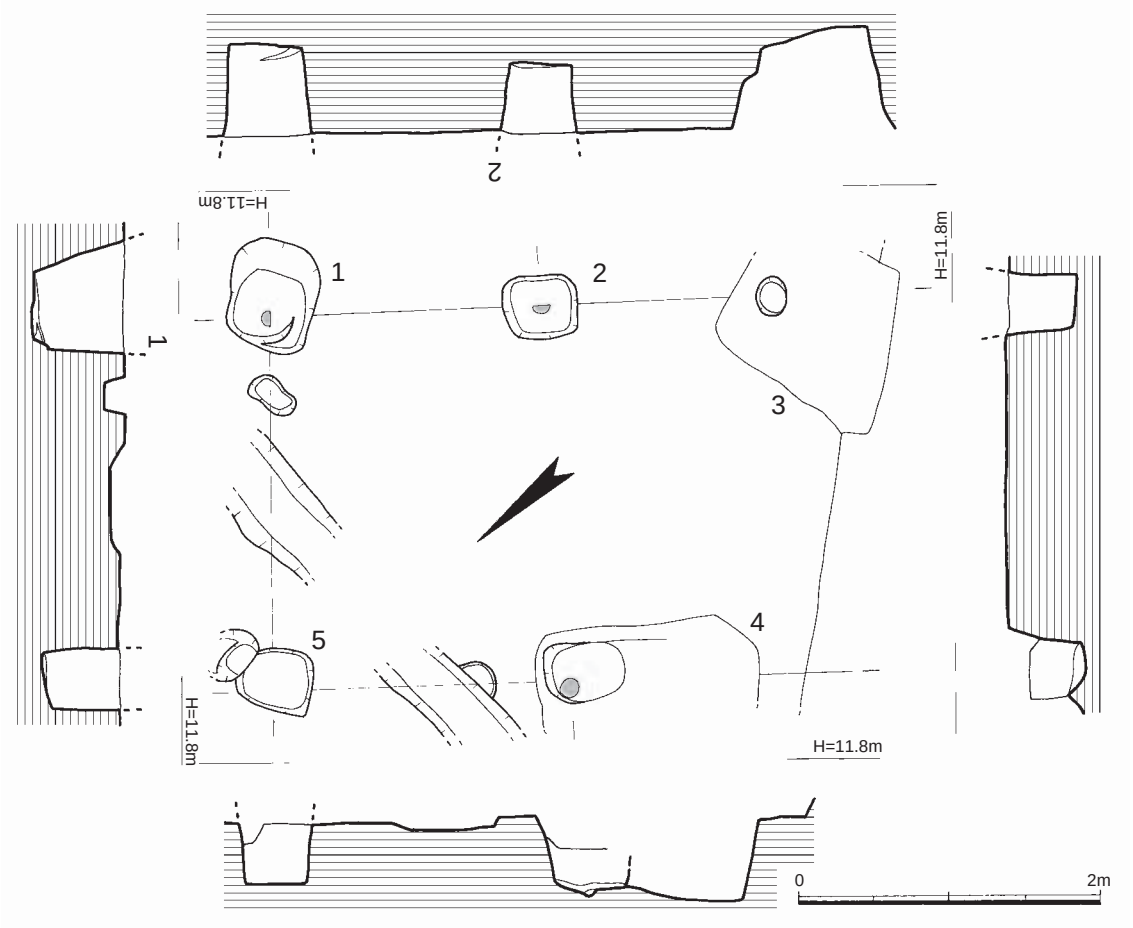


Fig.150　SB12建物出土状況実測図（1/50）

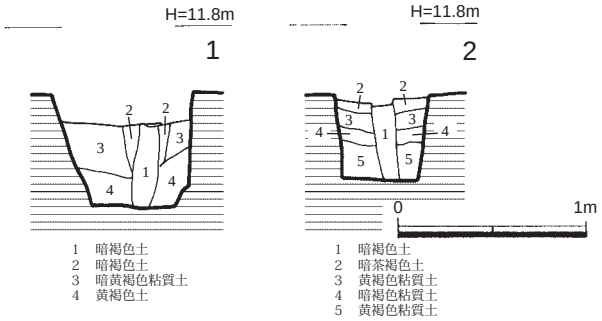


Fig.151　SB12建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

SB13建物（Fig.152～154）

本建物は、調査区南側の中央に検出された。

（規模）

建物は、長軸方位がN－50°－Wを向く東西棟建物である。桁行きと梁間の規模は、２×１間である。

また、桁行きの実長は、4.3mで、それぞれの柱間長は2.5m、1.8mを測る。梁間長は、2.5mを測る。床面積は、11㎡程度と考えることができる。

（出土状況）

建物の柱掘り方は、６個が区別される。また、掘り方４以外では柱痕が確認できる。

建物番号	地区名	建物方向	長軸方位	規模	桁行		梁行		床面積	柱穴番号	形状	規模			旧遺構番号	主要な出土遺物	建物時期	挿図番号
				(桁行×梁行)	実長(m)	柱間寸法(m)	実長(m)	柱間寸法(m)	(㎡)			長径	短径	深さ				
SB13	E区	東西棟	N−50°−W	2×1間	4.30	2.50/1.80	2.50	2.50	11.00	1	隅丸長方形	80	62	60	3126	弥生式土器	弥生後期	Fig.152
										2	隅丸長方形	55以上	50	80	3216	―	弥生後期	Fig.152
										3	隅丸長方形	60	50	50	3158	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.152
										4	隅丸長方形	50	35	65	3195	―	弥生後期	Fig.152
										5	隅丸長方形	68	55	82	3210	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.152
										6	隅丸長方形	65	55	80	3196	後期弥生式土器	弥生後期	Fig.152

Tab.23　SB13建物跡計測表

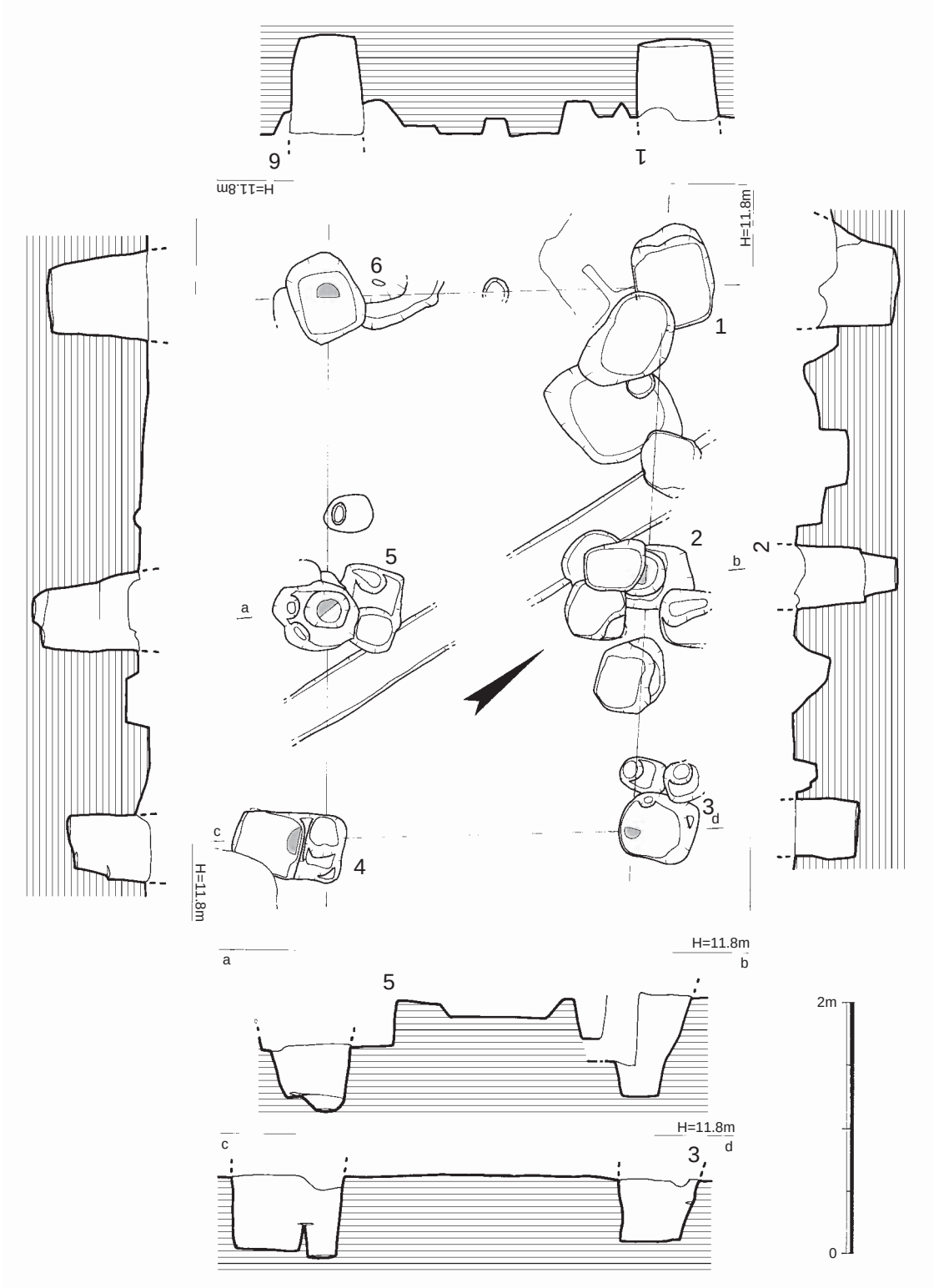


Fig.152　SB13建物出土状況実測図（1/50）

掘り方１は、平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が80cm、短径が62cm、深さ60cmを測る規模である。柱痕は掘り方の平面では確認できていないが、土層断面で確認ができた。これによると径20cm弱の規模である。掘り方埋土内からは、弥生式土器の器台、投弾が出土している。

掘り方２は、いくつかピットの切合いのなかでかろうじて区別できるものである。平面形は隅丸長

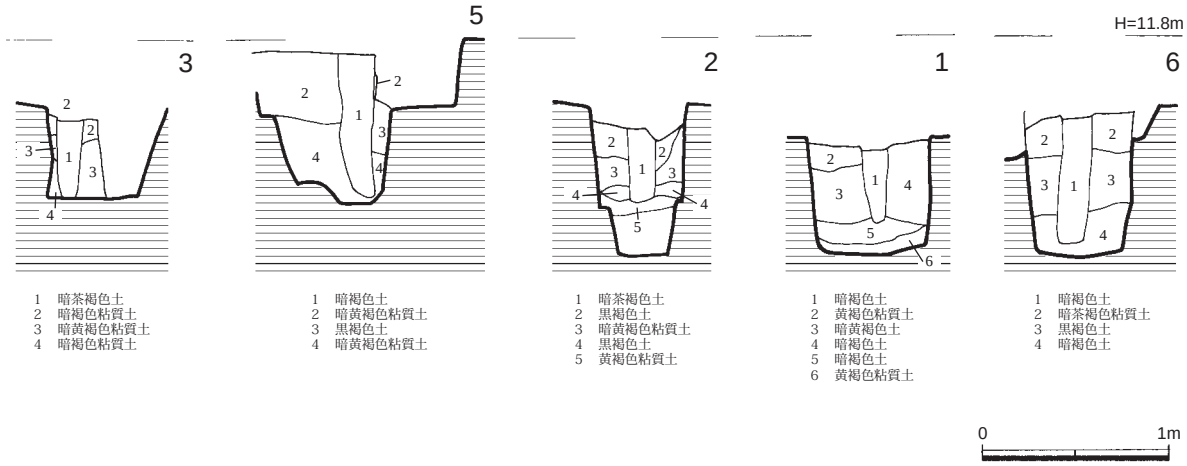


Fig.153　SB13建物柱穴掘方土層断面実測図（1/40）

方形と考えられる。現状では、長径が55cm以上、短径が50cm、深さ80cmを測る規模である。
掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径20cmを測る程度である。

掘り方３も平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が60cm、短径が50cm、深さ50cmを測る規模である。掘り方内で確認できる柱痕規模は、径10cm強である。
掘り方埋土からは弥生後期土器の破片が出土している。

掘り方４も平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が50cm、短径が35cm、深さ65cmを測る規模である。

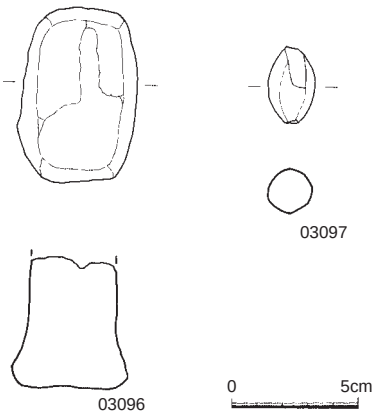


Fig.154　SB13建物柱穴出土遺物実測図（1/3）

掘り方５も平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が68cm、短径が55cm、深さ82cmを測る規模である。

埋土内から弥生中期・後期の土器破片が出土している。土層断面では柱痕が明瞭に残る。掘り方内で確認できる柱痕の規模は、径20cm弱のものである。
掘り方６は、平面形が隅丸長方形を呈する。現状では、長径が65cm、短径が55cm、深さ80cmを測る規模である。埋土中から弥生中期・後期土器の破片が出土している。土層断面では柱痕が明瞭で、周辺の埋土は色調の異なる粘質土を交互に投入している。

（出土遺物）（Fig.154）

03096は、中実の器台破片である。淡黄褐色を呈する。器面の摩滅が著しい。

03097は、土製の小型投弾である。これらは何れも掘り方１出土。

４．土壙群の調査（Fig.155～177、Pl.20～22・28）

概　要

土壙群は、調査区内で13基が検出されている。このうちSK10～13の４基は他の土壙群と形態を異にすることから、区別できそうである。これらは不整な長方形をなし、北側部分の床面が斜面となり、南側端で丸く柱穴状に深くなる形態をとっている。各土壙は対置する位置には無く、方向もバラバラである。この土壙の南端側の柱穴状部分と北側の床面が斜面となって上がっていく形状は、柱根の抜き跡ととも考えられるが、これほどの深さを持つ柱は最初に立てる場合でも斜めに落とし込んで立てる仕掛けが必要となるのではないか。この点から、独立して立てられた柱の場合やSK10・11のように線上に南北に並ぶことも考えることができる。

他の９基の土壙群は、長方形（SK01・07・05）や身幅の細い長方形（SK02・03・08・09）、竪穴状（SK04・06）の土壙である。弥生後期の住居群からはやや離れた位置にあり、幾つかの土壙を除いて覆土内からは弥生中期初頭～前半期の土器類が出土することから、調査区のほぼ中央部に残る長方形竪穴住居（SC10）とセットになる時期の所産である可能性が高い。

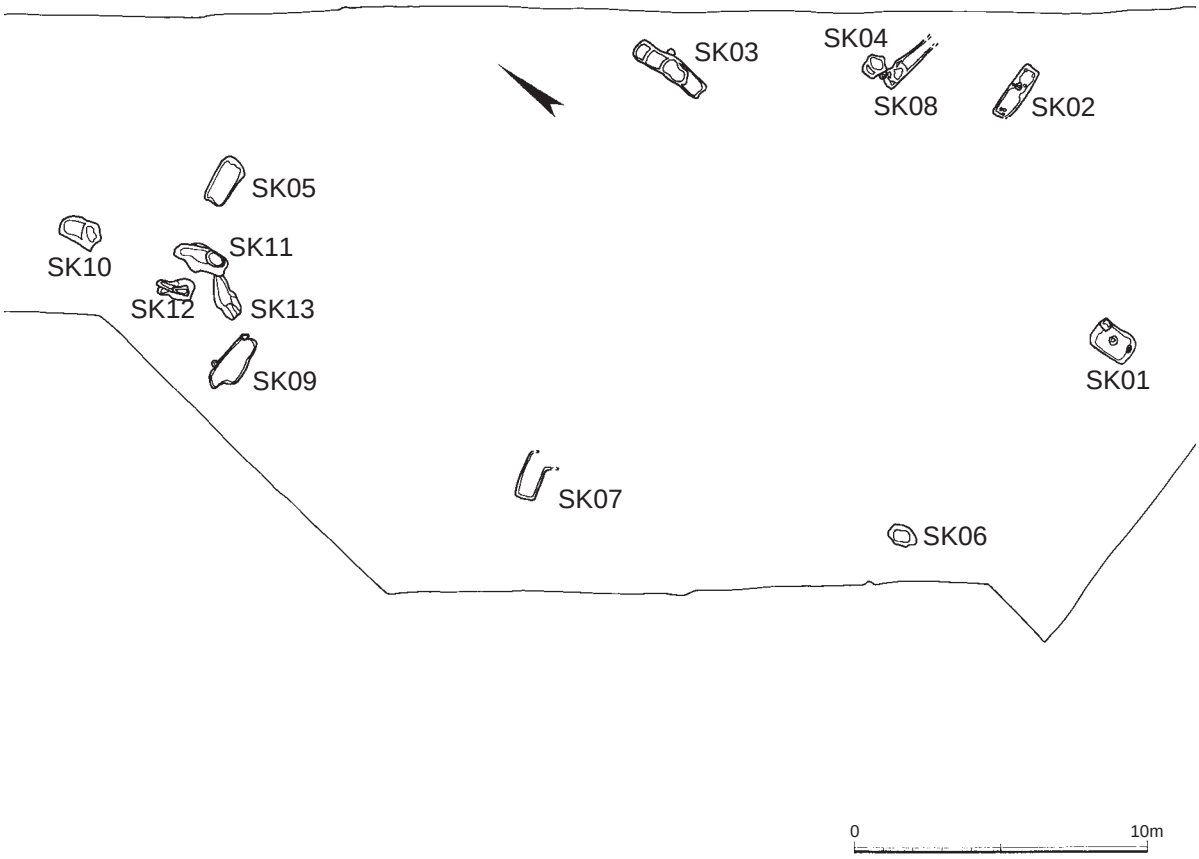


Fig.155　土壙群出土状況全体図

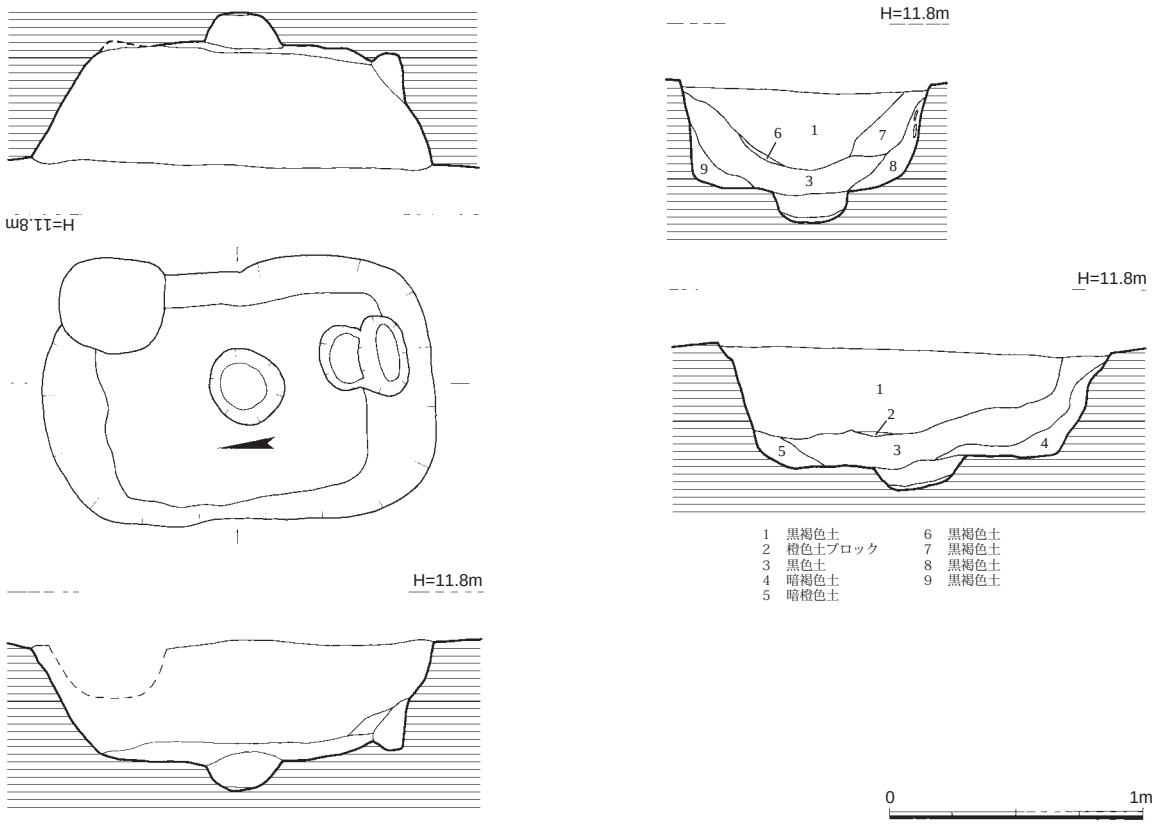


Fig.156　SK01土壙出土状況実測図（1/30）

SK01土壙（Fig.155〜157）

本土壙は、調査区の南端近くで検出された隅丸長方形の土壙である。土壙は長辺が1.55m、短辺が1.03m、深さ45cm強の規模である。壁の立ち上がりは緩い。また、中央部の底面には径が30cm程度の円形ピットが見られる。埋土は殆どが黒〜黒褐色土である。埋土内から甕・器台など若干の土器類が出土した。

（出土遺物）（Fig.157）

03127は、甕口縁である。口縁端部はやや下降気味である。器面全体の磨滅が激しい。胎土には径2〜3mmの砂粒を多く混入する。器色は暗黄褐色を呈する。焼成はやや軟質である。

03125も小型甕の口縁である。外面に分厚く、断面が三角形をなし、上端が下傾する。内外面共に器面の磨滅が激しい。胎土には径2〜3mm程度の砂粒の混入が多い。器色は明るい橙色を呈する。焼成はやや軟質である。

03126も小型甕の口縁である。口縁部は小さくＬ字状に屈曲し、上端は平坦面をなす。器面調整は、器面の磨滅が見られる中、外面に細かいタテハケメ、内面にナデ？が残る。器色は、橙色を呈する。胎土には径2〜3mmの砂粒の混入が多い。焼成はやや軟質である。

03121は、小型の中空器台である。上半部を失う。調整は、外面が板状工具によるナデか。縦方向に稜線をなす。また、内面は指ナデが残る。器色は、橙色を呈する。 胎土には径3mm程度の砂粒の混入が多い。焼成はやや軟質である。底部径６cmを測る。

03124は、厚手の器壁を持つ器台である。外面は荒れが激しく、内面に指ナデが残る。器色は、明橙色である。胎土には径2〜3mmの砂粒の混入が多い。焼成は堅緻である。底部径8.2cm。

03123は、中実の小型支脚である。外面はヘラナデ・指ナデが見られる。器色は、暗橙色を呈する。

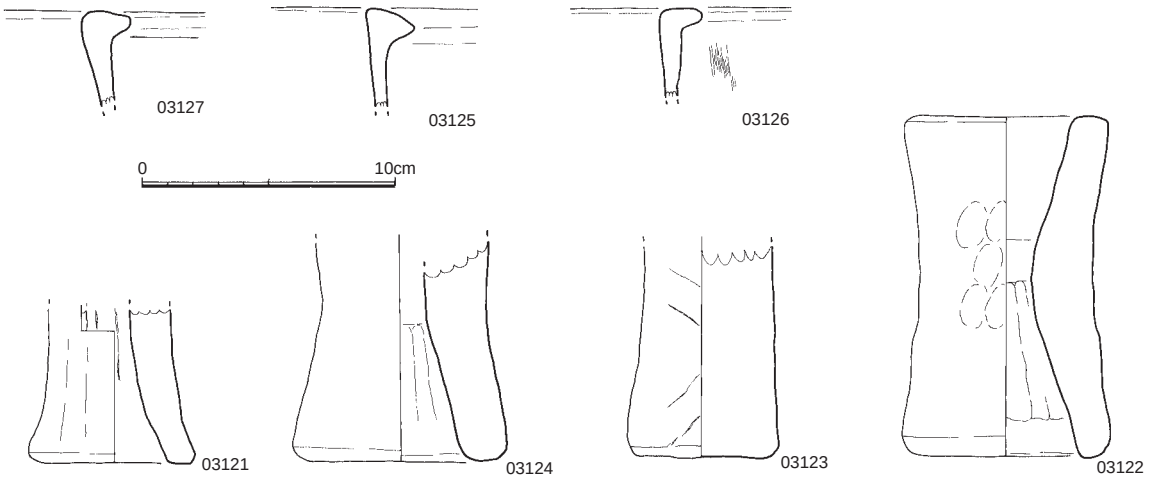


Fig.157　SK01土壙出土遺物実測図（1/3）

胎土には殆ど砂粒の混入が無い。焼成は堅緻である。底部径６cmを測る。

03122は、上下がほぼ対称をなす中空の器台である。器壁は非常に厚い。器面は内外共に磨滅が激しいが、外面には指頭痕が多く見られ、ナデ調整を施す。内面は下半部で指ナデ、上半部でナデ調整を施す。器色は、明橙色を呈する。 胎土には径2～3mmの石英砂粒を多く混入する。焼成は堅緻である。器高13.5cm、頭部径８cm、底部径8.2cmを測る。

本土壙は、これらの出土土器類から弥生時代中期初頭の所産と考えられる。

SK02土壙（Fig.155・158・159、Pl.20）

本土壙は、調査区の南東部隅で検出した長方形土壙である。土壙は、長辺が1.95m、短辺が0.6m、深さ0.25～0.3mを測る規模である。長辺・短辺共にほぼ平行しており、壁の立ち上がりは何れも緩い。遺構としての性格は不詳である。土壙の埋土は全体的に黒色～黒褐色土で占められ、遺物も土器類を中心として第２層（黒褐色土）や第１層（暗褐色土）からの出土が目立った。

（出土遺物）（Fig.159）

03128は、比較的大型の甕口縁部破片である。口縁部は外方に突出し、上端面は下傾する。
器面調整は、外面胴部に細かいタテハケメを施し、内面の口縁・胴部にはヨコナデを施す。器色は、外面が褐色で、内面灰褐色を呈する。 胎土には砂粒を少量混入する。焼成は堅緻である。外口径が32.4cmを測る。第２層出土。

03129は、支脚か。内面は中空となる。頭部の平坦面は本来の形状を保っているのか不詳である。頭部で3.7～3.8cm四方を測る。或いは他の何かを模倣した土製品であるかも知れない。器色は、明橙色を呈する。胎土は精良で、殆ど砂粒を含まない。焼成も堅緻である。第１層出土。

これらの出土遺物から本土壙は、中期初頭の所産であると考えられる。

SK03土壙（Fig.155・160・161、Pl.20・28）

本土壙は、調査区の南東端で検出した比較的大型の長方形土壙である。土壙は、側辺の中央部で折れ、ねじれている様に見え、２基の土壙の切り合いではないかと疑った。しかしながら、土層断面では特別の変化もなく、同一の土壙として理解できる。また、底面は中央部にむかって不規則な階段状をなし、中央部は長円形土壙となる。

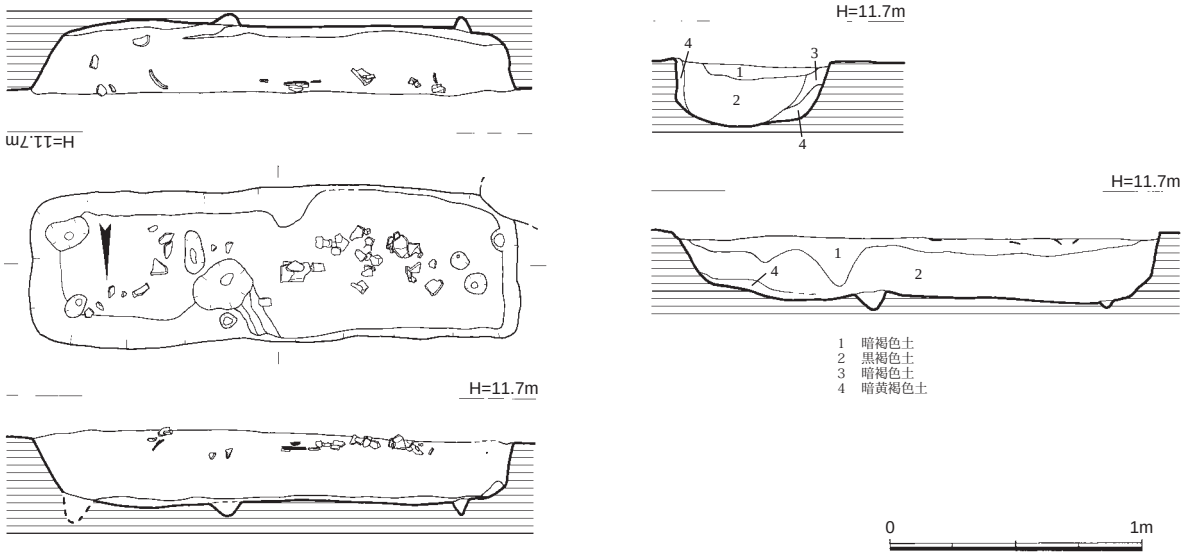


Fig.158　SK02土壙出土状況実測図（1/30）

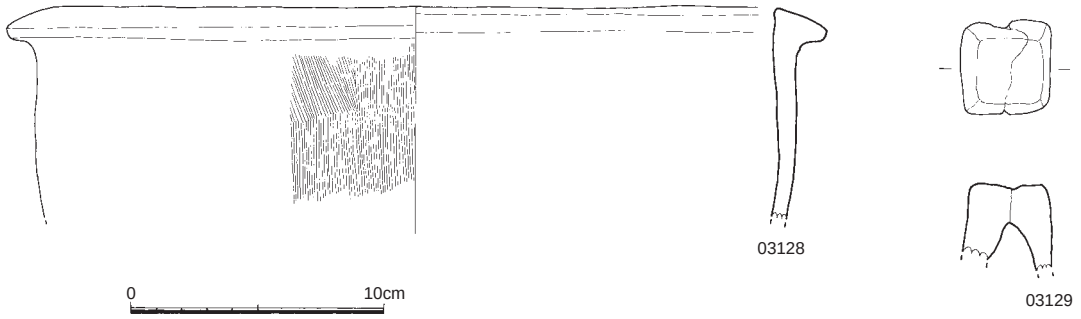


Fig.159　SK02土壙出土遺物実測図（1/3）

土壙の規模は、長辺が2.7m、短辺0.6～0.7m、深さは中央部で0.6m強・短辺北側で0.5m・同南側で0.4mを測る。土壙では遺物類が底面近くでまとまって出土するが、断面図でも分かるように埋まる段階で流入した遺物も多い。

（出土遺物）（Fig.161、Pl.28）

03144は、如意状口縁を有する甕である。調整は、内外面共にナデ・ヨコナデを施す。口縁端部はヨコナデ調整。器色は内外面ともに明灰色を呈する。口径18.6cmを測る。下層出土。

03138は、口縁部が短く外方に開く甕である。外面は調整不明。内面は口縁部が横ハケメ、胴部ナデである。胎土に石英砂粒を多く含む。器色は暗褐色を呈する。口径20.6cmを測る。番号R3。

03139は、口縁端部が肥厚し、直下に沈線１条を巡らす甕である。外面はタテハケメで、口縁・内面はヨコナデを施し、指オサエも顕著である。器色は、明褐色を呈する。 胎土に石英粒の混入が多い。口径は23.4cmを測る。番号R3

03134は、口縁が小さい平端をなし、直下に１条沈線を巡らす甕である。器面の磨滅が激しく、胴部外面に一部ハケメが残る。器色は明褐色を呈する。口径24.8cm。番号R2

03135は、口縁端部の突出が弱い甕である。器面の荒れが激しく、外面一部に荒いタテハケメが残

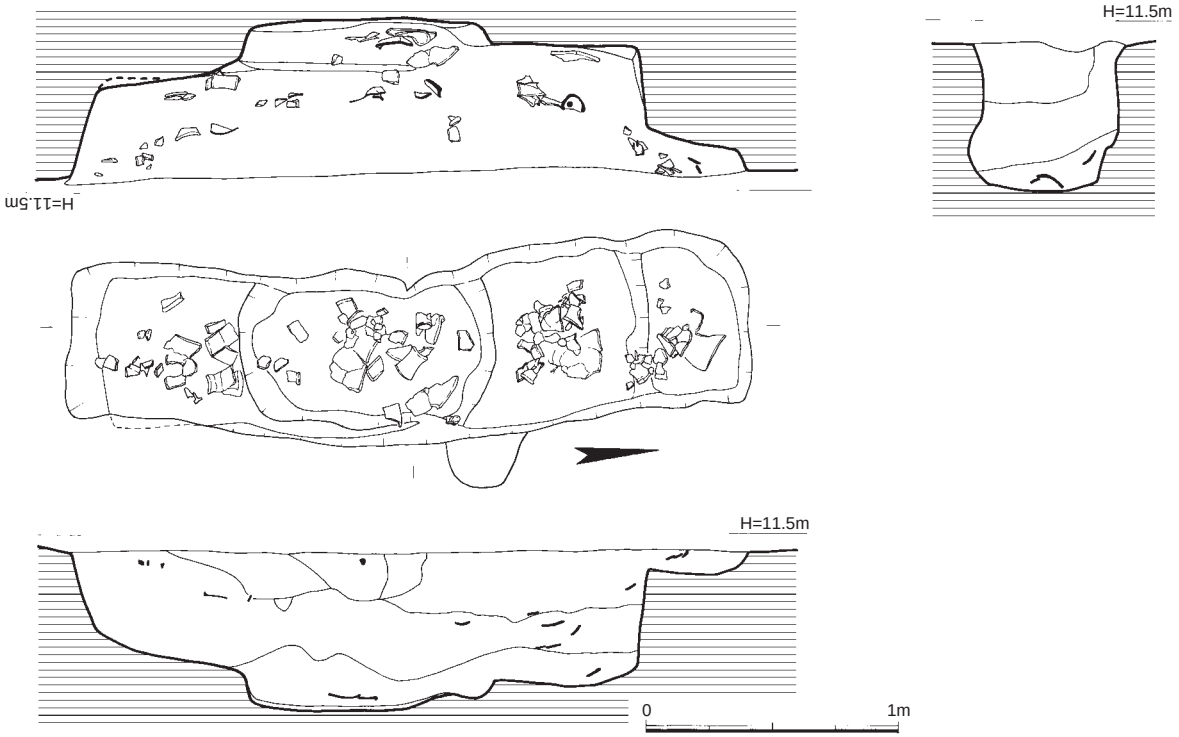


Fig.160　SK03土壙出土状況実測図（1/30）

る。器色は明褐色を呈する。 胎土は石英粒の混入が多い。口径26.4cmを測る。番号R2

03142も口縁端部の張り出しが弱い甕である。器面の荒れのために調整は不明である。器色は淡褐色を呈する。胎土には石英・長石の砂粒を多く混入している。口径25.6cmを測る。番号R4

03141は、発達の弱い口縁の上端が平坦となる甕である。器面の荒れが激しく、外面の一部にタテハケメが残る。器色は暗褐色を呈する。胎土に石英砂粒を多く混入する。口径26.8cmを測る。

03130は、口縁の外端部が細く尖る甕である。全体に器面の荒れが激しい。器色は、淡赤褐色を呈する。胎土に粗砂を混入する。焼成はやや軟質である。口径29.8cmを測る。番号R1

03133は、肥厚する口縁下に１条の沈線を巡らす甕である。調整は、口縁部内外にヨコナデ、外面に細かいハケメ、内面にナデを施す。器色は明褐色を呈する。口径は28cmを測る。番号R2

03136は、上げ底をもつ甕底部である。外面の一部にタテハケメを残す。内底部に指オサエが残る。器色は、明赤褐色を呈する。胎土は粗砂を多く混入する。底径5.4cmを測る。番号R2・R3

03140は、壷底部である。内外面共にナデで、内底部に指頭痕が残る。器色は、暗褐色を呈する。胎土は粗である。底径７cmを測る。番号R3・R4

03132は、小型の中空器台である。上下が対称形をなす。外面は細かいハケメ、内面ナデである。器色は、明褐色を呈する。胎土は密である。器高12.9cmを測る。番号R2

03131も小型の器台である。外形がほぼ直立する器形である。内外面共にナデ調整を施す。器色は、明褐色を呈する。 胎土は密である。器高16.2～15.6cm。番号R2

03143は、口縁下に低い三角突帯１条をめぐらす鉢である。外面は荒れが著しいが、ミガキの可能性がある。器色は、明褐色を呈する。 胎土は粗である。口径31.4cm。上層出土。

03137は、土製投弾である。器色は明赤褐色を呈する。長4.5cm、幅2.5cmを測る。番号R2

13014は、太形蛤刃石斧である。頭部を欠失する。玄武岩製。番号R3

以上の出土遺物から、本土壙は弥生時代中期初頭の所産であると考えられる。

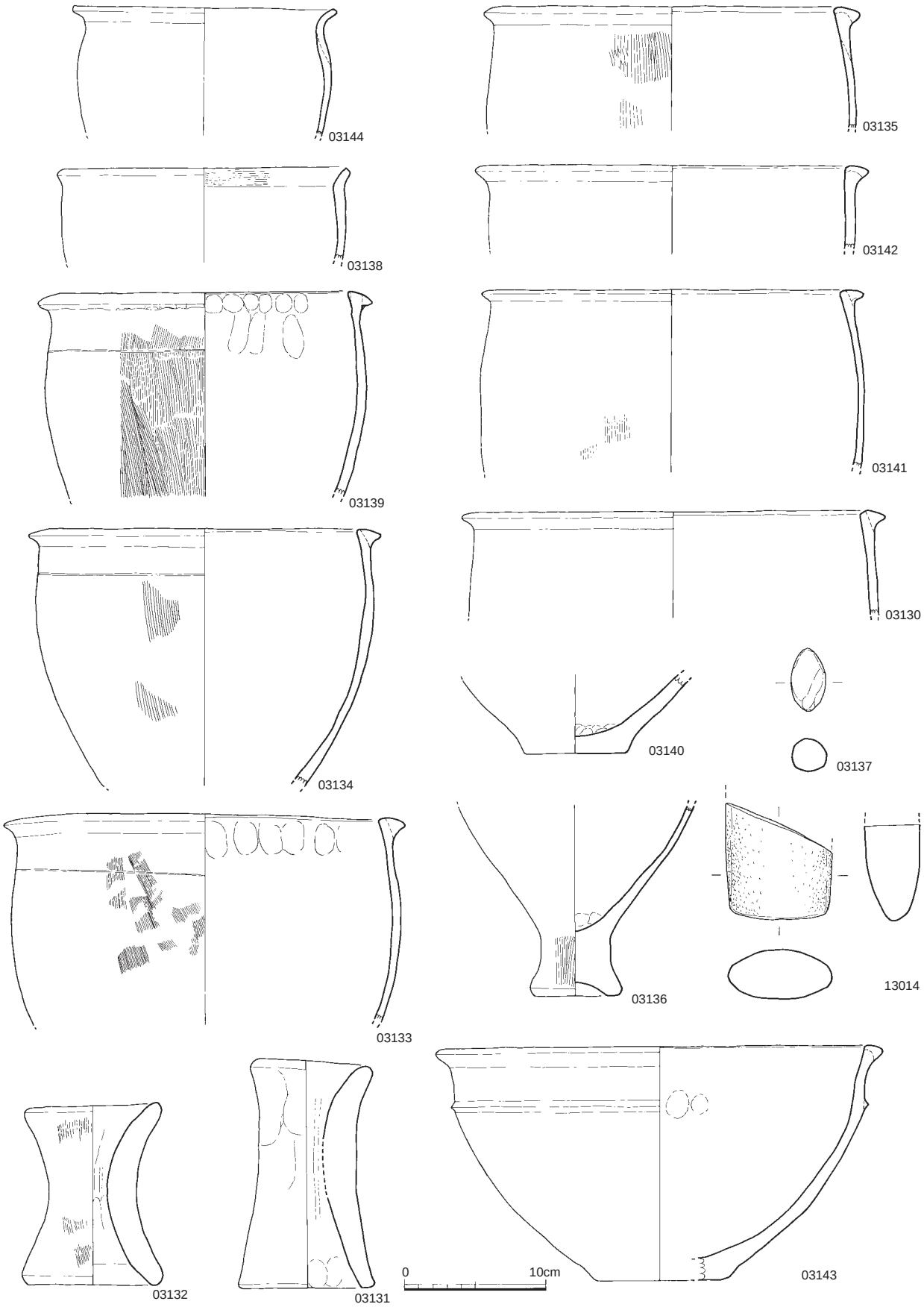


Fig.161　SK03土壙出土遺物実測図（1/4）

SK04土壙（Fig.155・162・163、Pl.21）

本土壙は、調査区の南東際に検出された。土壙は、不整な円形をなし、壁は直立せずやや斜壙となる。土壙の規模は南北0.75m、東西0.7m弱、深さは最深部で0.85mを測る。平面的には東側の壁が直線的で、横穴状に壁が入り込む。底面は西側壁で小さいステップをもっている。また、土壙内の埋土は、黒色土であり、その中位から土器類が若干出土した。

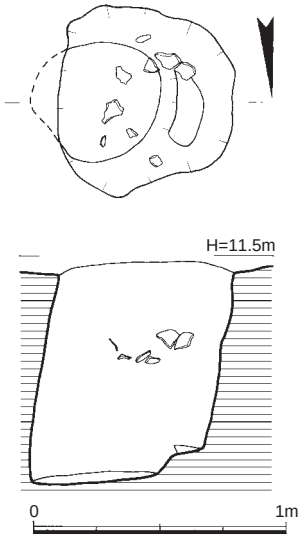


Fig.162　SK04土壙出土状況実測図（1/30）

（出土遺物）（Fig.163）

03146は、不安定な平底を有する甕底部である。底部は外端がやや上がり、丸味をもっている。器面は内外面共に荒れが著しいが、外面が板状工具によるナデと外底の一部にハケメを残す。また、内面には細かいハケメを施す。器色は、橙色を呈する。胎土には径1～2mmの砂粒の混入が多い。焼成は堅緻である。底部径8cmを測る。番号R7

03145は、外側に緩く開く口縁部を有する鉢である。底部はほぼ平底となるが、端部が丸味をもつ形状である。

器壁はほぼ均一に整形されている。

器面調整は、外面で縦方向の丁寧なナデ調整を施す。また、内面の胴部上半には板状工具による縦方向のナデが施され、内底部には指オサエが残る。器色は、明褐色を呈する。器は、口径21.8cm、器高9.9cm、底部径8.6cmを測る。番号R4

本土壙は出土した土器類から弥生時代後期初頭の所産と考えられる。

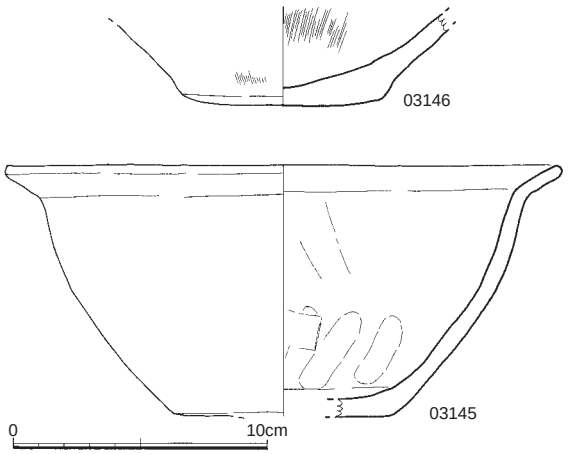


Fig.163　SK04土壙出土遺物実測図（1/3）

SK05土壙（Fig.155・164・165、Pl.21）

本土壙は、調査区北西側で検出された長方形土壙である。その規模は、東西長1.65m、東壁長0.75m・西壁長0.65m前後、深さは最深部で0.95mを測るものである。

土壙は、平面的に隅部がやや丸味を持ち、東側の小口部が西側の長さよりも若干長いものである。また、壁はやや袋状となる傾向にあり、横断面ではこれが顕著に見られる。底面は、東壁側より西壁側へ向かって緩く傾斜する。

土壙の土層断面は、Fig.165に見るように４層に区別され、第１層が黒色土、第２層が暗褐色土、第３層が黒色土、第４層暗褐色土と言うように暗褐色土と黒色土の互層となっている。埋土は何れもあまり粘性の強くない壌土である。

また、埋土の層厚は、第２・３・４層で10～15cmで、第１層の時期に大半が埋まったものと観察できる。

本土壙の性格は、検出状況を見る限り貯蔵穴的なものか或いは墳墓に関係する遺構であるのかは判断できない。また、土壙埋土内からの遺物の出土に乏しく、使用時期を限定することはできないが、埋土の土質・色調などが弥生時代中期初頭頃の他の土壙のものに類似することが手がかりとして上げられよう。

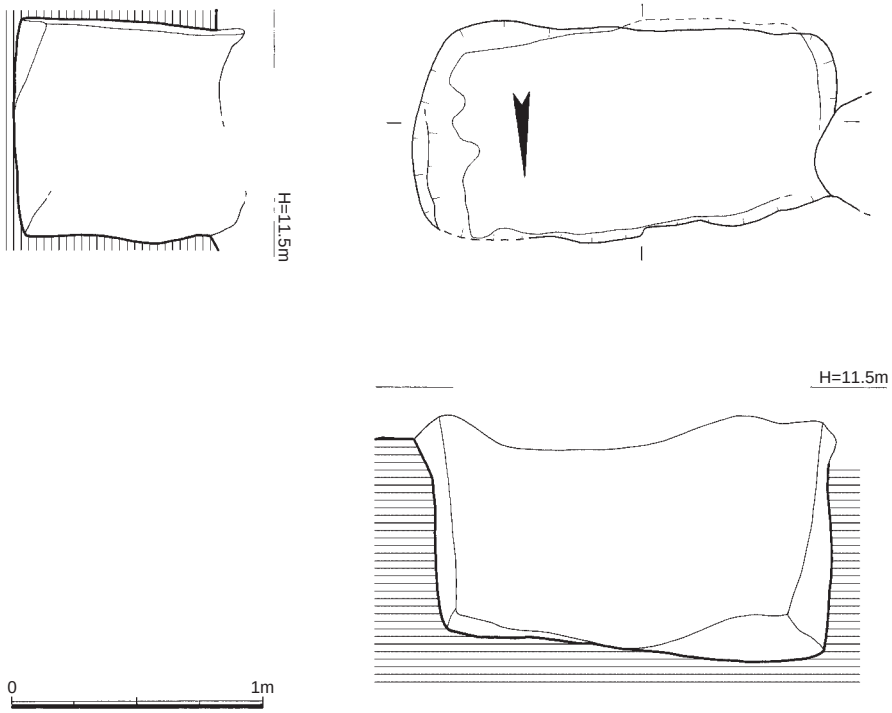


Fig.164　SK05土壙出土状況実測図（1/30）

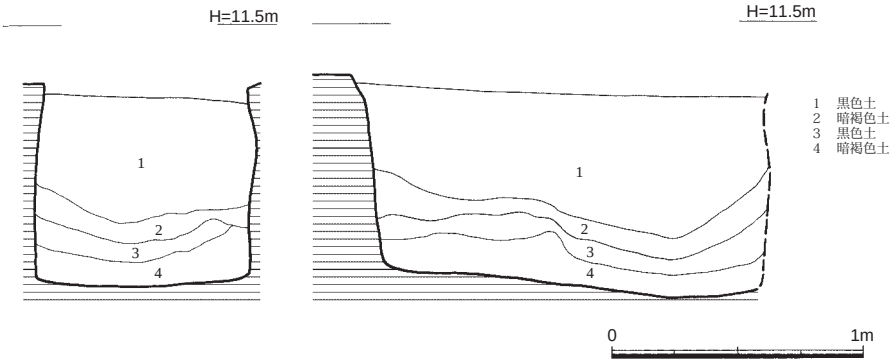


Fig.165　SK05土壙土層断面実測図（1/30）

SK06土壙（Fig.155・166）

本土壙は、調査区の南西隅で検出された長円形をなす小型の竪穴である。その規模は、南北長1m、東西長0.7m弱、深さ1.1mを測る。北壁は後世の攪乱溝によって平面形状が若干変わっているが、本来全体的に長円形をなしていたと考えられる。

壁断面は直立せず、やや緩いカーブを描いて袋状をなすものである。また、底面はほぼ水平である。

土壙の埋土は、黒色土で、内部から遺物の出土は見られなかった。使用時期は土器類の出土が無く、不詳であるが、埋土は他の中期初頭期の土壙などと共通する点をもっている。

SK07土壙（Fig.155・167～169、Pl.21・22・28）

本土壙は、調査区の南西隅近くで検出された長方形土壙である。後世の攪乱壙によって東側の小口部壁を失っているが、ほぼその形状を知ることができる。

その規模は、東西長1.55m以上、南北長0.7m前後、深さ0.85m以上を測るものである。東西の長辺部分の壁はやや開き気味に立ち上がり、南北の短辺部分の壁は内傾気味つまり袋状断面をなして立ち

上がる傾向が見られる。また、床面は壁の両端部から緩く下降し、中央部が皿状に深くなる形状となる。

埋土は、土層図に見るように、４層が認められ、暗褐色土と黒褐色土が互層となる堆積となっている。

また、本土壙に伴う遺物類は、床面から20～30cm上がった位置で主に出土している。これは甕を主体とする土器類、石器類などであり、土層上は第２層の黒褐色土内に殆どが含まれるものである。

（出土遺物）（Fig.169）

03154は、口縁端部が突出し、上端が平坦となる甕口縁部である。

出土時では同一個体と考えられる胴部下半から底部の部分が存在するが、復元時点で接点が見いだされていない。

口縁部は、内傾気味で、外面がやや垂れる。調整は、口縁部内外面がヨコナデ、外面胴部が縦方向の細かいハケメを施し、内面はナデ調整である。器色は、淡褐色～黒褐色を呈する。 胎土には石英・長石の砂粒を多く混入する。

また、胴部の下半を伴う底部は、分厚い上げ底をなす。調整は、底部外端を除いて胴部からの細かいタテハケメが残る。内面は、胴部の剥落が多く不詳であるが、内底部に指オサエが残る。口径27.4cm、底部径8.2cm前後を測る。番号R4・R6・R9・１層・２層・SK09の接合品。

03150は、肥厚する平坦口縁を有する甕である。口縁部を最大径としてすぼまって行くようである。調整は、外面に非常に荒い縦方向のハケメが残り、内面には指オサエ・ナデが見られる。また、口縁部内外はヨコナデである。器色は、明褐色～黒褐色を呈する。 胎土には石英・長石の細砂を混入する。口径は26.2～26.6cmを測る。胴部下半があるが接点が見

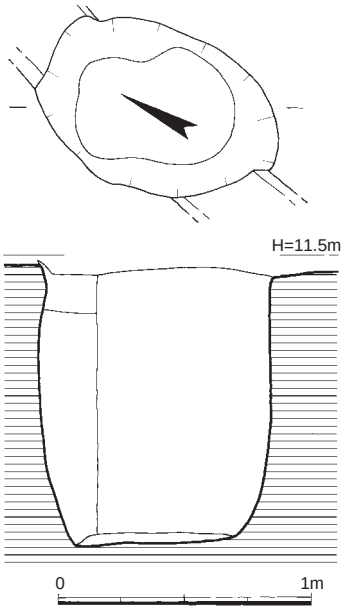


Fig.166　SK06土壙出土状況実測図（1/30）

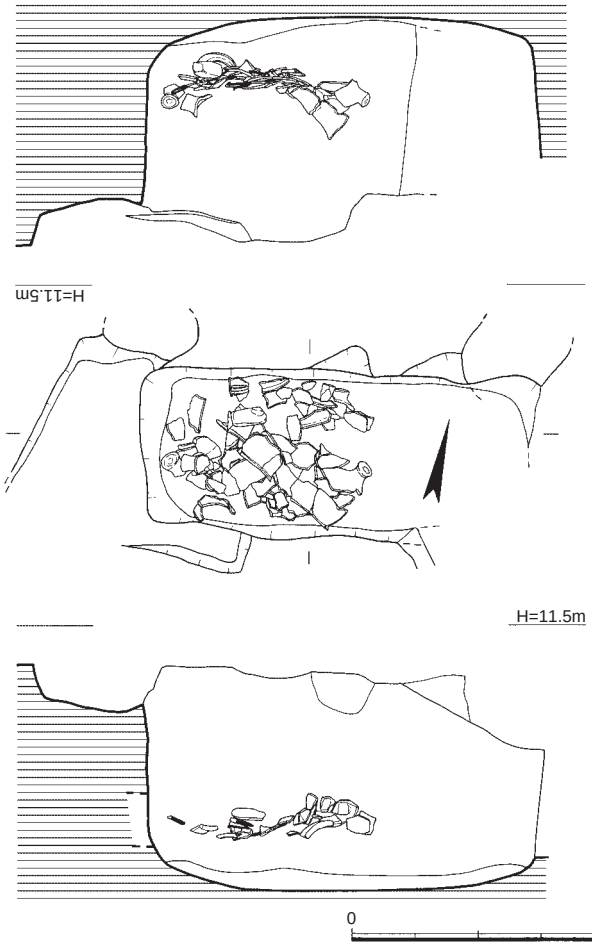


Fig.167　SK07土壙出土状況実測図（1/30）

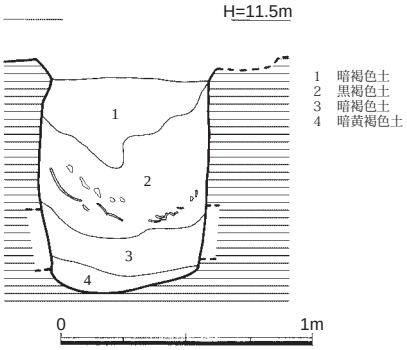


Fig.168　土壙土層断面実測図（1/30）

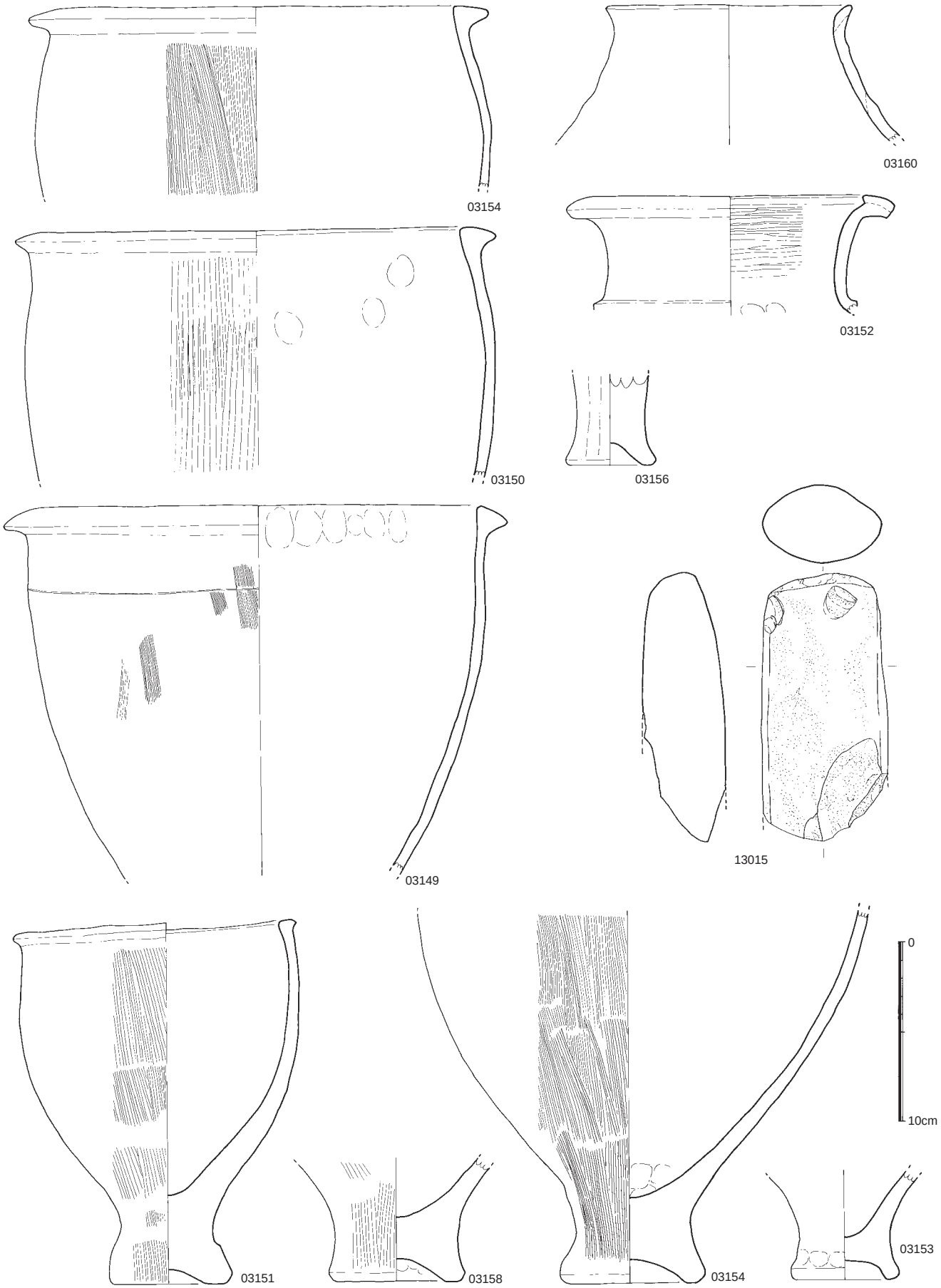


Fig.169　SK07土壙出土遺物実測図（1/3）

つからない。番号２層・R2・R4の接合資料である。

03149は、外端部が肥厚して断面三角形をなす口縁を有する甕である。甕は、口縁部を最大径とする形態である。また、口縁部下には１条の細い沈線を巡らす。器面調整は、外面が細かいタテハケメ後にナデを施す。また、内面はナデ調整で、口縁端付近に指オサエが残る。器色は、暗褐色を呈する。胎土には石英砂粒の混入が見られる。口径は27.8～28.2cmを測る。

03151は、小型の甕である。口縁部の発達は弱く、僅かに外方に突出する。器壁下底部に従って厚くなり、分厚い上げ底の底部に接続する。器面調整は、外面が荒いタテハケメで、内面はナデを施す。器色は、暗赤色～黒褐色を呈する。 胎土は石英砂を混入する。口径15.6～16cm、器高20.2cm、底径15.4cmを測る。

03158も分厚い上げ底の甕底部である。外面には荒いタテハケメが残る。内面は磨滅のため不明である。器色は、暗褐色を呈する。 胎土は粗である。底部径6.6cmを測る。

03153は、上げ底で、やや小型の甕底部である。内外面共に器面の荒れが激しい。胴部下端付近に整形時の指オサエが残る。器色は、褐～黒褐色を呈する。 胎土は粗である。底部径5.2cmを測る。

03160は、本土壙の西側にある大型攪乱壙出土のもので直接伴う資料ではない。内径する口縁の端部を小さく外開させる形態の壷である。調整は、内外面共にナデを施す。また、外面には丹が塗布される。器色は、淡赤灰色を呈する。口径13.2cmを測る。

03152は、外開する口縁端部端に粘土を張り、肥厚させた口縁部を有する壷である。口縁部の内外面がヨコナデで、内面は横方向のヘラミガキを施す。また、外面はナデ或いはミガキであろう。口縁ぶ上端以下の外面に丹が塗布される。器色は、明褐色を呈する。 胎土は粗である。口径は17.8～18.4cmを測る。

03156は、中実の支脚である。底部はやや上げ底をなす。外面には指頭痕が残る。器色は、赤褐色を呈する。胎土は粗である。底部径4.8cmを測る。

他に土器としては大型壷の底部などが出土した。

13015は、太形蛤刃石斧である。刃部を欠失する。頭部には打痕が多く見られる。玄武岩製。

本土壙は、その機能が貯蔵穴と考えられ、出土遺物類から弥生時代中期初頭の所産と考えることができよう。

SK08土壙（Fig.155・170）

本土壙は、調査区南東側際のSK04土壙の南側に接して検出された長方形土壙である。

その規模は、東西長が2.55m以上、西側の小口部幅0.65m、東端部の遺存部で幅0.45m強、深さは東側で0.2m、西側で4.5mを測るものである。

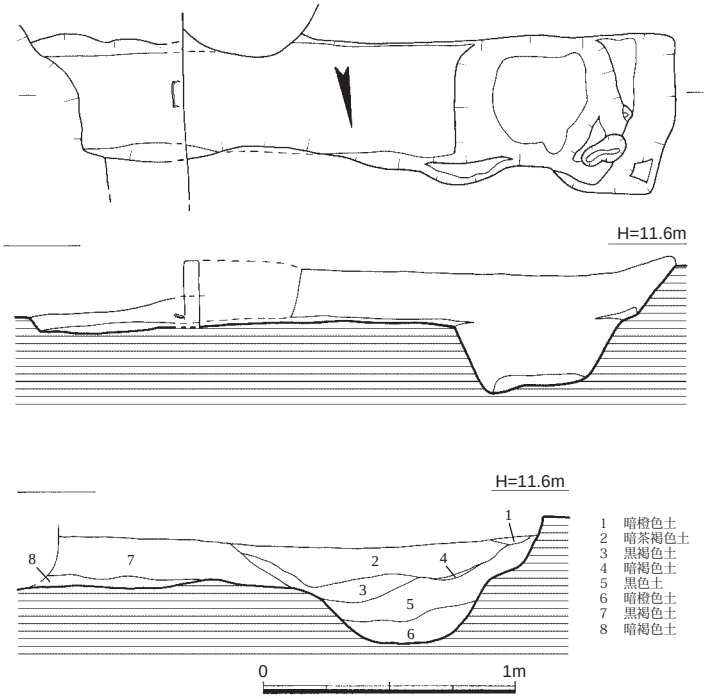


Fig.170　SK08土壙出土状況実測図（1/30）

土層図から見ると、西側小口部にはピット状の窪みが見られ、堆積は第７層の黒褐色土を切っており、時期差があるものと考えられる。しかしながら側辺は西側と直線上に並ぶ位置にある。埋土は、黒色土であり、他の中期初頭期の埋土と共通するものであるが、時期を特定できない。

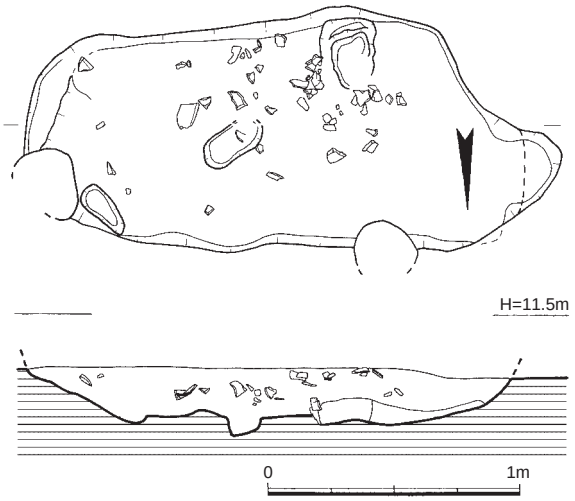


Fig.171　SK09土壙出土状況実測図（1/30）

SK09土壙（Fig.155･171･172、Pl.22）

本土壙は、調査区の北西側で検出された不整な長方形土壙である。

その規模は、東西長2.1m、南北長0.8～0.95m、深さ0.2m強を測るものである。

土壙の形状は、東側小口部で隅部をなし、これから伸びる南北壁はほぼ平行するが、西側小口部付近ですぼまっている。

また、床面は皿状の断面をなしている。土壙に伴う遺物類は、床面より10～20cm程度浮いた位置で出土している。遺物類は、甕形土器の破片を中心とするもので、何れも小破片である。

（出土遺物）（Fig.172）

03165は、膨らみの少ない胴部から如意状に外開する口縁部をもつ甕である。

器面は全体的に磨滅が著しく、調整を明確にし難い。胴部外面はヘラナデ調整か。また、内面には縦方向の指ナデを残す。器色は、暗橙色を呈する。 胎土には径3～4mmの大砂粒を混入する。口径は28cm前後を測る。

03164も同様の形状をもつ甕である。03165甕と同一個体の可能性もある。外面はナデ？で、内面

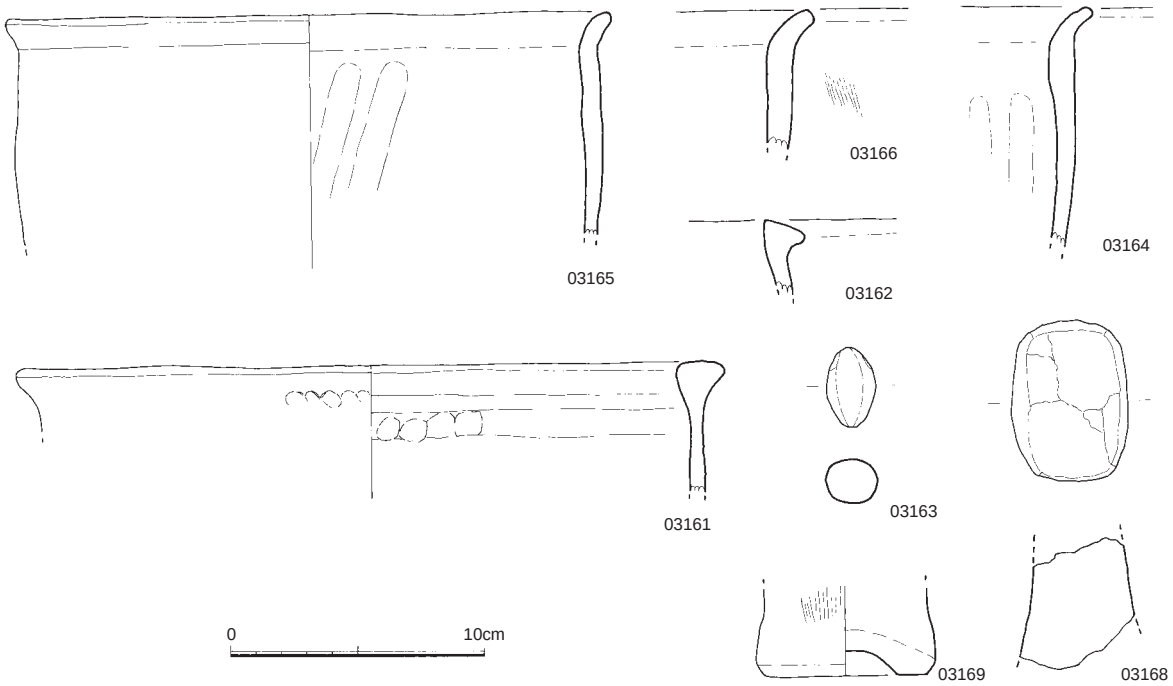


Fig.172　SK09土壙出土遺物実測図（1/3）

口縁部はナデ、胴部に縦方向の指ナデ痕が残る。器色は、暗橙色を呈する。胎土には径3～4mm程度の荒い砂粒を多く混入する。焼成は堅緻である。

03166は、端部が短く屈曲する甕口縁部の破片である。内面の屈曲部には緩い稜が付く。

器面調整は、器面の荒れのために明瞭に観察できないが、外面の一部に細いタテハケメが残っている。

03162は、肥厚して外部断面が三角形をなす口縁を持つ甕口縁部の破片である。器面は、磨滅のため調整痕を明らかにできないが、口縁上端部はナデが認められる。器色は、暗黄褐色を呈する。胎土には径1～2mmの砂粒を混入する。 焼成は堅緻である。

03161は、口縁部が肥厚して内外に張り出す口縁を有する甕である。外面は磨滅のために調整は不明で、口縁付け根に指頭痕が残る、また、内面はヘラナデによるものか、器面が平行する稜となっている。指頭痕も残る。器色は、橙色を呈する。胎土は砂粒の混入が多く、粗である。また、焼成は堅緻である。口径28cm前後を測る。

03169は、分厚い上げ底をもつ甕底部である。器面調整は、外面の一部に縦のハケメが痕跡的に残る。また、外底部はナデ調整を施す。器色は、橙色を呈する。胎土には径が1～3mm程度の砂粒の混入が多く見られる。焼成は堅緻である。底部径6.4cm前後を測る。

03163は、土製の投弾である。上下で対称形をなし、横断面はややひしゃげた円形となる。長軸に沿って緩い稜を認めることができる。器色は、暗橙色を呈する。 胎土は密である。焼成は堅緻である。長2.3cm、厚さ1.8cm、重さ10gを測る。

03168は、中実の支脚か。方柱状の土製品で、上端面は破断している。器色は、暗橙色を呈し、胎土も密である。焼成は堅緻である。

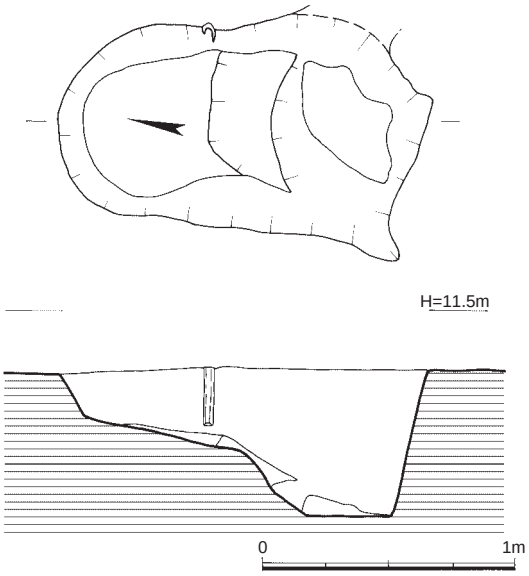


Fig.173　SK10土壙出土状況実測図（1/30）

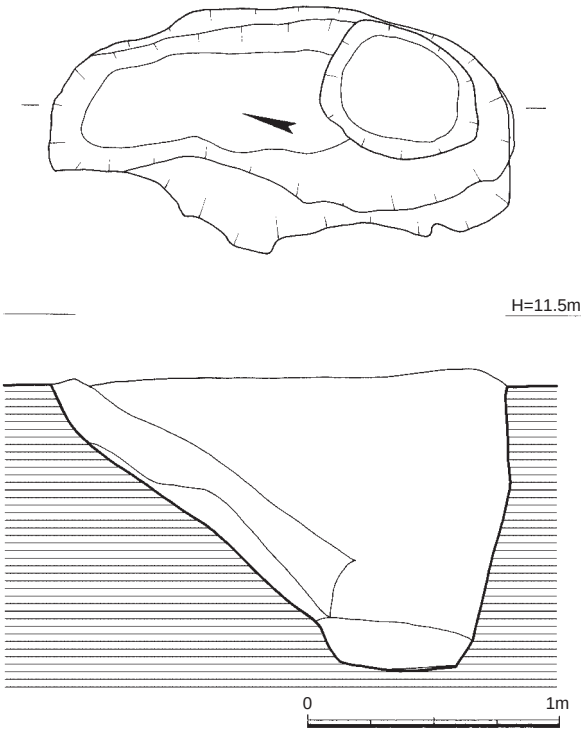


Fig.174　SK11土壙出土状況実測図（1/30）

これらの出土遺物から、本土壙は弥生時代中期初頭を前後する時期の所産と考えられる。

SK10土壙（Fig.155・173）

本土壙は、調査区の北西端で検出された不整な長円形の土壙である。

その規模は、南北長が1.4m、東西幅が0.8m前後、深さ0.55m程度を測るものである。土壙の特徴はその底面の構造にある。南側が柱穴状に深くて北側に向かって段をなし、斜めに立ち上がって行く断

面となることである。これは周辺に集まっている他の土壙（SK11～13）にも共通する形状である。何れも調査地の北側若しくは北東側に斜面となる掘り方をもっている。やや大型の柱を立てるための掘り方或いは柱抜き跡の考え方もできよう。しかしながらこれらは何れも積極的に建物或いは構造物として相互に関係をもっているかは判断に苦しむところである。

本土壙からは、時期を判断できる遺物は出土しなかった。

SK11土壙（Fig,155・174）

本土壙は、調査区の北西隅に検出された大型の長方形土壙である。前のSK10土壙からは南側に3m弱離れ、同土壙の長軸の延長上に位置する。

その規模は、南北長1.8m強、東西幅0.8～1m、深さ1.15mを測る。南側の壁付近には径が0.5×0.6m程度の円形土壙が確認でき、北側は段をなして急激に駆け上がっている。

これを土層断面で観察できないが、柱を抜き去るための掘り方なのか、或いは大径・長木を立てるための掘り方なのか不詳と言わなければならない。

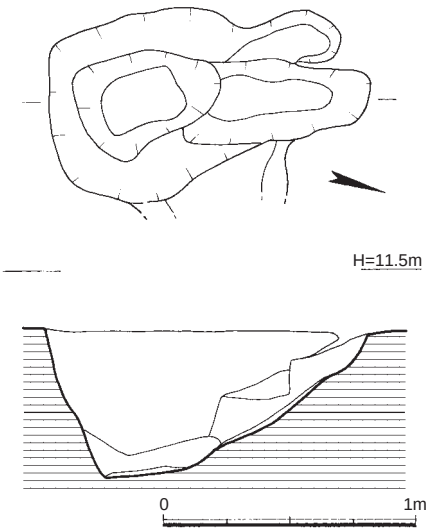


Fig.175　SK12土壙出土状況実測図（1/30）

SK12土壙（Fig.155・175・176）

本土壙は、調査区の北西側に検出された不整形な土壙である。

位置的には前のSK11土壙の西側に当たる。

土壙は、SK11などに比較するとやや小振りであるが、同様の構造を持っている。

その規模は、南北長1.25m、東西幅0.5～0.7m、深さ0.55m前後を測るものである。南側壁寄りに0.6×0.35mの長円形土壙が見られ、これから北側に向かって斜めに駆け上がる形状となっている。

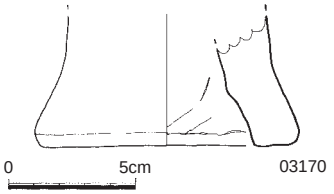


Fig.176　SK12土壙出土遺物実測図（1/3）

また、北側の斜面部分では切り合う様な掘り方となっており、これらが時期差を示すものか不明である。

（出土遺物）（Fig.176）

埋土内から少量ではあるが、土器類が出土した。

03170は、分厚い器壁を持ち、脚が踏ん張る器台の底部である。底部の畳付きは幅広い。器面調整は、磨滅のために不詳であるが、外面の一部にナデが残る。器色は、明橙色を呈する。 胎土は密である。焼成も堅緻である。脚径10cmを測る。弥生時代後期の所産か。

SK13土壙（Fig.155・177）

本土壙は、調査区北西側で検出された長方形土壙である。SK11土壙に切られる。これは他の土壙に比較するとやや小規模のように考えられるが、形状は相似たものかも知れない。その規模は、南北長が1.6m、東西幅0.55m前後、深さ0.2～0.45mを測るものである。南側が深く、北に向かって低く駆け上がる。時期を示す土器類は出土していない。

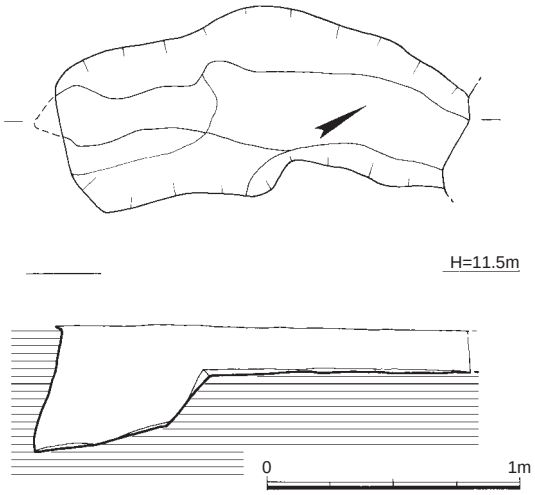


Fig.177　SK13土壙出土状況実測図（1/30）

小　結

これまでＥ区で検出された、土壙について個別の説明を加えてきた。これらを時期別に見ると、明らかなのはSK01～03、07土壙が中期初頭期、SK09土壙がやや古く前期末～中期初頭期それからＳＫ04土壙が後期前半期と考えられる。また、SK05・06・08は埋土の状況から中期初頭の可能性もある。なお、SK10～13については形状の類似性とこのうちのSK12出土土器に後期ある点で後期に属する遺構と考えている。

５．井戸跡の調査（Fig.82・178～183、Pl.23・29）

井戸跡は、Ｅ区の南東側に集中して検出され、他の調査区（Ｄ・Ｃ・Ｂ）にかけて南東方向に帯状にひろがる分布をみせる。

SE01井戸（Fig.82・178・179、Pl.29）

本井戸は、調査区南東の隅で検出された円形の素掘り井戸である。

井戸の規模は、検出面で南北長90cm、東西長80cmの長円形を呈し、断面形は辺縁より40cm下がった位置まで円筒形となっており、これ以下では100cm程度にわたり壁面が膨らみ、さらに底面までは円筒形となる。底面はほぼ平坦で、中央部に向かったやや窪む形状となる。壁面中央部の膨らみは鳥栖ローム層の最下部と八女粘土層の境目付近にあたり、湧水による崩落を示すと思われる。深さ210cm。

井戸内からの出土遺物は少量で、覆土の中位から底面付近を中心として出土した。

（出土遺物）（Fig.179、Pl.29）

（土器類）　03102は、口縁端部の内傾化が著しい二重口縁壷である。磨滅が著しく、内面に荒い横ハケを残す。器色は淡赤褐色である。口径18cmを測る。 胎土やや粗で、焼成もやや軟質である。

03098は、丸底気味の底部を有し、底部より７cm程上がった位置に鈍い２条の三角突帯を巡らす。鉢或いは壷か。器色は暗赤褐色で、内底部に指オサエが残る。最大径17.2cmを測る。 胎土は粗で、焼成も軟質である。03104は、器壁の薄い甕口縁部破片である。口縁内端部はやや跳ね上がり状を呈する。外面と口縁内面に荒いハケメ調整が残る。器色は淡赤褐色である。胎土はやや粗で、焼成は軟質。

03103は、口縁端部がく字形に緩く屈曲する小型甕である。器面の磨滅が激しい。外面の一部に荒いハケメを残す。器色は暗褐色～暗

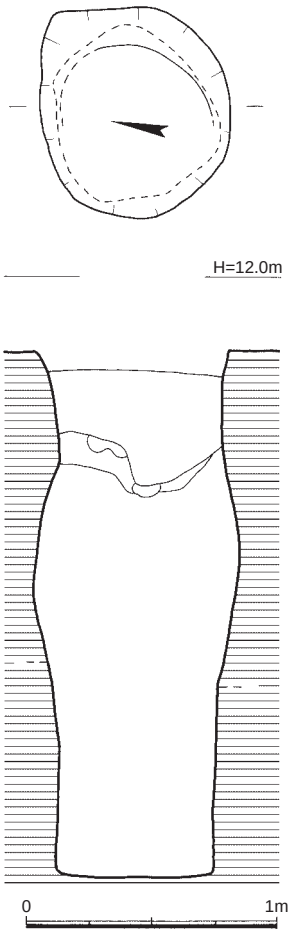


Fig.178　SE01井戸跡出土状況実測図（1/30）

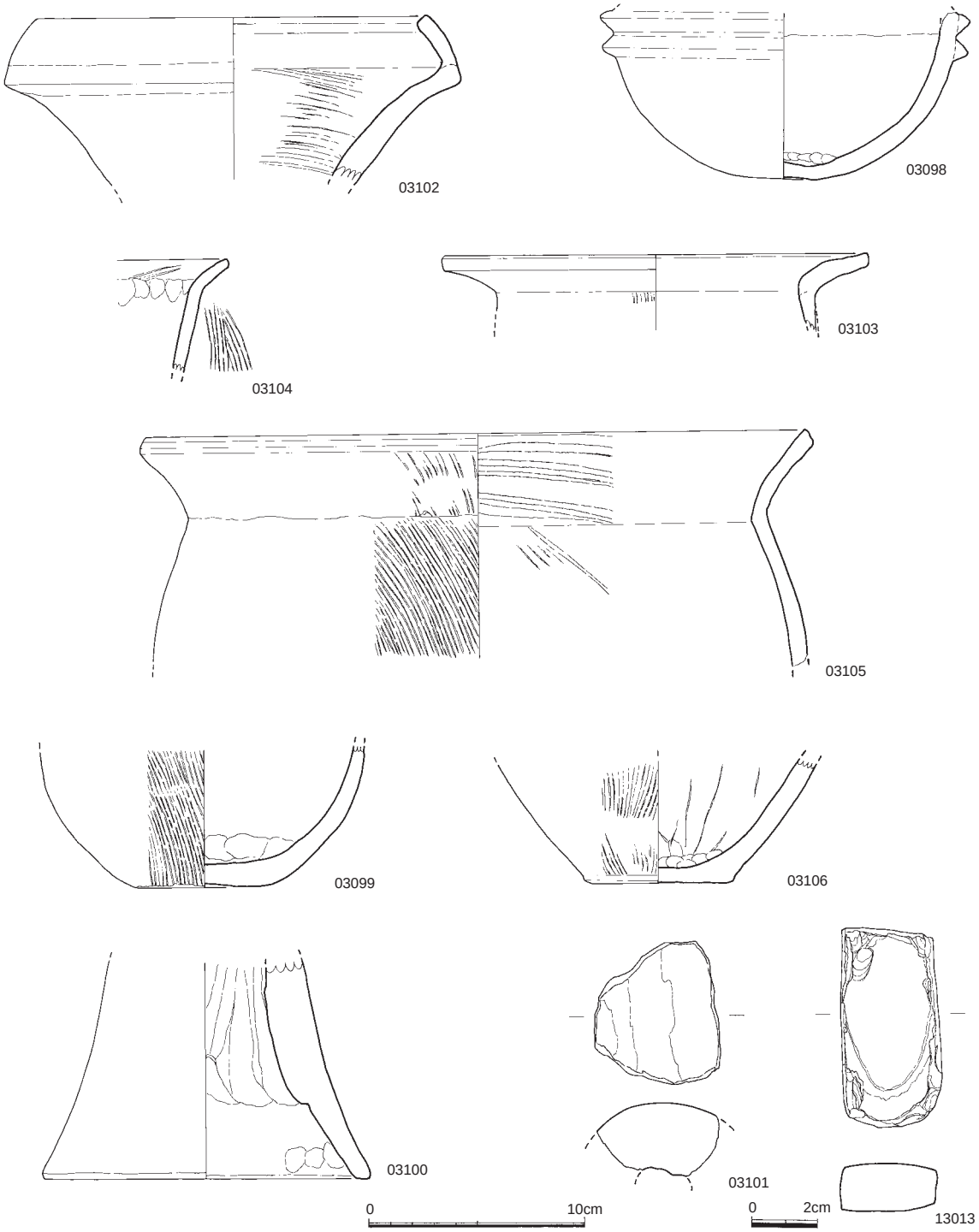


Fig.179　SE01井戸跡出土遺物実測図（1/3・1/2）

赤褐色である。口径19.6cmを測る。 胎土は粗で、焼成は軟質。

03105は、口縁がく字に屈曲する中型の甕である。外面と口縁内面に荒いハケメ調整を残す。器色は、黒褐色～暗赤褐色を呈する。口径30.4cmを測る。 胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。03099は、鉢破片である。緩い平底をなす。外面に荒いタテハケメを残す。器色は、暗褐色を呈する。03106は、甕底部破片である。平底で、外底部はやや上がる。外面ハケメ、内面にヘラケズリが残る。03100は、中空の器台破片である。中央部の器壁は異常に厚い。器面は磨滅が激しい。内面に絞り、

指オサエが残る。底径15cmを測る。残存高10.1cmである。外面は淡黄褐色を呈する。 胎土は粗で、焼成も軟質である。

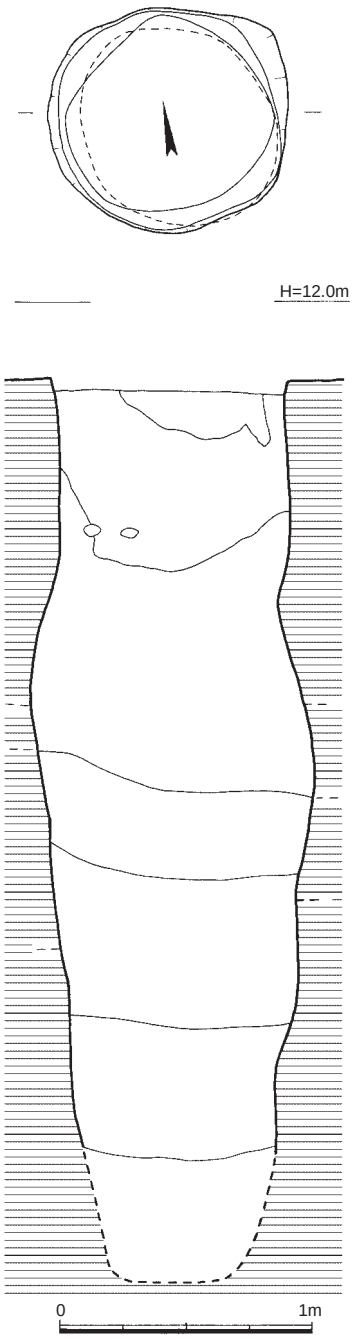


Fig.180　SE02井戸跡出土状況実測図（1/30）

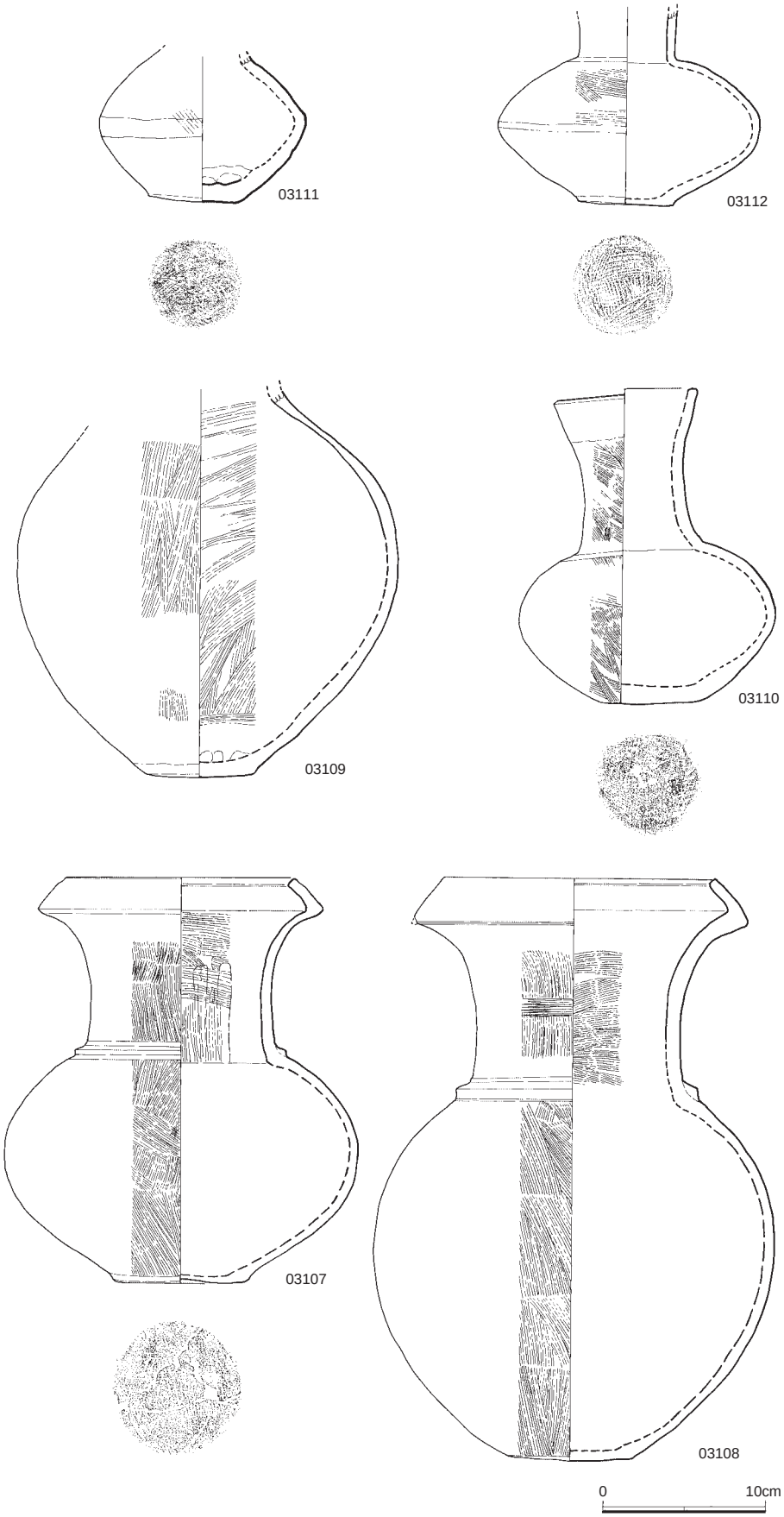


Fig.181　SE02井戸跡出土遺物実測図（1/4）

Fig.182　SE03井戸跡出土状況実測図（1/30）

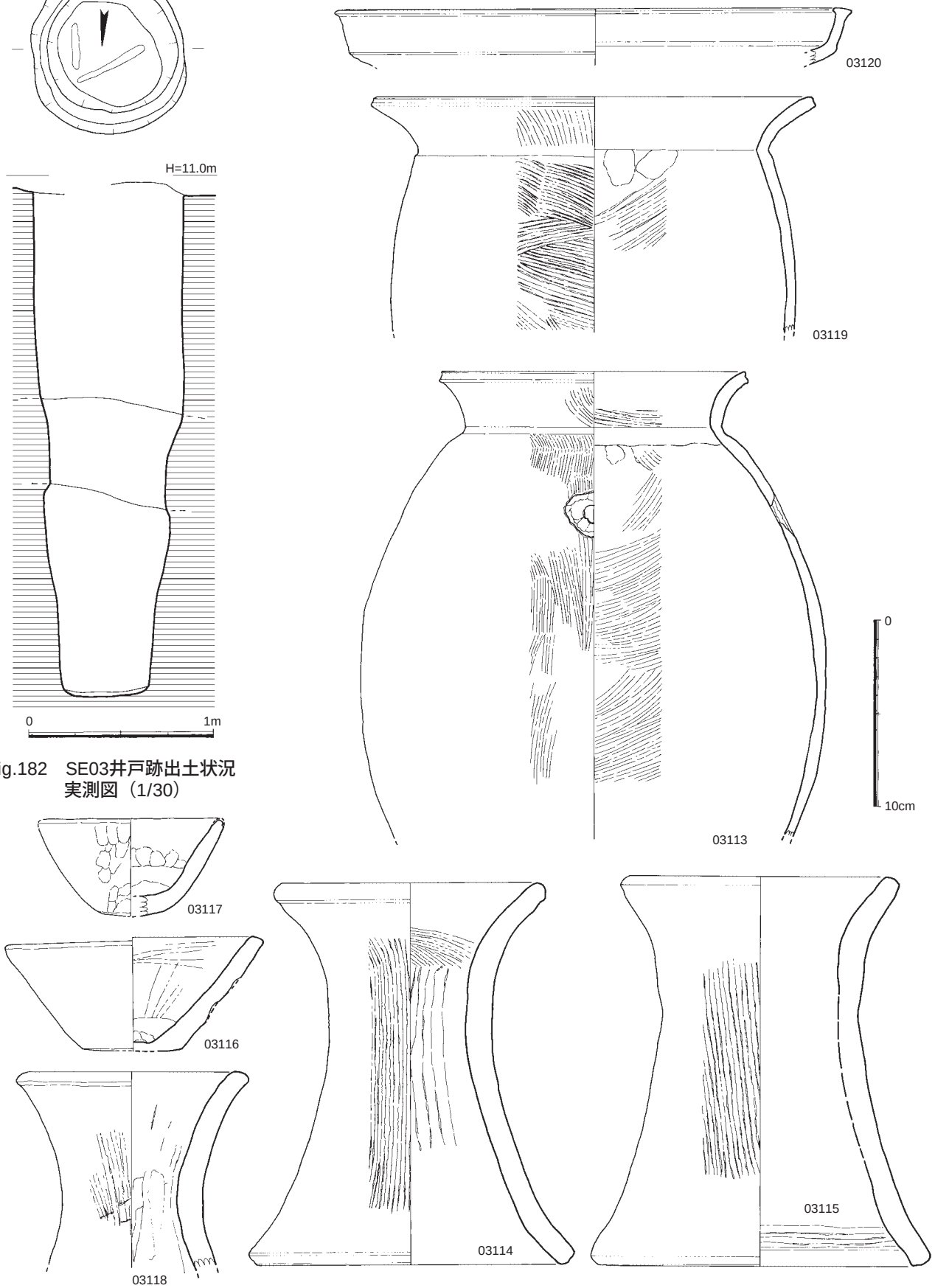


Fig.183　SE03井戸跡出土遺物実測図（1/3）

（その他）　03101は、円筒状の土製品である。全周の1/4程度を残し、中心部に孔が残る。外面淡褐色で、外面中央に黒斑あり。 胎土は密で、焼成も堅緻である。フイゴ片か。13013は、扁平片刃石斧の未製品である。裏面及び両測辺も研磨が及ぶ。石材は、淡褐色の粘板岩。

SE02井戸跡（Fig.82・180・181、Pl.23・29）

本井戸は、SE01井戸の北西側15mの地点で検出された円形の素掘り井戸である。検出面での規模は、東西長95cm、南北長90cm、深さ3.6m程度と考えられる。壁断面は、縁辺から100cm程度まではほぼ円筒形をなすが、これ以下の鳥栖ロームと八女粘土の境付近では湧水のために凹凸をくり返している。このため調査では掘下げにしたがって壁面崩落の危険があり、底面レヴェルはボーリングステッキの刺突によって確認した。

井戸内からの出土遺物は、覆土の中位から底面付近から出土したものが多く、一部を欠損するものもあるが、ほぼ完形のまま投入されたと考えられる土器類が多い。

（出土遺物）（Fig.181、Pl.29）

03111は、口縁部を欠失する小型壷である。強く屈曲する胴部を特徴とし、底部は不安定な平底をなす。外面は細かいハケメ後に丁寧なヘラナデを施す。内底に指オサエが残る。器色は、外面淡褐色で、内面黒灰色を呈する。底部径5.6cm、胴部径12.5cm、残存高9.4cmを測る。 胎土密で、焼成も堅緻である。03109は、口縁部を欠く壷である。扁球状の胴部に不安定な平底を有する。口縁部は残存部から立ち上がると考えられる。外面の調整は、荒いタテハケメ調整後に下半部をナデ消している。また、内面は底部方向からの荒いハケメ調整後にナデを加える。内底部には指オサエが残る。器色は、外面が淡褐色で、内面灰褐色～暗灰色を呈する。底部径6.5cm、胴部径23.7cm、残存高23cmを測る。胎土はやや粗で、焼成もやや軟質である。03112・03110は、長頸壷である。

03112は、口縁上半部を欠失する。残存部ではほぼ直立する口縁部と扁球形の胴部を特徴とし、小型の不安定な平底を有する。器面調整は、外面が細かいハケメ調整を行った後に丁寧なナデによって消しており、外底部には荒いハケメでなで回す調整が残る。また、口縁内面もヨコナデ調整を施す。器色は、外面上半部が暗灰色、下半部が暗赤褐色を呈する。なお、外面下半部には黒色顔料が塗布されている。底部径5.8cm、胴部径16cm、残存高16cmを測る。 胎土は非常に密で、焼成も堅緻である。03110は、直立気味の口縁部と扁球形の胴部を特徴とする壷である。口縁端部は緩く外方に開く。また、底部は不安定な平底をなし、胴部からの移行点が不明瞭である。器面調整は、外面胴部が細かいハケメ調整後、口縁端部付近・頸部付近及び胴部上半部近くをヨコナデして消している。また、外底部は細かいハケメ調整が残る。口径8.8cm、底部径6cm、器高19.4cm程度を測る。器壁は厚手である。胎土は粗で、焼成堅緻である。03107は、中型の二重口縁壷である。外反気味に立ち上がる口縁部は端部が内傾する。また、扁球形の胴部を有し、頸部には段状の突帯 1 条を巡らす。底部は外端部で丸く膨らみ、やや上げ底気味の平底をなす。器面調整は、胴部外面が荒いハケメ調整後に口縁端部付近にヨコナデを加える。また、外底部はハケメ調整後にナデを施す。内面は口縁の端部がナデ調整で、下部が縦横のハケメ調整。指ナデを加える。器色は、暗褐～淡褐色を呈する。口径13.7cm、胴部径21.6cm、器高24.6cmを測る。 胎土は密で、焼成はやや軟質である。03108は、03109と同形態の大型壷である。やや長手の半球形胴部に外開する口縁部を有する。口縁端部は内傾して屈曲する。また、底部は不安定な平底である。器面調整は、外面胴部で、丁寧なハケメ調整後に口縁端部付近・頸部突帯付近に強いヨコナデを加える。また、内面口縁部は端部にヨコナデ、これ以下に細かい横ハケメを施す。器色は、外面が淡赤褐～淡褐色、内面暗赤褐色を呈する。口径16.7cm、底部径7.8cm、器高

30.5cmを測る。 胎土は密で、焼成も堅緻である。

SE03井戸跡（Fig.82・182・183、Pl.23・29）

本井戸は、SE02井戸の南東側５mの調査区際で検出された円形の素掘り井戸である。井戸の規模は東西長85cm、南北長80cm、深さ270cmを測る。壁断面は、縁辺から1.1m程は円筒形を保ち、これ以下の中位で凹凸が見られ、底部付近はまた円筒形となっている。中位の凹凸部は鳥栖ロームと八女粘土の境にあたる湧水部位にあたる。井戸内からは、覆土の中位以下で未加工の木片等と共に主に土器類が出土した。

（出土遺物）（Fig.183、Pl.29）

03120は、二重口縁壷の口縁部破片である。短く外方に開く口縁部は、上端が平坦となり、両端に突出する。また、口縁部下半への移行は緩やかで、境は鈍い稜ををなす。器面は荒れが激しく、調整は不詳である。器色は、淡灰褐色を呈する。復元口径27.6cmを測る。 胎土は密で、焼成軟質。

03119は、口縁がく字形に屈曲する甕である。胴部下半を欠失する。外面は使用によると考えれられる熱で剥落が激しい。また、ススの付着が見られる。器面調整は、外面が荒いハケメ調整後に口縁端部・頸部付近にヨコナデを施す。内面は胴部の位置部に荒いハケメを残す。器色は、外面が黒～黒褐色、内面暗褐色を呈する。口径は23.8cmを測る。 胎土は粗で、焼成は堅緻である。

03113は、長胴の胴部に外開する短い口縁部をもつ甕である。頸が良くしまった感じを受ける。器面調整は、外面が荒いハケメ調整後に口縁部端及び頸部に強いヨコナデを施す。内面も荒いハケメ調整後に口縁部・頸部付近にヨコナデを加える。器色は、内外面ともに淡赤褐色を呈する。また、頸部よりやや下がった位置の内面から二次穿孔が行われている。口径は16.2cmを測る。 胎土は密で、焼成も堅緻である。03114は、中空の大型器台である。広く踏ん張る脚部に外開する口縁部を有する。器面調整は、外面が荒いタテハケ目調整後に口縁・脚部にヨコナデを加える。内面は中位にしぼりが見られ、口縁付近に荒いハケメが残る。他はヨコナデである。器色は、下部が赤褐色で、他は暗褐色である。口径14.5cm、脚径16.9cm、器高20.4cmを測る。 胎土は粗で、焼成はやや軟質である。03115は、中位のしまりの少ない中空の器台である。器面調整は、外面で荒いタテハケメ調整後に口縁部端・脚部端付近をヨコナデする。また、内面はナデか。器色は、外面が脚の一部が赤褐色で、それ以外は暗黄褐色である。内面は暗褐色である。口径14.9cm、器高20.9cm、底部径16.5cmを測る。胎土は粗で、焼成はやや軟質である。井戸上層出土。03118は、中空の器台口縁部破片である。器面調整は、外面に荒いハケメ調整が残る。内面は中位にしぼりがみられ、口縁部付近にはヘラ痕跡が見える。口径は12.4cmを測る。 胎土は粗で、焼成はやや軟質である。03117は、手捏ねの小型鉢である。底部は不安定な平底である。内外面共に指頭痕とナデ調整が残る。器色は、内外面共に暗褐色を呈する。口径9.8cm、器高5.25cmを測る。 胎土は粗で、焼成も軟質である。

03116は、不安定な平底からほぼ直線的に外方に開く口縁をもつ鉢である。器面調整は、荒れが激しく、内面に荒いヘラナデと指オサエを残すのみである。器色は、内外面共に淡赤褐色を呈する。口径13.8cm、底部径5.4cm、器高6.1cmを測る。 胎土は粗で、焼成もやや軟質である。

以上、Ｅ区南東部で検出された３基の井戸跡は出土した土器類から何れも弥生時代後期中頃の所産と考えられる。

６．甕棺墓の調査（Fig.82・184〜188、Pl.24・25・30）

概　要

今回調査では、調査区の北西隅で小児棺５基、成人棺１基の計６基の甕棺墓が見つかった。本調査区の東に隣接して、民間開発に伴い2000（平成12）年４〜５月に行われた井尻Ｂ遺跡群16次調査では弥生時代中期前半期の城ノ腰期を中心として中期中葉須玖式に及ぶ墓地が発見されている。これらは、甕棺墓13基（内訳は成人棺４基・小児棺９基）、土壙墓４基、土壙６基等で構成された墓地をなしている。その分布はそれほど密集した配置となってはいない。成人甕棺墓の埋置は殆どが墓地の西側か南側方向から行われており、墓地全体の中では南〜西辺部にあたるかと考えられる。

これの西側に隣接する今回調査区でも、中期中葉の古い段階の成人棺であるＫ06甕棺墓が南西側から甕棺を埋置しており、弥生墓地全体の西或いは南側の限界部分を構成する位置にあるものと考えられる。また、小児棺は、成人棺よりも時期的に新しい中期後半期に入るものが殆どと考えられる。甕棺墓に伴う副葬遺物は全く出土しなかった。これは16次調査でも同様である。墓地の中心は更に東側にあると考えられ、今後の調査によって明らかになることと思われる。以下個別に説明を加える。

Fig.184　弥生時代墓地出土状況全体図

（小児棺）（Fig.82・185・186、Pl.24・25）

K01甕棺墓（Fig.82・184～186、Pl.24・25）

本甕棺墓は、調査区北東隅で検出された合口式甕棺墓である。1.2以上×0.7m規模の隅丸長方形の墓壙に小型甕２個を口縁部を接して埋置する。東側より埋置されたと考えられる。削平のために遺存状況は不良であり、土圧のために細片となっている。

上甕（東甕）（Fig.186）　上甕は、出土した状況では底部破片等も原位置を動いた状態で見つかっているが、胴部中央部分との接点が無く、復元が困難であるため口縁部断面の一部を図示した。

上甕は、平坦口縁を有する小型甕で、口縁は外方への発達の強い形状である。口縁下に突帯は持たない。上端面はやや内傾気味となっている。器面調整は口縁部上端及び外面がヨコナデで、胴部にタテハケメを残す。器色は、淡褐色である。また、 胎土は密で、焼成は軟質である。口径は不明であるが、下甕と同サイズか。

下甕（西甕）（Fig.186）　下甕も出土した状況では殆どの部分を削平で失っている。甕は平坦口縁を持ち、残存する胴部の傾きから胴部が上半部でやや膨らむ形態となろう。口縁部内面の直下は全周に亘ってやや窪む。

器面調整では、全体に器面の磨滅が激しく、口縁上端部にヨコナデを残すのみである。器色は、外面が淡褐色で、内面暗褐色を呈する。復元口径は、33.2cmを測る。また、 胎土は粗砂の混入が多く密で、焼成は堅緻である。

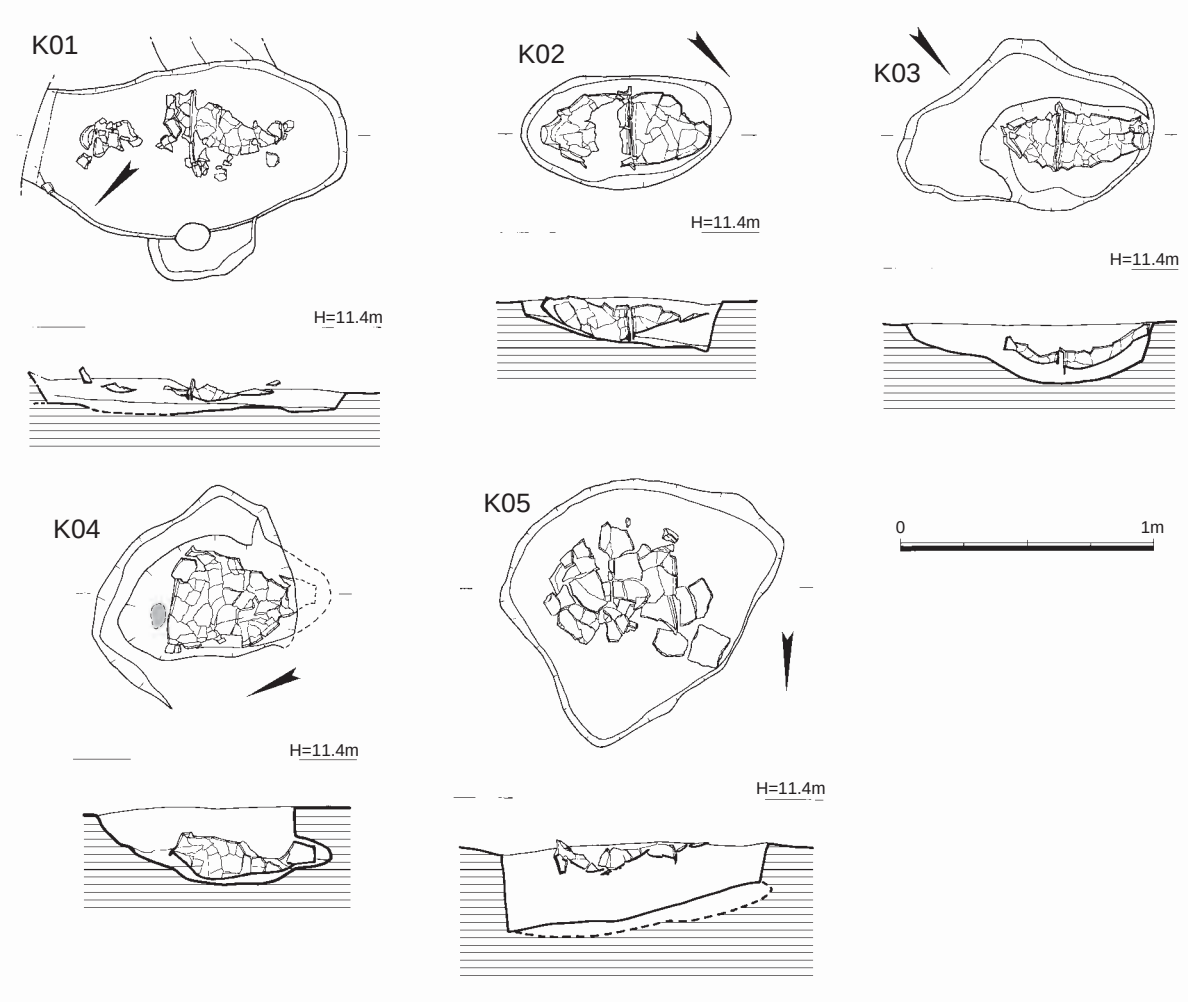


Fig.185　K01～05甕棺墓出土状況実測図（1/30）

Ｋ02甕棺墓（Fig.82・184〜186、Pl.24・25）

本甕棺墓は、Ｋ01の西側に隣接して検出された呑口式の合口小児甕棺墓である。0.85×0.45m規模の長円形の墓壙内に埋置される。棺の埋置は下甕が高く上甕が低くなる配置となっている。

棺は削平のために上半部を失うと共に、残った下半部の破片も部分的に失われている。ほぼ同サイズの甕を使用する。

上甕（北甕）（Fig.186、Pl.30）　上甕は、上端が平坦となる口縁部の外側を、上方から全周を打ち欠いて合口としている。口縁部内側はやや突出する。器面調整は、器面の荒れが激しいが、外面に荒いタテハケメを施し、頸部付近をヨコナデする。底部が存在するが接点が無く、復元できない。器色は、内外面共に淡赤褐色を呈し、外面全面には黒色顔料が塗布されている。頸部径26cm、残存高31cmを測る。 胎土は粗で、焼成もやや軟質である。

下甕（南甕）（Fig.186、Pl.30）　下甕は、平坦口縁を持ち、口縁が最大径となる甕で、口縁下に１条の三角突帯を巡らす。また、底部は急激にすぼまり、分厚い上げ底となる特徴をもつ。器面調整は、口縁の内外面にヨコナデが残る。また、胴部外面は細かいタテハケメを施し、底部外端付近にはこの後にヨコナデを加える。外面口縁〜底部外端までは黒色顔料を塗布する。内面は暗赤褐色〜暗褐色を呈する。口径34.6cm、底部径6.8cm、復元器高38cmを測る。 胎土はやや粗で、焼成は堅緻である。

Ｋ03甕棺墓（Fig.82・184〜186、Pl.24・25・30）

本甕棺墓は、Ｋ01甕棺墓の南側に隣接して検出された接口式の合口小児甕棺墓である。南北長1.00×東西長0.65m程度の不整形な土壙内に0.7×0.45m程度の長円形土壙を掘り、 上甕に小型の鉢、下甕に甕を使用して合わせ埋置している。内部土壙には薄く土を充填してから甕棺を埋置している。

上甕（南甕）（Fig.186、Pl.30）　上甕は底部径の大きい鉢形土器である。やや外側に垂れる平坦口縁の直下に三角突帯１条を巡らす。器面は、内外面共にナデで、底部外端部付近には縦方向のヘラミガキが見られる。内底部には指オサエが見られる。器色は、外面が暗赤褐色で、内面灰褐色を呈する。また、内外面共に黒色顔料の塗布が確認できる。口径31cm、底部径9.5cm、器高21.4cmを測る。胎土は密で、焼成堅緻である。

下甕（北甕）（Fig.186、Pl.30）　下甕は、上端部がやや外側に垂れる平坦口縁を有する甕である。外口唇に斜め位置の刻み目を施す。器面調整は、外面に荒いタテハケメを施し、口縁部付近はナデ調整。内面には底部付近に指オサエが見られる。器色は、外面が暗赤褐色〜暗灰褐色、内面灰褐色を呈する。内外面に黒色顔料を塗布する。口径31.2cm、底部径7.1cm、器高36.2cm前後を測る。 胎土は密で、焼成も堅緻である。

Ｋ04甕棺墓（Fig.82・184〜186、Pl.24・25・30）

本甕棺墓は、Ｋ03甕棺墓の西側に隣接して検出された単式の小児甕棺墓である可能性が高い。埋置された甕は１個であり、土圧等のために細片に割れているがほぼ原位置を保っている。また墓壙内の口縁部付近には通常では甕棺合わせ部の目詰めとして使われる粘土塊が出土し、上甕位置に相当する墓壙の空間が狭い点からも単棺であることが首肯できよう。蓋は板材などの腐食し易い素材かと考えられる。墓壙は、南北長0.8m、東西長0.8m程度のサイズの不定形のもので、南側の壁面に小横穴を掘って棺の底部から挿入している。

下甕（Fig.186）　遺存状況から破片の接点が少なく、破片を図示することとしたい。口縁部〜胴部上半のものは、口縁端部を残さないが、端部にしたがって肥厚し、口縁部下に低い貼付でない突帯（？）１条を巡らす。器面の荒れが激しく、調整は不明である。突帯部径25cmを測る。胎土は粗で、焼成も軟質である。また、底部はやや上げ底のしっかりした平底である。外面の一部に細かいタテハ

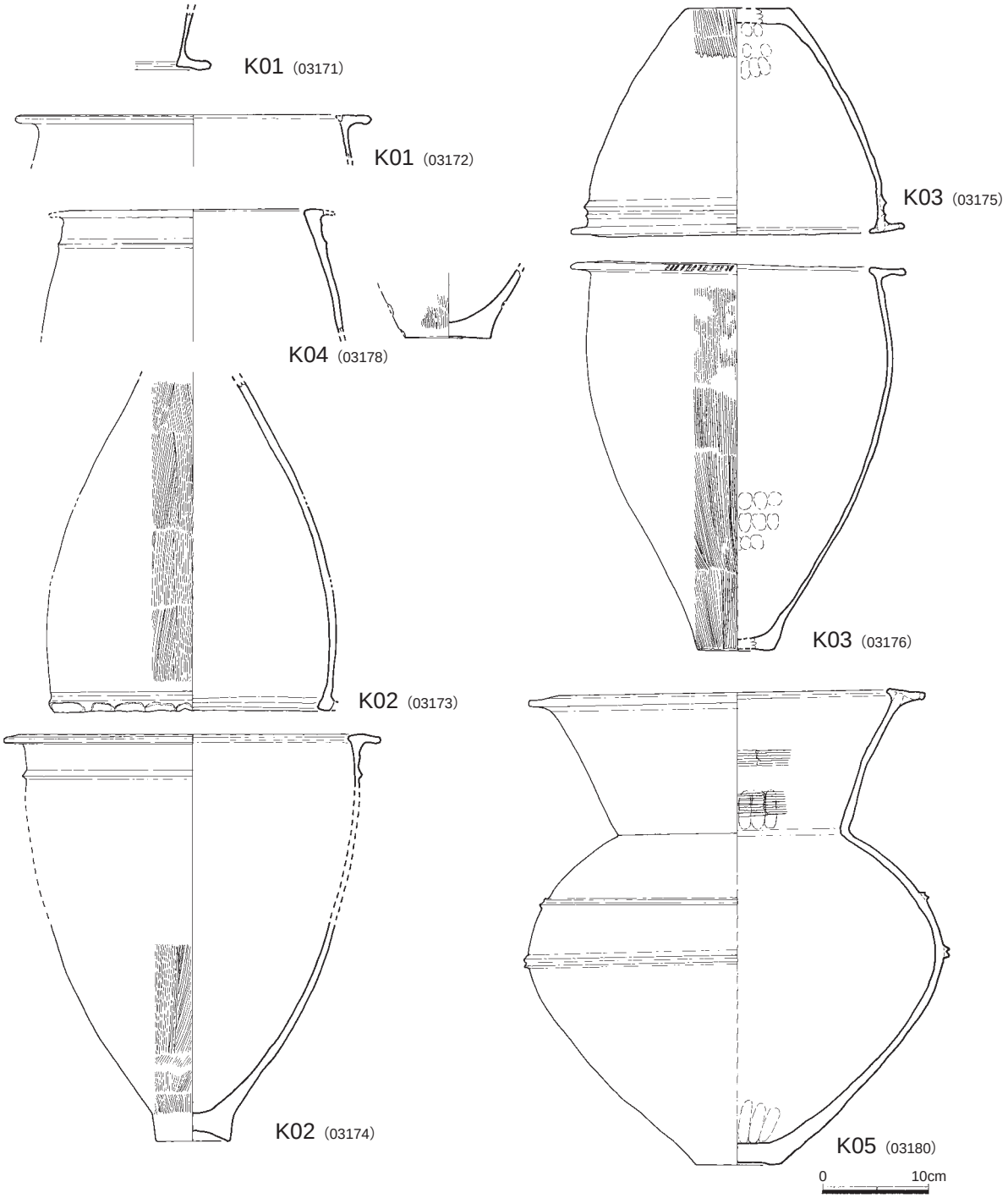


Fig.186　K01・02・03・04・05甕棺実測図（1/6）

ケメが残る。器色は、外面が淡褐色、内面が灰黒色を呈する。 胎土粗で焼成は軟質である。本甕は、出土状況断面から本来的に器高55cm以上のサイズと考えることができよう。

Ｋ05甕棺墓（Fig.82・184～186、Pl.24・25・30）

本甕棺墓は、Ｋ04甕棺墓の南側に位置で検出された小児甕棺墓である。甕棺墓は、東西方向を向く不整形墓壙の東側に、壷形土器を口縁部を西側にして横たえ、口縁部に大型甕棺の胴部突帯付近を打ち欠いたものを蓋として合わせ使用している。

上甕　大型甕の低い三角突帯２条をめぐらす胴部破片を29×42cmほどに整形して蓋としている。

器壁は0.8cmを測る。器色は、外面が暗褐色～褐色で、内面黒褐色を呈する。

下甕（Fig.186、Pl.30）　鋤先口縁を持つ中型の壷である。胴部最大径付近に間隔を置いて、断面がM字形の突帯２条をめぐらす。底部外端は丸味を帯び、緩い上げ底となる。器面調整は、荒れのため不詳であるが、口縁内面に一部ヘラミガキが残る。胴部中位の突帯間に黒斑が見られる。器色は、内外面共に黄褐色である。また、外面全面と口縁部内面に黒色顔料の塗布が観察できる。復元口径27cm、胴部最大径39.6cm、底部径7.7cm、器高45.5cmを測る。 胎土は密で、焼成は堅緻である。

（成人棺）（Fig.82・184・187・188、Pl.24・25・30）

Ｋ06甕棺墓（Fig.82・184・187・188、Pl.24・25・30）

本甕棺墓は、調査区西端部で検出された接口式合口の成人甕棺墓である。墓壙は、南北長2.85m×東西長1.85～2.00m、深さ0.75m程度の隅丸長方形を呈し、北側の小口部に横穴を穿ち、下棺を挿入して埋置している。北側小口部の横穴は奥行き50cm、高さ45cm規模のものである。

上下の棺は土圧のために潰れ、下半部にあたるほぼ半分が原位置を保っている。

棺はほぼ水平に埋置されたものと推定される。また、棺にはほぼサイズの等しい大型甕を使用している。

上甕（南甕）（Fig.188、Pl.30）　口縁部を最大径とする大型の甕である。口縁部は逆Ｌ字形の断面を呈し、上端部で非常に肥厚する。内面への口唇の発達が顕著で、端部は丸味をもって整形される。

口縁部下には突帯はなく、胴部の中位付近に低い貼付の三角突帯１条をめぐらす。底部は内面を殆ど欠失する。胴部下半には大黒斑が見られる。器面調整は、外面が荒れのために一部にタテハケメが

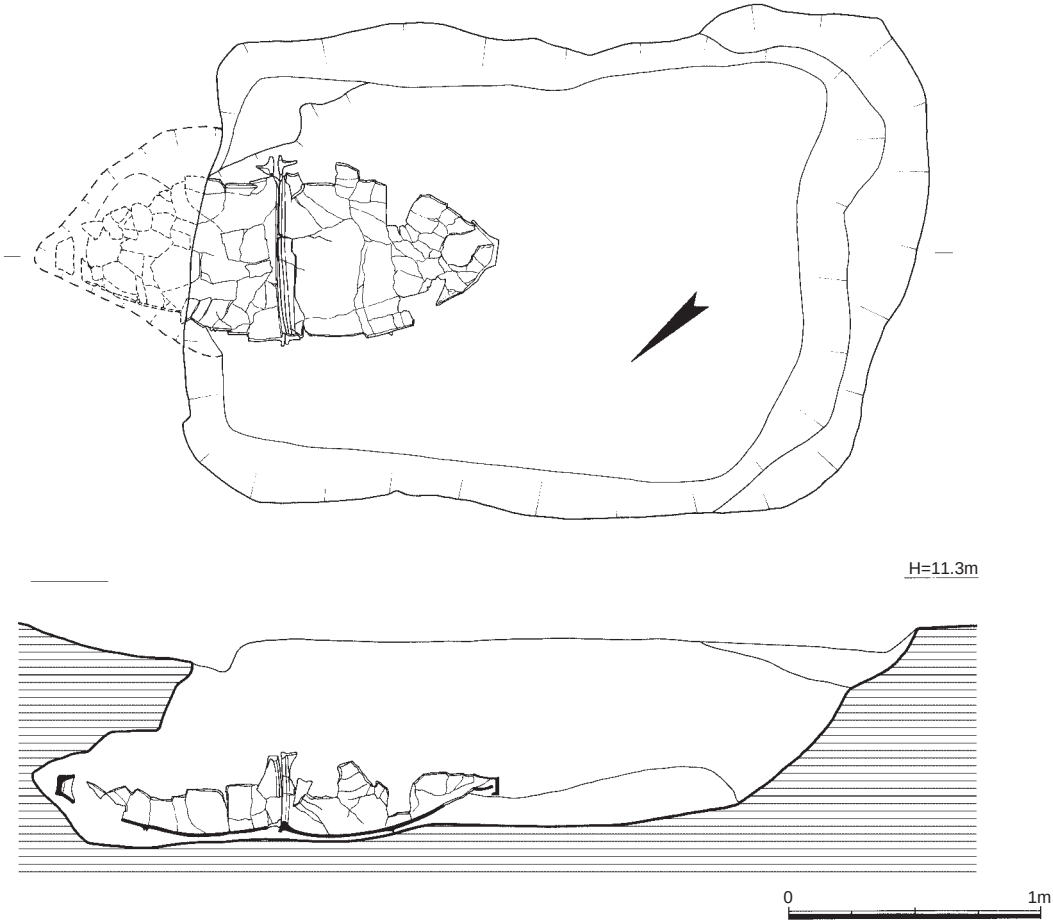


Fig.187　K06甕棺墓出土状況実測図（1/30）

のこる。内面はタテハケメ調整後にナデを加え、消している。内底部に指オサエが残る。また、口縁部内外面にも丁寧なヨコナデが加えらる。

器色は、外面が淡黄褐色～淡橙色で、内面は灰黄色である。また、外底部を除く内外面全面に黒色顔料の塗布が観察できる。外口径62.6cm・内口径50.4cm、胴部最大径63.9cm、底部径12.8cm、器高84.6cmを測る。 胎土は密で、焼成は堅緻である。

下甕（北甕）（Fig.188、Pl.30） 下甕も平坦口縁の内面への発達が顕著な逆Ｌ字形口縁を有する大型甕である。

胴部の中位付近に低い三角突帯２条をめぐらす。底部は安定した平底となっている。胴部中位には大黒斑が見られる。

器面調整は、外面の器面荒れが激しいが、タテハケメ後にナデ調整を施す。内面もまたハケメ調整後にナデ調整か。

器色は、内外面ともに淡橙色を呈し、全面に黒色顔料の塗布が見られる。また、口縁部の上端部の一部に丹が残存する。

口径は、外口径68cm・内口径55.5cm、胴部最大径68.3cm、底部径11.55cm、器高88.6cmを測る。 胎土は密で、焼成も堅緻である。

中期前葉の汲田式甕棺に位置づけられる。

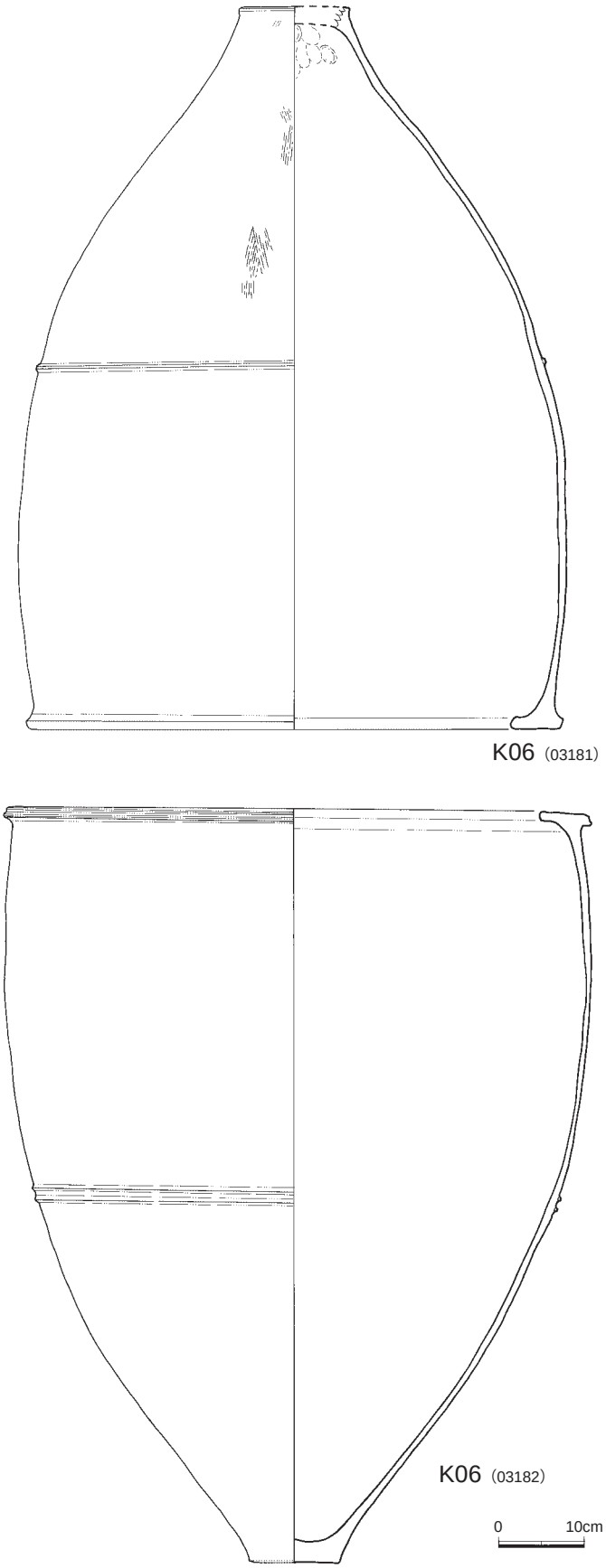


Fig.188　K06甕棺実測図（1/8）

７．小　結

これまで、Ｅ区における各遺構について個別に説明を加えてきた。

本地区内の遺構は、形状の明らかなものとして、竪穴住居跡10軒（SC01～10）、掘立柱建物建物13棟（2×1間規模、ＳＢ01～13）、土壙13基（SK01～13）、井戸跡３基（SE01～03）、甕棺墓６基（Ｋ01～06）が確認される。

また、多くのまとめきれない柱穴群も見られ、掘立柱建物や竪穴住居跡の主柱穴であった可能性を残している。

これらの遺構群は、出土した遺物類から時期を測り、整理を進めていくとおおよそ弥生時代中期初頭から中葉（Ⅰ期とする）、弥生時代後期前半（第Ⅱ期とする）、同後期中葉（第Ⅲ期とする）、同後期後葉～終末（第Ⅳ期とする）の４時期に区別できるものと考えられる。

【第Ⅰ期】

（弥生時代中期初頭～中期中葉）

弥生時代中期初頭から中葉までの遺構は、調査区のほぼ全域に散漫に認められ、生活遺構と墓地に区別できる。

第Ⅰa期（同初頭～前葉）

この時期に相当する遺構は、調査区のほぼ全域に分布している。これらは、長方形住居であるSC01竪穴住居跡や、比較的大型の長方形土壙である、SK01～03・07・09などであり、当該期の土器類を中心として出土し、貯蔵的機能をもった生活遺構が見られる。また、SK05・06・08などの土壙は、出土遺物が少なく、積極的に同期に含められるかは判断に迷うところであるが、同遺構の埋土の性質や堆積状況から可能性を考えて良いかも知れない。

また、墓地として調査区の北端部に小児棺Ｋ02や成人棺Ｋ06などが知られる。集落の開始と共にやや遅れて墓地の形成が開始された時期と考えられる。

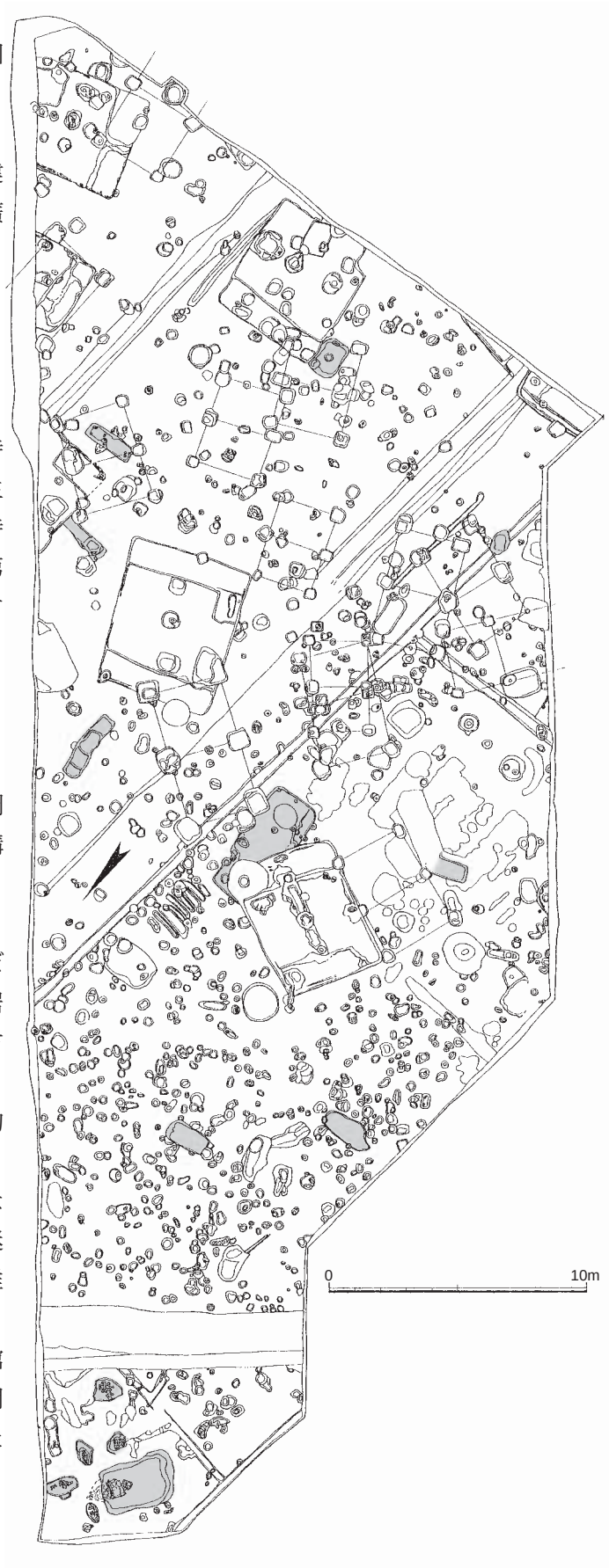


Fig.189　弥生時代中期のE区図（第Ⅰ期）（中期初頭～中葉）

Fig.190　弥生時代後期のE区図（第Ⅱ期）（後期前葉）

Fig.191　弥生時代後期のE区図（第Ⅲ期）（後期中葉）

Fig.192　弥生時代後期のE区図（第Ⅳ期）（後期後葉～終末）

第Ⅰｂ期（同中期中葉）

この時期に相当する遺構は、調査区の北端部墓地にのみにある。

小児棺であるＫ01・03・04・05甕棺墓がこれにあたる。調査区の東に隣接する第16次調査には同時期の甕棺墓の広がりがみられ、寧ろ今回調査区は墓地の西橋にあたることが分かっている。

なお、この甕棺を主体とする墓地は時期的に弥生中期後半まで継続することが知られるが、墓地の規模については不明な点が多い。

第Ⅱ期（弥生時代後期前葉）

この時期に相当する遺構は、定型的なのものでは調査区で確認できた実数は少ない。

調査区南端に一部が見つかったSC03竪穴住居跡や同東端部際のSK04土壙である。
同期に含められる可能性のある他の遺構では、掘立柱建物（倉庫）群や特徴的な掘り方を有する土壙（SK10～13）群が上げられよう。

第Ⅲ期（同後期中葉）

この時期以降が集落として最も展開が著しいと考えられる。

該期の遺構は、調査区の南側に片寄って構築される傾向にある。竪穴住居跡であるSC01、04～06の４軒、井戸跡であるSE01～03の３基である。

竪穴住居は、長方形の短辺側にベッド状施設を備え、炉を挟んで２本の主柱穴を配置する形態となっている。調査区内ではSC01・05・04・06の４軒の住居跡が、それぞれ約10m程度の間隔を置いて構築されていることが分かる。また、ベッド状遺構の位置や主柱穴の配置から殆どの住居への入り口が南側に向いていたことが窺える。更にSC01住居やSC05住居の周辺には円形井戸が構築され、住居と水の確保と利用のあり方を考える上で貴重な出土状況である。

また、同期に含められる可能性のある他の遺構では、掘立柱建物（倉庫）群や特徴的な掘り方を有する土壙（SK10～13）群が上げられよう。

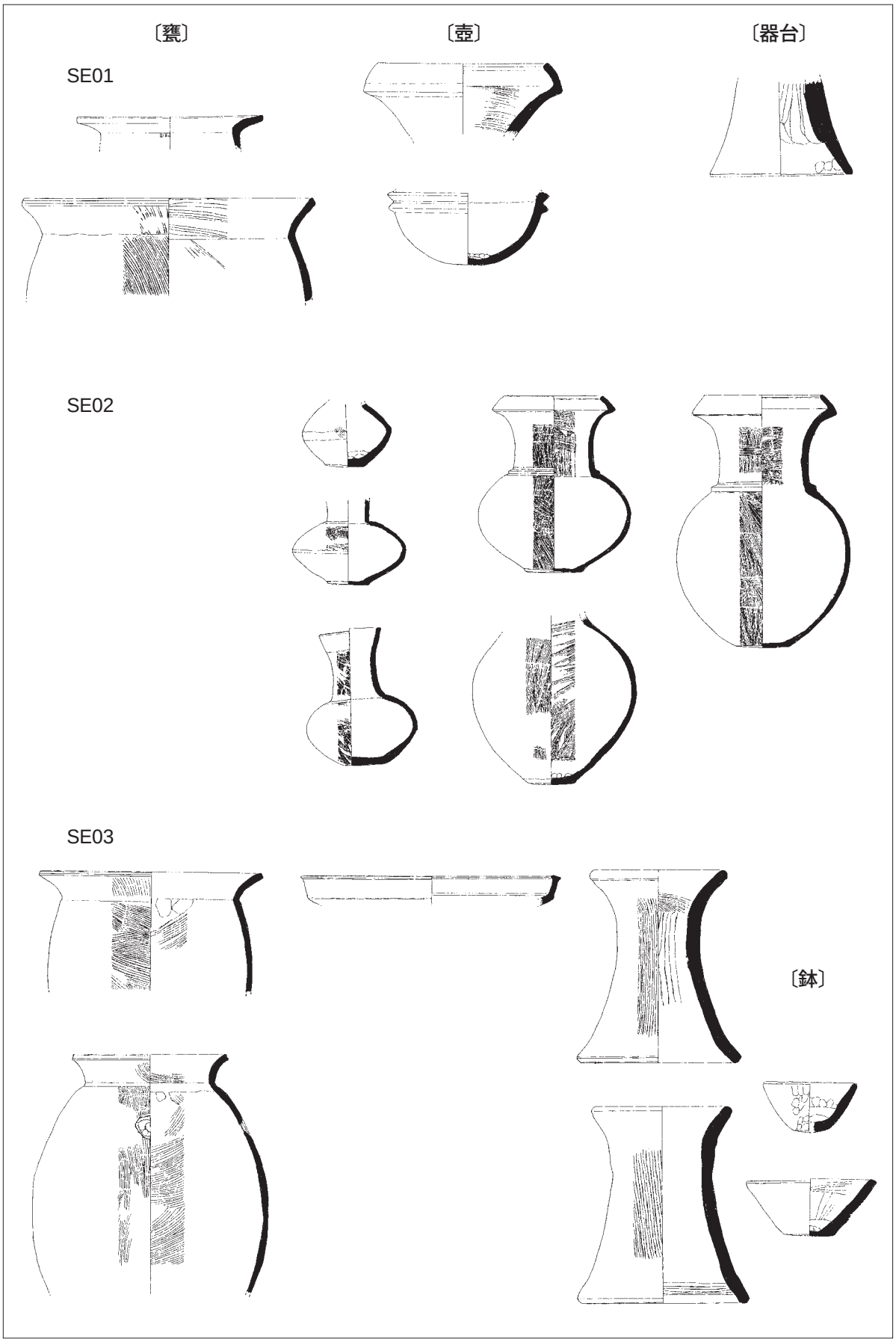
第Ⅳ期（同後期後葉～終末）

この時期に相当する遺構では、定型的なものは竪穴住居跡であるSC02・08・09の３軒である。

竪穴住居は長方形の短辺にベッドを構え、炉を挟んで２本の主柱穴を配置する形態である。住居はそれぞれがやはり約10m程度の間隔をもって南東から北西方向に配置されているように考えられる。

また、同期に含められる可能性のある他の遺構では、掘立柱建物（倉庫）群や特徴的な掘り方を有する土壙（SK10～13）群が上げられよう。

以上本調査区の遺構について、若干の考察を加えてきたが、勿論この調査区を含む井尻Ｂ遺跡群の全体像に迫るためには本当に小さい成果であると考えられる。道路幅と言う限られた調査区ではあるが、未報告であるＢ～Ｄ調査区の成果と合わせて次回に全体的な考察を行いたい。



井戸跡・出土土器類の組成

第Ⅳ章　Ｆ区の調査

１．調査概要

本地点は、黄褐色粘質土を地山とする台地の末端部にあたり、遺構面は北西に向かって緩やかに傾斜する。調査面での標高は約８ｍである。本調査区では、ロームの上にクロボクが残る。

F区で検出した遺構は、掘立柱建物1棟・溝7条・土壙1基・ピット多数である。全ての溝は、台地の落ち際と平行に、方位をほぼ南北にとって掘られている。土壙は、調査区南東部に検出したが、須恵器細片が出土したのみで詳しい時期は不明である。掘立柱建物は、２間×２間以上の東西棟で、古代の溝をまたいでおり柱穴の規模から中世に下るものと思われる。なお、調査区南西隅部は当初ユニットハウスが設置してあり未掘であったが、平成13年8月、追加的に調査を行った。北東の縁辺部についても同年11月に工事立会を行っている。

２．掘立柱建物（SB）

SB2017建物（Fig.193）

調査区東側にて検出した。梁行をほぼ磁北方向に持つ東西棟の建物である。SD2006を切るが、当初切り合いに気づかず溝を切る柱穴をとばしている。残存する柱穴は不整な円形で、間隔は柱穴中心間の距離で0.9〜1.1m、径20から25cm、深さ20から30cmを測る。遺物の出土がなく詳しい時期は不明。中世まで下るものか。

３．溝（SD）

SD2001溝（Fig.194〜197）

調査区西端部、台地の落ち際にて検出した。ほぼ南北方向に流れる溝で、調査区北西隅でやや西に振れる。断面逆台形で、１度堀り直されている。

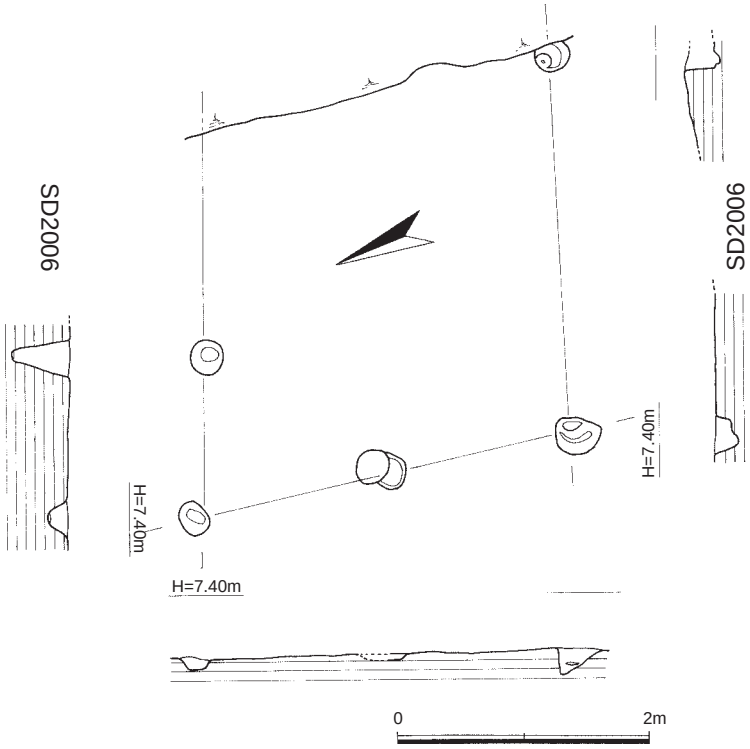


Fig.193　SB2017実測図（1/60）

出土遺物（Fig.195・196）

１は、弥生土器甕である。底部の小片で、底径8.6cmに復元される。３は、叩石である。花崗岩質の円礫を用いる。重量807.8gを測る。４・５は、砥石である。４の石材は砂岩質。５は頁岩質で、完形で出土した。５の重量は53.1gを測る。

SD2002溝（Fig.194・195）

調査区西端部、台地の落ち際にて検出した。ほぼ南北方向に流れる溝で、SD2001溝に切られる。同溝とは埋土が類似し、１条の溝の、掘り直しの単位であるにすぎない可能性もある

が、現場では確認できなかった。断面逆台形を呈し、計3回の掘り直しが認められる。

出土遺物（Fig.195）

２は、土師器甕である。口縁部の小片。口径25.2cmに復元される。

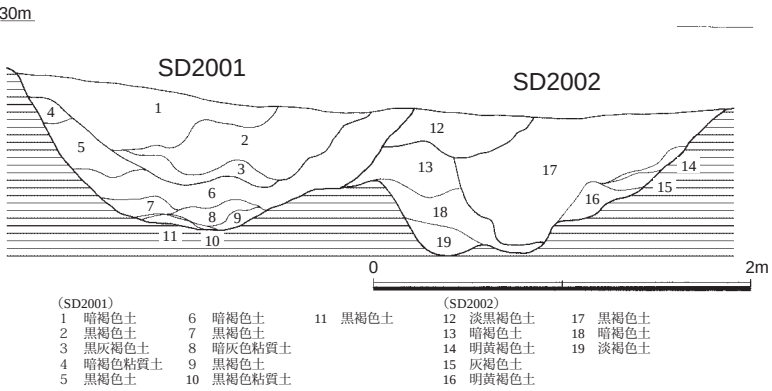


Fig.194　SD2001・2002土層断面実測図（1/40）

SD2003溝（Fig.197・198）

調査区北西隅にて検出した。SD2001溝に切られる。同溝とは埋土が類似し、１条の溝の、掘り直しの単位であるにすぎない可能性もあるが、現場では確認できなかった。断面からは2回の掘り直しが認められる。土師器・須恵器が出土したが、細片のため図示し得なかった。

SD2004溝（Fig.197・199）

調査区北西隅にて検出した。SD2003溝に切られる。幅15cm・深さ25cm程度の溝で、南側は緩やかに広がり、浅くなる。底面は鋤で掘ったような半月形の工具痕が2列にわたり検出された。埋土は、暗褐色のSD2003とは異なり、黒褐色土である。クロボク層の上面から掘られているためか。遺物は出土しなかった。

SD2005溝（Fig.200）

調査区中央部にて検出した。南北方向に掘削される溝で、磁北からは約11度東にふれる。埋土は大きく2分され、上層は黒褐色の粘質土、下層は砂礫が堆積する。土層断面からは4回の掘り直しが認められ、2回目に掘り直した段階までは流水していたと推定される。SD2018に切られる。断面は逆台形を呈し、幅5m以上、深さ1.1mを測る。

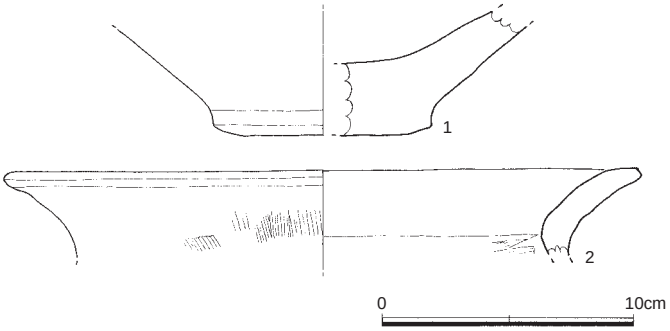


Fig.195　SD2001・2002出土土器実測図（1/3）

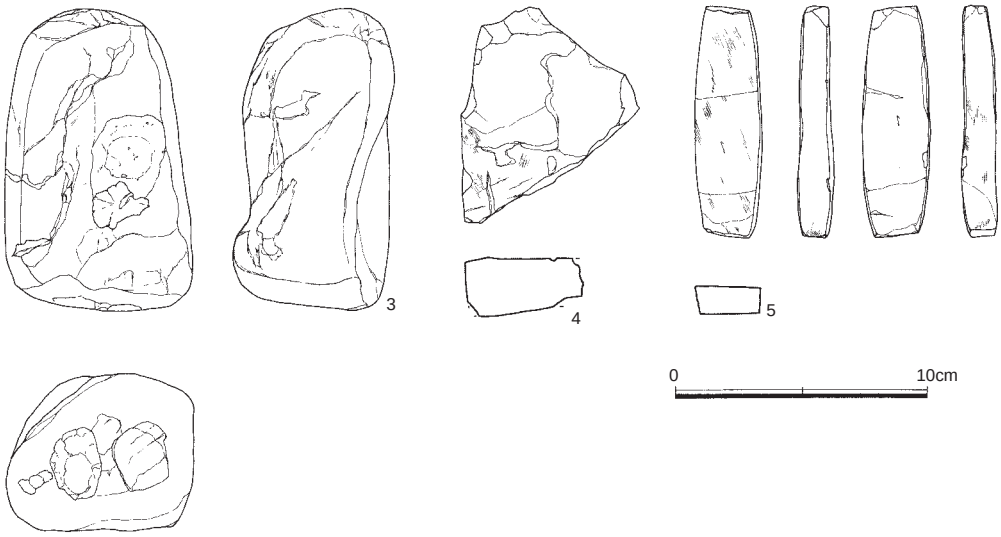


Fig.196　SD2001・2002出土石器実測図（1/3）

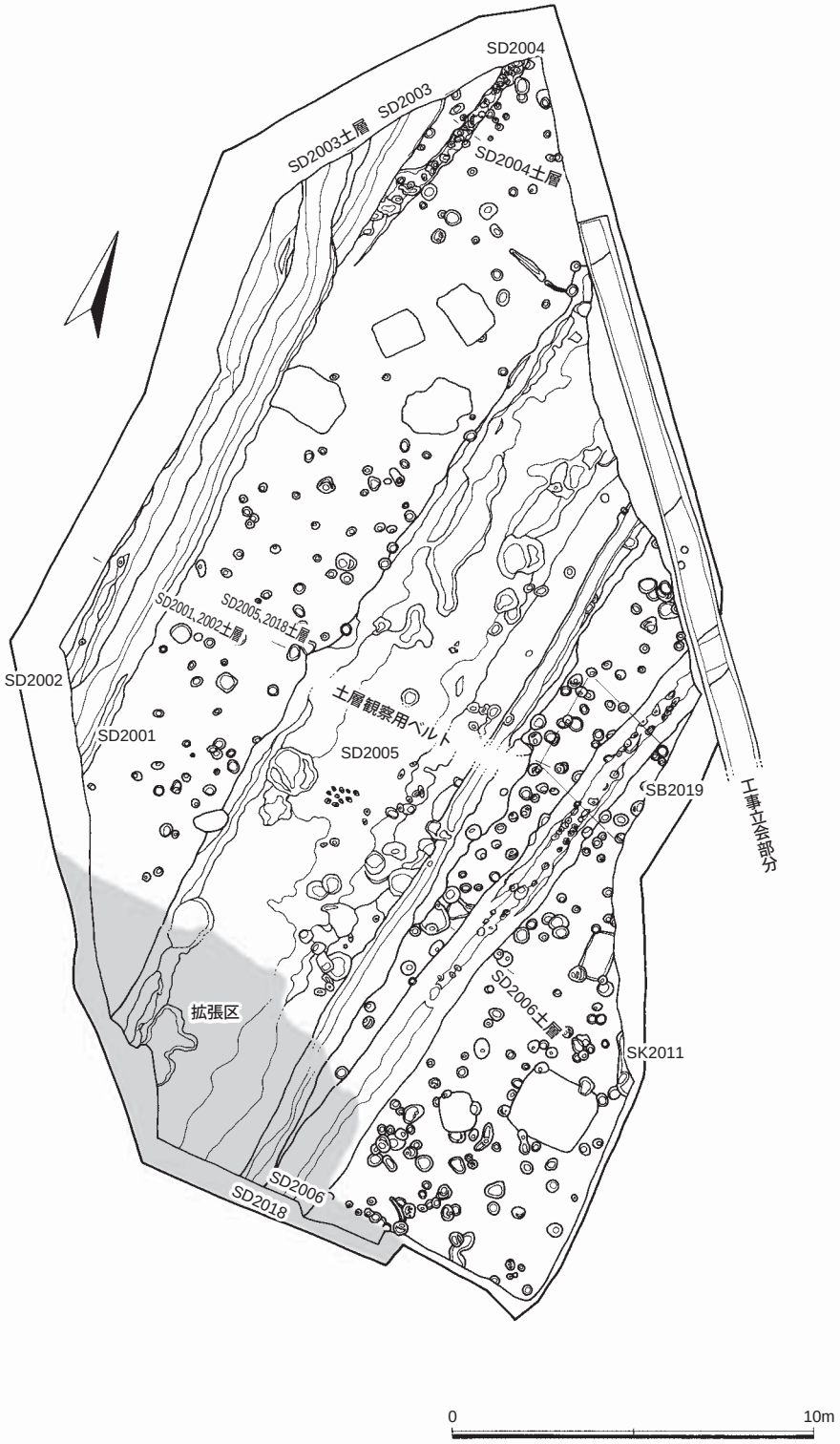


Fig.197　F区全体図（1/200）

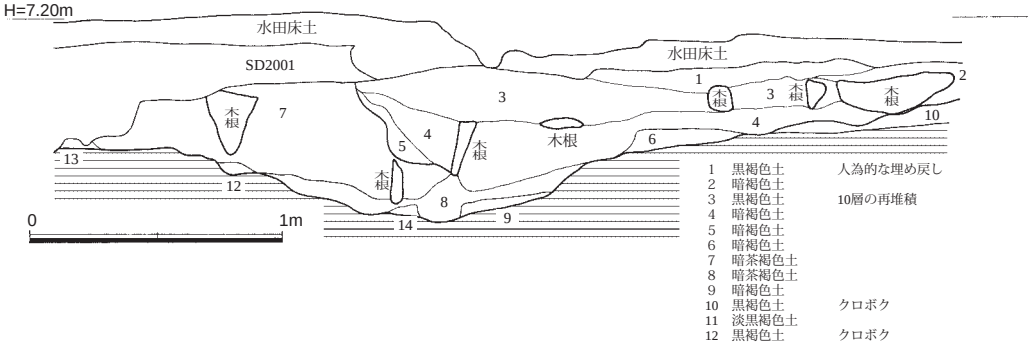


Fig.198　SD2003土層断面実測図（1/30）

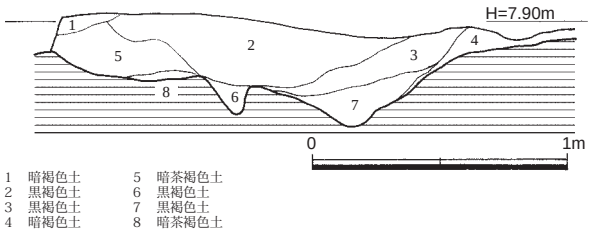


Fig.199　SD2004土層断面実測図（1/30）

出土遺物（Fig.201〜205）

①上層出土の弥生土器：６・10は、甕である。６は底部が完存する破片。底径6.0cmを測る。胎土は石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。10は底部が丸みを帯びる段階のもの。胎土は石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。７は、鉢である。底部が完存する破片。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。８は、器種不明。壺か。底部の小片。底径7.2cmを測る。９は壺である。９は、内面の大半が剥落する。底径7.2cmに復元される。底部で1/3程度残存する破片である。胎土は石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。11・12は、甕棺である。口縁部の小片で、11は口径48.0cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。12は、69.0cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。いずれも成人棺と思われるが、小片のため口径の数値は不確実。13は、無頸壺である。口縁から肩部にかけての小片で、丹塗りが施される。口径15.0cmに復元されるが、小片のため不確実。胎土は、石英・長石の微粒子、茶色の粒子を若干含み、焼成は良好である。14は、壺である。底部の破片で、底径3.5cmに復元される。小片のため調整ははっきりしない。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。15は、器台である。上半部を欠損し、底径13.4cmを測る。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。16・17・18は、甕である。16は、口縁部から胴部にかけて1/3個体残存する破片で、口径19.6cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。17は、口縁部から胴部にかけて1/4個体残存する破片で、口径22.4cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。18は、口縁部から胴部にかけて1/6個体残存する破片で、頸部に突帯を巡らす。口径21.4cmに復元される。胎土は、石英・長石粒・雲母を若干含み、焼成は良好である。19・20は、いわゆる沓形器台である。体部を1/3欠損する個体で、器高7.5cmを測り、底径8.2cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。20は、上部から底部にかけてかなり欠損する個体で、頂部に外面から穿孔されている。器高8.5cm・底径9.2cmに復元される。胎土は、石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。

上層出土の土師器・陶質土器（Fig.202）：21は、坩堝である。口縁部が1/2ほど欠損する個体で、平面形はやや多角形状をなす。内外両面とも不定方向ナデもしくは指押さえで整形され、口縁部および内面全体に被熱痕跡が観察される。口径7.2cm・器高8.1cmを測る。胎土は、石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。22は、脚付坏である。脚部から坏部にかけての破片で、底径7.3cmに復元さ

れる。本来は丹塗りか。胎土は石英・長石粒を多く含み、焼成は良好である。23は、高坏である。脚部上半の破片で、受け部径4.4cmを測る。胎土は金雲母を若干含み、焼成は良好である。24は、壺である。山陰系か。口縁部から頸部にかけて1/8程度残存する破片で、口径16.2cmを測る。胎土は、石英・長石粒・金雲母を若干含み、焼成は良好である。25は、壺である。胴部のみ接合できた個体で、胴部径14.2cmに復元される。器壁は薄く、焼成は良好である。26は、高坏である。坏部が1/3程度残存する破片で、口径25. 4cmを測る。本来は丹塗りか。胎土には金雲母を若干含み、焼成は良好である。27・28・29は、甕である。27は、口縁部から胴部を1/2程度残す個体で、口径16.8cmに復元される。焼成は良好である。28は、口縁部から胴部を1/2程度残す個体で、口径21.6cmに復元される。焼成は良好である。29は、口縁部から胴部を1/2程度残す個体で、口径24.0cmに復元される。30は、陶質土器短頸壺である。ほぼ完形で出土した。口縁部外面ををやや鋭角に肥厚させ、体部には垂直方向の縄目叩きを平行に行った後、螺旋状に凹線を施文している。胴部下半は右下から左上へナデ上げる。口径10.9cm・器高10.4cm・底径8.6cm・胴部最大径14.2cmを測る。胎土は精良だが焼成はやや悪く、器面は赤褐色を呈する。

下層出土の弥生土器（Fig.203）：31は、甕である。底部の破片で、底径7.4cmを測る。胎土は石英・長石粒を多量に含み、焼成は良好である。32・33は、壺である。口縁部の小片で、口径22cmに復元されるが、小片のため不確実。胎土は石英・長石粒を多く含み、焼成は良好である。33は、口縁部から頸部にかけての小片で、口径17cmに復元されるが、小片のため不確実。胎土は石英・長石粒を多く含み、焼成は良好である。34は、甕である。口縁部の小片で、口径30.6cmに復元されるが、小片のため不確実。丹塗りの可能性がある。焼成は

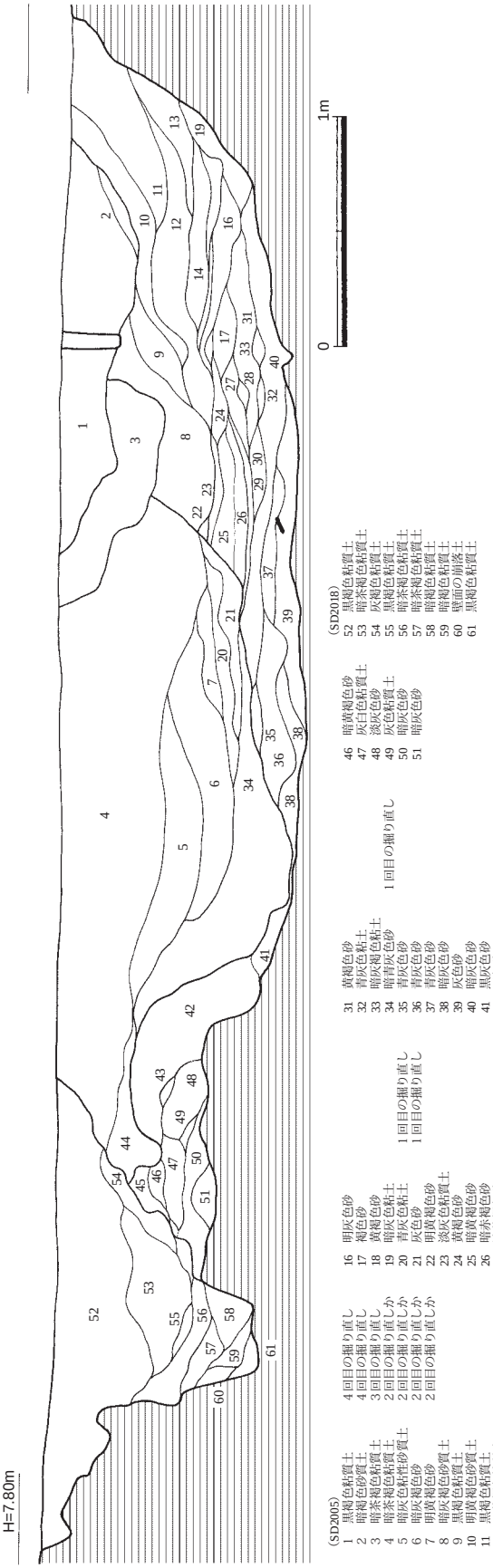


Fig.200　SD2005・2018土層断面実測図（1/30）

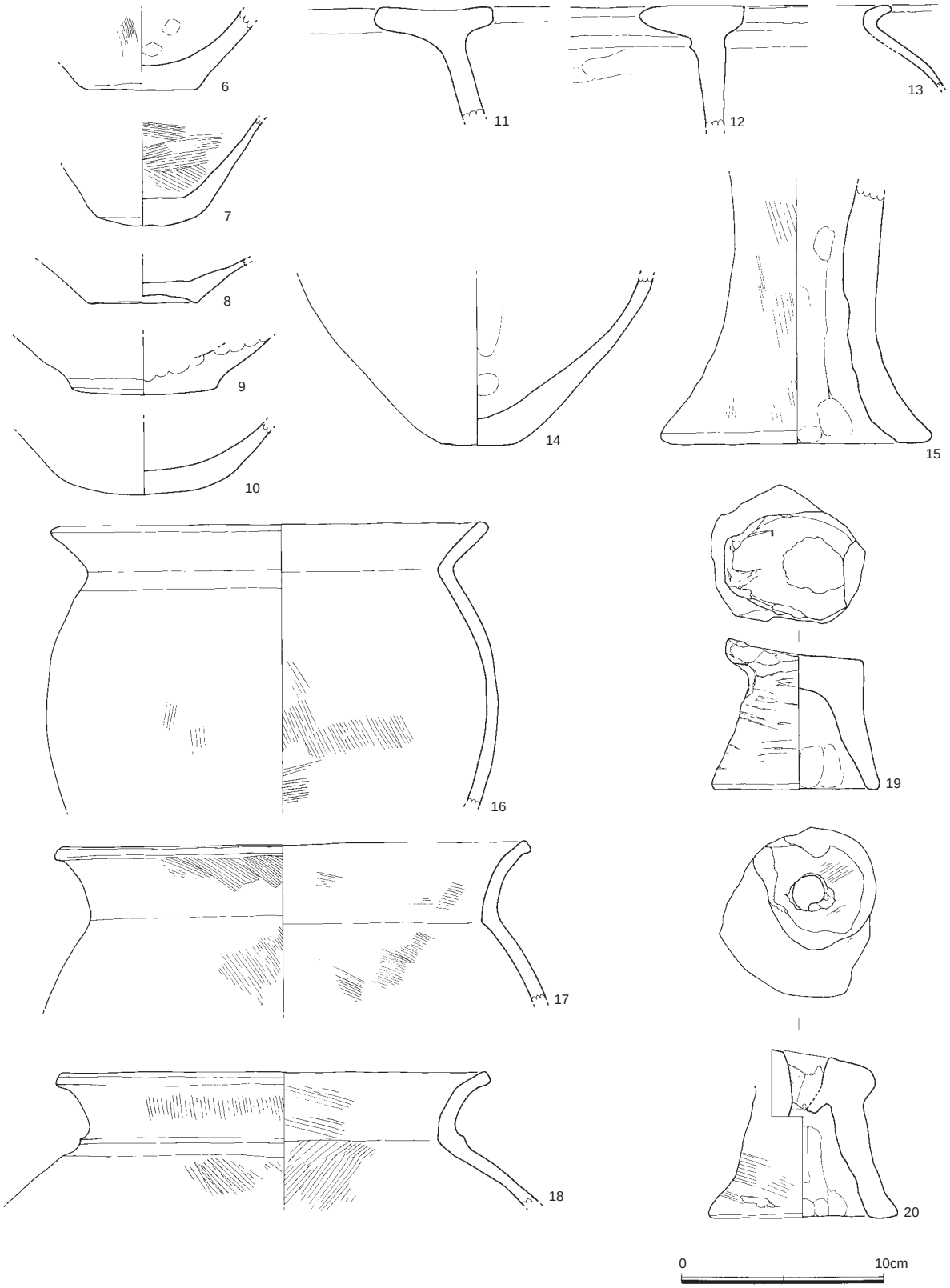


Fig.201　SD2005上層出土弥生土器実測図（1/3）

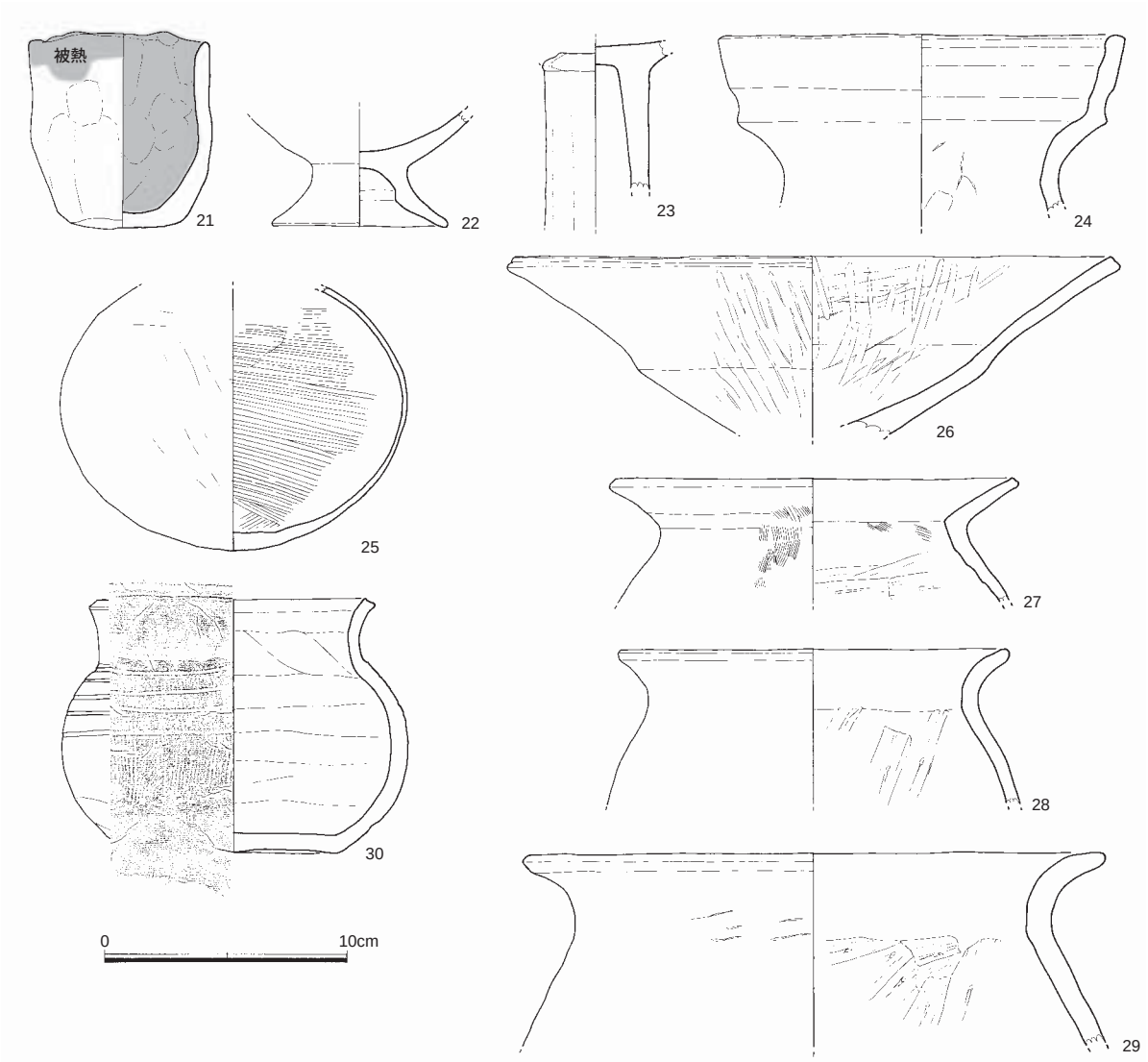


Fig.202　SD2005上層出土土師器・陶質土器実測図（1/3）

良好である。35は、突帯文土器甕である。口縁部の小片で、口唇部外面に刻目突帯を有する。胎土は石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。36・37は、甕である。36は、口縁部から胴部にかけて1/6程度残存する個体で、口径20.4cmに復元される。胎土は精良で、焼成は良好である。37は、口縁部から胴部にかけて1/6程度残存する個体で、口径22.2cmに復元される。胎土は石英・長石を若干含み、焼成は良好である。38は、鉢である。体部を2/3欠損する個体で、内面に丹の痕跡が観察される。口径24.2cm・器高13.7cmを測る。焼成は良好である。39は、高坏である。脚部の破片で、3カ所に外面からの穿孔が観察される。焼成は良好である。40は、壺である。底部から胴部にかけての破片で、内面から焼成後に穿孔している。丹塗りの痕跡も観察される。焼成は良好である。41は、甕棺である。底部の破片で、底径7.7cmに復元される。焼成は良好である。

下層出土の土師器（Fig.204）：42は、鉢である。器形の歪みが大きく、手捏ね土器の可能性が考えられる。口径9.8cm・器高6.3cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。43は、豊前系の高坏である。坏部のみ残存し、口径11.7cmを測る。胎土は精良で、焼成は良好である。44は、山陰系二重口縁壺である。口縁部から頸部にかけて3/4程度接合した。口径14.3cmに復元される。胎土は石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。45・46は、壺である。45は口縁部から体部にかけて1/4程度

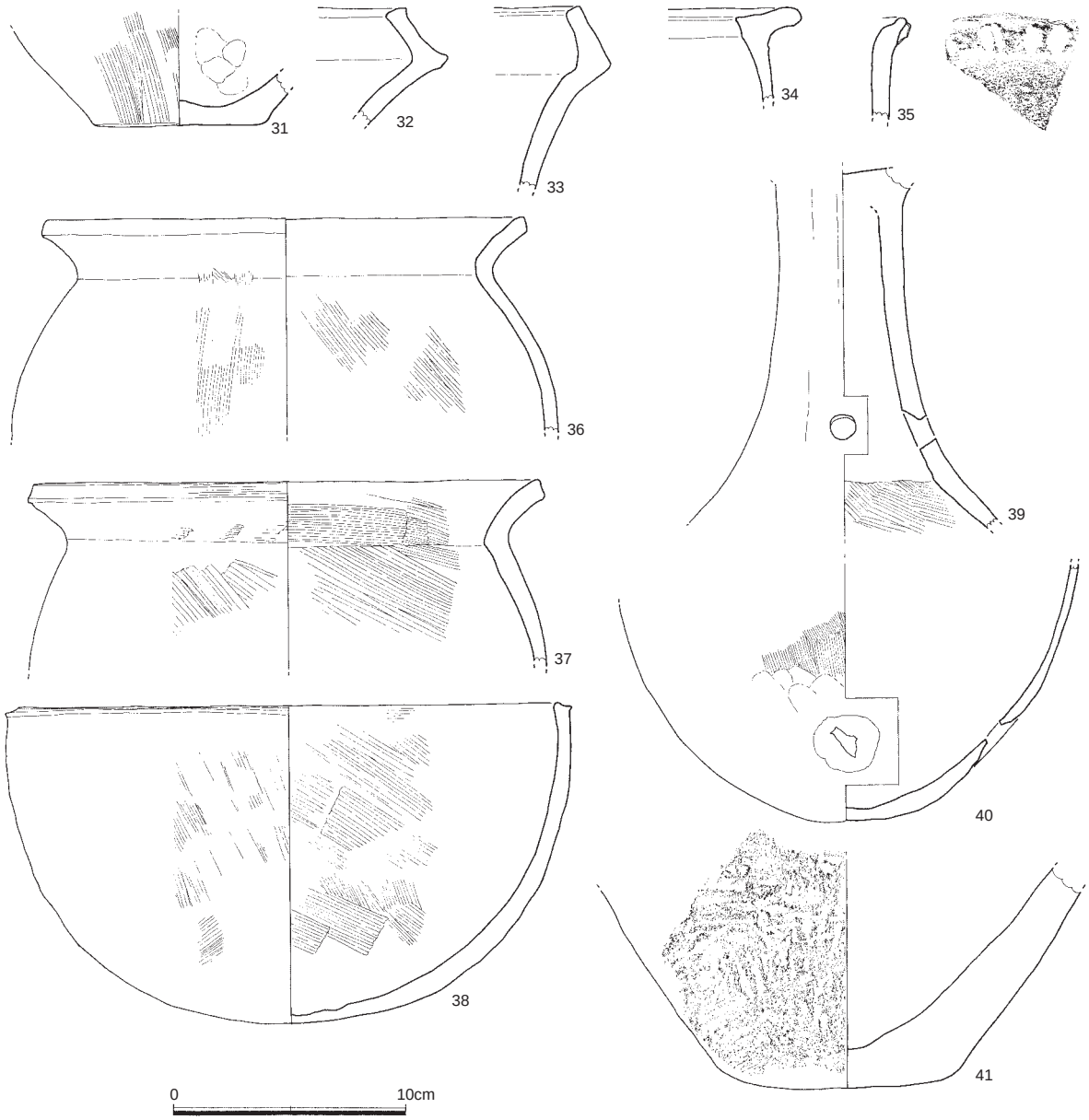


Fig.203　SD2005下層出土弥生土器実測図（1/3・40のみ1/4）

残存する個体で、口径17.0cmに復元される。胎土は石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。46は、口縁部から胴部にかけて1/3程度残存する個体で、口径18.0cmに復元される。胎土は石英・長石粒を若干含み、焼成は良好である。

下層出土の石器（Fig.205）：47は黒曜石製調整剥片である。縦長剥片の基部を一部加工している。器長4.5cmを測る。48は砥石である。磨製石斧を再利用した個体の破片で、残存長5.0cmを測る。

SD2006溝（Fig.197・206）

調査区東半部にて検出した。南北方向に人為的に掘られた溝で、方位は磁北より18度東にふれる。幅1.2から1.3m、深さ1.0～1.2mを測る。断面は略逆凸字形を呈する。底面は北に向かって緩やかに傾斜するが、北半には鋤で掘ったような半月～三日月形の工具痕が2列平行する形で検出された。埋土は概略暗褐色で、土層からは埋没後、1回の掘り直しがあること、堀り直す前の段階では滞水していたことが推測される。

出土遺物

（Fig.207・208）

石器（Fig.207）：49は石英脈岩製叩石である。両面中央に敲打痕があり縁辺部には擦痕が観察される。重量333gを測る。

須恵器（Fig.208）：50は、甕である。口縁部から胴部にかけて1/4程度残存する破片で、口径24.6cmに復元される。内外両面とも叩きの後、ハケ・ナデにより叩き目・当て具痕を消す。胎土は精良堅緻で、焼成は良好である。

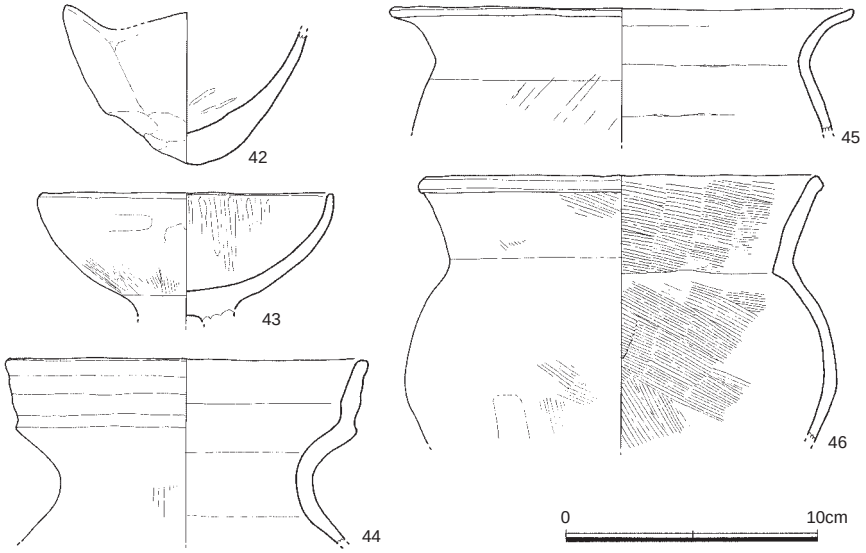


Fig.204　SD2005下層出土土師器実測図（1/3）

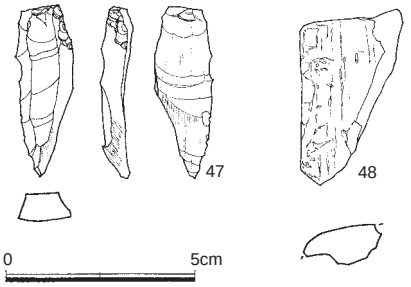


Fig.205　SD2005下層出土石器・調整剥片実測図（1/2）

SD2018溝（Fig.197・200）

調査区中央部にて検出した。南北方向に人為的に掘削される溝で、ほぼSD2005に平行する。SD2005を切るとしたが、SD2005を最後に掘り直したものとも考えられる。現場では確認できなかった。断面を観察するまで切り合いがわからず、遺物はSD2005と混じっている。幅は断面から2.1m、深さ断面略台形で、中央がさらに深く掘り込まれる。土層断面からは、流水していた痕跡は確認できなかった。

出土遺物（Fig.209〜211）

弥生土器（Fig.209）：51・54・55・56は、甕である。51・54は、口縁部から胴部にかけての小片で、焼成は良好である。55は底部の破片で、底径7.4cmを測る。56は底部が1/3程度残存する破片で底径8.0cmに復元される。52は、甕棺である。口縁部から胴部にかけての小片で、口径47cmに復元されるが、小片のため不確実。53は、壺である。口縁部の小片で、口径27.4cmに復元されるが、小片のため不確実。いずれも焼成は良好である。57は、器台である。脚部を欠損する個体で、口径15.7cmを測る。焼成は良好である。58は、無頸壺

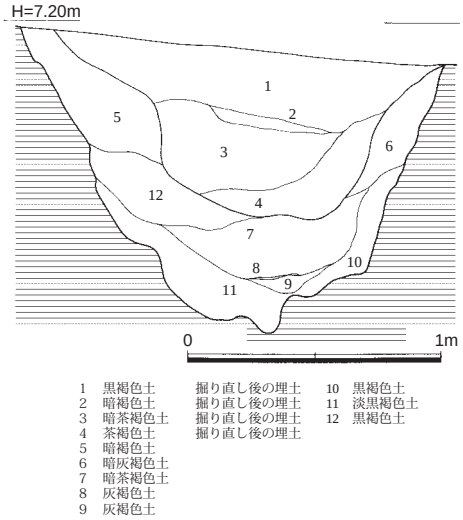


Fig.206　SD2006土層断面実測図（1/30）

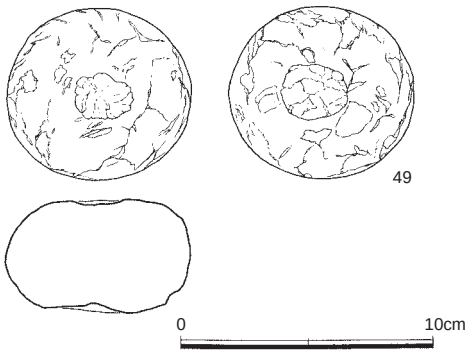


Fig.207　SD2006出土石器実測図（1/3）

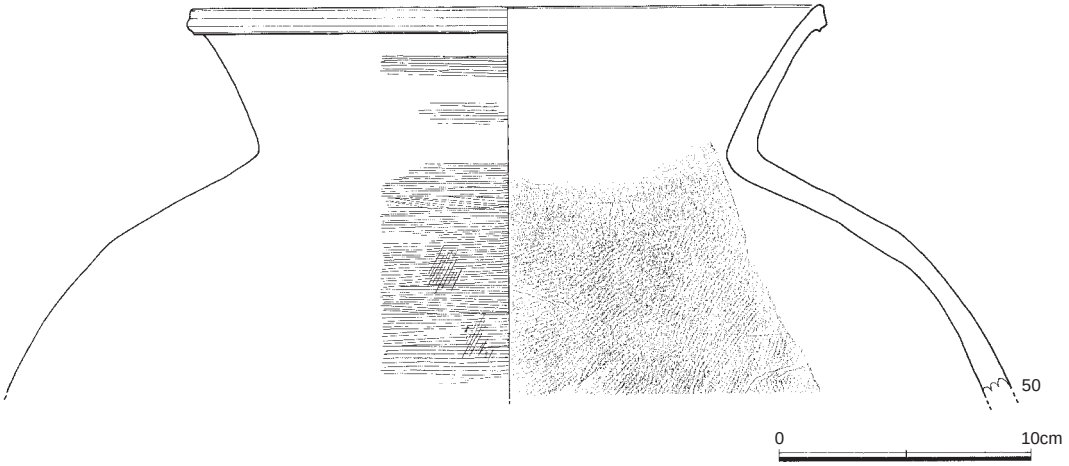


Fig.208　SD2006出土須恵器実測図（1/3）

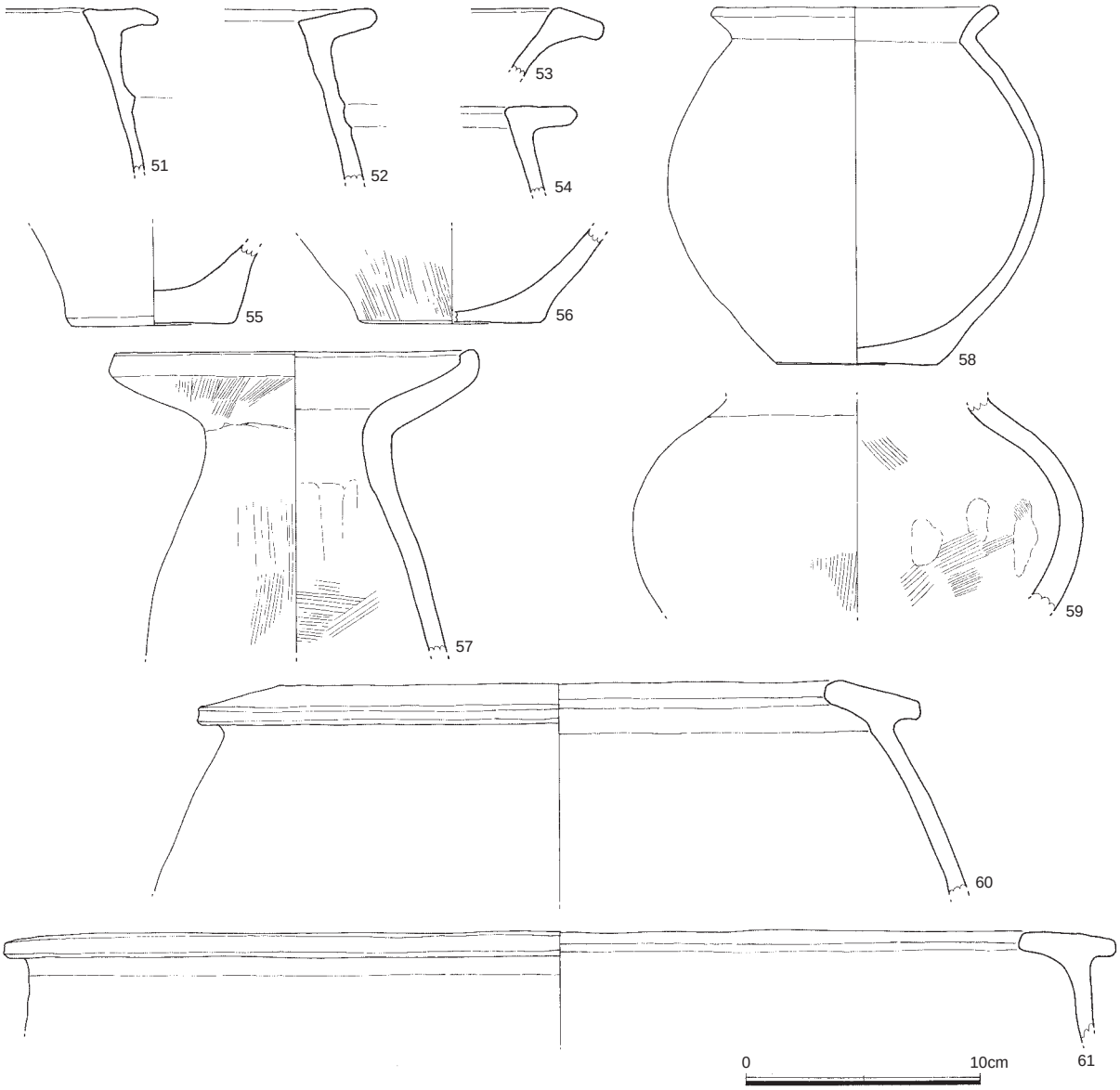


Fig.209　SD2018出土弥生土器実測図（1/3）

である。2/3程度残存する個体で、口径12.2cm・器高15.2cm・底径6.8cmを測る。59は、壺である。胴部の破片で、最大径19.2cmを測る。60・61は、甕棺である。ともに汲田タイプ。60は、口縁部を1/4程度残す破片で、口径41.2cmに復元される。61は、口縁部の小片で、口径79.6cmに復元されるが、小片のため不確実。いずれも焼成は良好である。

土師器（Fig.210）：62は、高坏である。脚部の破片。63・65は、甕である。いずれも口縁部の破片。63は1/4程度残る破片で、口径14.6cmに復元される。65は口縁部のみ1/5程度残存する破片で、口径23.8cmに復元される。66は、壺である。口縁部から胴部まで1/6程度残存する破片で、口径22. 6cmに復元される。

石器（Fig.211）：67は、抉入柱状石斧である。身部の破片で、凝灰岩質を呈する。器幅2.6cm・器厚1.5cmを測る。68は、叩石である。中央に敲打痕が、縁辺部に擦痕が観察される。重量317.9gを測る69は、砥石の小片である。重量192gを測る。70・71は、叩石であるが、71については石錘の可能性も考えられる。

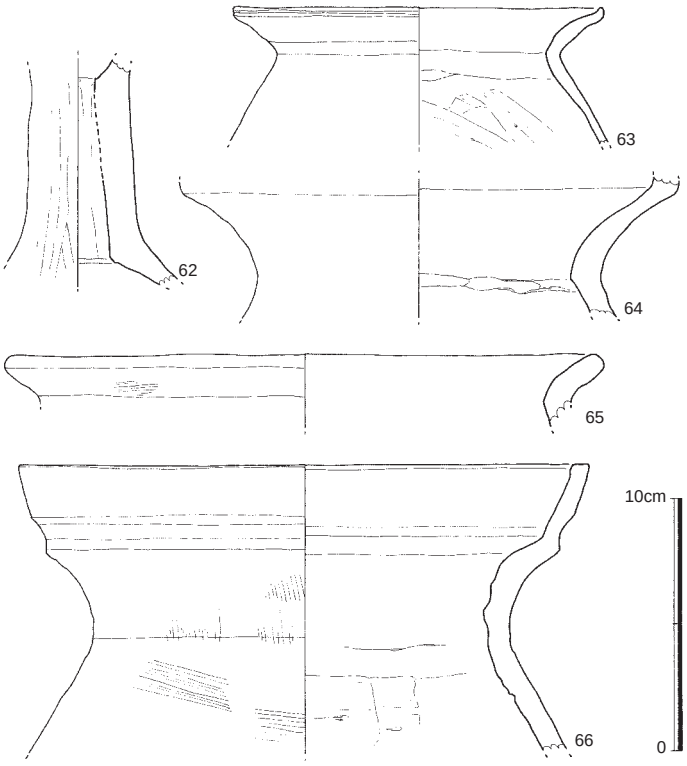


Fig.210　SD2018出土土師器実測図（1/3）

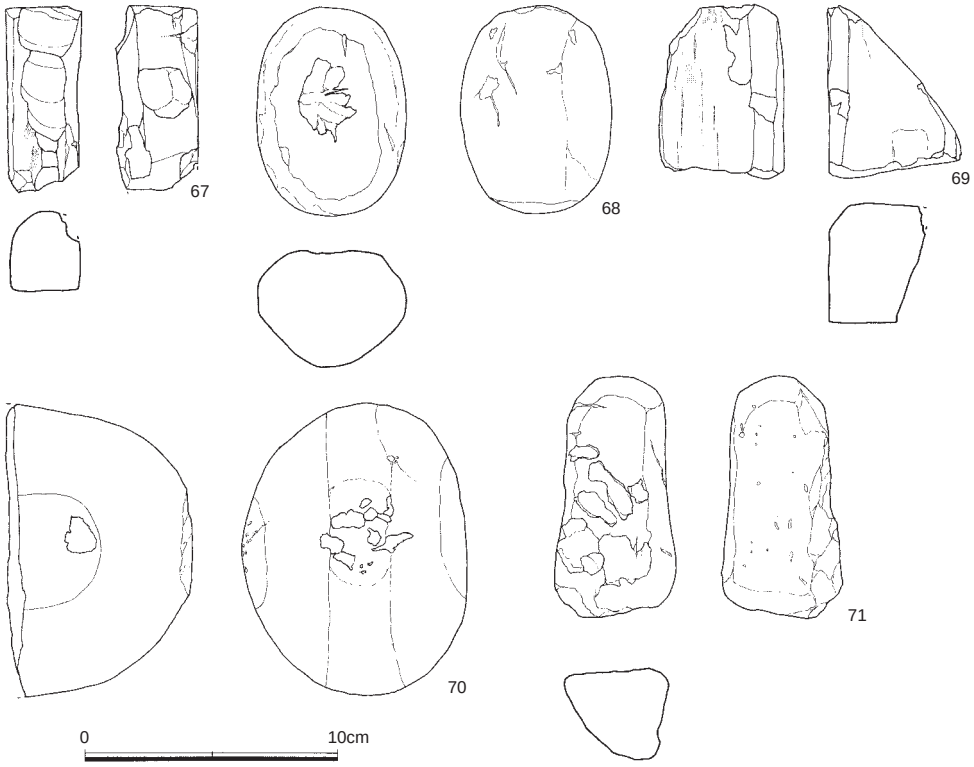


Fig.211　SD2018出土石器実測図（1/3）

4．土壙(SK)

SK2011土壙（Fig.212）

調査区東半にて検出した。平面形は略長方形になると思われるが、土壙の大半が調査区外に

なるため調査できなかった。検出できた範囲で、超軸方向で1.6m・深さ5〜10cmを測る。

出土遺物（Fig.213）

72は、須恵器甕である。胴部の小片。外面は格子目状叩きが観察される。

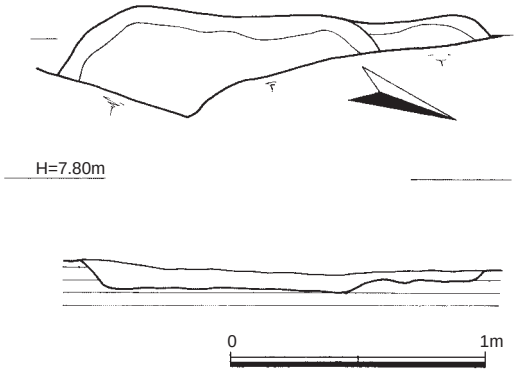


Fig.212　SK2011土壙実測図（1/30）

5．その他の遺物（Fig.214）

遺構検出面からは、須恵器・土師器・弥生土器の他、瓦が３点出土した。Fig.214に図示する。

6．小結

Ｆ区の調査では、掘立柱建物1棟・溝7条・土壙1基・ピット多数が検出された。SD2001から2003は古代、2006は7世紀代の埋没が考えられる。これらは流水の痕跡がなく、特に2006についてはE区検出の溝との関連も想定される。2005は、下層に砂礫が堆積し流水があったものと思われ、台地の縁辺部に沿わせて掘られていることから、灌漑用水路としての機能が考えられる。幾度も掘り直されているが、流水していたと思われるのは1回目の掘り直しまでで、以後は流水の痕跡はなく、2018を含めて用水路としては放棄されていたものと思われる。2005は4世紀代が遺物の主体だが、5世紀に下る遺物も少数だがみられ、2005の最終的な埋没は5世紀に下るものと思われる。2004からは遺物は出土しなかったが、埋土がクロボクの再堆積状であり、2005上層とあまり時期は違わないものと思われる。

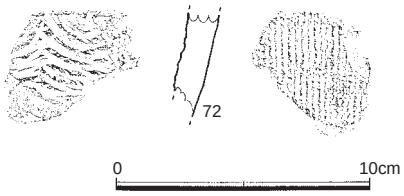


Fig.213　SK2011出土須恵器実測図（1/3）

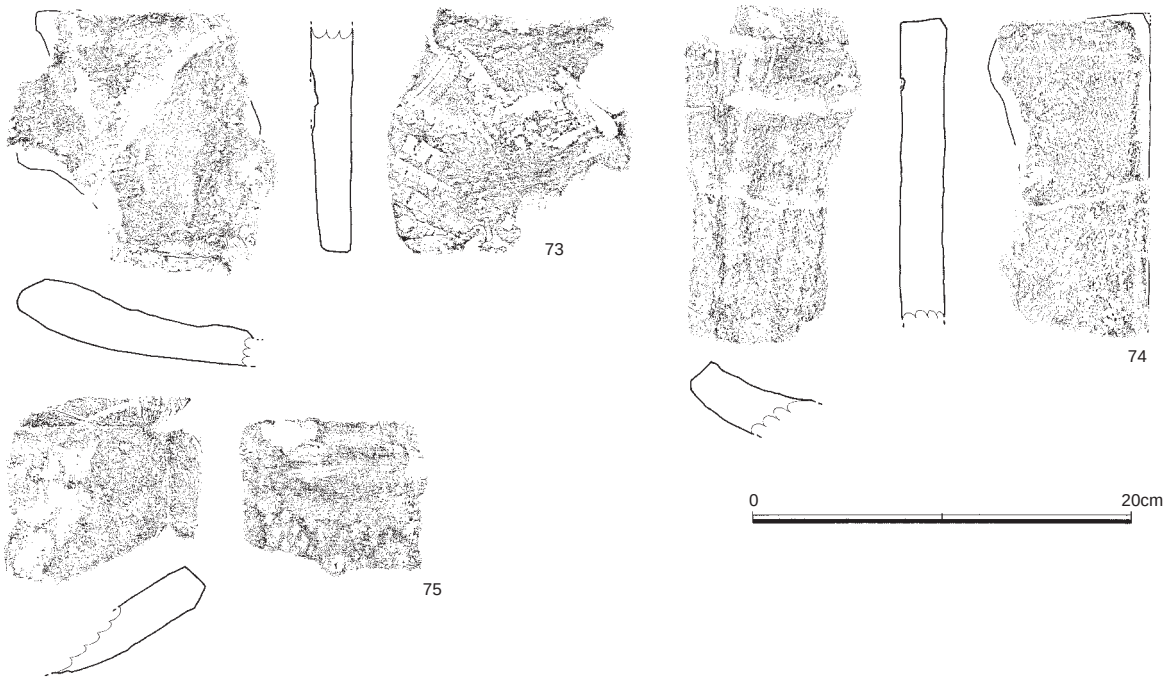


Fig.214　遺構検出面出土遺物実測図（1/4）